眉山全集

第三巻

第拾號

博文館發行

眉山全集

第三巻



（明治三十四年撮影）

眉山全集

第三巻

目次

眉山全集

第三卷

目次

眉山全集

第三巻



春宵

（上）

「叔母さん。」

と黄昏の勝手口に、未だ若い、嬌めかしい聲、尤も近所をかねて、持前の甲高なのを殺して言つたので、中では聞逸らしたか、重ねて呼掛けて見たが、返事がない。

「おや居ないのか知ら。」

と口の中、伸上つて奥を透したが、いつまで躊躇ひもせず、其まゝ中へ入ると、身輕に臺處を上へ、未だ閉めてな

い引窓から、ちら〳〵と星の影が、暮初めた春の空に、既瞬き出した下を、斜めに切つて右に竈、左に鼠不入、膳棚の最う暮の色に迫つて見える脇を、ほッそり柳腰、ひらりと袂の影を打つて、衝と茶の間へ入つて來た。

途端に次の間の隅、出窓の脇の、三尺仕切の押入の前に何か片付物をして居た、四十前後の、身嗜みの好い、色の淺黒い、扮裝から小瀟洒した風の女、それと氣が付いて、振返つて襖を片手に中腰の身を捩向けた。

「おや、高ちやん。」

「あら、那樣處に居たの。」

と向直つた見返つた娘、言ふ間に逸早く傍へ來ると、早莞爾して其まゝ、

「早かつたらう。」

「其筈だわね。」

「厭よ。」

「何故さ。」

「知らない、又調戯はうと思つて。」

と立つたなり、少し身をくねらして、袂を返して、何と言ふ事はなく胸に押當てて、言知らずそは〳〵した樣子。笑つて年上のは、手ばしこく片付物を濟まして、襖を閉めて立上ると、

「おや〳〵最う暗くなつて來たね。めッきり又日脚が伸びたと思つたに、何かして居ると待つてる間もありやアしないねえ。」

言ひ〳〵茶の間へ入つて來て、

「此方へお出な。まアお坐り。今火を點けるから。」

言捨てゝ又、先刻お高の入つて來た板の間の方へ出て行つたが、小脇で洋燈を扱つて居る物音がすると、やがて彼方から、

「憚り。其處の自在をいつもの處へ掛けておくれな。」

「おや最う人を使ふの。」

「何だねえ。動き泣きをすると寄せ付けないよ。」

「おゝ恐い。」

と笑つて尻輕に立つ。ぱつと燈火が射して程もあらせず、

「御覧よ。此風變りの洋燈を。昨日冷かし過ぎてつひ押付けられたんだがね。そら、いつも廻つて來る源さんにさ。彼の人は商ひが上手だねえ。」

部屋は六疊の間、脇に長火鉢を据ゑ、壁に寄せて中古の茶簞笥、上から三味線が二挺、久しく使はぬと見えて、轉軫に塵埃が溜つて居る。背後は押入並んで、佛壇此方の柱の隅から繭玉が下つて、天井の眞中には虫封じの御符が見えた。

年上のは此家の女房の、お定と言つて、其處等に氣さんじの噂の女亭主は田舍廻りの糶呉服、それからそれと渡り歩いて、月の大方は留守にして居る。子もなく厄介もない家、お定は一人暮しのやうな身を、然し氣樂にして過して居た。元は何であつたか、何處となし垢脫けがして、昔磨いて居たと思はれる跡も見え、時とすると、恐ろしく下卑た言葉遣ひをする。見たところ一癖有りさうな、油斷のならぬ相好はして居るが、奥には別に惡氣のない、野暮らしい程の實も持つて居る。今の良人と一處になつたのは、二十八九からとか。いゝ加減世帶染みて、今は最う餘り自墮落にもして居ないのである。

お高は十七ばかり、力味の勝つた涼しいぱッちりとした眼に、淡く描いたやう

な眉引締つた口、片笑靨、細面の色は白い方ではなかつた。襟の掛つた瓦斯の着物に、帯は小柳繻子、髪を結綿にして、黄八丈の前掛を締めて居た。

お定は佛壇に灯を供へて、其處等の戸締りをして歸つて來ると、

「さア、これで何も彼も事濟みだ。」

と火鉢の前へ重さうに鐵瓶を下して、下の火を覗き込んで、

「おや〳〵まア、何時の間にかすつかり流れ了つた。よくしたものさ。些少ばかり暖付いて來ると、直に最う火がお留守になるわね、」

言ひ〳〵炭を加いで、跡の灰を直して居る。お高は後挿を拔いて、首を傾げて、可愛らしく眉を寄せて痒さうに髷の下へ差入れたが、元へ直すと、

「本當よ。だが餘ッ程暖かになつたのね。今紺屋へ寄つて來たんだがね、此處まで少し急いで來ると、最う汗が出るんだもの。」

「然う。那様に急いだの。」

とお定は意味あり氣に、

「矢張急がせるものがあるとねえ。」

と顔を見る。お高は白ばくれて、微笑みながら、
「あゝ、早く叔母さんの顔を見やうと思つてね。」
「おや、憚りさま、お門違ひだよ。」
「あら本當よ。」
「おほゝゝ、何處を押しやア那樣音が出るだらう。其口の下から焦れないやうにおし。伊之さんは屹度遲いから。」
「始つたよ。又厭がらせをお言ひなんだらう。叔母さん。惡い病よ。」
お定又笑つた。
「だつてお前、那樣事でも言はなけりやア埋らないぢやないか。つけ〳〵見せ付けられてばかり居るんだもの。」
「あら厭だ。叔母さん、那樣事を。」
「でも目にも餘らうぢやないか、恁うして一人で居たつて、打捨つて置きやア、直に手ばなしだもの。」
「おやいつ私が…………。」

「始ッ終さ。」

「まア可哀相に。」

「はいお茶。」

「おゝ吃驚した。」

「さまして召上れッとさ。」

「おほゝゝ、厭だねえ。」

と出してくれた煎茶を一口、飲んで下に置くと、お定も相伴のやうに湯呑を取上げたが、

「時にと。今夜は無盡があるから私は構はず出掛けるよ。來たら伊之さんにね、確かり留守番をおしと言つておくれ。」

と立上る。お高は其涼しい眼に一寸張を見せて、

「あら、それぢや今私一人になるの。」

「淋しかア玩具を出さうか。」

笑つて態とらしく、

「一人になるとお化に喫べられて了ふわ。」

「おほゝゝ、お化は可かつたね。安心おし、出るものは塵埃と鼠ばかりだよ。」

「鼠にも引かれるわ。」

「はてね、餅肌は違つたもんだね。那樣事を言つて內々一人になりたがつて居る癖に。」

言ふ中に簞笥の上の節糸の半纒を引掛けて、持つものを持つて、やがて支度を濟ますと、近く來て、見下したまゝ、

「ぢや行つて來るよ。溫順しくお留守をするんだよ。」

「おほゝゝ、お土產は。」

「おや厚顏ましい。氣を通して行つて遣るんぢやないか。默つて拜んで居るが可い。」

「でも今の中は留守番だらう。」

「まア、此子は。お剩錢を取る氣だよ。」

「おほゝゝゝ、育ちが惡いからねえ。」

「おほゝゝゝ、まアお樂み。」
言捨てゝ室を出る。前の襖を開けると横手に掃出し窓のある二疊の上り口、跟いて送つて出たお高は、
「叔母さん、提灯は。」
と土間へ下りて、下駄の歯をからりと言はせると、振返つて、
「なに最うそちこちお月樣が上るよ。」
「ぢやアね。」
とばかり、お高は障子に捉まつて、立ち身に輕く、
「行つてお出でなさい。」
お定は其まゝ出て行つた。表は宵の間の町を隔てゝ遠く賑やかな人通、月の上り前の東はぼうッと明るく、何處となし花の香が動いたと思ふと、風に連れてちら／＼と格子の中へ櫻が散込んで來た。障子を閉めて、お高は茶の間へ歸つて來ると、何といふ事はなく、今更のやうに其處等を見廻して、やがて又火鉢の前、待つ身の落付かず、立たうとして又坐つた。

待つたが、急に來ない。
「辻占入り花林糖。」
と其時。

（中）

それと行違ひに、突掛け下駄の勢ひよく、がらり格子戸を開けて、飛込むやうにして入つて來た。

「今晩は。」

お高は言ふ迄もなく、それと胸を躍らしたが、態と返事もせず、急に素知らぬ風で、横を向いて濟し返つた。外のは拍手脫けの體で、一寸足を止めたが、いきなりずいと上つて、つか〳〵と來て襖を引開けた。

「何だ。居るのか。人を馬鹿にして居やアがる。」

笑つて入ると、其まゝ火鉢の向ふへ通つて、どッかり坐込んだ。切立ての、中柄の唐棧に八端の平絎、よろけ縞の同じ唐棧の半纏を引掛けて居た。髮を綺麗に分けた中肉の色の黑い、二十四五の職人風であつた。

「お定さんは。」

と直に聞く、お高は初めて振返つてぢろりと見ると、冷やかに、

「誰だえ。お前さんはお定さんに何の用なの。」
相手は氣を打つて、
「何だ。何うしたんだい。いきなりに變な事を言はれちやア面喰ふぢやねえか。」
「些少は面喰ふが可いよ。癖になるから。」
と言つて又態と、
「お前さんは誰だよ。」
「驚いたな。へい、私ア町内の若え者で、伊之助といふ、しがねえ奴でござえやす。何分宜敷願ひやすよ。へい。」
とお前立ちの狛犬といふ身で畏まる。お高は笑ひもせず、
「然う伊之助ッてえのはお前さんかい。私ア那様人ぢやアないと思つたよ。」
「へい、最う些少男が好かつたかね。」
「男前よりは實が有る筈だよ、さんざッぱら人を待たして置いて、今時分のそのそ來るやうな情無しぢやアないと思つて居たのさ。」

「解つた。其事か。突如だから見當が付かなかつたらうぢやねえか。勘忍しねえ。今出やうと思ふと、そら新道の寅が來たんだ。」

「寅が來やうが、猫が來やうが、那樣事を私が知つた事ぢやアないやね。此方は正直に、先刻から馬鹿な顏をして待つて居るだらうぢやないか。伊之さん、氣の利いた按摩は最う三軒ばかり稼いだ時分だよ。」

「一言もねえ。平謝りだ。劈頭から然う浴びせられちやア、文句の出やうもねえぢやねえか。俺が先へ來て居る約束だつたから言ふ事ア出來ねえが、俺も那樣に待たせたつもりぢや無かつたんだ。」

「矢張私を見くびり切つて居るからさ。」

「むゝ今夜は甚く付けが荒えな。まア茶でも飮ませねえか。」

お高もはずみで言つたやうなものゝ、事實怒つて居るといふ程でもないから、其間に言葉を柔げて、

「察しるが可いやな。一人で待つて居ると、ぢれッたくつて、ぢれッたくつて、仕樣がありやしないぢやないか。」

と茶を注いで、猫板の上へ出す。
「解つたよ。最う可いやな。負けとけ。嗅ア大明神ッ。」
と茶碗を取つて、一息にぐいと仰飲つたが、
「熱つゝゝゝゝ。」
「おほゝゝゝ、いゝ氣味だ。」
「冗談ぢやねえ。ほう。」
と息を引いて、
「腹の底まで煮え込んだらうぢやねえか。」
「餘りまんがちだからさ。矢張罰だわね、おほゝゝゝゝ。」
伊之助も苦笑ひ、
「いゝ面の皮だ。あゝ、未だひり〳〵する。」
と言つて、調子をかへて、
「時にお定さんは何うしたんだ。」
「無盡と言つて外したの。」

「むゝ、それでお前の一人天下といふんだの。」

「なに私ばかりぢやないよ。」

「何故。」

「お前といふものが有るぢやないかね。」

「はゝゝ、何の事た。這麼に安くして居ながら。」

「あれ、何を安くするものかね。なんぼ私だつて、亭主は亭主と思つて居るわ。家に居る時だつて、私は最う娘の氣ぢやアありやしないよ。」

「うまく言ふぜ。」

と伊之助は上げ煙管、喫してぽんと拂くと、

「其氣で亭主風を吹かせうか。」

「おほゝゝ、今から世帶の稽古かえ。伊之さん、私はね。」

と持前の片笑靨に、

「お前は亭主になると屹度邪慳だらうと思ふよ。」

「馬鹿言つちやア可けねえ。邪慳處かい。いつも此通りだ。頭の上つた例

しはありやしねえぢやねえか。俺こそ然う思つてるんだ、同棲になつた日にやア、それこそ尻に敷かれ通しで、から最う意久地のねえ事だらうと、本當よだが、それでも俺ア得心するつもりで居るんだ。」

「まア、可哀相に。私ア那様風に見えるかねえ。私が其麼に無考へでも嗜む處を嗜む位は知つて居るわね。お前私を那様女だと思つてお出なの。」

「然うでなけりやア此上なしよ。だがお前は、何故又俺を邪慳だなんて思つてるんだい。」

「でもね、外で調子の好い人は、内ぢやア甚くむづかしいッて言ふから。」

「へえ俺が、これでも調子が可いのかえ。」

「でも誰に向つてもいゝやうな事ばかり言つて居るぢやないか。」

「然うか。那様事なら譯なしだ。これから無上に突慳貪にして遣らう。二言目にはぽかりと喰らはせる。面白え。然うしてくれべい。」

「まア、那様事をされて堪るものかね。」

「いゝや然うする。其方が甚麼に勝手が好いか知れねえや。やい。まごま

ごすると撲りのめすぞ。」

「おほゝゝゝ、それぢやァ喧嘩腰だァね。」

「可いやい。默つてろい。」

「まァ、手が付けられないよ。」

「なにい。」

と不意に立上る。

「何だねえ。急に氣の狂つたやうに、お止しよ最う。」

伊之助は何うするかと思ふと踵を返して、向ふへ出て行つた。

「あれ何處へ行くの。」

「雪隱だ。」

「おや厭だ。おほゝゝゝ。早く行つてお出でよ。」

其まゝ伊之助は障子の外へ、後にお高は、流石逢瀬の嬉しさの、目色に動いて、際立つて晴やかに見えたが、只見ると、今伊之助が投出して行つた煙草入木彫の虎の根附の着いた棧留の兩提が、丁ど此方へ向いて口を開いて煙草の隅から

疊んだ紙の端が一寸見えた。お高は何心なく目を留めたが、膝行り寄つて手に取つて少し引延して見ると、文殼で、中は見覺えの女文字。

お駒と言つて三年前まで同じ小學校の同じ處に、二三の席順を爭つて同じく通つて居た、隣り町の棟梁の娘、相手はそれであつた。

急がはしく讀んで行く中に、お高の手はぶる〳〵と慄へ出した。顏は熱し、眼は光つて、思はず手紙を摑んですつくとなる。

中には近い頃の逢引の事が書いてあつた。

舌ッたるい、種々の事が添へてあつた。

屹度よ。屹度よ。といふやうな字は到る處に、後から腹の立つばかりの行を追つて、見捨てると聞かないよと留めてあつた。

縁を踏んで、何も知らず伊之助は歸つて來る。障子越しに屹と其方を見返つたお高は、常から氣の勝つたやうな顏の、其時物凄いまでに見えたが、何と思つたが急に手紙を隱して、齒を喰ひしばつて押堪へるやうに、ぢッと面の色を包んで待つた。

障子が颯と開く。お高はびたりと坐り直した。伊之助は元の座に返つて腰を下すと何心なく、

「おい、お前今夜は些少ァ遲くなつても可いのか。」

お高は耳にも留めず、改つて、ひたと打向つた時は、既氣味の惡いほど落付返つて居た。

「伊之さん。今度は冗談で言ふのぢやないからね。お前さんも其氣で聞いておくんなさいよ。可いかい。私は今夜ッから、今夜もたつた今ッから、お前さんとは最う緣を切つて了ふから、其つもりで居ておくんなさい。」

「えッ。」

と伊之助は不意を喰つて、流石に氣色を變へて打目戍つたが、

「な、何を言ふんだい。戯けるにも程があらァ。切れるとは何の事た。よもや本氣ぢやあるめえが。譯を言はなくつちやァ談話が出來ねえ。切れるたァ、な、何で切れるんだい。」

「おほゝゝ、那樣に恐い顔をおしでない。伊之さん、私は今、お前の煙草入の中

にあつた手紙をね。」

と出して颯と擴げて、前に突附けやうとする。

「なに手紙ッ。」

思はず立掛る伊之。

「其處から御覽な。お駒さんのさ。不意と見付けたもんだから、つい皆讀んで了つたのさ。私も言ふ事はそりやア胸に持切れないほどあるけれどね、恁うなつては最う何も言はない。今更いがみ合つたつて始まらないから、綺麗に別れて了はうよ。切れた印に此手紙は貰つて置くよ。」

言ふなり立上つて行掛けた。伊之助は證據を出されてから、當座に詰つてまづい顏、少からずだぢろいで見えたが、遮ぎるやうにして其時、

「待ちねえ。それにやア譯が有るんだ。むゝ、入組んだ譯があるんだ。まア下に居て聞いてくれ。」

「何だねえ。未練らしい。お前の器量が下るばかりだよ。通しておくれ。歸るんだよ。」

とひらり身をかはすと、衝と通拔けて駈出した。

「おい、待たねえか。おい。」

と伊之助は跡を追つていきなり臂を伸ばしたが、居かず先へ拔けて、お高は既板の間を駈下りた。

「おい、お前は。」

と半ば言はせず、

「知らない。他人のお前に最う用はないよ。」

と敷居を外へ、言ふ間に水口の脇に立つと、

「さよなら。」

と前面を向いた儘、態とらしい元氣のいゝ聲で言つて、ふいと行つて了つた。

外は朧月で、未だ春の夜の人の行交、見上げる向ふの高みに、背後を見せて居る料理屋の二階から、入亂れて騷歌の聲が、崩れて下へ瀧のやうに落して來る。片側塀續きの下は空溝の處々草が生えて數町。

お高は一人になると最う上の空、見えず、聞えず、何處へ來たのか、何處へ行くの

か、何も知らず、地を踏鳴らして、遮に無に前へ、駈けるやうにして行つた。畜生人でなし、何うしたら、何うして遣つたら、と思ふは只其事のみ、波立つ胸に面は變じ、目は輝き、歯を喰ひしばつて夢中に行拔ける。下駄の前歯を折つたのも袖を嚙裂いたのも、櫛や簪を振落したのも、半ばうつゝで、人こそ無けれ、朧でこそあれ、亂れた姿を月に曝露しにして、物狂はしく先へと足に任せて行つた。

途端に脇から、

「やい、お高ぢやねえか。ど、何處へ行くんだい。」

と慌たゞしく呼止めたものがある。お高は吃驚して、俄かに我に返つたやうに急はしく其方へ振返つた。眞近に、月を浴びて、唐棧揃腹掛に白木の三尺、四十恰好の、苦味走つた顔、思掛けない親父の金五郎であつた。

「あら、まア阿父様。」

「何うしたんだい。え、おい全で氣が違つたやうに、夢中になつてまア何處へ行かうてえんだ。」

「此處は何處なの。」

「馬鹿、己が居る處も解らねえのかい。一體何うしたんだ。」

「私………私、今あの………。」

とお高は息のはずむのに、辛うじて紛らしながら、

「私、今其處で犬に追掛けられて、夢中で此方へ逃げて來たもんだから。」

と言つて今更のやうに胸を擦つて、

「あゝ恐かつた。私本當に何うしやうかと思つたわ。」

「何だ。俺ア何事が起つたかと思つたい。手前は又何だつて今頃這麼處をまごついて居るんだ。」

「え、何さ。先刻紺屋へ行つた歸りに一寸お定さん處へ寄つてね、今其處から出て來た途中なの。本當に最う喰殺されて了ふかと思つたわ。まア何うしやう、髪も這麼にし了つて、簪も何も何處へ落して來たんだらう。おや〳〵下駄もまア。」

「ちよッ、詰らねえ目に遇やがつたな。まア可いや。怪我をしねえだけ目付け物だ。さア、一處に歸らうぜ。」

「阿父様、お前は何處へ行つたの。」と聽て立並んで、帶を一搖り、むら／＼と又、沸立つ胸をちッと押へて、心ならずも引添うて行く。何も知らず金五郎は、

「俺か。俺ア小山の旦那ん處から、一寸來てくれッて言ふ使で出掛けて行つたんだ。仕事の用と思つて行つて見ると、思掛けねえ談話よ、矢張お前の事だ。」

「え、私の事。」

「まア家へ行つてから緩くり話さうよ。」

「あれ、可いぢやないか此處、だつても。何處で話したつて同じ事だわね。私の何なの。」

「だが往來中で言ふのも變だからな。」

「可いやね。誰も聞いて居やしまいし。」

「ちよッ、面倒だ。むゝ何よ。あのそれ新道の高岡さんな、高利貸の。」

「あゝ、あの人が何うしたの。」

「彼處の若旦那がな、お前を嫁に欲しいッてえんだ。」

「えゝッ。」

お高は目を睜つたが、然し顏を赧めはしなかつた。

「と言ふ小山の旦那の談話なんだ。冗談ぢやねえ、先は何萬ッて言ふ身代だ。なア、此方はお前引振つたつて高の知れた植木屋だ。何うした氣紛れに吹込んで來たかは知らねえが、付けもねえ、丸で談話のやうぢやねえか。段々聞きやア、それも若旦那が何でもッて言ふ意氣込みで、親旦那を說付けたッて言ふんだから、一通りは解つたとは言ふもんの、然し俺ア不承知だ。お見立てゝ有難えと言ひてえが、俺ア些少も有難かアねえ。何だつてお前高岡の旦那が彼迄に仕上げた、其本を洗つて見ねえ。人の面ア冠つた奴の出來る仕事ぢやねえぢやねえか。」

お高は默つて耳を傾けて居た。金五郎は見も遣らず、外輪に捻つた突掛け草履の立身を其儘、月下に昂然として、

「植木屋の金五郎は、土地に生れて四十年からして恁うして居るが、憚りなが

ら慾得ぢやァ渡つて來ねえ。べらぼうめ、男を見損やがつたかい。」

と言つて少し腰を折つて、

「とは思つたが、義理のある小山の旦那の前だ。餘り向見ずな事も言へねえからな、飛んでもねえ事でえす、何しろ釣合はねえ取組で、私にやァ飲込めねえが、然しよくまァ考へた上で又、と言ふやうな事にして歸つて來たんだ。」

「…………。」

「なァ、手前も俺の子だ。よもや那麼處へ目のくれる女ぢやあるめえ。解つてらァ、なァ、一も二もあつた談話ぢやねえ。」

お高は稍暫く言ひかねたやうに見えたが、思切つて、

「阿父さん、でも若旦那には罪はないだらう。」

聞きも敢へず、矢庭に振向いた金五郎の眼はぎらりと光つた。

「な、何だと。」

お高は其時決然とした面持で、

「阿父さん、時々家の盆栽物を見に入らつしやるので私はあの方をよく知つ

て居るよ。先が本當なら私嫁く氣だわ。」

「這畜生な、何を言やがるんでえ。己ア那樣丁簡を持つて居やアがるのか。呆返つた奴だ。さア、最う一度言つて見ろ、己、只は置かねえぞ。」

「あれ、何だねえ。いくら人が居ない處だつてまア靜かにおしな。阿父さん私も言ふ事があるから家へ歸つてよく聞いて貰はう。」

「聞かうとも聞かなくつてよ。俺もみッしり言はにやアならねえ。さア、早く來い。」

「行くわね、そんなに急がなくつたつて。」

「來やがれ。えゝ、さつさと歩かねえかい。」

「おほゝゝ、何も那樣に怒らなくつても可いわ。」

路は坂になつて其處から振返ると、左手に目を迎へて、巍然とした其高岡の一構、月にも佗びしげな伊之助の家の軒の傾いた影も見えた、お高はちッと見て振仰いで又親父の顏を見上げたが何も言はなかつた。櫻の多い山の手の、西も東も花の香取籠められた中を、親子は二人、坂を彼方へやがて物蔭に消込ん

で了つた。

虚偽の價

(一)

「屹度よ、貴郎。」

男は言葉なく點頭たのであつた。

「あら、屹度よ。可いの、貴郎。」

月は今雲を離れて、間近の露の萩の上蟲を隔てゝ汀に近く、其處に娉婷とした廿一二夜を鮮やかな光に榮えて、思の色を其の儘に見せて、紛れもない館の息女歌子の姿、人こそ無けれ、思ふ男の前でこそあれ、夜目の彼方の囁きでこそあれ、品位に膨つた唇から、恁うした言葉の餘所に洩れた事は固より無いのである。

男は微笑みながら、

「はゝ、那樣に心配になりますか。」

と眺めるやうに其眼を見下した。言知らず其身一つに、此美を占領して居る裡の誇りと、時に取つての情の滿足とに、若い、血の多い、面の色は輝くばかり、一意其處に生命があるかとのみ思詰めて居るやうに見えた。

聞くと等しく、歌子は颯と其麗はしい眼色に稍角を持つて、

「あれ、貴郎、私一生懸命でお聞申して居るのぢやありませんか。」

男は愉快らしく、歌子の怨じ顏の、常から二もないものに思つて居る星のやうな眼眸を打目戍つた。何か言譯をすると思へば、さはなくて面白げに、

「はゝゝ、」

歌子は怫然とし態と身を背けた。

「可うございます、たんと然うなさいまし。私最う知らないから可い。」

男は尚も打笑ましげに、

「歌子さん。」

「知りません。」

と強かつた。

「はゝゝ、又怒らせて了つた。」

さや／＼と、石を渡つて、水が呟くやうに流れて行く。其處に萩、彼處に萩、萩と萩の中を蜿つて、秋の夜頃を月の徑、其處に二人は睦まじげの影を曳いて今此庭に只二人の靜かな夜を身に占めて居る。男は色黒の二十七八、高からず、低からぬしツくり身に適つた洋服姿眼の淸しげな、眉の秀でた、一際の形容をさへ持つて居た。竹川義方といふ、可なりに知られた素封家の嗣子、進と呼ぶ恰好の若人である。

重ねて、

「歌子さん、」

歌子は最早返事もせず、拗ねて衝と向ふへ行かうとした。進は微笑むばかり止めやうともせず、其處等逍遙ふ態に、月を見上げて獨語。

「ふむ、一つ謝罪らせた上で口をきいて遣らうといふのか。面倒なお孃樣だ。」

歌子は矢庭に駈戻つて來て直と傍へ、

「貴郎は本當に餘りですわ。」

「何故、」

「でも他を全ッきり何んとも思つて居て下さらないんですもの。」

「ふむ、それで、」

「それ、那樣冷淡な事仰有るぢやありませんか。」

「冷淡、何が冷淡、私全で覺えがないが。」

「御覽なさい。其調子ですもの。私最う今度は本當に聞かないから可い。」

「はゝゝ、今度のが本當なら、先刻のは嘘だつたのですね。」

「勝手になさい。私最う貴郎とお談話なんかしませんわ。」

進は聲に出して打笑つた。

「はゝゝ、實に妙だ。」

歌子は更に腹立たしく、

「お笑ひなさいまし。いくらでもお笑ひなさいまし。何うせ可笑うございましやう。人が這麼に心配して居るものを、貴郎のやうな方は本當にありは

しない。」

「いよ〳〵妙だ。貴孃は廻り道ばかり取つて一人で腹を立つて居る。然しそれも可いでしやう。女といふものは兎角に閑ですからね。」

歌子は躍起となつて、

「何ですとえ。閑ですと。まア貴郎は私が閑費しに這麼事を言つて居ると思つて居らつしやるの。貴郎は何といふ方でしやう。最う何うにでもなさいまし。私は勝手に何にでもなつて了ひます。何うなつたつて最う構やしませんわ。」

進は衝と寄つて輕く肩に手を掛けた。

「止さう。歌子さん、這麼事いつまで言つて居ても切りはない。貴孃のお氣遣ひはよく解つて居ます。捨てゝ置けと言つた處で、私が捨てゝ置きましやうか。談話は濟んで居るのぢやありませんか。貴孃が繰返すから可けない。」

「貴郎はそれだから酷いと言ふんです。それほど何も御存知なら外に仰有

りやうもあるぢやありませんか。全體人を馬鹿にして居らつしやるからだわ。」

「謝罪つた。僕が惡いとしやう。これから何でも御機嫌を取るとするさねそれで可からう。」

「あれ、又貴郎は那樣………。」

「はゝゝ失策つた。つい口が滑つて可けない。仕方がない、出直して又一つ謝るとしやう。」

「知りません。誰が謝罪つてくれと申しました。貴郎は勝手な事ばかりして一人で遊んで居らつしやる。人を何と思つて居らつしやるのでしやう。本當に憎らしいつたらない。」

「降參だ。最う和睦しやう。」

「御自由に。」

とばかり避けるやうに衝と引離れた。此時、

「姉樣、おや姉樣は何處?」

と繁茂の彼方樹の間を透いて月に描かれた優しげの物越、進は聞付けると其儘、

「や花子さんか。此處だ〳〵早く來て、姉樣の怒つて居る顔を御覧、恁ういふ顔は容易に見られないから。」

歌子は狼狽へて慌たゞしく、

「まア、貴郎那樣事を妹に…………。」

進は事ともせず、笑つたまゝに、

「然し事實だから。」

歌子は言ふ事を知らなかつた。投出したやうに、

「本當に貴郎といふ方は…………。」

進は更に機嫌よげに見えた。蟲の間を近づく足音、霧を離れて眉の鮮やかなふつくり圓い妹の花子の顔が、萩の葉越しに其處に見えた。進は振向いて逸早く、

「花子さん那方から來たの。」

歌子は小聲に、

「邪魔だわ。」

花子は何も知らず、はた／＼と走寄つて、近づく其儘仇氣ない態に、

「見えない筈だわ。這麼處に居るんだもの。私方々探したのよ。」

進も實は邪魔でない事はなかつた。然し笑つた。笑つて月に若い、水々しい顏を映して、談話は直ちに、賑やかな、罪のないものになつた。秋を餘所の晴々しい一夜。

（二）

月を踏んで暫くして進は、歌子の許父方の緣を引いて居る浪原中將の邸を去つた。身は順境に前途に障りの何をも認めず、殊更若い健やかな人の眼に入る何物も興ありげに、身を取卷いた總てのものが、いづれも自分を慰めるかのやうに見えた。今の程歌子が氣遣はしげに脇から急に緣組の事を申込まれたのを話して、若し定つたら、とおど／＼した時にも驚く色もなく、何かと思へばそれだけの事か。宜しい。引受けた。僕が何うでもするから安心してお出でと事ともしなかつたのであつた。路を夢に、葉卷の薫元氣よく歸つて來たのは、未だ九時少し前であつた。

家は程近い小日向臺、煉塀掛りの木深い住居。進は横手の通用門から衝と入つて中の口を奥へ通つた。居室へ行くかと思ふと、何か用ありげに幾室を越して南の角の母の部室を指して行つた。

進の母は志津子といふ若い時から聞えた美人で、今も其俤を何處やらに殘し

て居る。未だ黒髪の色に見えて、年より四つ五つは若く見える。二重目縁の張のある眼に、思切つて通つた鼻筋、昔ながらの肉置の、押出しの好い奥様態りであつた。

何心なく、襖に手を掛けて進は中へ入つた。ぱつとした電燈の下に眩いばかり小道具を飾立てた部屋の中、志津子は隅に据ゑた唐机に凭つて肱杖支てうつゝなく眠つて居た。身體の加減で昨夜一夜、眼も合さず明して了つた事を今朝母から聞いて居た進は、首肯くまでもなく其故にして、近く寄つて起さうとした。

見ると机の上に、半ば巻込んで一通の手紙が繰擴げてある。近づきさまに進はゆくりなく其上に目を落した。

何かは知らず、進といふ字が餘りに、多く見えるのに、思はず、目を惹かれると、共に、見る〳〵面の色が颯と變つた。

志津子は其まゝに、夢も騒がず、疲れを受けていつに似もやらず眠つた居た。

進は石のやうになつて、眼を輝かしたなり動きもしなかつたが、やがて一聲矢

庭に口を銜いて、

「母樣、」

思はぬ鋭い舌の根に志津子は吃驚して目を覺まし、急がはしく瞬きしながら、進を見て言譯のやうに、

「まアお前かえ。吃驚した事、おほゝゝ。なに昨夜寐なかつたものだからね少し考へ事をして居る中に、いつの間にか寐入つたと見えて。」

と稍、身を起して、

「お前いつ來たの。よく／＼寐込んだと見えて些少も知らなかつたよ。」

と手首を揉返しながら、漸くはツきりした眼を進の方に押向けた。

「何か用なの。」

と言つて不意に氣が付いたやうに、

「おや、お前何うかおしかえ。まア、其顏色は。え何うおしなの。な、何事が起つたのだよ。」

と慌たゞしく見るから親心の氣遣はしげな色を明らさまに見せて、

「あれ、何故默つて居るのだよ。　進お前本當に何うおしなのだよ。」
進は差當つての、歌子の事で此處へ來たのであつたが、今はそれ處でなかつた何をか言はうとして、言敢へず唇の戰かれたが、
「母樣、其處にあるお手紙は…………。」
志津子は寐起の上を進の只ならぬ面持に氣を取られて、机に其手紙を出してある事を全で忘れて居た。慌てゝ振返つて見るより、はツとばかり進のそれよりも更に色を失つて隱しもならず差俯向いて了つた。
二人其儘に云ふ事を知らなかつた。
暫くして途切れ〳〵のさながら悲しげの進の聲音、
「母樣、そ、それは事實ですか。」
志津子は物をも言はず、目をさへ擧げやうともしなかつた。
「母樣確かりした返事をなすつて下さい。私もよく考へて見ねばならんと思ひますから。」
志津子の身は幽かに打顫はれた。室は寂として、障子の棧の茶立虫が、脇の置

時計の秒と、さながら調子を取つて行くやうに、耳に立つて只聞えるのであつた。

二人苦しげに、打向つて又少時、

「母樣、」

と進は更に言つた。

志津子は其間に漸く胸を据ゑたらしく、やがて振仰ぐと、俄かに度を失つた先の面持は消えて居たが、然し少からぬ恐れを抱いた眼を押向けて、

「進一度はお前に、何うでも言はねばならない事だが、今日まで言後れて、つい恁ういふ事になつて了ひました。お前も辛からうが兎も角成行を一通り話さうから。」

と言つて、憚かれるやうに四邊へ氣を付けたが、押直つて、言難くさうに、

「お前此手紙の主を知つてお出かえ。」

「はい、存じて居ります。見馴れた手跡ですから。」

何さま其手蹟は見たら忘れる事の出來ぬ變體の自己流であるから、殊に屢々

父の許で年久しく目に觸れて居るので、進は一見して其人を知つたのであつた。父の莫逆の友安藤左一郎といふ、某女學校の校長、殊に德行の高いので、聞えた人、父とは三十年からの交りのさながら兄弟のやうにして居るので、進も叔父とさへ呼慣れて居るのである。

「進、お前を生んだ母の身になつて、氣の毒だけれど聞いて下さい。今から二十九年前私が丁ど十七の歲、」

言ふなり最早行詰つたが、いつか目を落して、

「羞かしい事を言はねばならぬ。お前の……知つての安藤の叔父さん、私に二つ上だから、其頃は未だ二十歲前、此家の阿父樣の世話になつてお出の時分義方と二人して、私の阿父樣の處へ、語學の稽古にお出でゝあつたが……、今見た手紙で大方推量をおしだらう、私も末に這麼事にならうとは夢にも知らず何も言つて了ふが、ついした事から深い約束をして了つた。全體安藤さんの阿母樣と私の阿母樣とは、以前同じ御殿に勤めて居た緣で、安藤さんは家中の人と兒供の時分から心易かつた。殊更兩親に早く別れてお

了ひだつたから、阿母様は取分けて、何彼と目を掛けて、お出なすつた。阿父様にもお氣に入り、あゝ彼の儘で行つたなら長の月日の恁うした憂い目を包隠して渡つて行くやうな事が何うしてあつたらう。」と聞えるばかりの吐息をついて、と又進の顔を、不安の眼色に竊と見上げたが、

「あゝ最う、よしない事は言ひますまい。私は一圖に其約束した方を思つて居た。其中に其方は一人で世間に立つて行くやうにおなりだつた、望みの通り同棲になるのも、最う間もないやうに胸の中ではお互ひに決めて居た。忘れもしない翌くる年の五月。

其時は最う阿父様はお亡なりだつたが、跡も御懇意にして居た者だつたから竹川さん――其頃は未だ竹川さんと言つて居た――竹川さんも度々お見えになつたが、拍子と言ふものは解らないもんだね、三日ばかり阿母様が別に氣遣ふほどではなかつたが、熱の氣味で休んでお出だつた。丁ど二日目の夕方安藤から聞いたと言つて、竹川さんが見舞に入らしつた。暫く枕元でお話しなすつた跡、別間で私と少しばかり身の入つたお談話をして歸つてお出なす

つた其時からの事であつたとか。私は何も覺えて居ないが、降つて沸いたやうに何がお心に染つたのか、跡で聞いて吃驚した。竹川さんは其時から私に懸想なすつたといふ。

誰がお前、那樣事を思掛けやう。知合つてからも何年越近しくお交際をして居たのに、それまでは何の事もなくつて、私の方から言へば、本當に氣が知れなかつた。何にもしろ那樣事とは、全で思ひも付かずに居たのだから、それから後も私は前と少しも變りはなかつた。其中に竹川さんの、段々御樣子が變つて來た。

私は未だそれでも氣が付かないで居た。勿論それらしい事を、假にも口にはお出しなさらなかつたし、素振にさへ見せやうともなさらなかつた。只、以前とは何といふ事もなく違つて居らしつたから、私は何うなすつたのかとばかり不審に思つて居た。

すると一日安藤さんが、只ならぬ御樣子で入らしつて。竹川さんは堪へ切れず、何も彼も打明けて仰有つたとの事。

私は其時初めて聞いた、そも〳〵の事の起りから、それから後の、竹川さんの思込みやうの、一通りではないといふ事、若しや事が間違つた日には、甚麼仕末になるかも知れぬ、それからそれと、恐ろしさに身内の慄はれるやうな事まで聞かされた。

竹川さんには外ならない親友で、私の一家とは分けて別懇といふので、最初の橋渡しに安藤さんが頼まれた。竹川さんの御両親も共々口をおきゝなすつた。竹川さんは打明けて御両親にもお願ひなすつたとかで。

私を何でもお貰ひなさらうといふ譯。

不承知でも達つて言伏せてくれろ。談話が付き次第、表立つて申込まう手筈になつて居た。

と言つて私に何うしやうがあらう。私は泣出さないばかりで聞いて居た。

話して居る御本人が、現在安藤さんではなからうか。

けれども安藤さんの方が、私よりも未だつらかつた。安藤さんは其場合、無理にも御自分を捨てゝ了つて、何處までも竹川さんの爲に骨を折つて上げなけ

ればならない深い義理に縛られて居る。安藤さんが身を立てるまでには、何から何まで、竹川さんの阿父樣の世話になつて居たと云つて可い位、阿父樣には恩人なり、竹川さんには親友なり、殊更竹川さんの身にかへて思込んでのお頼みであつた。

思切つて安藤さんは御自分を犧牲になさると仰有つた。そして私に手を支いて、何うか竹川の望みを叶へさして遣つてくれと仰有つた。」

言續けて不意と聲を止めた。當時を思出したか、眼色は亂れて、胸の鬪の跡を其儘に映して居たが、やがて本に返ると、跡の成行は知つての事だから、細々しい事は言はないが、切ない種々な目を過してから後、血を吐くやうな思ひをして、私は到頭此竹川の家へ嫁付いて來る事になつた。

最う〳〵何も目を眠つて居た。諦めて了ふ事と、取直して了ふ事に只掛つて居た。

それで事もなく濟んで了つたら、若い時分の一時の夢で、月日の中には、何うかして跡形も無くなつて了ふやうにもなつたらう。忘れはしないにした處が

今のやうな、あゝ今のやうな……。」
と又暫し取亂れた。心付いたやうに打直つて、
「進、聞いて下さい。半月ばかり經てから、私は吃驚して、若しそれだつたら何うしやうと思つた。私は身體に覺えがある。いよ〳〵然うならば、竹川の家へ來たより前の事。

月が變つて、確かに最う然うと定つて、私は只ならぬ身體になつて居たのです。それから先といふもの、お前の生れる迄の、生れてから其後の私の困みは何うだつたか。お前の爲、安藤さんの爲、義方の爲、私の爲、私は到頭本當の事を隱して了つた。進、勘忍して下さい。知つて這樣事になつたのでは決してない。それと知つた時は最う遲かつた。言ふのもつらいねえ、今の阿父樣はお前の本當の阿父樣ではないのです。」

志津子の其面持には、餘り電燈が明る過ぎた。進は然し見て居なかつた。見たら氣の毒とも思つたのであらう。色も直さず、さながら其處に作付けたやうになつて聞いて居たが、母の言つた言葉は、第一に間違つて居ると思はれる

と、現在母に向つて、子として思ふまじき事をも、冷やかに批判するやうな心地になるので、流石に堪られず、不意に口を切つて、

「解りました。仰有つた事はよく解りましたが、私には御挨拶がしかねます。私もよく考へて見ねばなりません。御免。」

とばかりで座を立たうとした。驚き顔に、志津子は慌たゞしく、

「あれ、お前……。」

進は肯かず立上つた。

「いゝえ私今何と言つて可いか解りませんから。」

「進。」

と志津子の聲が跡に聞えた。進は足を止めず、此方に背を向けたまゝ、殆んど逃げるやうにして室を出て行つた。

「あゝ、」

と深い、志津子の溜息の聲、襖の外になつて、進は胸に、さながら惱ましげの母の顏を思浮べたが、然し引返して慰める事は出來なかつた。はッと躊躇つたの

も少時、いつか足早に室を離れて了つた。

（二一）

茶の間から臺所への通ひになつて、納戸がはりの六疊の中の間がある、其間に隣つて、同じ廣さの女中部屋、がた〳〵物の小簞笥に、縁の取れ掛つた針箱などの取散してこそあれ、疊も燒けず、襖も黑まず、其處等手奇麗に見えて、切張もない出窓の障子夜も未だ涼しいほどの頃であるから、左右に開放したまゝ、前の竹格子を越して、重さうな無花果の葉が、燈火に冴えて眞青に見える。其方に近く俯向いて、今縫物の針を動かして居る、仲働の淸と言つた、廿歳ばかり、色白の、豊肥した風、むつくり高い膝の上に、巾地を引擴げて居る側へ、

「ちよいと、何うしたんだらうね、お淸さん。」

言ひながら來て、寄添ふやうにして座つた。お村といふ仲好の朋輩、二つ三つ年下の、丸顔の、小造りの、ふつくり髪の毛の麗はしいのであつた。重ねて顔を差寄せて、

「ねえ、本當に何うしたんだらうね。」

「何がさ、」

と相手は針を止めて振仰いだ。

「何がつて、奥樣が、」

「奥樣が何うしたの。」

「なに別に何うしたつて事はないんだけれどね……。」

相手は笑出した。

「何だね、下らない事を。いゝ加減馬鹿におしでないよ。」

「あれさ、お聞きよまア。」

と手を擧げて抑へるやうにして、未だ事ありげの面色を其儘、

「でもね、奥樣の御樣子が、いつもにない餘り變つて居らつしやるからさ。初手は御病氣かと思つたら然うでもお有りなさらないやうだし、伺つても何も仰有らないで、何だか大變に御機嫌が惡いの。私奥樣の那麼御樣子で居らつしやるのを見た事がないわ。」

聞くとお清も、流石に眉を寄せて、

「だつてお前、先刻から別に何の事もお有りなさりはしなかつたぢやないか。」

「だからさ、猶の事異しいぢやないか。先刻若旦那樣が歸つて入らしつて、お部屋で暫くの間談話をして居らしつたやうだつたがね、何でもそれからなの。其時に何うかなすつたんだらうとは思ふがね。でも若旦那樣は、彼の通りの御機嫌で歸つて居らしつたのだから、突如に何も有りやうはなし、何だが餘程妙だわ。」

「で若旦那樣は何うなすつたの。」

「若旦那樣はお部屋へ入らしつたッきり、」

「え、」

「音沙汰なし。」

「お前行つて見たの。」

「いゝえ、だつて御用がないんだもの。」

お清は深く考へるまでもなく、其儘只事のやうに、

「なに屹度何だよお前、何か知ら詰らない行違ひから、根もない親子喧嘩のや

うな事をなすつたのだよ。」

「然うだらうかね。それならば何だけれども……。」

と俯向いて、袖に簪の影を見せて、ちッと眼を一つに集めた。お清は見て冷かすやうに、

「お前は又大層氣にするぢやないか。お主思ひは違つたものだね。」

「だつてお前、ついぞ無い事なんだもの。氣にするのが當前だわ。お前は又餘り氣にしなさ過ぎるぢやないか。誰かの事だと直に夢中になる癖に。」

「おや人聞の惡い事をお言ひでない。妾だつていざとなりやア……。」

「おほゝゝ、又南瓜を抱へて飛出すんだらう。」

「まア、何の事だよそれは。」

「此間の地震の時のやうにさ。」

「何だねえ。彼時ア慌てゝ了つたんだもの、仕方がありやしないわね。」

「けれども彼時の事を考へると本當に可笑しいよ。まア何ていふ了簡で那麼ものを持出したんだらう。」

「可いよ。たんとお言ひよ。自分だつてお隣邸の火事ん時に、裸体で湯殿から飛出して來た癖に。」

「あれ私は外へ飛出しはしなかつたわ。」

「噓をお吐き。身體も拭かないで跣足で駈出した癖に。そら脊中の白鯰を若旦那樣に見付けられたぢやないか。」

「知らない。那樣おまけを付けて言ふんなら、私も其つもりでお前の種々な事を言つて歩くから可い。」

「一寸お村さん。」

「知らない。生憎と耳が塞がつて居ますよ。」

「いゝえさ。それぢやないんだよ。一寸、奥樣が茶の間へ入らしつたやうぢやないか。」

「え、」

と背後ざまに手を支いて、鼻から上を襖越し、ちらと茶の間の方を見たが、急に隱れるやうにして、此方へ向直ると聲を落して、

「然うだよ。出て入らしつたよ。御覧な彼の心配さうなお顔付を。」

お清も伸上つて竊と、及腰に瞥見をした途端、

「村や。」

「はい。」

志津子は紫檀の茶箪笥を背後にして、何時もの長火鉢の前に、思做しか鬢のほつれも、火影に淋しさうに見えて、目を落してぢツと前を見るともなしに、見詰めて居た。

「お召しなさいましたか。」

とお村は敷居越しに手を支へて、それとなし雲行を眺めるかのやう、竊と顔を見上げたのであつた。

「あ、お前進の處へ行つてね。」

「はい、」

お村は逸早く、さてこそと竊かに思つた。取敢へず、

「あの、紅茶を淹れたから話しにお出でと言つて來ておくれ。」

「畏りました。」
お村は兎角を言はず、又言ふべき身の上でもないので、身輕に立つて進の部屋通ひの廊下を、離れた洋室の方へと、稍小急ぎにやがて洋扉の前に立つた。
何心なく手を掛けると、がちりと音がして、いつになく錠が下りて居る。
輕く指先で音訪ひながら、
「若旦那樣、」
返事がない。
「若旦那樣、」
と再び叩いて立つた。
暫くして、つか〳〵と來る足音がして、戸も開けず中から、五月蠅さうに、
「何だ、用か。」
「はい、あの奥樣が……。」
「何だ。早く言へ。」
「あの、紅茶を淹れたから、お談話にお出になるやうにと仰有います。」

むゝ、」

と少し躊躇つて居るやうであつたが、忽ち口早に、

「然うか。あのなア、今差掛つて少し急いで遣つて居る事がありますから、今夜は御免を蒙りますと言つてくれ。」

「はい。」

と流石に接穗がなかつたが、

「あの何なら一寸でも入らしつたら……。」

「ちよッ、行かれる位なら斷るかい。行け。」

「はい。」

進は逸早く戸の傍を離れた樣子、お村は據無く踵を返した。

志津子は進の來ない事を聞いて、お村の見る眼もあつたから、流石に惱ましげの色は見せなかつたが、聲に出しては力なげに、

「然う。」

とばかり、やがて振返つて、

「進は甚麼樣子だつたえ。」

「はい。甚麼と申して……。」

「いゝえさ、いつもと變つたやうな事はなかつたかえと云ふの。」

「はい。それは何うで御座いましたか。あの錠が下りて居りまして、若旦那樣は中から御挨拶を遊ばしたのでございますから……。」

「なに錠を下して……。」

と思はず聲を止めたが、繕ろふやうに態と輕く、

「然うかい。それぢアね。お前御苦勞だが最う一度行つてね、私が少し話したい事があるから、後で用が濟んだら私の部屋まで來てくれるやうに、と言つて來ておくれ。」

「はい。」

とお村は其儘に立つて、足早に彼方へと出て行つた。志津子はほッと息、頭が下つて、自から眉が寄つた。氣遣はしげな面の色の、眼は一入に胸を深く、其儘其處に影を守られて居た。

其夜進は遂に來なかつた。志津子の今かと待つて居たにも拘はらず、書齋の電燈の終夜薄れもしなかつたにも拘はらず、室が離れて居たので双方の溜息さへ聞えなかつた。

(四)

「進、」

言はれて吃驚して振返ると、いつの間に其處へ來たのか、傍に引添ふやうにして、此方を打目戍つて志津子が立つて居た。進は今思ふ事の餘りに多いのに安樂椅子に身を深く、四邊の何も耳に入らなかつたので、志津子の部屋へ入つて來たのも呼ばれるまでは知らなかつた。顏を見合せてはッとして、思はず身を眞直にしかけたが、其儘頽折れるやうに坐に着いて、さながら苦しげに、

「母樣私は未だ確かりした御返事をする事は出來ませぬ。此室へお出下すつても、お互ひにたゞ心持を惡くするばかりです。阿父樣のお留守中が未だしもの幸ひです。私も何うか、今少し氣を靜めましやう。お願ひですから彼方へ入らしつて居て下さい。」

「いゝえ私、お前と這麼風で最う片時も堪へては居られません。私昨夜は寐なかつたのをお前知つてお出かえ。」

進も遣る瀬ない聲音に、

「私も昨夜は寐ませんでした。」

「然うだつたかい。勘忍して下さい。それなら猶更の事、お前の思つて居るだけの事を、今此處で言つて了つてくれたら何うだらうかね。」

「いや、それは未だ言ふ譯には行きません。」

「何故、え何故可けないの。」

「私自分の母に對して言へない事を思つて居るからです。や、兎に角今暫く彼方へ入らしつて居て下さい。私は未だ、實の處決心する事が出來ないのです。いづれお談話をせねばならんのですから、後に私の方から伺ひます。それまで何うぞ此儘になすつて置いて下さい。事に依つたら私の考へが間違つて居るかも知れない。若しも然うであつたら私は非常に嬉しいです。母様、私は充分貴女を思つて居ります。私の心苦しいのも察して下さい。」

「進、」

と志津子は急がはしく身を乘出すやうにして、いつか掛けて居た椅子を直と

進の傍へ寄せた。

「何うぞ最う私を泣かせておくれでない。 昨夜も言つた通りの、餘儀ない譯を考へてくれたら……。」

と少し言淀んで、

「それにしてもお前、昨夜私が言つた事は、よく聞分けてくれたらうね。」

「はい、お話はよく解りました。」

「然う、それならば彼の、私の事をも、少しは可哀相のやうに思つてくれたかえ。」

進は重々しく首肯いた。」

「はい、それは充分にお氣の毒に存じて居ります。」

志津子は颯と、眼に悦はしげの色を見せて、母なる人の、我が子のうつゝには、ッと進の膝の上に手を置いて、其儘打目戍つたが時も待たず、いつか又涙組まれて、

「進、よくく言つてくれました。 私やお前が、甚麼にか心持を惡くした事だらう若し然うならばこれから先、お前を見る度胸を痛くするやうな事がと、案じら

れてならなかつたが、お前が然う言つてくれたので、何よりも嬉しく思ひます。進、それぢやお前、矢張私を母と言つて居ておくれかえ。」

進は脊を直に、はツきりした、力のある聲音に、

「何を仰有るのです。現に母樣と言つて居るではありませんか。假令何であらうとも、貴女は何處までも貴女です。貴女は又私を甚麼者に取つてお出なんですか。」

「いゝえ。いゝえ。お前の氣性は能く知つては居るけれどね……」、

と又言遲れて、やがて直と、

「進、本當に勘忍して下さいよ。」

進は又も押返すやうに、

「母樣、ではこれで、一先づ何うかお引取りなすつて下さい。今も申した通りです。兎角の御挨拶は後にいたしたいですから。」

志津子は首肯きながら、

「は、行きましやう。お前が那樣に言ふのなら、其上お前の氣に逆ひたくはな

いから、あながちに居やうとは言はないがね、ならう事なら今、胸に思つてお出の事を、一寸でも聞いて行きたいが……。」

と顏を見て、氣をかねたやうに、

「お前今しがた、私に對して言へない事を思つて居るとかお言ひだつた。構はないから此處で言つて了つてくれたら何うだね。私を隔てゝくれるのでなければ、何うか今言つて了つておくれ。私それでないと、一人彼方へ行つてお前の來るまで、氣を揉んで居なければならないぢやないかね。」

「…………。」

「進、」

「…………。」

「お前那樣に言難い事なのかえ。」

進は振仰いだが、長く見て居るに忍びない態で、

「然うです。言難いのです。外ならん貴女に向つて言ふのですから、全く言難いのです。仕方がありませんでは片端だけ申しましやう。母樣、知らなけ

れば兎も角もです。既に知つた以上、私は父を欺いて居る事は出來ません。」

「えッ。」

志津子は色を失つた。急がはしく、

「そ、それぢやお前は………」

「さア、それですから今は申上げないと言つたのです。貴女と安藤さん――然う私は敢へて安藤さんと言ひます――其安藤さんに對して、何ういふ處置を取つて可いか解りませんので、昨夜から一人苦しんで居るのです。然し私は自分の良心の許さん事を進んで爲る事は何うしても出來ません。殊に父上、あの寛大な父上を知つて欺く事が、何うして出來ましやう。」

「進、私も其事では、これまで甚麽にか身を苦しめたらう。彼の時からの十分一でも、私の此の胸の中を知つてくれたら………。あゝそれも身勝手かも知れない。進、そしてお前、私を何うしやうと言ふのだえ。恁ういふと何だけれど、お前私の身を何う考へておくれなの。」

「母樣、」

志津子は押返して、

「聞いて下さい。安藤さんが身を捨てゝ、義方の爲に讓つたのを、私は決して罪とは思ひません。安藤さんなり私なり、犧牲といふ事を、どれほど深く胸に思つて居たらう。そればかりではない。一口にこそ三十年といふが、長いこれまでの月日の間、安藤さんの眞心に、友達として義方に盡した事は、お前の知つて居るだけでも些少やそつとの事ではないのだらうと思ふ。自分の事をいふのは異なものだけれど、私も隨分、妻として盡すほどの事は何處までも盡して來たのです。それもこれもお前の出方一つで、皆無になつて了ふのではないかえ。お前もねえ、四方八方自分の身の事をも、とツくりと又よく考へて見ておくれでないかえ。」

「母樣、然ういふと折角のお言葉を、何とも思はんやうに當りますが、勿論今仰有つたやうな事は、昨夜から繰返して充分に考へたです。」

「それならば尙の事、お前の立場はそれは察して居る、察しては居るけれども、全々安藤さんに背いて了ふ事は出來なからうが、最一つ言つて置きたいのは、

若し此事が父樣に知れた以上、お前父樣を何のやうな不幸な身に落して了ふといふ事も、よく知つて居るだらうねえ。」

進は力無げに、

「然し母樣、私は父を欺く事は出來ません。」

志津子は悲しげな眼を睜つて、其儘ぢつと打目戍つたが、聞えるばかりの吐息と共に、

「あゝ最うそれぢや、餘計な事は言ひますまい。私も實は、其始めから覺悟して居た。若しや事の破滅を見るやうな日があつたら、私は最う生きては居まい、と疾うから決めて居るのだから…………。」

「何、何を仰有るのです。」

「いゝえ。それこそ最う、初めから知れて居る談話。知らないで爲た事にせよ私にも身の咎はないとは言はれない。それで又お前を恨まうとは決して思ひもしない。けれどもねえ、せめてお前の身に疵の付かないやうにと、そればつかりを願つて居ます。お前もねえ、最一度よく考へて見ておくれ。では

彼方へ行つて居ましやう。」

とばかり立上つて、

「進、では後にね、」

跡へ振返つて、物思はしげな姿を其儘、靜かに室を出て行つた。進は目を擧げて其後影、俄かに聲を掛けやうとして、言敢へず跡へ、さながら喪心したやうに、椅子に深く身を埋めたのであつた。

完

（五）

振翻れて目にさやかな、秋の影の中を踏んで、進はせか〳〵と、町も人も筒抜けに咋夜の浪原の邸へ衝と入つた。近しく往來して居る親戚の間で、其儘中へ通つて、廊下を奥へ、つか〳〵と行く、途端に、

「や、」

と聲かけて彼方から、六十近い白髪交り、仁王作りの身を重げに、廊下を踏鳴らして其處へ見えた。

「や、これは。」

と進は見ると共に急がはしく歩を止めて會釋した。來たのは主人の中將であつた。

迎へて上々の機嫌に、

「進か、よく來たな。や、お前に話す事があるが、今は出掛けぢやから、ゆる〳〵話して居る譯に行かん。今日歸りに志津さんにも逢つて置かうと思ふが、そ

れも都合で廻られんかも知れん。お前なア、明日にも又出て來てくれい。」

と進の怪しむ色を見て、微笑みながら、

「進、俺は最う何にも彼も知つて居るぞ。歌が白狀しをつたわ。」

と更に心好げに、

「はゝゝ、何ぢや其顔は。聞け。俺は許して遣つたぢや。や、俺は恁うしては居られん。いづれ話すぢや。何彼は歌に、奥へ行つて聞くが可え。」

「伯父樣。」

と進は不意に聲を上げた。中將は行掛けて急に立止つて、

「むゝ何ぢや。」

「私其前に、折入つて伯父樣に願たい事があるですが……………。」

「おう、聞かう。が、今は急ぐからな、跡にしてくれい。まアゆツくりして行け。」

言捨てゝ既彼方へ、見るから肥えた後姿を、のつしり大波の行くかと見えて、衝と一間へ入つて行つた。

進は跡に、俄かに足を釘付けのやうにして、動きもやらず、立竦んだまゝで稍久

しく居た。程もあらせず、後方は入亂れて人々の聲が聞え、今しも主人の出て行くと見えて、やがて邸内を軋出して行く馬車の聲が聞えた。進は未だ手を拱いた儘で居た。

逢はずに寧ろ、歸つて了はうかと不圖思つた。同時にはつと耳を打つて、奥の一間を此方へ流れて、矢庭に高く風琴の聲。進は不意に血を堰かれたやうに思つた。自分は今、歌子に何を言ひに來たのであるか。

「あら竹川の兄樣、」

と折しも向ふの障子を出離れた、妹の花子、見付けると直に駈けて來た。清い、甲高な聲が鈴のやうに響渡ると、奥にも逸早く聞取つたか、節は碎けて風琴の音は礑と止んだ。進は急がはしく立上つた歌子の影を眄眼に見るやうな心地がした。結下げの漆のやうな黑髮を颯と背後へ、淡紅のリボンのさながら目に立つて、世心付かぬ若々しさの花子は直と見上て、罪なげに微笑みながら、

「兄樣いつ入らしつたの。」

「今、」

とばかり、進も流石、心ならず、笑顔を振向けた。

「然う。私些少も知らなかつたわ。阿父様は今しがたお出掛けよ。」

いふ時、脇の障子がするりと開いて進の思惱んで居た其人のいそ〳〵として、顔から先へ、星のやうな眼がちらと向ふと、直さま其處へ、

「まア。」

と正的に花の姿、迎ふる間もなく衝と寄つて、

「私貴方のお家へ行く處でしたの。」

花子は何も知らず、直さま引取つて、

「然うよ。私も一處に行く約束したのよ。兄様、可笑しいのよ。貴方を驚かして上げるんだつてね、姉様は一人で何だか莞爾々々して居るのよ。」

進は不意に前へ出た。

「兎も角奥へ行つて話さう。」

「はア、入らつしやい。花子さん、貴孃二階の叔母様の處へ復習に行くのぢやなくつて。」

「えゝ、今行く處なの。」
「ぢや後に入らつしやい。復習が濟んでから。」
花子は勇んで從いて行く筈であつたのが、少からず失望した形で、
「でも些少の間なら可いわ。」
歌子は眞顔に態とらしく、
「いゝえ可けません。貴孃怠けると又阿父樣に叱られてよ。」
花子は首を捻くるやうにして、
「仕方がないのね。ぢや私大急ぎで復習つて來るわ。兄樣、それまで歸つちや厭よ。」
進の答へるより先に歌子が遮つて言つた。
「大丈夫よ。兄樣は私が止めて置いてよ。早く行つて入らつしやい。」
「ぢや私直に來てよ。兄樣、屹度待つて居らつしやいよ。」
進は其間、常なら一人の興味をも先に立つて添へるのであるが、今日は何も言はなかつた。

はたはたと駈けて行く花子の足音の向ふへ消えて行くのも、何やら現のやうに聞いて居ると、

「さア貴方、」

と歌子は先に立つて中へ入つた。奥の居間へ行く間も、人目に離れたのを見済ますと、既隠されぬ面の色に、足さへ浮きうきと、

「進さん、私何のお談話をするか知つて居らしつて。」

進の慫ういふ場に遣ふいつもの調子は全で消えて居た。にべもなく、

「知つて居る。」

と先も尾もなかつた。

「あら、何うして、」

と歌子は聲をはずませて振返つた。進は削いで取つたやうに、

「今阿父様から聞いたから。」

歌子は眼を睜つて、物讀み顔に、進の常に變つた態を打目戍つたが、直ちに元に返つて、

「酷い。それで貴方那樣知らない顏をして居らつしやるの。」

進は少したぢろいだやうに、我にもあらず、

「なに然ういふ譯ぢやない。未だいふ場がなかつたので。」

「何です貴方、那樣事を私との間に。」

「え。」

「貴方、態と仰有るぢやなくつて。」

「いや……………。」

「何うなすつたんですよ。貴方、然う言へば何だかお顏色も良くないやうなのね。本當に何うかなすつて居らつしやるんぢやないのですか。」

進は自ら責めたけれど、然し眞實を語らなかつた。

「なに、少し氣分が惡いのです。」

（六）

室へ入ると、二人間近く、其囁きの聞えるばかりに、いつもの座を取つて打向つたが、歌子の望みとは反對に、談話は兎角に冴えなかつた。

「進さん、貴方何うしても變だわ。私は仰有つた通り御氣分の惡いにして置くけれど、何でもそればかりぢやないと思ひますわ。でも餘り平素と違つて居らつしやるもの。貴方、私にお隱しなさるのは初めてね。」

歌子は此日、殊に其日、進に恐ろしく美しいものに見えた。其眼、其眉、其胸の動くに連れて幾年越、二人の外に知るものも數の記念の、俄かに犇と身を打つて來るやうに覺えた。まして其緣の、やがて公けに取結ばれやうといふ今日。見るに付け、思ふに付けて、身の覊絆、心の覊絆の、容易に解去る事の出來ぬ地位に在る事をも、更に強く感じた。

あゝ兎でも、今別れて了ふ事は出來ぬと思つたが、故も知らず、脇から繰られたやうに、其儘調子を變へて、

「いや全〻だ。朝から何うしたのか、妙に氣分が惡くなつて仕樣がない。だから來まいと思つたんだけれど、昨夜の談話が氣に掛つてならんかつたもんだから。」

と急に葉卷を出して火を點じて、

「兎も角貴孃の方の事を聞かせて下さい。伯父樣は出懸けだつたから、詳しい事は歌に聞けと仰有つて俺は許して遣つた。いづれ後でよく話すから、と言つて出て行らしつた。何しろ意外な好結果だつたが、歌子さん、全體何うしたのです。」

「否、貴方は何とも思つて居らつしやらないんですもの。人をばかり酷い目に遇はして置いて。」

「なに酷い目に？」

「酷い目でなくつて何でしやう。考へても御覽なさいまし。切羽に詰つて、思切つて、父に打明けた私の切なかつた事を。」

「勿論それは察して居る。然し那樣に急だつたとは思はなかつたので……。」

と進は又心ならず言つた。樣子に自から讀まれて、歌子は氣を損じたやうに見えたが、父に許された悅びの、今はそれにのみ勝たれて居るので。

「仕方がない。負けて上げましやう。聞いて頂戴、私今朝は本當に何うしやうと思ひましたよ。」

阿母樣がお在世ならば、那麼思もしなかつたでしやうが、彼の嚴重の、時によると私をも御自分の從卒と同じやうにお扱ひなさる阿父樣と對座。

昨夜お話申した彼の緣組の事を、全で命令するやうに仰有つたではありませんか。

不意ではあり、貴方の方の手が、今其處で間に合はうとは思はれもしませんし、厭と言つたら手は見せぬほどの父の意氣組、常から言葉を返す事の出來ない私の身です。ぢツと見下して居らつしやるお顏をさへ見上げられないのですもの、」

といつか調子付いて話掛けた。進は其間、知らぬ間に耳は餘所になつて、胸の思に奪はれて了つたが、不意に惱ましげに首を振つて、

「や、可かん。歌子さん、甚だ何だけれど私は中座する。何うも非常に心持が惡くなつて來た。結果は知つて居るのだから、談話は後にして貰つて、一端出直して來やう。」

と急に立上らうとした。歌子は驚いて顏を打目戍つて、

「あれ、那樣にお惡いの。」

進は顏を見合せて、眞顏に氣遣はしげな態を眼に入れると、俺は何故這麼事を言つたのかと思つたが、思ふ傍から又出任せに、

「何だか餘り工合が惡いから。」

と言つて衝と立つた。これで歸つて了つては、殆んど何の爲に來たのか解らんではないかと、一人焦立つたけれど仕方はなかつた。母と言ひ、歌子と言ひ、周圍の總ての事情と言ひ、何處を見ても身の自由を縛られて居る以上、斷じて自分の意志を決行する事は到底自分には不可能であるかも知れぬ、と腹立たしいやうに覺えた時、

「それぢや家で休んで入らしつたら、」

と歌子の聲が聞えたやうに思つたが、半ば聞かぬ態に、其場を興の醒めた仕末にして、いつか室の外へ、離れた彼方の二階から、花子の讀書の聲の斷續して聞えるのを耳にして立つたのであつた。

（七）

夜になつた。進はそれまで歸つて來なかつた。月が射込んでから暫くして、恐ろしく疲れた色で、漸くの事に歸つて來たが、然し此時には最う、母に向つて打笑ふなどの餘地が出來て居た。

其儘歌子の許へ、急がはしく書面を認めて使に持たせて出して遣つた。そして一方少し落付いたやうな心地がした。

最早猶豫もせず、直さま母の前へ、色こそ惡けれ、聲音は際立つて力付いて、

「母樣、突如に勝手な事を言ふやうですが、昨夜のお談話は何うか取消して戴きましやう。出來るなら聞かない以前にして了ひたいですから。」

「えッ、」

と志津子は思はず前へ、後から口早に、

「それぢやお前、あの胸に納めてくれやうといふのかえ。」

「いゝえ、詰まる處、私の身勝手なのです。阿父樣には何とかして、自分に滿足

する御恩報じもしたいと思ひましたから。」

志津子は手を執らぬばかりに、

「進、お前のお言ひのより外に、お前の胸に言ひたい事は甚麼にか有るだらう。私本當にお禮を言ひますよ。」

「母樣、最う此お談話は止しましやう。私も昨夜から餘計な御心配を掛けました。今夜は私お詫の印に何かお氣の晴れるやうな事をしたいと思ひますが、」

「まア、お前那樣…………」

進は手を伸ばして、前の障子を颯と引開けた。

「いゝ月ではありませんか。寧そ今から何處かへお伴しましやうか。」

「いゝえ最う、これで澤山、お前の氣を直してくれたのが私には何よりです。」

とやがて心置かぬ態に、

「それぢやお前恁うしておくれな、今夜はねお前、此處でゆッくりと話して居ておくれ。私それが甚麼事より好いのだから。」

「は、何でもお望みの通りにしましやう。私貴女の好い方が好いのですから。」

とそれなり前夜の事は最う二人の口には上らなかつた、軈て罪のない四方山の談話に移つて、譯もなく一夜を更したのであつた。

二人共に重荷を下したやうな心地がした。志津子は又枕を高くした。歌子の方はそれよりも猶容易かつた。歌子は何も知らぬのだから、二言三言の後には直に解けて、

「でも私餘りだと思ひましたわ。」

とばかり別に殘つて居るものもなかつた。

進は勿論、奥から暗い影を取去つて了ふ事が出來なかつたが、上邊には最早何も見せなかつたから、旅から歸つて來た義方も、歌子の父も、其他の誰も知るものはなかつた。

それから以後、志津子は同じく良妻で、安藤は良友で、義方は矢張幸福で、竹川の家は羨まれるほど、平和であつた。歌子と進との緣は、其中に滯りなく取結ばれて知るものは皆目出度がつたのであつた。

綾小袖

（一）

「兼さん、家か。」

と懐手、二子の下に浴衣を重ねて、同じ半纏、白木の三尺を尻ッこけに締め、外輪に捻つた雨劉の下駄、ぶらりと床屋からの歸り途、剃立ての髭の跡のすッぺりとして、日に焼けた額のあたりがてら〳〵と光る、色の黒い、二十八九の、職人風。

「よう、巳之さん。」

と開放してある障子の彼方、茶の間の長火鉢の前に大胡坐で居たのが、火鉢の縁に片肱を持たせて首を伸すと、莞爾として、

「上んねえ。」

「むゝ、今其所でお前の所の奴に聞いたんだが、お前怪我アして休んで居るつての。飛んでもねえ。」

ずつと通つて火鉢の前、遠慮なし、胡坐に崩して對ひ合ふと、腰を探つて棧留の煙草入、銀の鬼の假面の付いた奴を前へ出す。

主人の兼五郎は、親の代から居て付きの鍛冶職、いつも鞴の前に、薄汚れた仕事着の汗だくで、顏も手足も、炭の粉に黑くなつて居るのが、今日は清淨と、細の二子の眞新らしいのに、白ッぽい唐棧の半纏、八端の平絎といふ姿で、顎を探つて、鑷で髯を拔いて居た處。

からりと其鑷を、火鉢の抽斗へ納ひながら、

「うむ、奴に何所で。」

「なに角の棟梁の家の前でよ。」

「彼畜生、未だ那樣所をまご〳〵して居やアがる。何所で油を賣つてやがつたんだらう。なアにお前、横町の平さんの所へ、最う先刻の事だ、一寸賴む用が出來て使に遣つたのよ。いめえましい野郎ぢやねえか。」

「はゝゝ然うか。其奴ア惡い事を言つたな。まア可いやな。大目に見て遣んねえ。今がお前遊びてえ盛りだアな、各自に覺えのある事だ。なア。」

と覗込んで、一服吸付けた素銅の煙管を、ぽんと叩いて持直して、

「時に怪我は、」

「むゝ、なに大した事ぢやねえ。これよ。」

と右の袖を捲り上げると、腕から肩のあたりへ掛けて、黑々と、見事に肥えた上を、直と卷付けた繃帶が目に立つて白い。

「全體何うしたんだ。」

兼五郎は苦笑ひ。

「それが又詰らねえ理窟に、喧嘩の仲裁に入つてな、相手の奴ア何ともねえで、いゝ面の皮に、仲に立つた俺が遣られたつてえもんだ。喧嘩はそれでおぢやんになつ了ふ。痛い目をしたのは俺ばかりだ。埋らねえぢやねえか。はゝはゝ。」

「うさアねえ。何しろ飛んだ迸沫だつたの。何所でよ。」

「鐵砲洲の仲間の家でよ。だがまア此お蔭で譯なしに仲直りが出來て了つたから、俺も氣が濟んだといふもんだ。文句アねえ、これが友子友達の爲だ。

正味を言やア這麼腕の一本や二本、入用なら素ッ首でもお持ちなせえだ。然うぢやねえか。」

「むゝ其所だ。其氣でなくつちや又頼もしくねえや。」

「と、まア煽動て置くのか。」

「なに煽動るもんか、全くだ。」

「ぢやア其氣で、」と輕く、「何か奢らうかね。」

言ふ時不意に、

「おや巳之さん、入らつしやい。」

と此家の女房、三十前の、婀娜々々しいのが、今水仕事のあとゝ見えて、前掛で手を拭きながら、綻れる笑顔に、華美な聲。

「何だか急に男振が上つたと思つたら、遣つてお出でだね。」

と頬から頤を、一寸撫でゝ見せる。

「むゝ、其歸りよ。お豊さんの前だが、何うだい此淩立ての面で、一番小當りに當つて見やうと思ふのがあるんだが、まア出來やうか出來めえかね。」

「そりやア最う巳之さんの事なら、」
「え、」
「言ふがものはなからうぢないかね。」
「はゝゝゝ、それぢやア何方だか解らねえ。」
「あれ、惡い聞きやうだね。默つて居たつて向ふから、それこそ五月蠅くつて仕樣がなからうと言ふのだわね。」
「おい〱、氣を付けて物を言ひねえ。嬉しがらせも好い加減にしねえと、先へ行つて甚麽間違ひが出來めえもんでもねえ。」
「まア、折角本當の事を言つて上げるのに、何故然うなんだらう。」
「澤山だ、最う。」
と笑ひながら、煙管をもろに、煙草を捻つて、
「此所の家ぢやア、夫婦が揃つて世辭がいゝから、俺のやうな氣の弱え者は、本當だ、世辭ぼてりで逆せ上つて了はア。」
兼五郎はまぢりとして居た眼を急に巳之助の方へ抑向けて、片頰に矢張打笑

みながら、

「何だな。俺を卷添に入れてくれる事はねえやな。此方は何時だつて正札附きだ。餘計な世辭なんぞ誰が言ふものか。へん、那樣事で逆せるやうなら未だ可愛いが。」

「冗談言つちや可けねえ。這麼內氣な者を捉めへて。」

「おほゝゝ、何所を押しやア那樣音が出るだらう。」

と言つて不意に、

「おや、」

と伸上がるやうにして、表へ向つて丁寧に頭を下げた。

巳之助も兼五郎も、何と齊しく外へ振向いた。往還を其時、何所の金屋から來たかと見えて、四邊を拂つて美々しい扮裝、物凄いほど佳過ぎる縹緻の、二十五六のすらりとしたのが、十四ばかりの小間使風の小作りなのに包みを持たせて、秋の日中をさも鮮やかにしやなりとして、前を通つたのが、お豐の聲に、振向いて顏を見合せると立止つて、翳して居た傘を少し橫に、輕く會釋して、其持前

の片笑靨を深く、ぱッとした俤を、三人の眼に殘して其儘行過ぎた。
兼五郎は向直ると、誰に言ふともなく、
「いつ見ても美しいよなア。」
お豊は今の姿を、未だ其儘に思浮べたやうに、
「如彼なつてから又、目に立つて好くなつたね。」
「馬士にも衣裳ッてのに、それが彼の縹緻ぢやねえか、何所へ出たつて引けを取りつこはねえや。」
「那麼で居て些少も又見識ぶらないんだからね。」
「一體娘の中から怜悧だつたよ。」
「出世をしたもんだねえ。」
「然うよなア。今ぢや以前の影は見たくもねえ。」
巳之助は煙管を叩いて、
「ありやお前、何だらう彼の山崎さんの、」
「うむ、今ぢやりうとした奥様だ。」

「能くは知らねえが、妾上りだつて言ふぢやねえか。」
「然うよ。だが如彼して立派に直つて了つたからなア。何しろお前、何十年だか何百年だか知らねえ前から、土地で名代の山崎さんだ。なア、押しも押されもしねえやな。」
「うむ、そりやア可いが全體、ありや何ういふ筋の女だね。」
「何ういふ筋ッて、見た通りだ。標緻は如彼よ。氣立ては好しか。打突つてとんと來る鹽梅が、それ、極といふんだらう。なア、駈込んで來りやア何時でも引取つて遣らア。」
お豊は手も著けず、遠慮もなく反返つて、
「おほゝゝゝ、いゝ氣げんぢやないか。氣が違つたつてお前さんの所へなんぞ、何所に駈込んで來る者があるもんかね。こゝへ駈込んで來やうといふのは、途中で病犬にでも追掛けられた人でなけりやア…………。」
「戯けるなえ。手前なんぞに、情人の寸法が解つて堪るもんかえ。」
「おや／＼最う情人氣取りで居るんだね。呆れ返るね。」

「こん畜生、那樣毒口を利いて居る暇に、些少色氣を出して、妬く方へでも廻りやアがれ。」

「まア、何所まで氣が強いんだらう。馬鹿々々しくッて返事も出來やしない。」

巳之助は煙管を持つたなり、中を取支へるやうに、

「おい〳〵、俺の方の談話は何うしてくれるんだい。」

「待ちねえ。それだ。なに此阿多福が出しやばりやアがるもんだから、詰らねえ口を叩いたんだ。なアにお前、今俺が甚麼口を利いたつて、此方の手に入るんぢやなし。醜婦の癖に兎や角う言ふにやア當らねえやな。」

「あれ何を私が兎や角う言つたよ。」

「えゝ、又一幕と出て來やがる。手前が口を出すと手間が取れて可けねえ。彼方へ引込んで線羅蔔でも刻んで居ろい。處で巳之さん彼の女だ。」

「むゝ、何だか兎角に拘泥つてばかり居るな。むゝ其處で、―

「何がお前、彼の娘が未だ十六七の時分にやア…………。」

「然うだらう、俺も實は惜しい事しをたと思つてるんだ。」

「え、何故、」

「俺が此土地に居なかつたからよ。只は置くのぢやなかつたらうぢやねえかい。」

「えゝ、氣が早え。那樣方の談話をするんぢやねえや。出直しねえ。全體又お前なんぞの盤臺に乘る魚ぢやなかつたよ。」

「ふう、何だそれぢや。」

「聞きねえ。何が十六七時分にやア、可哀相に、偶におしやらくをする暇さへもなかつた。お曠と言やア綿入りよ。帶が擬へ物なら、簪ア天麩羅か。阿爺さんは屑屋さんで、毎日鐵砲笊を擔いぢやア、お拂ひ物はございませんかだ、阿母は家で鼻緒の內職よ。彼の娘はお前、辨當箱をぶら提げて、川向ふの、それ安田さんの工場へ、仕事着の蓬々髮で、雨が降つても通つたもんだな。

だがなア、何と言つても水の出端だ。身柄は兎に角、縹緻が好くつて、程が好くつて、喰付きが又好いと來て居るだらう。同輩同士群まつた中でも、直と目に立たうッてもんだ。町內中は言ふが者はねえ、界隈切つて面と樣子で、手に立

つ者はねえちやねえか。若え者は騷いで廻る、近所の者は煽込む、瓜の蔓に茄子と言ふもんで、可哀相に、角の隱居が川柳の講釋ちやねえが、親達や鳶にされ了つた奴よ。

併し別に惡い噂も立たなかつた。するとお前、一寸見ねえ中に不意に居なくなつた。」

「駈落か。」

「うんにや、家中がよ。」

「何うしたつて言ふんだ。」

「それがよ、突如の早變りだ。此横町に今ちやア燒けて失くなつたが、簑垣に淺黄壁、おつに捻つた入り口に、見越しの松がにうと冠つて居る、芝居の道具立のやうな家があつた。小倉庵とか、つぶし庵とか何でも那樣名の茶の湯の師匠が居た跡を、そつくり買つて居直りの、門にや女名前で松野組、彼のお組ちやんたア思はなかつたのが、矢張それなんだから、あツと來た。何しろお前、いろは長屋の總後架の脇から一足飛びに這麼所へ立籠つて、ちんと濟まさうたア

思掛けねえぢやねえか。それと聞くと、氏子の若え奴等は皆毒氣を拔かれ丁やがつて、へえーッてえんで開いた口が塞がらねえ仕末よ。正味を言やア圍はれたんだ。」

「ふむ、だがそれまでの段取が、些少ア其所に有らうぢやねえか。」

「待ちねえ。今それを話す所だ。有りやう俺も其場に居て、跡で聞いて然うかつてな事よ。丁ど其前、然うさ彼是十日も前だつたらうよ。向ふの久さんに煽てられて、止せば可いのに笭箵と釣竿なんか提込んで、渡頭の脇の、それ薪屋の、石垣ん所で、汐先を見て釣つて居たと思ひねえ。夕日が眩しいから頬冠りをして氣の利かねえ面で泛子を睨んで居ると、當付けらしく目の前を家根が一杯、御自慢の一中か何かで下流へ下して行く。水に響いて、辨天山の鐘がごーんと來る。櫻の枯ッ葉がくる〳〵ッと捲いて落込むと、釣竿の上の赤蜻蛉がひよいと飛んだ。其時だ、船頭の龜公が、向河岸をとんと突いた。渡舟が出て來たと思ひねえ。

時候が時候だから、客はから無えや。ばらりと八九人、店者らしい若いのが二

人前の方へ出て、背後に婆樣と、荷を脊負つた小間物屋、脇へ寄つて六歳ばかりの兒を連れた中年增、其傍に立つて居らしつたのが、山崎の旦那だ。才取屋の淸助がお供で、何でも寺島へ、賣物に出た地面を見に入らしつた歸りだつて事だ。其所へ乘合はして今工場から退けて、彼のお組坊が朋輩と三人連れで、船首へ寄た若えのゝ直ぐ脇に居た。船が出て行くと、兒供は面白がつて、小緣に摑まりながら、片手を水ん中へ漬けて惡戲して居た。途端に威勢よく前を突切つて行つた川蒸氣の餘波が、タ、、、ッと來て突如舷へざぶりと當つた。兒供はあッと言つて避ける機勢に、不意と摑まつて居た手を離したもんだから、身體の釣合を取り損なつて、横ッ倒しに河ん中へのめり込まうとした。傍に立つて居らしつた旦那は、吃驚しなすつて慌てゝ抱止めたは可かつたが、其拍子に提げて居らしつた鞄を、水ん中へ落して了つたらうぢやねえか。ほい。と言はしつたが追付かねえ。淸助も大事な物が、其中に入つて居るのを知つて居るから、やッ、て騷いだが跡の祭りよ、何しろ山崎の旦那ッてもんだ。船頭の龜公も徒勞な忠義にやならねえから、いきなり着て居たものをぽんと

脱いで、透かさず中へ飛込まうとした。途端に一旦沈んだ鞄が、ほつくり浮上つて舟縁の、お組坊の居た傍へ流れて來た。見て居る中に雪のやうな、眞白な二の腕が伸びたと思ふと、拾つた鞄の水を切つて、嫣然笑つて、「浮いて來ましたよ。まアいゝ鹽梅に。」と衝と立つて旦那の前へ持つて行つて上げた。清助は飛んで出て禮を言ふ。旦那も喜んで丁寧に挨拶をしなすつたが、其時初めて近々とお組坊を見なすつたのだ。」

「縁かい矢張り。ふむ、其奴がきつかけで横町住居か。」

「鞄が飛んだ出雲の神よ。渡頭を上つてから、旦那が清助に、「いづれ何とか禮をしないぢやならないが、清助、彼娘は。」と仰有つた。其又仰有りやうが只でなかつたとよ。俺ア此方で、何も知らねえから、一寸見たばかりで又泛子の方へ氣を取られて居ると、お組坊が通り掛りに聲を掛けて、「兼さん、釣ますかえ。」「うんにや、からツきしだ。」「おや〱お前さんにも似合はないねえ。」と彼の娘は如才がないから、愛嬌を零して通過ぎたが、跡で清助に聞けば、其時一寸振返つたんだとよ。すると向ふの山崎の旦那も、何か氣殘りの顏で此方を見

なすつた。眼と眼がすばしこく物を言つたさうだが、俺ア啣へ煙管の濟ましたもんで、泛子を睨んで何も知らずよ。其癖其日は、到頭一尾も釣れず仕舞だ。」

「其代りにやア、其お組さんとかゞ飛んだ大物を釣上げたぢやねえか。」

「違へねえ。なアに此方ぢやア、それほどの氣も無かつたんだらうが、何しろ旦那の方の意氣込みが大變なんだ。何でも、是非、と仰有るんで、清助も向鉢卷で、萬端中に立つて事を纏めたんだ。よくしたもんで阿爺は現金に鐵砲笊を投げ出して了ふ。阿母も最う鼻緒所ぢやねえ。火鉢の前に長煙管で、晩にや按摩さんに揉んで貰はうかツて世界になつた。何よりも強身なのは、旦那がてんで首ツ丈なんだ。お前は知るめえが、其時分花川戸にも一軒、以前芳町で鳴らしたのを、落籍せたのが圍はれて居た。餘所ながら見て知つて居るが、大したものだつたよ。兎ても素人目に、ひよいといろは長屋から飛出して來たお組坊なんぞが、取組みにならうたア思はれもしなかつた。それがよ。おべこべだ。何所が然うも亦氣に入つたのか、それとも此方に腕があつたのか、秤は此方へ下つて、花川戸はそれツきり上つたりよ。

それぱかりぢやねえ。二年經つて奥樣が亡くなると、間もなく跡へ乘込みの、一年經たねえ中に男の兒が出來たぢやねえか。爭はれねえ跡取りだ。お金御用で昔ッから、何十萬て、書上げたッて言うぢやねえか。今ぢや何の位あるか底の知れねえ身代を、其兒が脊負つて立つてるんだ。人の身は解らねえもんだよ。

何しろお蔭で、お釜を起したのはお組坊の、最う坊ちやアね、さんとでも言はうか、彼の人の親達だ。阿爺さんは此先の、角地面を貰込んで、何にもしないで、碁なんぞ打つて暮らして居らア。大きな面をしねえ處が、彼の一族の德かも知れねえ、が惡くも言はれねえだ、隨分頭も下げられて居る。巳之さん、恁うなッて見るッてえと、女ッて言ふものも、馬鹿に出來ねえよなア。」

お豐は何時の間にか座を立つて、何か臺所でがたごとゝ遣つて居る、巳之助は抱込んで居た片膝を、離して又煙管を手に取つて、

「むゝ、那樣もんかい。たが然ういふのはざらには無えからな。」

「有つて見ねえ大變だ。家の奴なんぞも、面こそ那麼だが、何う取外して、飛ん

だ謀叛氣を出さねえもんでもねえ。」
聞いて居たか、障子越しに、
「巳之さん、本當だよ。私だつて最う些少剝けて居たら、這麼所にまご〳〵して居るもんかな。」
兼五郎は振向いて、態とらしく呆れた顏、
「おや、本音を吹きやがらア。」
巳之助は耳にも掛けず、
「はゝゝ、お前達の事を知らねえと思つて、お豐さん能くも那樣事を言へたもんだね。」
言ふ時、表から、
「親方、只今。」
と息を切つて、小僧の三太、悪戯さうな、眞黒な面をひよいと突出した。兼五郎は頭ごなしに、
「何だ。今頃歸つて來やがつて。何所で道草を喰つて居やがつたんだ。」

「へい。」

と例の事、恐れ入つたが不平な面附。此時からからと引越車が續いて二臺、跡から賣殘りの青物を振分けにして、在の百姓らしい老爺がのつそりと通る。

曳いて夕日の影法師、羅宇屋の汽笛、兒供の聲、時計が丁ど五時。

（二）

門の柳には未だ横日が射して居るが、軒洋燈には最う火が入つて、續いて上を夕烏、暮に程もない空になつた。噂のお組は、噂の中の兩親の家の前へ來ると、振返つて供の小間使に、

「今日は此方で少し遊んで行くからね、お前は此所から歸つて可いよ。」

「左樣でございますか。では後程お迎ひに……。」

「あゝ若し遲くなつたらね。」

と持たせて來た包みを受取つて、別れて一人、鈴の付いた潛門を開けて、花崗の敷石の上を身輕に行くと、いつも女中より先に、出て來て障子を引開ける小まめの母親が、今日は影も見せず、奧からぱた／＼と小さな足音が聞えて、いきなり上り口へ、丸く肥つた十三ばかりの、肩揚の深い、髮をお下げに、淡紅色のリボン、未だ前齒の透いて居る女の兒、お組の妹、お房といふのが駈出して來た。見ると共に、

「あら、」
と涼しい眼をぱつちりと見張つて、
「私は阿母樣とばつかり思つてよ。」
「おや阿母樣は家ぢやないの。」
とお組は上りながら聞咎めて、呟くやうに、
「まア、態々人を呼んで置いて、何うしたと言ふんだらう。」
「あのね、阿母樣はね、今水島さん所から急に呼びに來たんでね、裏から駈出してお出でなの。あの、直に歸つて來るッて。」
「然う。」
言ひつゝ奥へ行く。跡から追縋るやうに來て、
「姉樣何よ。水島さんの、ほら、お米さんがね、又癲癇を起したんだつて。癲癇ッて言ふものは泡を吹くのねえ。お米さんは此間もお湯の中で起したの。私行つて居て吃驚して了つたわ。」
お組は好い程に返事しながら衝と茶の間へ通つたが、不意に立止つて、

「おや阿父樣もお留守なの。」
「今日は誰も居ないのよ。」
「松は。」
「松は宿へ行つたの。」
「まア。それぢやお前一人ッ限りなの。」
と氣先を折られた形で、一寸考へて居たやうであつたが、其儘坐つて、
「でも直にお歸りなら、出直すのも何だから、些少の間待つて居やうかね。」
お房は心得顏に、ちよこ〳〵と次の間から、綿の厚い黄八丈の客座蒲團を持つて來た。
「はい、お蒲團。」
「おや、能く氣が付くのねえ。」と笑つて下に敷いて、「房ちやん、御褒美に好い物を上げやう。」
と持つて來た包を引寄せて、結目を解掛ける。
「え、何、」

とお房は、珍らしさうに上から差覗く。お組は開けやうとした手を止めて、微笑みながら、

「當てゝ御覧。いゝ物よ。」

「然う。何だらう。」

とぢッと見たが、遽に其眼を輝かすやうに、頓興な聲で、

「あゝ、解つた。人形。」

「いゝえ。」

「それぢや簪。」

「いゝえ、那樣もんぢやない。御覧な這麼大きな簪があるものかね。」

「でも私のものばかりぢやないんでせう。」

「それは然うだけれど、一番上に乗つて居る此大きいのがお前のさ。何うしたの。未だ解らないの。おほゝゝゝ、それぢや開けて見せやう。これさ。」

と風呂敷をぱらりと解くと、思はず衝と寄るお房の目を迎へて、赤地の西陣の帶が射るやうに色を打つた。

「あらッ帶。」

と吃驚した眼を瞬つて、飛付くやうに、

「まア、いゝ事。あら、最う仕立てゝあるのねえ。本當に、まア、何て好いんだらう。私吃驚し了つたわ姉樣、これ本當に私におくれなの。」

「然うさ、お前でなくつて何で、此所へ持つて來るものかね。なに本當は此間最う買つて置いたのだがね、仕立てゝ來るまで態と默つて居たの。」

「あら、然うなら何故早く知らせておくれでないんだらう。私知つて居たら、皆に甚麽にか自慢して遣るんだつたのに、姉樣、あの最つと見ても可いの。」

「可いとも。お前に上げたんだもの。さア。」

と取つて手に渡した。お房は取るから目もあやに、左視右瞻、恐さうに押擴げては、見飽かず又打返して躍る心を明らさまの、溢るゝばかりの悦ばしげの色を、お組は暫し打見遣つて居たが、何心なく眼を移して、不圖脇へ振返ると、

「おや、こゝの家に似合はない寫眞帖があるね。房ちやん、ありや何うしたの。」

「…………。」

見とれて居て返事がない。

「房ちやん。」

「え、」と氣が付いて、急に顔を振上げて二つ三つ瞬きしながら、「今何かお言ひなの。」

「いゝえね、彼所にある寫眞帖は何うしたのと言つたのさ。」

と指さしゝた。お房は只見て、

「あゝあれは加藤さん所から、お遺物よ。家の皆の寫眞が入つてるの。私の知らない人のも姉樣のも、幾箇も入つて居てよ。持つて來ませうか。」

「然う、加藤さんから來たの。なに見たければ勝手に取つて見るから可いよ。それよりか房ちやん、お前御苦勞だけれど一寸行つて來てくれないか。」

「え、何所へ。」

「阿母さん所へさ。私が待つて居るからと言つてね、其方で未だ手間が取れるか何うだかつて、一寸聞いて來ておくれな。それからお米さんにね、最う御氣分は可うございますか。お大事になさいと言つてね。」

「可くつてよ。ちや、行つて來ませう。直ぐと。」
「あゝ、一寸氣の毒だけれど驅出して行つて來ておくれなね。」
「なに譯なしよ。直其所の横町なんだから。」と身輕に立上つて、「ちき、行つて來てよ。」
言ふなり、身を返して、颯と一振り、頰へ冠つて來た髮を背後へ振上げると、衝と室を出て行つたが間もなく下に、急がしさうにポツクリの足音を立てゝ門を出た。
お組は待つて居る間を、流石に所在なく、まじ／＼と緣先に並んで、三鉢ばかり、手作りらしい見頃の菊の上げてあるのを見るともなしに眺めて居たが、直に飽きて、立つて小簞笥の上の、今妹に聞いた寫眞帖を出して來て、退屈凌ぎに開けて見た。
二枚三枚、手に任せて目を通して行つたが、
「おや、此時分の寫眞が未だ家にあつたかねえ。」
今の榮華に、全で他人の事のやうに忘れて居た、十六、七八の娘時、夏かと見えて

中形の浴衣、水髪にして銀杏返の、今目の前に、まざ〳〵俤に立つたのが一枚、仲好しだつた鑄掛屋の娘の、お仙と言つてお俠なのと、二人で公園で撮つたのが一枚。初めて出來た正月小袖、今から言へば不斷着にもならぬ仕立卸しを嬉しさうに、島田に結つて撮つたのが一枚。三社祭りに妹を伴れて、歸りに一緒に撮つたのが一枚、四枚上下に、色こそ褪せたれ、偲べとばかり、其影の誘ふに連れて我にもあらず、胸に浮ぶ當時の事。

「…………。」

見詰めて頃刻、言葉もなく、手を差置いて其儘に居たが、やがて先を、はらりと一繰開けると、

「おゝ、」

と思はず聲を出して、穗に出でゝ颯と、刷いたやうに色が散つた。目に止めたのは手札形の、同じ程の古さの寫眞、二十二三の、眉の濃い、眼の切長な、小作りらしい、遊俠な壯佼の半身であつた。

其以前、三軒置いて一つ長屋、母親は花火屋へ通つて、息子は家で餝職、幸次と言

つて稼人、親と親とが懇意であつたので、連れてお組も氣を置かなかつた。
其頃は、工場通ひの只の女、今の身などに、成得やうとは夢にも思はなかつた。
此方十八、向ふが五つ上の、未だ何も言はなかつたが、互ひの胸は能く知つて居た。
此方も待てば、向ふも待つて居た。再びない機會が一度閃くやうに、
「あゝ、彼の時。」
とばかり、今も思出される。櫻は過ぎて春の暮、夕燒空に猫の額の、それより狹い庭先も、燃立つやうに色を返して、たゞ一株の柘榴の若芽が、さながら寶石のやうに輝立つた。端居に近く、お組は一人、鬢のほつれを明らさまに、くツきり白い襟頸を背後に見せてうツとりして居た。途端に表を威勢よく、がらりと開けて、
「今日は。」
と衝と入つたが、只見て、
「おや。」

と突立つた。お組は振返ると、はッと色めいて、

「おや、幸さん。」

「叔父さんは。」

「生憎だつたのね。今日は仲間の寄合とかで、歸ると直に出て行つたの。」

「其奴ア些少拙かつたな。何は、叔母さんは何所へ。」

「阿母さんは今しがたお湯へ、お房を連れて私と入代つて行つたの。」

「然うかい。ぢや出直さうか。」

「まア可いぢやないかね。お上りな。阿母さんは早湯だから、最う間がありやしないよ。用ッて何なの。」

「なに、少し叔父さんに話したい事があつて來たんだがね。」

と立つた儘考へて居る。お組は重ねて、

「まアお上りなねえ。」と言つて口早に、「私一人だからつて、那樣にお逃げでないでも可いぢやないかね。」

「はゝゝ、厭味だね。恐しい。ぢや些少の間待つて居やうか。」

とそれを機にずッと上つた。知つた同士、懇意な仲で、差向つて談話をするのだから、何も不思議な事はないのだが、幸次は何時に似ず何か間を悪く、お組は又妙にそは／＼して、平常と調子が違つて居る。二人は何で然う胸が騒ぐのか、其癖言ふ事は却つて上の空、中には言合はせたやうに、恁ういふ好い機は再びないと思つて居た。

「おい、構つてくれちや可けないぜ。お客扱ひなんかされちや居難くつて可けない。」

「あれ、お客なんて思ふものかね。私はいつでも家の人のやうな氣で居るんだもの。幸さんだつて又お客のやうな氣で、家へお出でぢやなからうと思つて居るけれど、」

「然うとも、然うでなくつて留守へなんぞ來て、恁うづう／＼しく構へて居られるものかね。だがお組さんの前ぢやァ些少何うも氣が差すよ。」

「おや、何故だらう。」

「俺ア恁う見えて存外内氣なんだからね、何だか豪氣に極りが悪いんだ。」

「まア、何が極りが悪いんだらう。可笑しいぢやないか。」

と心にもなく、しら〴〵しい。幸次は笑つたが、流石に正的にも言はれず。

「なに性が生息子だからさ。女の前へ出ると、口も利けねえッて奴さ。」

「おほゝゝ、御冗談もんだね、人を。宜敷申しておくれとさ。」

「矢張り然うだらう。言はなくッちや解りッこはないから。」

「え、何がさ。」

「それだがね、ちよッ、焦れッてえ、構ふ事はない打撒けて了はう、お組さん。」

と不意に眞面目になつた。色にこそ出さなかつたが跡の言葉の何といふ事をお組は能く知つて居た。一心に待構へて居た。其一言を聞いたらば直ぐ、割つて自分も、隱して胸に持つて居た事を、殘らず打明けて言はうとばかりの、心一つにぢッと見る其時、たゞ一言の境目の其時、何事！

わッといふ俄かの騷擾、馳違ふ人、叫立つ聲。

「火事だ。火事だッ。」

「何所だ〲。」

「前の疊屋だ。」
「ナニ、疊屋だ。やッ、此方は風下だぞ。」
素破と振向く半空を、目近にどッと黒煙、卷立つ火焔の閃くと見るや、耳を貫く半鐘の響、どう〳〵どッと燃上る聲の、手に取るやうな直ぐ先の家は然も眞ッ風下。
二人は最う談話處ではなかつた。
宙を飛んで駈戻つて來た親父の眼の色も違つて居る。慌てゝ跡から入つて來た母親と、同時にどや〳〵と見舞の人々、幸次も火元に猶近い我家の、母親一人の氣遣はしく、取るものも取敢へず、混雜の中に引別れた。
家は幸ひに、一軒先まで來て燒殘つたけれど、幸次の家は煙になつて了つた。
それから先は離れ〳〵逃した機は再び最う來なかつた。
「嗚呼。」
と今更に吐息ついて、思はず眼を離すと膝を辷つて、ぱッたり寫眞帖は、疊へ落ちて下へ表紙を返したが、再び取上げやうともせず、我を忘れたやうに、前を見

詰めて居たが、暫くして、

「幸さんは今何うして居るだらう。」

浮世の夢を幾つ重ねて、思へば最う八年越、富に馴れ、驕りに馴れ、人を人とも思はぬほどに不足のない今の身に何にも侘しかつた其時分の事を思ふと、全然他人事のやうに、我身ながらも譃のやうな心持がする。あゝ併し、何うして急に恁ういふ事が思出されるのだらう。お組はそゞろ心に、我とも覺えず、言はず語れぬ一種の淋しみを感じた。

心付いて、俄かに我に返つて、

「まア何うしたといふのだらう。私とした事が何を今になつて……。」

と打捨るやうに、切つて放して、衝と立つて庭先へ、片足庭下駄の先へ下した途端、門の鈴の音、續いてポツクリの音を先に、息せきお房の驅込んで來た跡から、母のお淺の、それらしい刻み足。

「おゝ、歸つて來たやうだ。」

と振返ると、さやかに光る衣の綾、帶の軋みのそれより先に、最う今の先の面影

は殘りなく消えて居た。

（三）

「なにね、態々呼立てたやうで何だけれどね、近所の事だしするし、矢張り家の方が心置きがないものだからね、」

と炭を加足して、重さうに鐵瓶を直しながら、母のお淺。五十に近い年輩も、昔よりは若返つて、眼も明らかに、肉も落ちず、いつもながらの小まめな取廻。何も其蔭の今日の安さに、娘ながらも一目置いて、下から氣を取るやうに、

「でも用を缺いて來ておくれぢやなかつたんだらうね。」

「いゝえ、私も丁度來やうと思つて居た處だつたの、良人ぢや昨日から横濱へ行つて、明後日でなくつちや歸つて來ないし、今日は全つきり用は無いの。」

「然う、それぢや緩りして遊んで行つておくれな。餘所の人になつて了はれると、恁うして水不入で、時たま談話をするのが何よりの樂みだからね。おや又火が消えたやうだね。今度の炭は何うも熾りが惡くつて可けない。」

と五徳の下を差覗いて、又炭をせゝり出した。長火鉢を向前に、お組は膝を少

し斜かいにして、片手を輕く火鉢の緣に置いて對合つて居たが、眼を母に、何氣なく、

「まア、お談話は後にして、阿母樣、あの今日呼びにお遣しのは、何の用なの。」

お淺は火箸を持つて居た手を休めて、振向きさまに、

「なに、下谷の榎本の、あのお鹽さんの事に付いてね、お前に一寸知らせやうと思つたものだから。」

「え、お鹽さん。」

とお組は一寸目を瞬つて、何か思ひの外の事を聞いたやうな色を見せたが、稍口早に、

「解つたの、行先が。」

それがさ、飛んだ事なんだよ。餘りぱつとして可い事ぢやないからね、人出入りの多いお前の方へ行つて話すよりか、來て貰つて話した方が可いとも思つたので、それに此間中から暫く逢はないからね、顏も見たしするから、先刻此方へ序でがあつたらと言つて呼びに上げたやうな譯さ。」

下谷の榎本といふのは、車坂の山喜と呼ばれて、廣く知られて居る麻問屋、家とは遠い親類で、向ふは昔からの内福だけに、お組の女工時代には、時に少からぬ、世話にもなつた先、お鹽といふのは總領種の甘やかされて我儘一杯の、殊に甘い母親に羽を伸させる縹緻であつた。

十七までは極彩色、山喜の花と、振返られたのが、夏を過ぎて秋の取付、夕餉の膳の肴が冷えて、漬茄子の色が變つて行くのに、以ての外の父親の立腹、泣いて突伏した母親の前に、お鹽の置手紙が擴げてあつた。未だ一向の孩兒とばかり思つて居たのが、默つて用簞笥の三百圓、手廻りの金目なものを一包みにして其日からお鹽が家出したのだ。

それから騷出して漸つと知れた。出入りの車宿の挽子で、太吉といふ風の惡いのと、其又上手を行つた、强かな家の二階に潜んで居たのを漸くに道を付けて連戻して、半年ばかりは外にも出されずに居たのが、稍手心を緩めると直ぐ、眼を晦まして、又も姿を隱して了つた。

相手が變つて、今度は醫師の代診の何某、それぢや此間の病氣の時からと氣が

付いたが追付かず、又一騒ぎで、ごつた返したが、それッきり、行方知れず。數へて五年も過ぎて今、お組は不意に其名を聞いて、驚きもし又訝かりもした。

「まア何うしたの。お鹽さんが。」

「お聞きよ。彼の娘は去年からね、川越で藝者になつて居たんだよ。」

「え、藝者を………。」

「ねえ、いくら心柄だと言つても、如彼した不自由のない家に生れて、我儘放題にして威張つて居られるのが、本當に何うしたといふのだらう。何でも其前には、仙臺にも、福島にも、一時は函館にも居たんだとさ。去年は高崎から彼地へ巣替をしたのだつて談話だがね、彼のまア虫も殺さないやうな顔をして、人の前ぢやアろくに口も利けなかつた懐ッ子が、那樣お前、先から先を股に掛けて、渡つて歩かうとは思ひも掛けなかつたらうぢやないか、談話の代診さんなんぞは、疾うの昔、何うして了つたんだか影もないんだとさ。」

と膝の下の長煙管に、一服息繼ぎの煙草を吸付けると、ツと立つた煙を前に、其儘跡を繼いで、

「誰も知つた者が無いから、其所へ流れて來た迄の事は何にも知れないのだがね、いつの間にか籍も名前も、年までも最う違つて居る。苦勞をしたらうと思ふのに却つて若くなつて、十九と言つて隱して居るとは思はれない位、陽氣で、捌けて誰でも頭から呑んで掛つて、座敷ぢや敵ふものが無かつたといふ。まア何うだらう、それが彼の鹽ちやんと思へやうかね。何も跡から聞いたんだがね、那樣風で出るとそれは流行つたとさ。土地は好い所だと言つても、田舍の事だし、彼の縹緻で、藝は此地に居る時分から、器用で何でも出來て、それにお前、何所で覺えたのだか、土地に二人とないといふ好い呼吸なのだとさ。賣れるのは當然だアね。」

お組は聞き惚れて、我にもあらずお淺の顏を打目戍つて居たが、

「けれども何うして此方へ知れたの。誰か向ふで遇つた人でもあるの。」

「いゝえ、彼方から知らして遣したのさ。」

「彼方ッて？」

「お鹽さんからさ。」

「まア、何と言つて。」
「それが書置だから吃驚するだらうぢやないか。」
「えゝツ、」
「何しろ突如に山喜へ、お鹽さんの手で手紙が届いたのだらう。おや、と言ふので何は措いて、急いで封を切つて見ると、只繰返して、長い間の不孝を詫びた、暇乞の文なんだもの。家ぢや甚麽に吃驚したらう。」
「本當に、何といふのだらうねえ。」
「それから直に、番頭の由兵衛と、鳶頭の平吉とね、二人が駈付けたけれど、最う間に合はない。」
「えツ、」
「お客の中で、大和屋の金さんとか言つた、此人が深い馴染でね、二人の事は、界隈で知らない者も無い位、其人は養子の身分で、家は小間物屋、最う子供さへ持つて居ながら、夢中になつて了つたと見えるね。逆上せ返つて湯水のやうに遣つたのだから、二年の中だもの堪つたもんぢやない。家の物で足りなくな

ると、手の逹くだけ借込んだ仕末、最う何うにもならない樣になつた。先代の主人に見込まれて、養子になつた位なんだからそれだけの人ぢやあつたらうが、別だね此方の事は。

何うして然うも又思合つたのか。お鹽――土地ぢや小高とか言つたさうだよ、女の方でもそれ迄には散々無理な事もして、承知で深みへ入つて行く。苦勞が面白いやうになつて了つちやア、先は最う見えやしない。姉妹分の粂次とかいふのがね、見るに見かねて、しみ〲意見を言つたのだとさ。すると其時の小高の返事が、勘忍しておくれよ姉さん、これまで私は、人に欺されてばかり居たのが口惜しいから、それからは八當りで、罪だと思つた事もして來たけれど、今度のやうなのは始めてなの。彼の金さんはお客ぢやないんだよ。姉さん、何卒最う目を瞑つて居て頂戴。何うして末なんぞの事が考へて居られるもんかね。解つて居て爲るんだもの。積つて見なくッたつて氣が觸れて居るんだよ。死んでも本望さ。と恁うだつたとさ。」

お組は何と思つたか、沈んだ聲音で、

「お鹽さんは可哀相だね。」
と唯一言、眼は漂ふと見えて、只有つて竊と人知れず吐息ついた。お淺は訝かしげに、不圖眼を留めて、
「え、何え。」
言はれて忙がはしく、色を直してさり氣なく、
「なに、何でもないんだよ。それから何うしたの。」
お淺は再び前に戻つて、
「其中で今言つた金さんのお内儀さん、お勢さんといふ、二十三になるのが、それを怨みもせず、其内目が覺めてくれるだらうと、身を嗜んで何うにか家を取廻して居たが、何せい金さんの止め度のないしだらなんだらう。追付く筈があるものかね。折角の心掛けも、何も徒勞になつて、いよ〳〵持傳へた家藏にも離れて了はなきやならなくなつた時、愚痴は言はないで、私の出來るだけは爲て見せうと、女ぢやあつたが、一人で驅廻つて見事に八方を繕つて、骨さへ折つたら、何うにか盛返せるやうな運びまで付けて、これで兎も角も此場をと、

然うした中で何うして拵へたか、若干か纒まつたお金を前へ並べたのを有らう事かい、金さんはまあ、勿怪の幸ひに其金を摑出して、幾日待つても歸るのぢやない。

可哀相に、それから取逆上せて、何だかお勢さんの樣子が變だがと人にも言はれる程、目に立つてから三日ばかり、夜が明けて氣が付くと、昨夜確かに閉めた裏口の戸が開いて居る。奧の寐間は殼になつてお勢さんも、傍に寐て居た二歲になる兒の影もない。

家の者は、顏を見合はしてぎよッとした。途端に町外れの駄菓子屋の亭主が、息を切つて知らせに來た。今裏の川へ、兩手で確り、上に兒供を抱締めた儘で、お勢さんが流著いて來た。直に、直に、といふ仕末。

「おゝ、到頭……………。」

「引揚げたけれど手後れで、最う何うにも仕樣がない。さあ、此噂がぱつと立つ。誰も最う、金さんを見向いて見る者もない。此方は此方で、根が惡人ぢやないのだから、金さんも蒼くなつたとさ。殊更此方は養子の身分、向ふは家附

きの娘だらうぢやないか。」

義理ばかりでも立つ瀬はない。今度の事も、それが起りぢやあるのだけれど、一つには身の詰り、然うまでしても切れられないのが、皆一所に疊まつたのだね。

半月經たない中に、金さんは到頭情死さ。相手は言はなくッても知れて居る、當の小高さ。」

「あゝ。」

とお組は息を引いて、重ねて思入つたやうに、

「本當に、お鹽さんは可哀相だねえ。」

煙管を措いてお淺も、

「可哀相と云へば、可哀相さ。世間の慾といふものはそれこそ爪の先ほども無かつた娘だつたもの。」

と言つて付け足して、

「だから那麼事にもなつたんだけれど。」

お組は尚も夢見る氣勢。

「そりア最う、那麼に持崩して了つたんだから、何う肩の持ちやうもないけれど、彼の娘の本當の心は、皆が言ふやうぢやないかと思ふよ。けれども最う、何を言つたつて返りやしない。本當に。」

と聲を落して、急に投出したやうに、

「亡くなつて了つたのかねえ。何日か逢はれるだらうと思つて居たのに。」

と後は言葉もなく、物思ひ顔に、瞳を落して猫板の隅を見詰めて居た。お淺も流石、冴えぬ色に、

「私もねえ、何うせ好い事はないとは思つて居たけれど、這麼事にならうとは思はなかつたよ。親達は尚更さ。」

「本當に、彼方ぢや甚麼だつたらう。嘸吃驚おしだらうねえ。」

いふ時庭口から、縁先近く、お房が不意に入つて來た。前に立つと、いきなりお組に、

「姉様、這麼猫。」

と首輪の緋鹿子の鮮やかなのに、小さな鈴の愛らしげな、三毛の小猫を胸に抱へて、姉を見上げて、罪のない笑顔。

「おや、可愛らしいのだねえ、何所の。」

「此お隣りのよ。つい此間貰つて來たの。姉樣、這麼小さいのに、最う鼠を捕るの。」

「まア、然う。」

お淺は此方を、よくも見ず、其儘口を切つて、

「阿父樣も今朝ッから、それで下谷へ行きつきりなの。お前も行つてお遣りだらうねえ。」

お組は振返りざま、

「えゝ、行きますとも。せめて死顔にでも逢ひませうよ。」

「姉さん、姉さん、」

「あいよ。」

と五月蠅い顔もせず振返る。お房は眼を下に、瞬きもせず、

「姉さん、此猫には笑靨があつてよ。」

「おほゝゝゝ、まア、何を言つて居るのだねえ。」

（四）

月が上つて、宵の口、狹霧に影の薄く、濃く、しつとりとした夜の色、ところ〴〵燈火の露の小路の片側を、夜目にもさやかなお組の、軈て歸つて行く姿が見えた。

家は近間の、八町ばかり先、其絹足袋の塵埃さへ、知らさぬ程の間であるから、迎ひの女中の來るも待たず、心安げに歸つて來たが、今賑やかな町を離れて、淋しい裏路へ入つたからか、四邊に迫る秋の末の目に入る光景に誘はれたか、それとも今の母の談話の、まざ〳〵跡を曳いて居るのが連れて心を迎へたか、思ふともなく人の上、世の態、延いて我事と、歩みながらに思ひ續けて、今何某寺の門前を、路の小枝の角へ來た時、袂を横に音もせず、身に染む夜風に颯と吹かれて、思はず其方を振向いた途端、眼に入る姿に不圖立止つた。

其横町を直ぐ目の前に、懷手して衝と來た、月にも痿えた古袷、三十前後の小作りな肩の怒つた男と見えたが、一足先に前を越して、振向きもせず行かうとした。矢庭にお組は、

「あれッ、」
と聲に出して衝と寄つた。今の先寫眞で見た、まざ〳〵と其人の影。
「まア、幸さん。」
轟く胸を、面に颯と月の下、男も振返つて、驚き顔に、
「や、」
と向直つたが、一目にそれと、輝立つたお組の扮装を眼に入れると、其身の態の見られるやうに、心に既隔てを置いて、昔の親しさは見せなかつた。お組も流石、物佗びしげな幸次の姿を、近づく儘に看て取つたが、前に變らず懐かしげに、
「本當に、お久し振ぢやございませんか。まア何うなさいました、其後は。」
幸次は身を固く、稍伏目の姿で、
「へい、那様御丁寧な御挨拶ぢやア困ッ了ひます。御覽の通りな始末ですから。」
「あれ、何故那様御遠慮をなさるんでせう。私だつて自慢の出來るやうな身ではないのです。本當に、何年振でお目に掛りましたらう。あの後又築地の

方へ越してお出でなすつたと承はつたばかり、始終お噂はして居ましたが、つい取紛れてお訪問もしませんで、」

あゝ恁ういふ風に言つては、餘所々々しく取られはしないかと、思ひながらも其儘に押續けて、

「今ぢや何方にお居でなさるの。」

幸次は苦笑ひして、

「那樣氣の利いたんぢやないんでさア。今ぢや宿無しさ。」

「御冗談ばつかり。」

「全くでさ。正の談話、お相手になるやうなんぢやないんです。や、又お目に掛りませう。皆樣に宜しくね。左樣なら。」

とそつけなく、言捨てゝ旣に別れやうとした。お組は吃驚して駈寄るやうに、

「あれ、まア幸さん、」

と慌てゝ押止めながら、

「ま、何うなすつたのでせう。折角恁うして、偶にお目に掛つたのに、それぢや

餘りぢやありませんか。」

と怨みがましく、言葉もいつか打付けに、

「あれ程御懇意にした仲で、何で那樣に他人行儀になさるのだか、私には解りませんが、それとも何かお氣に濟まないやうな事でもあるのですか。」

と態と言つた。幸次はくるりと身を返して、ぢつと見たが、調子を變へて、突如ぞんざいに、

「いゝえさ、何にも知んなさらねえから那樣事も言ひなさるんだが、遇つて、厭な顏もなさらねえ其お心持は有難く受けて置きまさ。したがね、這麼野郎を懇意だなんて、氣をお付けなせえ、御身分に障りますせ。」

お組は流石驚かぬ事はなかつたが、直に莞爾して、

「でも矢張り幸さんでせう。」

月に流れて、幸次は色に動いたが、其儘立直つて、

「お組さん、全くだ、私ア今ぢや、ごろん坊だせ。」

「え、」

「まア、然う言つた形なんで。」

「おほゝゝゝ、可いぢやありませんか、何だつても。」

と言つて行手を一寸指さしゝて、

「矢張り彼方へお出でなんでせう。まア其所まで御一所に參りませう。」

「可いんですかい、那樣事をしても。」

「いゝえ、私、那樣高ぶつた女ぢやありませんよ。」

「へい、流石にねえ、ぢやアまアそこん所まで。」

と思はぬ道連、お組は夢と、昔を今の、時めく胸の言ふやうもなく、二足三足、踏むとも覺えず並んで立つたが、言葉の樣子に、聞いては氣の毒と思ひながら、重ねて口を切つて、

「本當に、何も知らないで居ましたが、築地へお出でなすつてから以來、何うして居らしつたの。」

「いや最う、からお談話にならないんで。全體私ア、火に祟つてるんですね。あれから以來、續けて三度御丁寧に全燒さ。」

「まア、那樣御災難が有つたんですか。何故又些少も知らして下さらなかつたの。」

「はゝゝ、一々燒け出されましたでもなからうぢやないかね。それも可しさ。もと〳〵有るんぢやないんだから、灰になりやア清淨したもんで、却つて小氣味が好いやうなもんですがね、それよりか事なのは、柄にない慾ッ氣を出して、四五人掛りで些と手に餘る仕事を初めたんでさ。話しやア愚痴になッ了ふから並べちやア言ひませんがね、それから先の浮沈、此六七年にや、隨分種々な夢を見ましたよ。

然うした揚句が、此姿さ。罷違つた日にやアと、前から覺悟はして居ましたから恁う來た所で、驚きはしませんがね、何しろこれぢやア、お談話も出來ませんやね。實ん所、先へ行つた奴が來いつてえんで、此東京も今夜がお名殘。明日ア名古屋へ突走らうッて仕末さ。」

「えッ、それぢや最う此方には、」

「えい、まア、居たくも居られねえやうな理窟でね。」

「まア、」
と言つたが、振向いて、直と見て、
「幸さん、」
「ではこれッきり最うお目には掛かれないのですね。」
「まア、其所等でせうよ。」
と思做しても、平氣な顏、お組ははッと、焦立つたが、流石に思遣つて、
「それぢや彼方に、何か好い見込みでもお有んなるんで。」
「なにそれも、半分雲を摑むやうなんで。まア當つて碎けるんでさア。」
聞いてお組は、それなり口を噤むだが、暫くして、しみ〴〵と、
「幸さん、何だか出過ぎるやうですがね、何もお互ひの事ですもの、若しお力になるやうな事が有りますなら…………。」
と半ば言はせず、身を直に、
「はゝゝゝ、や、思召しは有難いが、其位なら、疾うの昔お臺所から、拙い此面を出して居ますよ。何か負惜みにやア聞えますがね、幸次は未だ、人に頭を下げた

事はねえんです。一か六か、遣れるだけまア遣つて見せうよ。おゝ、危なく行過ぎやうとした。私ア此所から曲らなくッちや可けねえ。それぢやこれでお別れとしませう。出ないぢやならないんですが、急ぎますからお里の阿父様や阿母様に、序が有つたら、何うか好い鹽梅しきにねえ。よく言つて置いておくんなさいまし。」

と挨拶其儘、左手の路へ折れて行く。お組は未だ、思ふ事の何をも言はぬ中、慌たゞしき此別れやうに、呆氣に取られたやうになつたが、思はず聲を走らすばかりに、

「あゝ、もし。」

幸次は振返りざま、押冠せて、

「なにさ、行ッきりとも限らないんで。氣が利いて歸つて來ましたら、緩くり昔話でもしませうよ。まアお達者で。」

とそれなり別れて行つた。月を背後に霧に薄れて、肩の寒げな後影、今の談話に行先の、思ふに餘る口裏の、これが見納めになるかも知れぬに、言はず知らさ

ず、此儘にして別れる事かと、お組は其所に立つた儘、心一つにぢつと視る。露の目眦、村曇り、見えずなるまで立盡したが、俄かにはッと身を燒くばかり、せめて一言、一言だけも耳に入れてと、我を忘れて胸狂はしく、駈出さうとして、吃驚して氣が付いた。

月に影さす奥様姿、きらりと眼に入る指環の光、あゝ、昔の身ではないものをと、頽折れかけて又見返ると、今を別れの其影さへ、立籠む霧に消え〴〵の、眼に入る名殘の一目にも足らぬ。途端に、

「奥様。」

と曩の小間使、上する女中と二人して、押並んで行儀作つた。

お組はぎよッとして振返つたが、さあらぬ顔に、逸早く、

「おゝお、富か。」

「はい。只今お迎ひに參つたのでございます。」

「然うかい。清も一所に來たのかい。」

「はい。あの浦松様の先の處が淋しいつて、お富さんが恐がりますから。」

「おほゝゝ弱い子だねえ。それぢや、さア歸りませう。」

此時轣轆として前を横つて行く馬車が一臺、三十五六の、細面の夫人に向つて、十四ばかりの美少年が、見るから鷹揚に乘つて居たが、窓が颯と開いて、一言夫人の聲に、馬車は僅に行過ぎて礑と止つて、

「組子さん、御散歩？」

「おや、」

と急足に立寄るお組、中の二人に淑やかに挨拶したが、只見ると、既物言ひから動作から、時の間に全で違つた。

「まア那方からのお歸りで、」

「はい。一寸太田原樣に用がありまして。」

「左樣でございましたか。お急ぎでなくば、お寄遊ばしませんか。」

「はい。有難うございますが、今夜訪ねて參る者がありますから失禮致します。組子さん、あの明後日は是非お越しでございませうね。」

「はい。最う此間から樂みに致して居ります。」

夫人は盛裝した身を前に、莞爾やかな笑顔を寄せて、

「あの倉澤さんもお招き申しましたよ。山の賑かしに、」

「まア、お口の悪い。彼の方が山の賑かしならば私なんぞは野の中に吹曝されて居なければなりません。」

「まア飛んだ事を……………。では明後日ね、」

「はい、必ず。」

「御免遊ばせ。」

「御機嫌好う。」

會釋の跡に軋出す、影を見送つて其儘少時、お組は其所に彳んだが、振返ると又、幸次の行つた彼方を望んだ。髪のほつれを風に引かせて、露に後れた足元を、やがて家路に打向けると、其なよやかな身を細く、羽織の袖を胸に重ねて、

「おゝ、何だか急に寒くなつた事。さア、急いで歸らうよ。」

「はい、」

と二人は跡に身を、お組は先に裾を捌いて、何心なく振仰ぐと、彼方に輪奐の美

を極めた、山崎長者議員の邸第は、霧を破つて電燈の光に物々しく木立の上に聳えて見えた。

落葉（上）

左植込右茶畠の小徑の突當りに華奢な裏木戸がある。そこを這入ると中は頗る廣い造り庭であるから、木々は韓紅の色を爭つて、眩いやうに日に照返されて居る中から、銀糸を懸連ねて、小瀧は細かい音をたてゝ居る、其下を細谷川といふ見得で、ちよろ〳〵駈けて行く遣水の中程に、苔の付いた石が丸木橋のやうに懸渡してあつて、それから先は一面の芝生、飛石傳ひに庭下駄の止る處に屆いた普請の二階家が見てくれらしく、手を廣げて立はだかつて居る。一叢の媚竹二株の芭蕉、清風の旗でも翻へしさうな處は、此庭の入口と見える。

そこから今竹箒を手に、ぬつと一人の男があらはれた。どんつく布子に猫ぢやらしの帶で、扮裝は一向に納らないが、面は柄に似合はず雲上で、時代ならば若殿の身代りにでも立さうな目鼻立だ。

此男が朝夕庭の掃除をする。途端にいつも二階の小窓から首が出る。此首が中々容易ならぬ首で、其の容易ならぬ處は專ら眼の加減にある。年は左樣さ二十六七にもならうか。髮は品のいゝ丸髷に結つて、滅法價値のあるものを載せて居る。頭から踏んでかゝつても大家の奧樣だ。恐らくは顏ばかりでも、其だけの貫目は慥かにある。

そこで庭男は何心なく掃いて來る。例の通り小窓の障子が開いて居て、例の顏がそつと出て、しきりに此方へ目をつける。横手の平庭の方から段々初めて、次第に奧へと掃込で行くのを、しげ〳〵見詰めて居る其樣子といふものは、唯働き振を見て居るといふばかりではない。といつて此男に格別それほどにして見るといふ處はない。これには何れ綾のある事だらうが、出語りの太夫がないので、そこまでは分らない。

と見る中に女の顏はいつの間にか消えてなくなつた。男は何も知らないから頻りに掃て行く。稍あつて、後の築山の蔭から庭下駄の音が聞えて、何氣ない顏で出て來たのは二階の丸髷だ。今しも此地へ掃掛つて來る男の方へ、近

づきさまに聲をかけて、
「五助、そこんな處はそんなに丁寧に掃かなくてもいゝよ。」
「ヘイ。」と此方は見るより會釋して、「で御座いますが、何うせ手ついでゝ御座いますから。」
「それは最う左樣してくれるに越した事はないが、ちつとは骨休めをするがいゝ。お前が來てから此處等が大變奇麗になつたよ。」
「何う致しまして、まだよくお屋敷に慣れませんので、何かと屆きません勝て、」
前で見て居られる爲か氣が置けると言つたやうな風で、窮屈らしく掃て居る。
女はそれとなく前後を見て、すつと傍へ寄て來た。
「五助お前お内儀があるのかえ。」
「御冗談を、」と異な問に思はず振抑いで、「何うして其樣なものが御座いませう。」
「眞實に？」
「全くございません。」

「それでもチラと聞込んだ事があるもの。」と言つてにこ〳〵笑つて居る。

五助はいとゞ迷惑さうに、

「何と仰有いましても御座いませんので。」

「それでは誰か言ひかはした人が有るんだね。」

五助は驚いた。假初にもこゝの奥様ともいはれた人が、たしなみも無く此樣な事を口に出して濟むものかと、呆れたやうな顏をしたが、不圖心付いた樣子で笑出し、「奥樣、御弄りなすてはいけません。旦那樣の御留守中で、御退屈まぎれにお戯謔ひなさるのでございますか。」

「あらお前、そんな事を言つて胡麻化さうと思つてもいけないよ。人の事よりかお前に聞て居るんだアね。お隱しでないよ。言つてお仕舞ひな。」

「私には其樣な働はございません。第一私風情に誰が相手になるものでございますか。」

「其樣な事があるもんかね。人は左樣したもんぢやないよ。」

「然しまあ考へて御覽なさいまし。一寸見ても此樣な粗末な風體を致して、

塵芥の中へくるまつて居りますものに、唾でも吐きかけやうとするものが有るものでしやうか。當世は何につけても先に立ちますものは金でございます。今の女は皆中々利口で、算盤を彈いてから相談に取懸ります。」

と少し打解て來た話樣をする。女はすつと身を入れた鹽梅で、

「それはお前、中には其樣なのもあらうけれど、こればかりは欲得づくで行くものぢやない。いくらお金があるからといつて、身柄がいゝからといつて、其樣な事で自由になるのは、眞から思ひ込んで爲た事ぢやないやね。」

「へえー。」變な顏をする。

「おとぼけでない。覺えがない事があるものかね。」

其調子が餘り馴々しいので、五助は尙妙な顏をして、

「それでも何うも……、困りましたな。」

「話したつていゝぢやないか。羞かしいの。」

といよ〳〵切込む。此方は少したぢ〳〵の格で、

「いえ私は左樣の事にはとんと不案內で噓ッこにも未だございません。」

「うまい事を言つてる。お前のやうなものを假令お前がおとなしくして居たつて、人が打捨つて置くものかね。」

「御冗談を。」と箒の柄のけばを挘つて居る。

「眞實だよ。其中には、お前の方では知らなくても、何うしてまあ此樣にと、自分ながら分らないほど、思つて居る人が屹度あるよ。」

「ございましやうか。」と笑つて居る。

「無くつてさ。あのねえ、心といふものはね、もとを言へばね、妙なもんでね、もとを言へば一寸した御舍で、見染めるとか思染めるとか夢のやうな事で初まつて、それが高じて來ると何うにも斯うにも仕樣がないやうになるもんだよ。それは最う其樣な事を假にも思つてはならない身分であつたり、彼方此方の義理があつたりして、とても出來ないほど尚更募るばかりで、內所で唯もうあせつて居るの。仕舞には寧そ何もかも構はないやうな氣になる事があるよ。」

「へえー。左樣いふもので御座いますかな。」

と上吹く風のやうな挨拶、

「それでも先では氣が付かないから、察しる處か構ひつけもしないのさ。思詰めると何だか悲しくなつて、一思に、死ん仕舞うかとも、取詰める事があるもんだよ。其樣なだつたらお前、かあいさうぢやないか。」

「へえ。」と無據いやうな言葉付でいふ。

「分らないのかえ。お前も餘程情なしだねえ。」

「何でございます。」

ぬかりんと返事をして、ひよいと顏を持上ると、夫人はぢッと此方を視て居た。其眼は實に、只ならぬ眼で、何とも言ふに言はれない。流石に五助も氣が付いたか、はッと吃驚した樣子であつたが、何うしたのか、直に耳の根までを眞赤に染上げた。

夫人はすかさず氣をかへて、

「あゝ私は藏に用があつたつけ。」

捨臺辭ですり抜けるやうに其場をはづして、急ぎ足で一間ばかり踏出した途端、小石に躓いて鼻緒をふッつり、

「あ痛ッ！」
と聲を揚げて倒れかゝるのを漸と支へる。五助は駈けて行つて扶けやうとしたが、何だか行きかねてもぢ〳〵しながら、
「お危なうございます。何處かお傷めなさいませんか。」
と離れた處から變な聲でいふ。
「いえ、何處も怪我はしないがね、五助…………」
「へえ、彼處へ參つてお履物を持つて參るのでございますか。」
「なにそれも面倒だから、お前お氣の毒だが其處の離座敷の緣側まで一寸肩を貸してお呉れな。」
「へえ、肩をでございますか。」と頭搔き〳〵、切れ〴〵の調子で、「でも穢ならしうございます。此通り衣服は垢で汚れきつて居ります。」
「そんな事を氣にするもんかね。早く來ておくれよ。よ。さあ。」
「へえ。」と近づきかねて居る。
「仕樣がないねえ。」

夫人はちん／＼もが／＼で逆寄せて來る。五助は縮こまつた。夫人は近寄りさまに手をかけて、

「いゝかえ、最つとよく捉らしてくれなくちやいけないよ。それぢや恐くつて踏出せないから、私の身體を押へておくれな。何をうぢ／＼して居るんだね。もつと此方へ寄らなくつちやいけないよ。あら危ないッ！」

確かり抱付いた。五助は慄へ出して、いよ／＼竦縮んでしまつた。兎や角して漸と歩出した、何うして、介抱してお連申す處か、あべこべに此方が連れて行かれるやうな風つきで、一向に何うも埒口が明かない。

「お前はまあ無器ッちよだねえ。」

匂ひこぼれる笑顔で夫人は振向いた。五助は俯向いてしまつて首も上げられない。目もくらむばかりの體で、何もかもすッかり夢中で居る。

「あらお前そつちへ行くのぢやないよ。見當をつけずに歩いてるの。」

最ち淸い聲で、笑出した。五助は一層取逆上せて、血は沸返るやうで、實に何うしやうかと思つた。

けれどもまあ何うやらかうやら、えんやら漸との事で縁先まで漕付けて、肩から手が離れるや否や、何をも捨てゝ一目散に逃出した。命から〳〵といふ有樣で殆ど轉がらないばかり。

「五助、あれさ五助ッていへば。」

聲も耳に這入るものか、雲を霞と姿を隱した。夫人はやがて居間へ歸つて、窓から五助の部屋の方を、向からは見えない處で暫く見て居たが、もとの座に歸つて、一人で莞爾と笑つた。途端にばた〳〵と小さな足音が聞えて、遠慮もなくづか〳〵と這入つて來たのは清子といふ女兒、年は七歲位な、くり〳〵とよく肥つて、黑味勝の力んだ眼をして居て、見たところから利口さうな、其上まことに愛嬌のある子で、紅の這入つてる菓子でも喰べたか、脣の下を一寸染て、

「母樣、何處へ行つていらしたの。私先刻から大變探したのよ。」

心なく言はれて、夫人は却て顏を赧くした。返事も何だか出かねて居ると、清子はいふ事があるので返事なんぞ待つて居はしない。委細構はず、

「あのネ。ね。」と上目遣ひをして何か思出し顏に、

「先刻ね、戴いたお菓子をね、少しばかり人形に遣つたらばね、いつの間にかなくなつてしまつたの。そしたらば濱はね、それは人形が喰てしまつたのでございますッていふの。けれども乳母はね、さうではございませんッていふの。あのウ、お孃樣が、あのウ、何處かへお落として仕舞つたのでございますッて。それは何うだか知れないわねえ。人形だつて喰べますわねえ。それだからね、モ一つくれろッて乳母にいつたらばね、いけませんッていふの。あのウ母樣に伺つて、よいと仰有つたらば上げますッていふの。それだから母樣を探して歩いたの。ね、下さいな。人形がお腹が減くわ。」

口を尖がらかして皺を寄せて、頤を突出して話をする。夫人はたゞ器械的に耳を貸して、何か思入る樣子でぢッと顏を見詰て居る。淸子は鼻を鳴らして、

「母樣、よう、下さいな。ね、乳母に出して貰つてよござんすか。え。え。」

「あゝ、よろしい。」

何を許したのだか、恐くは夫人は知らないだらう。

「ハイ。」と淸子はいきり立つて、直に乳母の方へ飛んで行く。夫人は沈んだ

目付で後影を見送つて居たが振返る途端に、壁に掛けてある二面の油繪がゆくりなく目に這入つた。其繪は今は世き亡き夫人の兩親の肖像である。夫人はまるで睨付けられたといふやうな樣子で、ぶる〳〵ッとして慌てゝ俯向いた。其儘暫く打沈んで居たが餘程經つてから、幽かに洩れたのは太息であつた。ほつれ髮。

岡部夫人が病氣保養の湯治先から、下僕の五助と駈落ちしたといふのは、途方もないが事實である。夫人は再び得難い幸福を捨て、最愛の子をも捨てゝ、名譽も自由もそッちのけに、又とは世にも出られないやうな身になつて、それほどのものを盡く犧牲に供した其釣替といふのは、取柄も何もない、しみッたれな男だ。物好といふにも寔に程のある話であるが、兎にも角にも事實である。

如何に良人の輝彥が激怒したかは、表面にあらはれないからそれとは分らない。彼は最も思慮ある人として、馬鹿でないと二三の朋友に許されて居る。今度の事件については彼は一切無言で、たゞ常にない嚴格な顏を見せたばかりであつたが、最後に、

「あゝ憫むべき奴ぢや。

と言つて深く歎息した。

けれども眉目の間にあらはれて居る曇りは、如何に情と戰つたかの名殘では

ないか。其後此事についてはぷッつりとも言はなかつた。世間でも未だあらはにそれとは知らない。

輝彦は此家の養子である。夫人の父親には非常な恩義がある。今日の身の上になつたのは、何から何まで其人の庇保だ。夫人の居間へ行つて、彼の油繪の肖像を見た時、輝彦は實に涙組んだ。父親が此世を去る折、夫人の事は深くも頼まれた。其甲斐もなく斯ういふ仕儀になつたのは、そも〳〵此身の罪であるか。かゝる侮辱を與へるやうにならうとは、實に何たる事であらう。輝彦は瞳も動かさず見上て居る中に、沈痛の色はあり〳〵顔面にあらはれた。

清子は一筋にたゞ夫人を慕つて、「母様はいつ歸つて來るの。」

と日毎に幾度も繰返し繰返し父に向つて問掛ける。

「不便な奴ぢや。」

と輝彦は脊中を撫でゝいろ〳〵と慰める。餘りいつまでも影が見えないので、今度は更に

「父様、母様の處へ連れつて行つて下さいよう。」

とせがみ立てる。
あゝ、今日此頃の輝彦の胸の中、そも〳〵何んなものであらう。
越えて暫らく經つてから、夫人の所在が密に知れた。二人は一所には住つては居ないが、最寄に居て行通ひをして居るとの事。輝彦は直に、日頃夫人と最も親しかつた峯子といふ從姉を尋ね、所思を細かに談話して、先方へ行つてくれといふ事を頼んだ。峯子は聞いて涙を流した。
ひどく感じた結果は其日直に支度をして、用も捨てゝ置いて隱家へと差向つた。行先は或る草深い田舍で、後は雜木山の、前は圍ひのない寺の、脊戸に柿の實がなつて居やうといふ處、峯子は漸くそこへ行つたが、家を一目見て先づ其穢ないのに驚いた。
怪しげな蛆か沸きさうな、嵐を待たないでも倒れさうな、動けば鼻が支へさうに狹い低い藁小屋の、日も充分に射さないので薄暗い明り窓から、何だか腐つた氣が蒸れて出さうな中に、よくもまあ居られたものと、近づくほど愈〻眉を顰める。

流石に直には這入らないで、表で先づ樣子を窺つた。中は閴として居る。窓の横から竊と見ると居た、夫人は一人で居た。が、其變り果てた姿に、峯子は又驚いた。油ッ氣もない髮を櫛卷にして、身には繼の當つたものを着て、垢と塵埃との中に埋つて、古布子の縫直しをして居た。

人の這入つて來る氣勢に振向いて、此方を見た時の夫人の顏は實になかつた。はッとばかりに色を失ふと同時に、慌てゝ立上つて逃出さうとする。峯子は駈上りさま引止めて、情の押出すまゝ、疳走つた聲で、

「お待ちなさい。貴方は逃げるといふことを未だ知つてお出でゞすか。」

峯子は此樣な語氣で言出す心算ではなかつた。けれども顏を見るとつい氣が立つて我知らず調子も荒くなる。峯子は一圖に正直な婦人であつた。夫人を見つめて席を打たないばかりに、

「貴女は眞個に情けない事をして下すつたねえ。」

夫人は一言もない。面目涙で消も入りたいばかりに俯向てしまつた。峯子は重ねて、

「今更こんな事を言つても仕方もないけれど、貴女はまあ何といふ御了簡なの。」

夫人は兎角の返事もない。

「貴女のやうな人を從妹に持つて、しかも彼樣に仲を好くして居たと思へば、私は實に口惜しくッて………。」

峯子は泣出した。夫人もいつか泣いて居る。答がないので峯子は又、

「過去つた事はそれとしても、貴女は未だ後悔はなさいませんか。」

夫人は更に言葉もない。顏も得上げないでたゞ目を拭つて居る。峯子は自分に取紛れて、夫人への使命を忘れて居た。輝彥は極く穩かに事を分けて言諭してと賴んだのを、漸くこゝで思出した。一つには夫人が萎れきつて、座にも堪へない風で耻入つて居る姿に、流石に女氣の心も折れ、前よりはづッと物柔かに、

「いかに深く迷つたからとて、耻も外聞も捨てゝよくもまあ此樣な事が出來たもの。何もかも除物にした處が、貴女はまあ淸子を可愛いとは思ひません

か。何も知らないで貴女を慕つて、母樣の處へ連れて行つてと毎日せがんで何と言つても泣いて聞かないで居ますよ。貴女はこれを聞いても何とも思ひませんか。彼子の母親は斯う〳〵だとこれからは人に歌はれて、肩身の狹い身體になつて、爪彈きをされて暮すといふことに、貴女は氣がつきませんか。成長くなつても嫁にと貰手もなくつて、一生日蔭者になつて仕舞ふのです。貴女は現在所生の子を自分の手で酷たらしく不具にしたやうなもの…………」

夫人は先刻からいよ〳〵袖に暇もなく、殆んど咽ぶばかりに泣いて居たが、耐らへきれず、尚いひかゝる峯子を押止めて、身に引けてか、言葉も平素よりは少し叮寧に、

「アヽ最う何うぞ言つて下さいますな。私は身を切られるやうでございます。今更お目にかゝられた義理ではございませんし、貴女もこんな私のやうなものを、見るもお嫌でございましやうに、かうして態々來て下すつて言聞かせて遣らうといふ其御深切は、まことに身にこたへて有難うございますが、ああ何といふ因果でございましやう、私は…………私は…………貴女、お腹も立まし

やうが、何うぞまあ聞いて下さいまし。よく〳〵濟まないといふ事を、私は存じないのではございません。知つて居ながら爲るといふのは、何たる事かと折ふしは思ふ事もございます。申された事ではないかも知れませんが、私は未だに良人を忘れません。それでも斯うしてこゝに…………あゝ私は何といふのでございましやう。

其中にも尚思出すのは淸の事、雨につけ風につけて、何うして居るかと思ふ度に淚がこぼれます。御覽なすつて下さいまし」と言ひつゝ壁際の柱を指さした。眞黑に煤ぼけた中程に淸子の寫眞が掛けてある。無邪氣な可愛らしい顏をして、母の罪を無心に見守つて居る。夫人は又目を押へて、「せめてこれを傍で見て、逢ひたい心をやッと慰めて居ります。今日も今日とて淸によく似た草刈の子が、つい此處等へ來ましたので家へ上げて、いろ〳〵なものを遣つて遊ばして、賴んで一言母樣と言つて貰ひましたが、其心持は何ともいへませんでした。

これも申せば體裁のやうでございますが、此頃の寐覺の苦しさといふものは

何だか、恐ろしい獸類が傍に居るやうな、ひどい刄物で背後から斬付られるやうな、大きな岩の下へ押伏せられるやうな、何とも譬へやうがございません。罪といふものは人が手を下さないでも、自分で此樣にたしなめるものかと、つくづく思つて泣いた事もございます。

それに此頃のしがなさは、御覽の通りの貧しい暮らしで、以前の身に引比べて其不自由は言ふに言はれません。それも好きこのんで此樣な思をするのかと苦しまぎれに種々と考へます時には、つく〴〵我身に愛想が盡きるのも幾度か知れません。

此樣に彼方此方とつらい切ない事だらけな淺猿しい身になりながらも、離れますのは、嘸かしおさげすみなさいましやうが、寔に悲しうございます。人外とでも、何とでも、お腹の愈るだけは仰有つて下さいまし。面目もございませんが私は何うあつても思切る事が出來ません。」

基礎が既に違つて居るので、峯子は少しも同情を表さない。表さない處か呆れた。呆れた處か怒つた。一圖な氣にむら〳〵と疳癪が起つて思ふさま言

はうとして目は釣上つた、輝彦が言つた事を又思出して、心をこめて懇々と話をした。舌の續くだけはと、小一時間ばかり、許してやるから歸つて來いといふ輝彦の胸の中を、細かに嚙碎いて割つて聞かせた。夫人の色は確かに動いた。けれども遂に歸らうとは言はない。

峯子は更に淸子の方面から、いろ〳〵と根限りに說出した。夫人はたゞ泣くばかりで、返事といふのは淚より外にない。

義理で責め法で責め道で責めて、出來るだけの事を爲盡したけれど、夫人は何うしても唯とは言はない。唯いぢらしい姿で痛入つて居るばかり。此上は最早罪人として處刑を受けさせるとまで言つた。夫人は色を變へたけれど遂に動かない。峯子はこゝで堤を切つて非常に立腹した。恥知らず、人非人といふ樣な言葉は、口を衝いて迸つて出る。罵しつて罵しり倒して、舌も裂けないばかりに言捲つて、それでも胸がすかないといふ風で、沈返つて居る夫人を屹と睨まへ、

「これほどに言はれても貴女は何とも思ひませんか」

「假令どのやうに言はれましてもお返し申す言葉もございません。」峯子は席を蹴立てゝ歸つた。わッと泣入る夫人の聲は暫くの間斷續して居た。

歸つても何と復命しやう。有の儘に此通り言はれやうか。峯子は實に輝彦に對して、氣の毒で堪まらなかつた。それにつけてもと、齒嚙をして後を振返つて、散々の不機嫌で其場を立去つた。

其後折返して輝彦の使が、淸子を連れてこゝへ來たが、夫人は最早其家に居なかつた。風は落葉を吹立てゝ居る。枯草の露。

落葉後語

爾不健全なる人を知らざる輩よ。爾は此夫人に向つて呶々することなかれ爾左手にあやしき道德を提げ、右手に覺束なき人間觀を抱きて、石菖鉢の目高を學ぶことを已めよ。これ大空より天降りたる謎にもあらず、地より沸出でたる判じ物にもあらず、人も變り品も變れど、東西南北そんじよそこらに嘗て

有りたる事實に似通ひたるもの。此夫人は罵るべきか傷むべきか嗤ふべきか。神は飽まで此夫人を近づけざるべきか。こゝに風吹閉づる雲に誘はれ一夜青燈の下匆々の閒筆を走らせてかく亂雜に草するもの也。おや〳〵。

爪木折

(一)

雲の峯彼方に落て幌の追風、衣の綾、車は直走りに、案内知つた屋敷町、はや片蔭の深い方を、高塀掛りの一構への、只有る冠木門の中へ颯と乘入れた。

去年の春まで此家の令孃、母の曾代子は愛娘の、未だ何時までも手元に置きたかつたを、先から強ひて望まれて、飯塚新吾といふ、親讓の夥しい資産を持つて年の若い、未た新進の身ではあるが、某々會社に不相應の地位を持つて居る先へ嫁付いて、今車の上にも見違へるほど大人びた物越を、人は趣を付けて更に目を止めた。依子と言つて二十一、眉の匂ひの若くこそあれ、最う懷子で居られるのではなかつた。

客と見えて、車が二臺、彼方の梧桐の蔭に梶を下して、供待には車夫が二人、空になつた氷水の洋杯を脇へ押遣つて、一人は横に、一人は壁に凭込んだまゝで、吹

込む風を心地よく、談話も盡きて何時の間にか寢入つて居た。依子は幌越しに一寸目を遣つて、玄關脇の横窓を右手へ、時を涼しげな寒山竹の簇立つて居る前を過ぎて、いつものやうに中の口で車を降立つた。

「おや、」

と横手の女中部屋、肱掛窓を小簾越しに、小間使の春といふ、色の白い唐子のやうな額付をしたのが、それと見て直に立つて、依子の内へ入ると共にばた／＼と出迎へた。

「お出遊ばせ。まア暫くお越しになりませんでした事。」

「おや春かへ。大變御無沙汰をして了つてね。つい何だか出られなかつたもんだから。」

と上りながら、一寸立止る氣勢に、

「阿母樣は、」

「お奥でございます。」

「然う。」

と其儘中へ通つた。春は奥へ知らせる爲に先へ驅拔けて行く。依子は呼止めて背後から、

「一寸、あのお客のやうだね。」

「はい、遠山樣の旦那樣と若旦那樣でございます。」

「あゝ然うかい。」

と首背いて何氣なく、話聲のする座敷の方を振返つたか、それなり春に續いて奥へ入つて行つた。

只見ると奥の六疊、其昔依子の部屋であつた一間に、母の曾代子は古びた津輕塗の硯箱を傍に引寄せて、片手に卷紙、未だそれ程の年でもないに眼鏡の力を藉りて、さら〳〵と何か筆は倂し流れるやうに長々しい手紙を書續けて居たが、春の知らせに思はず筆を置いて、悦ばしげに振返つた處へ、依子は衝と入つて來た。

「阿母樣、何うも飛んだ御無沙汰をして了ひました。」

曾代子はそれも待たず、

「おゝ、能くお出だつた。此間つから何うしたのかと思つて、最う毎日のやうに待つて居たのだよ。今日も未だ見えなかつたら明日あたり一寸行つて見やうと思つて居た。まア併し能くお出だつた。往還は暑かつたらうねえ。」と一人で受取つて直には口も開かせなかつたが、俄かに心付いて又筆を取上げながら、

「御免よ。一寸此手紙を書いて了ふから。」

「あら何ですねえ那樣、私なぞに態々お斷りには及びませんわ。お構ひなく書いてお了ひなさいまし。まア大層長いお文だ事、那邊へお出しなさるの。」

「廣島へさ。」

と答へながら手を動かして居る。依子は此方に、春が出してくれた團扇を使ひながら、

「はア叔母さんの方へ。それぢやお序に跡へ一寸、私も宜しく申しましたと何うぞ仰有つて下さいましな。」

「あゝ、好いやうに書いて置かうよ。」

言ふ中にも先へ五六行、其間に軈て書終ると、膝から下へ、さながら布晒しの波を打つて重つたのを、くるりと返して卷納めながら、

「おう／＼、用もないのに恐ろしく長くなつた事。」

と封じて上書を濟すと、急がはしく眼鏡を外して、其處等を春に取片付けさせて此方へ、

「さア、漸と手が明いた。待遠だつたらうねえ。凉しいから其方の八疊の方がいゝよ。お前浴衣に一寸着更へたら何うだね。」

「はい有難う。なに此儘で可うございますよ。別に氣が張るのではありませんから、些少も暑い事はありませんわ。」

「然うかえ。でも窮屈だらうがね。」

「あれ此家へ來て何が窮屈でしやう。些少でも那樣だつたら私の方から申しますわ。」

と脇に置た進物らしい包みを其處へ、

「あのこれは家の阿母樣から、お珍らしくもありませんが、お目に掛けてくれ

といふお囑言でした。」

「然う。それは何うも。併し來る度に那樣心配をお爲ちや可ないぢやないかね。まア阿父樣が、お出になつたらお目に掛けやう。何かえ阿母樣は其後お腰の方は最う薩張おしかえ。」

「はい、最う此頃は私よりもお達者ですわ。」

「おゝ、それは何よりだね。此間も脇から聞いたが、お前には新吾さんよりも好くなさるさうで、那麼よく出來た姑は何處を搜しても容易に有るもんぢやないなんぞつて、いつ聞いても好い噂ばかりで私もお前の爲に甚麼に悦んで居るか知れない。」

「本當に、家の阿姑樣は勿體ないほど好くして下さるのですから、赤澤の勝子樣なぞのお談話を聞くと、私は本當に幸福だと何時も然う思ひますわ。」

「全くさ。お前の幸福といふもんだよ。お前も其氣でねえ、何處までも盡して上げなければならない。」

「はゝ、それは最う、私も出來るだけは氣を付けて居ますけれど、彼方で氣を付け

て下さるには死ても及びませんわ。本當に涙が飜れるやうな事が有るのですもの。生みの子だつて死ても凭うは出來まい、と何にも知らない私でさへ思ふ位ですわ。」

とさも思込んで言ふ。曾代子は感に堪へたやうに、

「おゝ、那樣かえまア。結構ぢやないかね。嫁と姑の仲の好いのは美しいものだが、お前は良い先へ本當に嫁當てたのだ。」

と言つて何心なく、不意に調子をかへて、

「そして新吾さんはえ。」

「は、」

と何か知らず、依子は周章てたやうな姿で、我にもあらず口籠つたが、笑つて紛らすやうにして、

「相變らず。」

と言つて母の若し怪しみはせぬかと、疑懼を帶びた眼を擧げて竊と見た。曾代子は深く眼にも止めず、

「然う、此頃餘り遠々しいから、何か種々と忙がしいのだらうと思つては居たが……。」

と常の挨拶、依子も尾に付て直ぐ、

「矢張り何彼と自分の事にかまけてばかり居るもんですから、いつも口癖に行かなくつちやならないと言つて居ながら、つい用事に追はれて居るのですわ。」

「なに態々用を缺いて來るには及ばないがね、手が隙いたら些少顔を見せてくれるやうに然う言つておくれ。阿父樣も近い中に行らつしやるやうに言つてお出だつたが、今朝も談話の序に大塚にも暫く逢はんの、と何だか心待に待つて居らしやるやうだつたよ。」

「本當に濟みませんのねへ。」

と吐息を隱して俯向いた。曾代子は何も知らす微笑みながら、

「何の那樣、謝罪るほどの事は有りはしない。何よりも家の中が、いつもお正月で行かれるのだから、これに越した事はないぢやないかね。世間は何うし

て、何處へ行つても波のないといふ家は容易にはないのに、何の心配も苦勞もないお前のやうな果報者が探したつて幾人あるだらう。慾には只、一日も早く孫の顏をと思つて居るけれど……。」

「あれ、阿母樣は又それを……」

「おほゝゝ、可いぢやないかね。併しこればかりは、いくら焦慮つても仕樣がないね。」

「知りません。那樣事何うでも可うござんすわ。」

「まア何だねえお前、いつまで那樣わやくらしい事ばかり言つて居られるものかね。」

「でも言つて居られるだけ可いぢや有りませんか。」

「おほゝゝ、何が可いのだらう。まア仕樣のない人だ事。」

と罪もなく笑傾ける。と葭戸の彼方に、ばた〳〵と身を輕く衝と來た小間使の春か、敷居越しに手を支くと、

「奥樣、旦那樣がお召しでございます。」

曾代子は振返りさま、
「然う。」
と首肯いて直ぐ、持つて居た團扇を置いて立上つた。依子は見上げるやうにして其儘、
「お客樣は遠山の叔父樣ださうですね。」
「あゝ、武さんも一處に來てお出だよ。」
「おや武さんが。然うですか。春が只若旦那樣と言ひましたから、私は兄樣の方だと思つて居ました。然う、武さんでしたか。」
と呟やくやうに言つて目を伏せた。曾代子は立ちながら一寸衣紋を直して
「では一寸行つて來る。お前も機を見て後に御挨拶に行つたら可からう。」
と言捨てゝ室を出て行つた。取殘された依子は後に流石生家の居心地の客に來たやうな手持無沙汰もなく、一人心安げに昔ながらの眼に馴れた四邊の光景を打眺めて暫く時を移して居た。
途端に颯と、青葉を越して一吹き軒に吹入れて來た風が、袂に靡き、團扇を伏せ

て、塗柄の房を横さまに、冷々と羅を押へて肌を掠めて行く涼しさに思はす顔を振向けると、彼方に表の廣庭を隔てた、板折戸越しに、

「や、」

と呼ぶ聲、と見る中に近々と、庭下駄掛けに身を寄せて、

「依子さん。」

垣の此方に姿を見せた、三十前後の紳士風、髭の濃い、眼の爽やかな何處となく立上つた面色を、一目見ると依子は、思はず乘出すやうにして前に押直つた。

「おゝ、武彌さん。」

（二）

「いや暫く逢ひませんでしたね。今彼方で伯母さんに貴女の來て居る事を聞きましたから、一寸座敷を外して來ました。」

と近く緣端に腰掛けて、親しく取繕はぬ風に、身を斜かいに微笑を帶びた顏を打向けた。

「おやそれはまア。私もお出になつて居る事を承つて、一寸出やうと存じて居ました處でした。さア、まア此方へ御上りなさいましな。」

「なに此處の方が涼しいから、」

と手にした葉卷の灰を拂落して、一服長く、ぱッと香の强い烟を外に、

「然う、いつか濱町の伯父の法事の時に逢つたきりでしたね。全く暫くでした。實は近頃度々貴女の事を聞いたり何ぞするもんだから、何うして居るのかと始終心に掛けて居ましたが……。」

依子は其間に團扇煙草盆などを薦めながら、

「は私の何を、」
と聞きさして、はッと眼を擧げた。
「なに貴女の家の事をさ。」
と輕く言つて不圖見返したが、依子の安からぬ顏色を逸早く眼に入れて、
「いや惡く聞いてくれては可けない。私は貴女の身を心配して言ふのだから、殊に他人ではない從兄妹の間で、見得も隱立も要るものぢやないのだから何うか昔の、然う、貴女の部屋だつた其處の六疊で、武さん依さんと言つて、お互ひに何も心を置かなかつた、彼の時分の氣持で聞て貰ひたいが……。それに、」
と言ひさして稍口籠る氣勢に、
「それに私が、跡から知らずに結婚を申込んだといふ關係も有るものだから貴女の今の事などを彼是言ふと、何うも妙でない事に思はれるかも知れんが私は何處までも貴女の幸福を望んで居るから言ふので、貴女もそれは、私の其後の樣子を知つて居てくれるだらうと思つて居ます。」
「は、それは、」

と依子は何かなしに差俯向いた。武彌の言はうとする事を大方は推して居るので、面に見えるより胸は尙騷いて居た。武彌は流石、其上外に聞かれるのを憚るやうに、彼方に一寸眼を遣つたが、

「依子さん、私は飯塚さんの怪しからん噂を聞いたので。」

依子は何と思つたか慌たゞしく、

「貴方、其事ならば最う、何も仰有りませんで……。」

「え、何うして、」

「いゝえ、實は未だ、母にも父にも何も言はないで居る位なのですから、もし何かお耳に入つた事が有りましたら今の處何うぞ貴方のお胸にだけ納めて置いて下さいまし。新吾もいつか本氣に返つてくれる事も有りましやうし、それよりも私、何か良人の非を數へるやうな、那樣お談話をするのは全く厭ですから。」

武彌は暫く其顏を打目戍つたが、やがて徐ろに、

「むゝ、それぢや言ひますまいが、併し唯自然の成行に任せて置いては、貴女は

詰らない目を見なければならないと思ふから、私はそれを氣遣つて居るのですが、貴女は勿論其邊の事も考へてお出でしやうな。」

「はい有難う存じます。私も全ッきり無考へではありませんけれど、併し私の方から進んで何うしやうとは思ひません。私は私の盡すだけの事をして良人に仕へて居ればそれで可いと存じて居りますから、最う其外には何も考へないやうにして居りますの。」

「いや貴女のお心掛けは然うでしやうが、貴女は今飯塚さんが甚麼考へを持つて居るか能く御存じなのですか。苟も貴女の良人である飯塚さんを惡く言つては濟まんけれど………。」

「あれ其事は最う仰有らないで下さる筈ではなかつたのですか。」

「なに前に言はうと思つた事は最う言ひませんがね、たゞ一言貴女に注意して置きたいのは、飯塚さんが罪もない貴女を出さうといふ考を持つて居る事ですが。」

「えゝッ。」

と思はず聲に立てるほど、悸として色を變へたが、俄かに心付いて、

「おほゝゝゝ、まア何を仰有るかと思つたら、矢張り人を調戲つて居らしやるのね。」

「むゝ、いや戲譃にして置いても可い。私は此事だけを注意して置く。勿論伯父伯母初め外の人達も付いて居る事だから、間違つた事などには決してさせもしまい。けれども、貴女は貴女で又執る手段も有るだらうと思ふ。」

「は、有難うございます。私のやうなものでも然うして御心配して下すつて、仰有つて下さるのは誠に有難うございますが、今の處何うぞ只御戲譃にして置いて下さいまし。それでないと私、恁うしては居られませんから。」

「そりや戲譃にして濟めば、全くこれに越した事はないけれど…………。」

「ですから何うぞ然うなすつて了つて下さいまし。武彌さん、本當を申せば私は良人を信じて居ります。飯塚へ參つて居ます以上、それでなくて又何うなりましやう。ですから其事は最う後生ですから何も仰有らないで下さいましな。」

「いや私も好んで言ひたくはないからこれで止しましやう。何うかね這麼事の又耳に入らないやうに、いつも好い談話を聞くやうに早くしたいですよ。」

「はい、何うぞして然ういふ事に。」

と談話を外に求めるやうに、

「それは然うと貴方は又、上總の方へ行らしつやるやうに聞いて居りましたが、」

「は、例の水産の方ですか。實はそれで少し御相談する事があつて、今日父と此方へ上つたのですが、私もいよ〳〵彼地へ本陣を据ゑる事にしましたから、いづれ其中、遊びに來て戴けるやうな好い座敷でも拵へて置きましやう。」

「そしたら今度こそ奥様を、」

「え、」

と眼を振向けた。依子はちッと見入るやうにして、

「貴方本當に、何故未だお決めなさいませんの。」

武彌は笑つて事もなげに、

「はゝゝ、いや那樣談話は最う、疾うの昔に何處かへ捨てゝ了ひました。一時は出來心で一寸那樣事も考へて見ましたが、それも何時か忘れて了つた位、私は最う自分の事業の外何も見ない事にしました。」

「まア、それでは何ですか私が、いつまでも貴方に濟まないやうで……………。」

武彌は多く聞かず、直さま打消すやうにして、

「何の、貴女に少しも關はつた事ぢやない。那樣門違ひをして居られては甚だ迷惑する。私は然うした面倒なのぢやないから。」

と言つて眞顏のやうな、半ば又戲れて居るやうな語氣で、

「依子さん、私は然ういふ事には餘程淡白して居た積りで居るのだけれど、貴女には然うは見えませんかね。」

と嘲けるやうに跡から、

「して見ると未だ何處かに邪氣があるのかもしれない。」

「あれ、然ういふ積りで言つたのではないのですけれど、」

と態とらしく微笑むばかりに、

「でも其事は何方にしても、貴方は何故いつまでもお獨りで居らつしやらないぢやならないんですの。」

「はゝゝ、那樣に又氣になるなら、誰か一人恰好なのでもお世話なさい。緣があつたら貰はうといふ事にして置かうぢやありませんか。」

「まア戲談ではありませんよ。」

「何故。」

「でも那樣、全で口先ばかりで仰有つてるやうなんですもの。」

「困るぢやないか。依子さん、それぢや若し私がこゝで意地を惡く、貴女を只虐めるやうな事をしたら何うなさる。私の獨りで居るのも實を言へば貴女の爲で、今度の事業に身を投じるやうになつたのも、詰り貴女を得られなかたからの反動で、私の生涯は全く貴女の爲に這麼思ひも寄ん方へ逸れて來たのです、と言つたら貴女は何うなさる。」

「…………。」

「そして納りが付くと思ひますか。」

「武彌さん、」

「ヤ、一寸、」

と武彌は氣色を見て直ぐに押止めて、

「だから言はない事ぢやない。近い親類で、お互ひに厭な心持で居たくはないぢやありませんか。私は過ぎた事を根に持つやうなのぢやないのから、此先何ういふ行爲に出やうと、決して最う氣に掛けて下さらないやうに願ひたいので。」依子は又も其顏を見入るのであつたが、軈て口を重く、

「はい、それぢや最う餘計なお勸事は致しますまい。私はたゞ貴方に聞いて戴きたい事があるのですけれど…………。」

「何ですか、それは。」

「武彌さん、今迄機がなかつたからつい言はずに居たのですけれど、私あの飯塚の方へ參りました時、貴方のお談話が私の方へありました事なんぞは、私全で知らずに居りましたので、彼の時若し…………。」

と言つて、少し躊躇つた。武彌は笑つて又押止めるやうに、

「然うでしやう。貴女は何も知らなかつた筈です。彼方の談話が最う決つた跡だと聞いたから貴女に知らせるのは、私が止めて了つたのですもの。」

「まア、然うでしたの。」

言ふかと思ふと吐息ついて、

「何も緣ですのねえ。」

「武彌、武彌、」

と此時、庭を隔てゝ座敷から、父の勝彥が外に向つて大音に呼ぶのが聞えた。

「おゝ呼んで居る。相談が付いたのかな。」

と武彌は立上つて、

「依子さん、邪魔をしましたね。何うです彼方へお出なさらんか。ちと又氣の晴れるやうな談話でもしましやう。」

「はい、お跡から是非。」

「は、それぢや、」

と輕く會釋して其儘、もと來た路を座敷の方へと引返して行く。風の通路、綠

の蔭の濃い下を、飛石傳ひに枝折戸の彼方へ隱れた、後姿の見えずなるまで、依子は跡を打目戍つて居たが、青葉を返して、曇ると見えた顔の色は、物言はぬ目に跡を讀ませて、やがて下に、面を深く、一人思に沈んで居た。

（三）

其夕竹の月夜籠の河鹿の音を入れて、浴衣の影の涼しかつた。燈火が點いて、遠山親子の歸つて行つた跡から、續いて碁敵謠仲間、主人の良輔は疲れた色もなく、例の客好き談話好きの、さゞめき立つた夏の宵であつた。座敷の賑やかなのに換へて、茶の間の次の、蔓の六疊の間、緣に籐筵、蚊遣りの烟、岐阜提燈の嬌めいた下に、依子は母に引止められて、談話のいつになく縺れて行くのに、稍持扱つた姿を、強ひて笑顏に紛らしながら、曾代子の又も押して何をか言はうとするのを、慌たゞしく遮ぎるやうにして、

「あれ、阿母樣は那樣疑つてばかり居らつしやるから、」

曾代子は能くも聞かず、

「いゝえお前那樣事を言つたつて、私の方には確かな證人が有るのだもの。」

「證人、まア、這麽事に證人に立やうな方が有るのですか。」

と依子は態とらしく呆れたやうな顏、曾代子は猶豫もなく、

「有るともねお前、」
「まア何方、その方は。」
「そりや言へとお言ひなら何時でも言はうがね、お前私に何も隠す事はないぢやないかえ。那樣隔てを置いてくれては私は却つて恨しく思ひますよ。」
とばかりぢッと打目戍る。依子は心ならず眼を背けて、
「おほゝゝゝ、阿母樣は一人で那樣事ばかり仰有つてお出でゞすけれど、先刻から申した通り全く根がない事なんですもの。思ひも寄らない噂を立てられるのは、世間にいくらも例のある事です。良人は全く那樣人ではないのですから。」
「お前本當にかえ。」
「あれ未だ疑つて居らつしやるの。」
曾代子は落付かぬ色を、名殘なく眼顏に見せて、
「然うでなければ又、これに越した事はなし當のお前が押切つて那樣事はないと言ふのだから、私もそれにして安心して了ひたいのは山々だけれど、談話

は又聞きとは言へ、聞いた人も言つた人も、うつかりしたことを口に出す人達ぢやないのだから、私は何うも氣遣はしくてならない。全體恁ういふ事は、お前から私に何うしたらと相談して來る筈だのに、お前は又新吾さんの惡い事を私の方の耳に入れたくないといふ斟酌かも知れないが、外なら兎に角に私に何の隱す事があらう。お前何故有りの儘に言つておくれでない。」

「阿母樣、困りますよ。何だか餘り思過しをして居らつしるやうで、那樣に仰有ると私何うお談話をして可いか解りませんわ。本當に安心して居らしつて下さい。阿母樣の思つて居らつしやるやうな事は些少もないのですから。」

「だが全で跡形もない事ぢやなからうね。縱令今話したやうな、最う半歳も家へ寄付かないといふほどの事は無くつても、身持が確かなら噂の立つ筈もない譯ぢやないかね。」

「はい、時によるとそれは無據い交際で、偶には家を明ける事もないぢやありませんけれど、今の世間には何處にもある事で、何も良人だけに限つた事ではありません。阿母樣、貴女は遠山の叔父樣からお聞きなすつたのでしやうが、

全體それは何處から出たお談話です。」

「それが新吾さんの何も彼も能く知つて居る同じ會社の丸茂さんといふ前から繁々に往き來をして居るといふからお前も知つて居るだらうが、其人から二度迄も聞いたのだと言ふし、一人は不意とした事から知つたのだけれど、確かに然うだと言つてお出だとか新吾さんを能く知つて居る北原といふ醫者から聞いたのださうだが、何方も拵へ事や輕躁みに人の事を言觸すやうな人では決してないといふのだもの。お前が請合ふのだけれど私には直に受取れないぢやないか。」

依子は聞きさして居る中に、何をか胸に思入つたやうであつたが色には出さず、さりげなく、

「然うですか丸茂さんの。でも良人の何處を見て那樣事を仰有つたのでしやうね。阿母樣、世間には隨分見違ひ思ひ違ひといふ事もありますし、それに人は、何彼に付けて種々な事を言ひたがるものですから………。」

「お前それぢや何も知らないで居るのぢやないかへ。」

と曾代子は調子をかへて又言出したが、

「それにしても新吾さんの樣子でも少しは知れさうなものだのに、私だつても徒勞に心配はしたくない。お前も私の心は言ふまでもなく解つて居るだらうね。」

「はい、解つて居ますとも、それは。ですから餘計な御心配を掛けないやうにと思つて安心して居て下さいと申して居るのですに、何故又那樣に氣をお盡しなさるのでしやう。」

と曾代子の氣色を竊かに讀やうに不圖眼を擧げたが、容易に解けさうもない樣子を見て取ると、其儘膝を進めて。

「阿母樣、それぢや恁うして下さいまし。せめて私から、御相談を願ひに來ますまで、其事は最うお預りなすつて下さいませんか。當の身の私ですもの、自分に振掛つて來た事を知らない顏で何うして居る事が出來ましやう。差詰め膝を抱いてお縋申すのは、阿母樣の外にはありませんものを、それこそ直に申上げに參りますわ。」

と態と強く言つて、跡は打笑むやうに、

「それにしても可笑いではありませぬか。全體ならば私の方が眞氣になつて泣立てゝもして、阿母樣が種々と言聞かせて宥めて下さるといふのが恁ういふ事に能く有る場合だと思ひますのに、何ですか私の方が落付いて、阿母樣の方が却つて躍氣となつて居らつしやるのですもの。事があちこちぢやありませんか。」

「お前はまア餘所の噂でもして居るやうに、何うして那樣悠長な事を言つて居られるのだらう。私にやお前の氣が全ッきり解らないよ。」

依子は尙も微笑ながら、

「今に解る時が來ますよ。」

「え、そりや何ういふの。」

「それもお談話する時があるだらうと思ひますの。今申したやうなのですから何うぞそッとしてお置きなすつて下さいませんか。ねえ阿母樣、何もお聞きなさらなかつた以前になすつて、默つて暫く見て居らしつて下さいまし。

ね、お願ひですから。」

と差窺くやうにして抑して言つた。曾代子は物足らぬ態に、

「そりやお前が那樣にもお言ひなら、然うして居ないとは言はないけれど、ただ此儘ぢや氣が濟まないからね。」

「ですからそれは屹度お心の濟むやうに致しますよ。本當に、這麼御心配を掛けて濟みませんのねえ。」

「なに那樣事は何うでも可いけれどね…………。」

「おや、お客樣は最うお歸りなのですね。」

と依子は頭を上げて玄關先の物音に不圖耳を欹てた。引違へて此方に近く、豐かに肥えた赭ら顔、年より早い白髯の、胸に垂れたを風に吹かせて、どしりとした身を重さうに、主人の良輔は生平の袖の肱を露はにして微笑みながら入つて來た。

「おゝ、依は未だ居たのか。」

見上げて笑ましげに依子は、

「はい、隨分長ッ尻ですのねえ。」
「なに先刻歸りかけたのを無理に止めたのですよ。」
と曾代子は其儘に言ふ。良輔はぢろりと見て、二人の前に座を取ると、
「ふむ、曾代は又詰らん事を依に言つたのぢやないか。」
曾代子は聞敢へず、
「何んです、詰らん事とは。」
良輔は打笑つて、
「なに先刻勝彥が取止めもない噂話をしたのを、何か眞氣になつて聞いて居るやうだつたが、大方輪を掛けて依に話したのだらう。併し餘計な智惠を付けはしまいな。」
「何の、智惠を付ける處ですか。それが氣に掛りますから聞いた通り申しましたがね、依子は全で那樣事はないと言ふんですもの。」
「なに那樣事はないと言つた？」
「依、よく言つた。勿論那樣事が有る筈はない。俺も一通りは聞いたが、實際

初めから取合はうとも思はなかつた。」
依子は身を進めて、聲さへ心嬉しげに、
「阿父樣、有難うござります。阿父樣より深く、良人を信用して下さる方は外にはありますまい。良人も其お言葉を聞いたら甚麼に喜ぶでしやう。」
「むゝ、なに新吾は俺の婿だ。那樣人の噂などに、直に騷立てるやうな輕々しい事で、お前を飯塚の家へ遣つたのぢやないなア、お前にした處で然うだらうな。」
「はい、それは最う。」
「俺は俺の流義で新吾を見拔いて居る。假令何があつても案じる事はないぞ。お前はお前の盡すべき道を何處までも忘れんやうにせい。」
「はい、私も然う存じて居ります。」
良輔は意を得たやうに、
「可し。何處までも其心で遣れ、曾代が何を言つたか知らんがな、俺もたゞ見て居るやうな事はせんわ。手を下さねばならんときには、猶豫なく遣つて退

ける。空騒ぎは、爲にならんぞ。なにさ、長い間にはさま〳〵な事があるものよ。苦勞は藥だ。山阪は越えて見るが可い。併しなア、甚麼場合にも必ず取亂す事のないやうにな。」

「はい、能く氣を付けましやう。本當に阿父樣にも、假令噂にしても這麼事をお聞かせ申して濟みません。」

「可いさ、可いさ。何も承知して居る。俺もな、暫く無沙汰をして居るから。明後日あたりお前の方を訪ねて見やう。曾代には又話す事がある。これで濟んだ事にせい。」

言ふなり颯と氣をかへて、未だ打水の滴るばかり、葉影を落す月の庭に眼を押向けて冴々しく、

「何うだ。良い晩ではないか。依、久し振だ、お前の手前で一服點てゝ貰はうかな。」

といつも機嫌顏、座敷で謠連れた名殘を、誘出されて其儘に、

「…………近きうしろの山里の柴といふ物迄名をとり〳〵のわざなるに、たゞ

心なき住居とて、人を賤しめ給ひそよ………。」

依子はやがて母にも望まれて、案内知つた水屋へ直に立つて行つた。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

もと來た道を其車に、幌を疊で、夜の色月に送られて依子は歸つて行つた。車は輕さうに、風を衝いて影を飛ばして行く。町には未だ門涼みの人の聲、路も途絶えぬ夜の都を、目を俤に立つ、眼元、口元、髮容、流れて先へ、又幾人かの目に迎へられるのであつた。

春潮

（一）

牛込の、矢來へ入つて、只有る屋敷町の中程、左右を石垣に疊上げて、門から中へ坂になつて右に折れて、枝を重ねた赤松の蔭から、破風作りの玄關先が見える一構への邸がある。路に接して百坪ばかりの庭を取つて、座敷に續いて八疊の書齋、寢間、茶の間、化粧部屋、別に離屋の小座敷を合せて八間、東へ廻つて、湯殿、車夫部屋、井戶、物置といふ可成りな住居。

南を受けて、一面に日の射込んだ緣先に、金茶の紋綸子の座蒲團が、五枚ばかり押連ねて干してある。閉切つた障子の上に、花には未だ早い梅の片枝が、恰も光琳模樣のやうに面白い影を見せて居る。枯木の梢に、一羽二羽、稍暫く雀が音を立てゝ居たが、何か見付けたそうに上のが不意に立つと、下のも後を追うて隣邸の植込の方へ飛んで行つた。

其時茶の間の障子を開いて何心なく出て來たやうな、二十二三の丸髷の婦人、常着らしい節絲の小袖に、中古の黒縮緬の羽織すらりとした見よげな姿で、緣に立つて庭を眺めて居たが、軈て下立つて、庭下駄に飛石傳。

春は名ばかりの、未だ冬構への此頃ではあるが、朝から風もない日和で、急に時候の變つたやうに、一枚脫いでも可いほどの暖かさに、そこはかとなく四邊のさまに目を移して、右手に織部形の燈籠の、上を振冠つて未だ骨ばかりの百日紅が枝を差翳して、居る下を拔けて、芝生に處々小松をあしらつた脇の姫墻の前へ立つと、家の前の通りは直ぐ目の下に、道行く人のさま〴〵の姿は、見るともなしの眼に入る。

途端に、

「お前、本當に其氣なのかえ。」

といふ聲が不意に聞えたので、只見ると下の石垣の傍に、四十恰好の肥つた、血色のいゝ內儀と、未だ年若の、小作りの女房風のと、二人立話をして居るのであつた。

「あれ叔母さん、誰が這麼事を冗談に言ふものかね。此間も那麼に言つたのに、未だ本當にしておくれでないんだね。」

と若い方のは恨みがましい。

「それぢや何うでも出る氣なんだね。そりやアお前の事だから、よく〳〵厭氣になつたんでなければ、此間も那麼事をまさかに言ふまいとは思つたけれど、何しろ困つたんだねえ。だがね、兎角に若い中には、何彼と思違ひのあるもんだからね、ま、惡い事は言はないから最う一度とツくりと後先を考へて見ては何うだね。」

言ふも聞かず押返すやうに、

「最う此上の考へやうはありやアしない。私だつて外聞の惡い出戻りなんかして、好んで肩身を狹くしたいとは思ひもしないし、叔父さんにも心配を掛けたかアなし、家へ歸つたつてそりやア、私の立場が甚麼だかッて事も知つてるけれど、私ア最う那樣事に構つちやア居られなくつちやつたんだもの。」

「まア此處で込入つた談話も出來ないが、まア早い處が、末の見留めが付かな

いからといふのだね。」

「然うさ。今の中に覺悟をしなかつた日にやア、此先甚麽目に遇ふか知れやしない。叔母さん、彼人は、本當に私を達摩茶屋へ賣りかねやしないよ。」

「仕方がないねえ。然う脊中合せになつて了つちやア。あれ程仲の好い夫婦だつたのにねえ。」

と流石に嘆息するやうな、言葉を途切らしたが、

「然しお前、那樣事にして好い心持はしなからう。」

「でも那樣事を言つて居ちや、此方の身が立たないもの。」

「けれども、情愛といふものは、然うしたもんぢやないがね。」

「おほゝゝ、叔母さんは暢氣だね。」

「え、」

「矢張脊に腹は替へられないわね。」

年上のは呑込めぬ顏、稍氣色ばむで、何をか言はうとしたが、不意に氣をかへて、

談話を切上げるやうに、

「それぢや兎も角、晩にでも隙を見てお出、よく又お前の了簡を聞いて見た上の事にしやう。」

「ぢやア晩に行くからね、濟みませんが叔父さんにもね、」

「あゝよく話して置かう。」

「何うぞね。」

「承知したよ。そんなら可いかい晩ね。」

「はア、其處等のものを了つたら直に行きますよ。」

別れて西東、家路を指して歸つて行く。上の姬墻の傍に、未だ半身を見せたままで、去りもやらず談話を聞きさして居た婦人は、其儘ぢッと後影を見送つて、物思はしげな姿に佇立んで居た。

ゆくりなく來合はせたばかり、談話も片端を聞いたゞけで、深くは樣子も知れぬけれど、婦人は今叔母さんと言はれた方の言葉を道理に聞いて、その相愛の情にさへ不足が無かつたら、假令何のやうな事を犧牲に供さうとも、少しも悔ゆる事はないであらうに、

此やうな夫婦もあるものか、と二人の去つたあとの何となく打目戍られたが、それに付けても何故又此やうな事を、際立つて深く身に感ずるのであらうと、不圖氣が付くと、顏には安からぬ色が見えて、誰に忍ぶともないに、抑へたやうな太息と共に暫く俯向いて居た。

三人連れて、學校歸りの女學生が下を通つて行く。隣邸にいつもの謠が初つて、今日は小鼓の聲さへ聞えたが、うつゝに聞流して居た耳元に清い、爽やかな聲で、

「千枝さん。」

吃驚して目を上げると、いつの間に其處へ來たのか、外の石垣へ寄つて、栗毛の、三才駒の、七寸ばかりなに、ゆらりと跨つた若い紳士が、其清しげな眼に、通つた鼻筋、濃く秀いでた眉の、清らか面を直と向けて微笑を含んで居たのであつた。

「あれ、晋さん、御免なさいまし、ついうツかりして居て。」

と急がはしく會釋した。此婦人の近しい親戚で、丸山晋一郎といふ男。

たつ〳〵と前へ出やうとする、馬を乘靜めて向直ると、

「暫くだつたね、達者かね。」
「はい、有難う。貴郎、那邊へ入らつしやるの。」
「一寸音羽まで。」
「お上んなさいましな。」
「いや今日は然うしちや居られない。歸りに白山まで行かんけりやならんから。千枝さん、此頃は些少も來ないね。夏が甚く恨んで居るぜ。」
「あれ然う。濟みませんね。何うぞ宜しく仰有つて下さいな。」
「近い中に是非お出な、夏も待つて居るからね。皆で又昔話でもしやうぢやないか。」
「はい私もね、餘り御無沙汰をして居るから、此頃に是非參上る心算で居ましたの。」
「それは尚更だ。屹度お出、それでは今日は急ぐから、これで、」
と別れを告げて行かけた。
「然うですか。では何れ近日。」

「夏にも然う言つて置くよ。」

「はい、何うぞ。」

手綱を掻繰ると、晋一郎は乘出して、其儘馬を走らせて去つた。今更のやうに、千枝子は其體格のいゝ後姿に目を留めたが、影が見えなくなると、前よりは一層物思はしげに、折しも通掛つた職人風の男に顏を見られて、急に避けるやうに跡へ引返した。すると今度は、母屋の方で

「嫂さん。」

と何處やら確りとした、澄切つた聲。

「はい。」

返事と共に、千枝子は急足、見ると緣に立つて、義妹の登志子といふ、脊の高い、頰の剝けた、眼のきりゝとした、口元の目に立つて引締つた、打見にも勝氣のやうな婦人、髮は束髮に結つて、柄も男物のやうなぢみな扮裝に、年よりは更けて見えるのが、端居に近く千枝子を待受けて居るのであつた。

（二）

「お客樣は？」

と近づくまゝに千枝子は問掛けた。

「今歸りましたの。」

と言つて登志子は事ありげの面色。

「實はね、打捨つて置けない事を聞きましたから。」

千枝子は目を瞬つた。

「何ですの。」

「まア上つて入らつしやい。」

と登志子は中に入つて、茶の間に長火鉢の脇、何か不興らしく、眉を寄せてちッと考へて居る。何事かと千枝子は跡を追つて衝と入つて來て、火鉢を挾んで座に直ると、落付かぬ眼に、

「何をお聞きなすつたの。打捨つて置けないッて、ま、甚麼」

口早に、慌たゞしい。それには答へず、登志子は腹立たしげに、
「兄は實に怪しからん男です。」
「まア、何を仰有るの。」
呆れて打目戍ると、
「貴女、兄の不仕鱈を御存じですか。」
「不仕鱈！」
「然うです。まアお聞きなさい。」
と膝を進めた。さては、と千枝子は思當る事もあるのか、前よりは騒ぐ色もなく、登志子の言葉を待つて居ると、
「一體なら貴女に隱して置くのでしやうけれど私然ういふ事は嫌ひですし、罪は罪で何處までも正さなければならないと思ひますから、貴女にも又確りと考へて戴かうと思ふのです。」
と重々しく重ねて又、
「先達中から、役所の方が忙がしいとか、やれ調べ物だ、やれ出張だ、と云つて度

度家を明けましたね。それが皆、那樣眞面目の事ぢやないのだから呆れるではありませんか。

未だ斷る中が殊勝なんだと今來た客は申しましたが、大手を振つて那樣事を爲るやうになつては、最うお談話になりはしませんわ。

那樣兄では決してなかつたのですけれどね、此頃は貴女、藝者買すもれば、花牌も弄いて歩くさうですし、それは最う聞いて居られないのです。貴女や私は、そりやア欺すに造作はありやアしませんが、何にしても兄の、以前が以前でしたから、少し位訝しな事があつても、まさかにと私も思つて居ましたのに此不始末は何うでしやう。私恁ういふ一圖の女ですから、兄だと言つて決して容赦はしません。

まアそればかりか、兄は脇に圍ひ者を置いて、追付け此夏、子供が出來るのだといふではありませんか。

恁う打明けて申したのも、何も私の手を拔かうといふのではありません。貴女は言はゞ侮辱されたのだすから、私お氣の毒でならないのです。何處まで

もお味方しますから、貴女の爲さるだけの事を充分に爲さいまし。それにしても貴女、まア何うなさいます。」

と我事のやうに登志子は躍起となつて言つた。談話の途中から千枝子は俯向いて了つたが、軈て悲しげな色に、強ひて笑顏を見せて、

「何かと思つたら、其事ですか。此間中、貴女は伯母さんの方へ行つて居らしつたから、何も御存じなかつたのですが……………。」

「えッ、それぢや貴女、最う知つて居らつたしやるの。」

「はい、其事なら、疾うから薄々は。」

「あれ、そして貴女、默つて見て居らしつたのですか。」

千枝子は口籠つて、

「けれども私が、それを何うする事が出來ましやう。」

「そ、それだから可けません。兄に過失があつたら、何處までも改めさせるのが貴女の勤めでしやう。兎もあれ貴女といふものを差置いて、這麽氣隨な事をして居るのを、貴女が何も仰有らないといふ事はありません。全體兄は何

ういふ了簡なのでしやう。家庭を何うの恁うのといふ事は、貴女の嫁らつしやらない前から、それは最う口癖のやうに私に言つて居た位でしたのに、肝心それを實行しやうといふ時になつて此始末なのです。それは私にしてからが、恁ういふ兄を持つて居ると云つては、人に顔を向ける事も出來はしません。」

「然しさう嚴しく仰有つても…………」

登志子は聞きも敢へず、

「何が嚴しいでしやう。兄の耻なり、貴女の耻なり、延いては私の耻ではありませんか。」

「なにそれは、良人が一人惡いのではありません。詰りは私が行屆かないからです。」

言つたが流石に、心には餘るか、其儘押默つて、屹と唇を引緊めた。登志子は肯かぬ顔、押返して、

「いゝえ、貴女が自分をお責めなさる事は少しもありません。今にも歸つて來たら、私思ふ存分言つて遣ります。」

「けれども恁ういふ事は、正面から荒立てゝは、却つて可くなからうかと私は思ひます。それは私だつても、隨分言ふ事は知つて居ますが…………。」

と言つて跡を躊躇つた。

「ですが私は、何うでも此儘にしては置きません。」

と一本氣に登志子は跡へ退かぬ。

「然し機を見て仰有らないと…………。」

と氣をかねるのを、

「なに構ひますものか。」

一言に消して屹とした。

「嫂さん、今夜見て居らつしやい。」

（三）

暖爐には火が盛んに燃立つて居る。マーブル臺の上の銀の鷲は、並べて据ゑた遠州松の盆栽の下に、羽を伸して、今にも飛ぶばかりに見える。中の卓子を離れて火の傍に椅子を寄せて親しげに語つて居るのは、千枝子と晉一郎の二人。

「折角來てくれたのに、生憎夏が留守で大いに拙いね。然し其内に歸つて來やうから、まアゆツくりしてお出な。今日は些少は遲くなつても可いのだらう。」

と晉一郎は殊に氣を置かぬ言葉付、遠慮もなく葉卷の烟を立てゝ、談話の中にも絶えず微笑を含んで居た。千枝子は今日は素鼠の御召、風通に下着を揃ひにして、帶は寂茶地の繻珍、黑の無双の羽織に、髮は夜會に結つて居た。打解けた調子で、

「でも餘り遲くなつては。尤も登志子さんによく然う言つては來たのです

けれど、」
「可いさ。偶だもの。なに此方といふ事が知れて居れば、用が出來たら迎ひに遣すだらう。可いさ。まア落付くさ。」
「然しそれでなくつたつてお邪魔なんだから、」
「なに今日は用無しだ。其中に夏も歸つて來るだらう。」
いふ時洋扉を開けて、仲働の若といふのが、チヨコレートに時節の菓物を添へて盆に載せて中へ入つて來た。
「おゝ其處の小さな卓を此處へ。」
命じて上へ持つて來た品を揃へて薦めながら、
「千枝さん、洋食は何うだね。今日脇から貰つた鳩がある。」
「あれ、最う構つて下すつちやア可けませんよ。」
「何だな。此處へ來て遠慮をする奴があるものか。」
「おほゝゝ、でも餘りお客扱ひをなさると、何だか勝手が惡くつて可けませんわ。」

「何の客扱ひなぞをするものか。此通りぢやないか。いつも千枝さんが來ると夏が嫁入してから家へ來た時には、丁ど這麽心持だらうと思つて居るのさ。」

と匙を執つて、チョコレートを掻廻しながら、蒔繪の食籠を持つて再び入つて來た仲働に、支度を吩咐けて退がらせると、

「千枝さん、芝居へ行つたかい。」

「いゝえ、此頃は何處へも行きはしません。」

「然う言へば、此方へばかりかと思つて居たら千枝さん、此頃は里の方へも些少も行かないさうだね。」

「はい、至で出ませんわ。」

「何か手が離されなかつたのかい。」

「いゝえ。」

「少し血色が好くないやうだが、何處か惡かつたのかね。」

「いゝえ、」

「では何うしたのだ。」

とちッと見たか、

「千枝さん、何か氣にかゝつて居る事があるのだね。解つた、何だね、聞けば長岡（千枝子の良人）は此頃大分遊ぶさうだが、那樣這麼で氣が進まないのだね。なに構ふ事はない、私だから言ふが可い。」

千枝子は、直に言葉も出なかつたが、

「まア、貴郎までが良人の事を御存じなのですか。實は其事で、貴郎にも御相談をしやうと思つてお寄申したのです。」

晉一郎は多く聞かず首肯いて、

「然うか。其事ならなに然う心配するには及ばない。千枝さんは少し我慢して、却つて機嫌を好くして巧く梶を取つて居る方が可い。」

「ですが私は…………。」

「まア可い。その方は當分まアそつとして置くが可い。折を見て私から熟くり長岡に話すから、私に任せて落付いて居るが可い。今は逆上せて居るか

ら何を言つたつて耳に入りやしない。ひよいとぐれたのさ。一時の事だ。いつまで續くものか。なに那麼風だけれど、勤める處は勤めて居るし、何うして其方は中々上手に立廻つて居る。案じる事はない。氣を大きくして居るさ。」

輕い調子で言つて只見て、又、

「然し恁う言つたからと言つて、全つきり千枝さんの心持を考へないで居るやうに思はれては困る。私は千枝さんに、餘計な苦勞をさせたくないと思ふから言ふのだがね、千枝さんは又外に何か好い考があるのかね。」

千枝子は默つて居た。

「千枝さん、私に任かして置かれないかい。」

「いゝえ、那樣事は決してありません。私は母よりも貴郎の方を憑りにして居るのですから。」

と言つたが、又伏目になつた。晉一郎は冠せて直ぐ、

「然う思つてくれゝば尚更だ。今日は最う此談話はしない事にしやう。千

枝さん、遲くなつても構はない、晩まで遊んでお出。何か思入れ氣の晴れるやうな事をしやうぢやないか。夏は何をして居るだらう。最ういゝ加減に歸つて來れば可いに。」

と葉卷を出して口を切つて、吸付けながら、

「千枝さん、夏が歸つて來たら今日の髷を見て遣つておくれ。當人自慢だけど其とぼけて居る工合と言つたら有りやしない。顏と髷とは全で別々でね、何の事はない猿芝居さ。」

「まア、那樣惡い事を。」

「なに惡い處か、妹だけに餘程最負分に見立てゝ遣つたのだ。鏡のない國に生れはしまいし、何うでも那麼髷に結ひたければ、雁首をすげ替へてから掛かるが可いのさ。來たら見て御覽、兎に角噴飯すから。」

「那樣酷い事を仰有ると、其通り夏子さんに言付けますよ。」

「構はんさ。有の儘の事を言ふのだから。醉興な何も骨を折つて腹の皮を捻らせるやうに結ふには及ばないぢやないか。自體が猫脊だから、あれで尻

尾が蛇ならば、鳴く聲鵺に似たりけりと言ふのだ。はゝゝゝ。」
「まア、覺えて居らつしやい。私本當に言付けて上げるから。」
噂をすれば、其時洋扉が半ば開いて、ずいと入つて來た十九ばかりの物越。
晋一郎は直ちに振返つて、元氣よく、
「やッ、漸く遣つて來たな。」

片影

（一）

緩く、ひた／＼と、岸の若草の根を洗つて、さながら流れるとも見えぬ大沼の水は、西を隈取る松原の裾を縫つて其處に渡船場が一つ、水を隔てゝ東は大戸部村、南は花輪村へと稍廣い村道が分れて、松の木蔭に藁葺の渡小屋汀へ寄せて繋つたまゝの舟が一艘、折しも乘手の影は暫く途絶えて、渡守は小屋の中に、いつもの繩綯もせず、ごろりと横に轉けて、切明窓から射込んで來る日を一杯に受けて、何時の間にかぐッすりと寢込んで居た。

其時、横手の松原の中の小徑から、鐵色三揃ひの背廣、茶の中折の帽子、小脇に寫眞器械、右手に袋入の三脚臺を提げて、不意に出て來た二十四五の男があつた。松を離れると直に渡場へ掛つて、汀に渡守の影を求めたが、舟から目を移して渡小屋の方へ振向けると、笑つてつか／＼と寄つて、

「忠八、おい、忠八、起きてくれ。」

うゝ、うゝ、とばかり、渡守の忠八、寢耳に聞流して容易に起きさうにもしなかつたが、重ねて呼立てられて其赤禿の額越、白髪の交つた八の字形の眉を擧げて小粒のぽちりとした眼を不意と見開くと、日向の眩しさに無上に瞬きして漸くに顏を上げた。

「おゝ、高宮の小旦那、」

「何うした。甚く又寢込んで了つたな。」

「はゝゝ、なァに昨夜些少べい夜更しい爲ましたで。」

「なに夜更し爲た。怪しいぞ、忠八。」

「はッて、何言はつしやるだ。忠八此年い爲て何しますべい。はゝゝ、小旦那にも似合はッしやらねえ。」

と其儘無遠慮の大欠伸、腰を伸しながら、軈ての事にのそりと出て來た。

「小旦那、あれから何處へ行かしつた。私ァ最う脇の路から、とッくに家へ歸らしつたとばかり思つて居ましたゞ。あれから今迄掛からしつちやァ、其寫

眞のう定めし夥え事撮らしつた事だらうね。」

「むゝ、今日は可成り撮つた。」

相手が相手だけ多くも言はず、小旦那と言はれた男は、先に立つて汀へと寄つた。あとから、忠八爺、見る目も悠長な足取で、

「お前樣はまア、妙な道樂をおッ始めたもんだね。那樣に彼方此方、寫眞のう撮つて歩いて何しなさるだ。私い此間お家の作藏どんに私がの艪を押してる處が寫つてるのを見せられて魂消ましたよ。小旦那、寫眞ッて言ふもんはまア體の好い魔法だね。」

「はゝゝゝ。」

と笑ひながら、小旦那は身輕に舟へ乗移る。續いて忠八も乗込んで、繋ひを解くかと見れば、どッかり艫へ坐込んで、其儘動かうともせず、腰を探つて悠々と氣の長い煙草と出掛けた。

「聞けば新井の殿樣さへ爲つしやるさうだから、何も悪いとは言ひましねえが、私がの處の婆樣なんぞは、寫眞を撮られると壽命さア縮まるとつて、甚く恐

がつて居ますわ。此間もね、何でも東京から來たらしい髭の生えた旦那衆だつたが、矢張お前樣のやうなものを引擔いでね、それがお前樣丁ど婆樣の野良へ出て居た時だつたと思ひなさろ。何が平素から恐がつて居る婆樣の正面へ、其旦那衆がそれ、此間お前樣も出さしつた彼の巨蛇の眼の玉のやうなものを向けたから堪んねえ、婆樣命から〴〵で逃出して、まッくら三寶家へ駈込むと、土間へ打倒つて了つたゞア。」

「可哀相に、嘸驚いたらうな。今度逢つたら能く言つて聞かせて遣らう。」

「それがよ、なか〳〵解りましねえだ。新田の多助でさへ、彼の箱の中には何でも狐が入つてるだと言つて居ますわ。役場の松本さアが、中の組立を種々と話してくれたで、私がだけはまア何うか係うか解つたが、多助や婆樣には未だ腑に落ちねえでがす。」

「然うか。今度折があつたら能く中を見せて遣らう。時に忠八、最ういゝ加減に舟を出してくれ。」

「はアい、今出しますだよ。」

と煙管を納めて漸くに立つて岸から舟を離して、棹を取直してぐいと一つ。途端に、

「あッ、船頭さん、一寸待つて、」

と透徹るやうな聲、松の彼方に、若い美しい姿が見えた。

言ふ間に其處へ急ぎ足、はら〳〵變り裏の裾を捌いて、褄を蹴立つて走寄つたのは、翳して居た深張の傘の中に、瓜實顔の品に勝つた縹緻は更に引立つて、此處等に珍らしい花月卷の、豐かに艶々しい髮は漆のやうなに、色のくッきりと白い、鼻の高い、黑味勝の張のある眼に思倣し眉の迫つた、何處となく力味のある顔立であつた。

汀に足を止めてほつと息、風に縺れた後れ毛を、其しなやかな手に取繕つて立つと、それと心得顔に舟を差寄せた忠八は、見るから莞爾々々もので、

「孃樣、豪ア早く歸らしつたね。」

「あゝ、」

とばかり、それより先に舟の中の若人と顔を見合せて、はッと色に出たが、目早

く忠八を見て、左あらぬ體に、
「おや、滿夫さん、」
「おゝ、浪江さん、」
と彼方も向直つて、我にもあらず微笑む色、舟に上るを迎入れるやうに、並んで胴の間に膝と膝、
「何處へ、」
と先に問出す男、浪江は日差を傘に避けて、顏を振向けると、
「なに一寸母の用で新井まで。貴方は？」
と問返す途端、一突き忠八の突張る水馴棹に、舟は不意に搖れて衝と乘出したので、
「あれ、」
と思はず滿夫の膝に取縋つて。はッと氣が付くと、急に傘で忠八の目を遮つて滿夫を見上げて竊と笑む。とも知らず忠八は、棹さしながらの胴間聲に、
「小旦那も梅田樣の孃樣も、東京から歸らつしやると、全で樣子が變つて了つ

たね。今ぢやア何う見ても、花輪の村の者とは思はれねえだ。小旦那は久しい事行つてござらしつたから、こりやア其筈だが、孃樣の方はそれほどでもねえに、以前の影は氣もねえだ。だがなアよ、何と言つても東京の水だ。孃樣の歸らつしやる前までは、坂の大盡の總領のが、花輪で一番だといふ評判だつたが歸ると直に、札は孃樣の方に落ちて了つたゞ。」

滿夫は物をも言はず、浪江を見返つて片頰に笑むばかり、浪江は流石面羞げに、

「お止しよ。お爺さん、那樣いゝ加減な事ばつかり、」

「はツて、嘘でねえ。正の談話でがすよ。」

「あれ、最うお止しと言つたら、私厭だわ、那樣談話。」

水が深くなつたので、棹を艪にかへた忠八は、すいと漕開く艪脚に練絹のやうな蜿りを見せて、顏は此方に、微笑みながら、

「聞かつしやい。未だ其續きがあるだ。」

「あれ、お止しといふのに、私ア最う知らないよ。」

「はアそれぢや止すかね、好え談話だが、お前樣は何故又然う聞きたがらねえ

だ。」

「お前は又何故然う話したがるの。」

「はゝゝゝ、それも然うかい。」

笑つて其儘に艪を押して行く。舟は音もせず長閑な光に流れた水の上を靜かに進んで、曼に出離れた松原も、いつか霞ませた日の匂は、西に東に遠く打開いた沼の面の岸を廻つて岡や畑や、森を拔いて立つ塔の姿や、空や雲や鳥の行方の、すべての影を底に沈めた鏡の上に得ならず滿溢れて、舟の二人の見馴れた眼にも、流石に見過ごしがての日和であつた。舟は進む。岸を誘つて芦の若芽の一寸二寸、子供の細工の附木舟が横になつて流れて、ひら〳〵と蝶が來る。空には高く揚雲雀。

（二）

渡津を越すと、同じ花輪村へと道連の二人は、まだ忠八の前をかねて態とよそよそしく、行手に開けた田圃路の、一目に見通される村の布置、燃立つ陽炎の稍中を立離れて行つたかと見ると、不意に横へ切れて、林の中の小路へと入つた。

「滿夫さん。」

と呼掛けてひたと寄る。人目を離れると、浪江の態度は直に變つて、返事も待遠しいやうに、

「あれ、何故默つて居らつしやるの。」

と何かなし時めく心、滿夫は其血色のいゝ、さも活々とした顔に、笑みを含んで見返つたまゝで、態と、

「何故と言つて別に言ふ事がないから。」

「まア、それだもの、可ござんすよ。本當に、人の氣も知らない。」

「何がさ。」

と落付いたもの、浪江は稍せいたやうで、
「貴方は私なんぞを、人の數にも入れてはお出なさらないのですね。」
「何うしたんだね突如に、思ひも付かない事を。」
とばかり取支へず只笑つて居る。
「解つて居りますよ。たんと然うなさい。」
「え、」
「知りませんよ。最う。」
「はゝゝ、浪江さん一人で芝居をして居る。」
「あれ、最ういゝ加減に虐めてお置きなさいよ。」
「誰が虐めるものか。貴孃が勝手に氣を廻して、何の彼のとぢくねて居るのぢやないか。」
「だつて貴方が餘りだもの。」
「何が、」
「でも、恁うして思ひも寄らず遇つたのに、貴方は傍に誰が居るかとも思つて

はお出なさらないぢやありませんか。餘り情がなさ過ぎますわ。」

「はゝゝ、貴孃は閑暇だから那樣事ばかり考へて居る。」

と更に取合つてくれね、浪江は怨めしげに顔を見上げたが、瞳を返してぢッと前を見詰めて、

「貴方は何處まで人を馬鹿にして居らつしやるのだらう。」

「浪江さん、怒つたのかい。」

と滿夫は同じ笑顔、流石に優しく、

「なに別に惡氣もなかつたんだが、貴孃が妙に持つて廻つたからさ。お互ひに疑ふ事もない身で居て、何も捻くるには及ばないぢやないか。」

言はれて見れば、固より深く根に持つて居るのではないので、色は解けたが、言葉は未だ前の名殘に、

「だつて貴方の出方が出方なんですもの。」

「むゝ、そりやア私の方も些少は惡かつたが、それぢや蒔直して、お望通りお世辭でも遣はうかね。」

「あれ、誰がお世辭を遣つてくれと言ひましたよ。」

「それぢや氣休めか。」

「何惡いわ。」

「はゝゝゝ、なに何も言はなくつても、恁うして居ればそれで可いぢやないか」

春の歩みに春の人、未だ葉にならぬ若芽の梢は煙るばかりで、樹々を透して、ほんのり霞みかけた空の色の夢のやうなに、何處ともなしに、日長に倦きたやうな鶯の聲さへ聞えるのである。小笹交り菫の花に縁を取つた徑に二人立並んで行くこと、日の射す方は、前にも背後にも糸遊が燃えて、吹くともなしの風さへ戀に靡くばかりの一連り。

十九、二十五、花輪の村に都がへりの二人の影、影は縺れて、行く〳〵春を縫つて行つたが、浪江は又も、

「貴方、これから直にお家へお歸んなさるの。」

「然うさ。」

と何心なく、滿夫は浪江の方へ振返つたが、輕く、

「何故、」
浪江は微笑みながら、紛らすやうに、
「なに、何でもないんですよ。」
「何處かへ行くとでも思つたのかい。」
「まア然うなの。」
「何處へ、」
「なにね、屹度又、坂の松野さん處へ寄つてお出なさるだらうと思つたんですよ。」
「屹度又とは妙な事を言ふね。私然う度々松野の家へ行きはしない。」
と稍不審顏。浪江は猶も打笑むばかり、調子も態とらしく、
「あら、お隱しなさるの。家の奥田がすッかり私に話しましたよ。だから先刻、忠八がお妙さんと私の噂をした時、甚麼に貴方にお氣の毒でしたらう。」
「ほゝゝゝ、何かと思つたら、浪江さん又始めたね。奥田が何を言つたか知らないが、那麼男の言ふ事を信じるやうな貴孃でもあるまいに、那樣愚にも付か

ない事を、貴孃も又冗談にも言ふといふ事があるものか。」

「でも此事だけは、本當にして可い譯があるんですもの。」

「何だね此事とは。」

「貴方、全ッきり覺えがないの。」

「有るものか。」

「噓を。」

「全くだよ。下らんぢやないか。那樣馬鹿な事を、貴孃には未だ私が解らんと見えるね。眞面目に言へば那樣事を言はれると、私貴孃を輕蔑する。」

と態と言つた。浪江はそれにも拘はらず、一人笑ましげに、

「それは爲すつても可いわ。でも本當の事は矢張本當でしやう。」

「何が、」

「御存じなければ敎へて上げましやう。お妙さんはね、貴方に大變なんですわ。」

「馬鹿な、那樣間違つた談話があるものか。」

「でも若し本當だつたら……。」

「浪江さん、」

「え、」

「お聞き。假りに貴孃の言つた事を本當とする。可いかい。」

「嘸お嬉しいでしやう。」

「まアさ、終局まで聞かなくつちや可けない。」

「いゝえ、聞くには及びません。私は其跡を默つて聞いて居るほど、人が好くはありませんわ。」

滿夫は氣をかへると、其儘笑つて、

「それぢや貴孃の勝手にさせやう。可し、然うだつたら、貴孃は多分祝つてくれるだらうね。」

「祝ひますとも。」

「それは有難い。貴孃の事だから、いづれ變つた趣向があるだらう。」

浪江は愛らしげに眼を輝やかして、我にもあらず調子に乘つたやうに、口も引

かせず直ぐに言葉を引取つて、

「有りますとも、それこそ類のない御祝物ですわ。然し貴方、其場になつて御辭退はなさいますまいね。」

「はゝア、餘程變つたものと見えるね。」

「變つて居る段ですか。忘れずに覺えて居らつしやい。私のお祝は、」

「むゝ、何だね。」

「短銃。」

「あはゝゝゝ。」

「おほゝゝゝ。」

顏を見合せると、心は解合つて、胸に蟠まりもなく、鶯近く野の花の、足元に寄る下路を、靜かに影を並べて行つた。

行くと鎭守の五本杉、路は其角から三つ股になつて、家路を左右に分けて居る。其處に二人は、いつものやうに後を契つて、互みの笑顔に袂を別つたが、聞く耳もなく、見る眼も勿論なかつたので、誰も知る者はなかつた。

（二）

煖爐には火が盛んに燃えて居る。緩くかゝげた窓帳の下から、庭を木枯の荒れて行く跡が、さながら寒さうに窓硝子の彼方に見える。長椅子に近く膝を並べて、二人は稍暫し夢心地で居た。室は春のやうに、心盡しの香料の染入るばかり立迷ふ中。

一人は若い學生姿、眉鮮やかに、眼の涼しげな、見るから容儀に勝つた男、一人は外ならぬ浪江であつた。

去年花輪の父の許を去つて、再び上京して、兄の醫學博士の此住居へ來ると、又もさる技藝の學校通ひ、海老茶の袴に、リボンの色、年は更に若やいで、いつを知らぬ噂の花に咲誇るのであつた。

うツとりとしたのが、ぱちりとした眼を上げると、

「富田さん、明日の運動會には、あの連れて行つて下さるのでしやうね。」

「勿論、」

と持つて生れた美い聲で言つて、富田は流れるやうに答へたが、添へて直ぐに、

「明日は貴孃のお兄様もお出でになるさうですから、貴孃をお連申すのは、全く私の名譽です。」

「あら巧い事を。貴方の仰有るのは當になりませんわ。」

「何うしてね。」

「でも貴方は、いつも間に合せな事ばかり仰有るんですもの。」

「いや、それは酷い。私は貴孃に對して、これまで間に合せなんぞ言つた事は決して無い。」

浪江は微笑みながら、其眼を視詰めるやうにして、

「屹度？」

「無論です。」

浪江は上を仰いで、眼を空ざまに、態と仇氣なく、

「でも那麽事もあつたし、それから彼事も然うだし、それに彼事だつても然うだわ。本當に、何だか知れたもんぢや有りやしない。」

「むゝ、益々不思議な事を仰有るね。あれとは何です。那樣漠然した仰有り樣ぢや私には一向解らない。何ういふ事だか明瞭と言つて下さい。」

「そら、最う那樣顏をなさるぢやありませんか。」

「いや、そりや貴孃が餘りな事を仰有るから。」

「噓、噓、矢張胸にお覺えがあるからですわ。」

「浪江さん、」

「え、」

「貴孃は私を何ういふ人間だと思つて居らつしやる。」

浪江は更に打笑みながら、

「然う、然うですねえ…………。」

と直には言はず顏を打目戍つて居たが、不意に口を銜いて、

「浮氣者。」

「えッ、な、何と仰有る。」

「おほゝゝゝ、那樣眞面目な顏をなすつても可けませんよ。私何も彼も知つ

て居ますわ。いくらお隱しなすつたつて駄目ですわ。」

「怪しからん。實に怪しからん。」

「おほゝゝ、未だ那麽事を言つて居らつしやる。」

富田は尙眞面目に、

「浪江さん、冗談は止して、本當の事を言つて下さい。」

「あら私、冗談なんか言つて居はしませんわ。貴方こそ、本當の事を言はれて極りが惡いもんだから、那樣、那樣………。人を餘りですわ。」

富田は氣をかへて態と打笑つた。

「いや何うも貴孃の口には兎ても敵はない。浪江さん、困るぢやありませんか然う人を虐めては。」

「まア、貴方は私の申したことをほんの口先ばかりだと思つて居らつしやるの。」

「はゝゝ、又蒔直しですか。なに、何と言はれても、此方には覺えがないのですから、何とも思ひはしませんが、併し冗談にも如彼いふ事は言はれたくないか

ら……　……。」

「又言はなければ甚麼事をなさるか知れはしませんわ。覺えがないなんて。私は存じて居ますよ。」

「むゝ、何ですそれは。まア其事から言つて御覽なさい。」

「まア、何ですねえ人に言はせやうと思つて。那樣何時までもしらばッくれて居らつしやらないで、眞直に白狀なさいまし。そしたら事に依つたら許して上げましやう。」

「貴孃は何を指して言つてるのだか、私には更に解らない。」

「おほゝゝゝ、餘り數が多くつて、何れを言つて居るのだか解らないのでしやう。」

「仕樣がない。那樣事ばかり言つて居ちや切りがありやしません。何の、此方に疚しい事が無ければ、何を言はれても驚きはしません。那樣拵へ事よりか、實際又疑つて可ければ、私こそ疑はなければならないのです。併し私は、貴孃に對して假にも疑ふなどゝいふ事を罪と思つて居ますから…………。」

浪江は聞くと共に、颯と色を變へて、矢庭に險しい眼色で衝と寄つた。

「まア默つて聞いて居れば、仰有るのに事を缺いて何を仰有るのです。疑つて可い」とは甚麼事を、私いつ貴方に疑はれるやうな事を致しました。いくら貴方の事を言はれたからと言つて、那樣、那樣言掛りを…………。」

「それ御覽なさい。貴孃だつていゝ心持はしないでしやう。先刻のやうな事を言はれた私の身にもなつて御覽なさるが可い。」

「いゝえ、それはそれです。貴方に那樣お心持が少しでも有ると思へば、私は氣の休まりやうがありません。さア、何を疑つて居らつしやるのか、言つて戴きましやう。」

「いや私は何も疑ひはしません。貴孃の取りやうが惡いのです。併しそれだけお聞入れなさるまいから言ひますがね、一體貴孃が、今の私には過ぎて居るのが第一だ。」

「まア、那樣…………。」

「お聞きなさい。貴孃の才と、縹緻と、地位を持つて居て私なぞのやうなもの

に、滿足して居られる筈がないではありませんか。」

「厭な、何ですねえ急に…………。」

「まア、お聞きなさい。殊更貴孃の周りには、新學士の大澤君、松永中尉、日比野男爵、武井君、西岡君など、いづれも私よりは立優つた人が、殆んど競走の姿で居るではありませんか。」

「可うございます。仰有いよ夥多。」

「最少しお聞きなさい。殊に彼の松永中尉には、前から貴孃をといふ、お兄樣の御內意があるやうに聞いて居る。」

「噓ばッかり、」

「そればかりではありません。貴孃と大澤君の親しさといふものは、最初は私も絕望した位、」

「御勝手になさい最う。」

「あとは略した處でまア然うでしやう。疑つて可いならと言つたのはそれですわ。貴孃のなさり方も亦隨分ですもの。此間の音樂會の時なんぞは私

でなければ甚麼氣を起すでしやう。」
浪江は聞くと共に氣色ばんで向直りさま、聲さへ急上げて、
「ま、貴方は何といふ方でしやう。あとで那麼に能く譯を話して、何も解つて居る彼の時の事を、」
と俯向いて又、俄かに沈んだ調子で、
「何うしましやう貴方が那樣氣でお出なすつちやア、私が甚麼に思つたつて仕樣がありません。あゝぢれッたい。何うして了はう。」
「浪江さん、」
「…………。」
「貴孃と私との間で、何故這麼事を言はないぢやならないのでしやう。」
「…………。」
「浪江さん。」
「知りませんよ。」
言ふなり衝と立つて、離れた暖爐の前の椅子へ、拗ねて背後を見せて態と掛け

た。富田は暫く只其態を眺めて居たが、同じく立つて傍近く、

「浪江さん、何故然う解らないんです。困つて了ふ。最ういゝ加減に心持を直して下さい。貴孃の御安心なさる事なら、甚麼事でも仰有る通りにして見ましやう。」

浪江は直ぐに答へなかつたが、流石に菅なくもせず、

「然う、屹度然うですね。」

「言ふまでもありません。」

「それぢや仕方がありませんから、今度だけは負けて上げましやう。そりやア私だつて何も好んで那麼事は言ひたくは有りませんけれど、貴方の此頃の御樣子が何だか氣になつてならないんですもの。」

と言つて不意に碎けた調子で、

「おほゝゝ、でも貴方は直と眞面目におなりなさるから、それだけ未だ賴もしいわ。」

「むゝ貴孃はそれぢや、矢張本氣ぢやなかつたのですね。」

「あら、然うぢやありませんわ。いゝえ家の兄なんぞはね、私の言ふ事なんぞ、何でも頭から冷かして了つて、全で相手にはしないのですもの。貴方が若し那樣だつたら、私は始終泣いてばかり居なければなりませんわ。だから私、先刻眞面目におなりなすつた時は、心ぢや本當は嬉かつたのですわ。」

「それぢや何も、那麼に私を困らせるには當らないぢやありませんか。」

「でも貴方が餘り種んな事を仰有るんですもの。」

「はゝゝ、冗談ぢやない何を私が言ふものか。」

「あら那麼事を………。」

と見上げた眼色、流石に返す鞭もなく、富田は打笑みながら

「いや私は何だか好いやうにされて居るのだ。」

時も知らず、見果てぬ夢を返しては行く。外は木枯のたゞ吹荒むのみであつたが、戸ざしの固く、いと濃やかな談話は、餘所に洩れなかつた。浪江が廿歳の冬の事。

（四）

「や、用談が濟んだら、僕はこれで失敬する。」

時は五月、見る眼を洗ふ新緑の、軒端に迫つた丸窓近く、其時鼎座して主客三人、いづれも親しい友の、今何事か協議の果てた跡。

終ると共に座を立ちかけた、客の一人、大浦乙彌といふ、三十前後の眉の濃い、額の廣い、切長の眼に強度の近眼鏡を掛けた男を、ぢろりと見た主人の謙三、同じ建築技師の中に普く樫村の名を知られた男、振向きさまに、でツぷりとした重さうな身を捩向けて、

「何だ、最う歸るのか。いくら美しいのが出來たからと言つて、何も然う歸りを急ぐにも及ぶまい。尤もお察し申しはするがね。」

「いや那樣譯ぢやない。實は少し約束があるのだ。」

「約束！　他人ならずさ。何の我々の間で、急拵への蔭武者などを出すには當らない事だ。隱さず有體に打撒けるさ。」

と今一人の竹岡といふ大浦と專攻を異にしては居るが、一昨年同時に出た工學士仲間、半ば面白づくに、

「僕も併し樫村同樣、飽くまでお察し申すよ。無理はない、貰ひ立ての、殊に又君の事だ。然も戀女房だといふではないか。」

言はれて答へるより先に、未だ其やうな事に若過ぎる大浦は、包みもあへず、さと赧らめた顏を、見て更に興ありげに、樫村は微笑みながら、

「そりや隱れもない事實だ。近頃大浦の、何處へ行つてもそは〳〵して、少しも落付かない樣子を見たまへ。今日も現にこれだ。あれから以來、全で目の色さへ變つて居る。や、僕は、つく〴〵思つたね。天下に良人を持つた女で、恐らく大浦を良人とした女ほど幸福な者はなからうと思ふよ。」

「ふむ、君を良人とした女ほど又不幸なものはあるまい。」

と脇から竹岡、續けて直に、

「君ほど又細君を安くする人は恐らくないからな。」

「いや、夫子も其點では負けて居る方ぢやあるまい。」

「なに僕のなんぞは這麼處へ持出す資格さへ有りはせん。第一女といふ資格が有るか無いかを疑つて居るのだからね。君のなぞは其處へ行つては雲泥の差があるのだ。君にさへ勿體ないと思つて居るほどのものだ。それを何うだ君の平素の始末といふのは。」

「はゝゝ、飛んだ處へ鉾先が向いて來た。大浦、なにせいまア可いではないか。幸ひの土曜日だ。何處かで一會遣らうぢやないか。それとも其お大事の者には何物も替へられんかね。」

大浦は立ちも上がらず、何か口籠りながら、

「そ……然う弄つてくれては困る。僕は何も其………、」

樫村は打笑むばかり。

「解つて居る。君の心事は能く解つて居る。何も辯解するには當らんよ。そりや珍らしいには違ひないさ。直にも顏は見たからうさ。矢も楯も堪るまいさ。至當だ。君の事だから殊更至當だ。飽まで孝行をなさいだがね。いづれにしても過ぎるのは餘りに妙でないよ。何分目に餘つて來ると君の

貫目に關はるからね。」

と竹岡と顔を見合はして、葉卷の烟を吐立てながら、

「まアさ、兎に角今日は僕等に交際ひたまへ。なア君、お互ひに十年の友人ぢやないか。然う急に袖にしてくれる事はなからうと思ふ。」

大浦は無據く苦笑して、

「むゝ、仕方がない。何とでも言へ。今日は兎に角失敬する。何うせ人の惡い君達の事だから、當分まア碌な事は言はれないのだ。や、それでは、」

と立上つた。

「むゝ、何うでも歸るのか。竹岡、情けないものだ。最う僕等の言は全で容れられない。」

「細君萬歲だ。」

「家內安全かい。」

「近所は堪るまいね。」

「友人も堪らないよ。」

「併し強ひて止めるのも罪は罪だ。」

「むゝ、今日はまア溫厚しくこれで放還して遣らう。」

「大浦宜しくよ。」

「序に僕からもな。」

大浦は聞流して、

「むゝ近い中に又冷かされに來やう。」

と軈て主人に送られて、玄關先に暇を告げて車に乘移ると、初めて荷を下した心地、門を出ると共に、二人の言葉などは直に忘れて了て、我家、我家、胸には最う、我家の影より外にはなかつた。時計を見ると三時半、四時には歸ると言つて置いたに、車は一時間の道、やとさながら一大事のやうに、上から聲を掛けて、

「平吉急いでくれッ。」

車夫は何も知らず、何か用事でもある事と返事と共に驀直に駈出した。上では坐ろ心の過ぎて行く町の態も目に入らず、又もや描出す新家庭の事。もどかしさには、未だ物足りなかつたが、車は矢のやうに、軈ての事に颯と我住

む町へ入つて來ると、一足毎に既近づいて來る樂しさの、心を載せて行く程もなく、忽ちにして流れるやうに我家の門を入つて行く。途端に聞える奥の琴の音は、既其人を忍ばせて、得ならず耳を誘ふばかり。梶が下りる。琴が止む。ばた〳〵と聞える足音、ひらりと降立つと共に、玄關の障子を左右に、迎へに出た三四人の影、中に一人群を拔いて、流石に大浦の眼にのみでもない花の姿、

「お歸り遊ばせ。」

「お歸り遊ばせ。」

「お歸り遊ばせ。」

「おう、」

とばかり、一言ながらさも快げに、包まぬ笑顔に見合す眼色、琴の其主は浪江であつた。

（五）

居間には未だ琴が出しかけた儘になつて居る。箱を離れて琴爪の、一つ近く落ちて居る態などを、物珍らしげに眺めながら、傍にいそ〳〵介抱する浪江の、新らしく汲んでくれた茶を味美さうに大浦は親しげに、

「浪さん、留守に誰も來なかつたかね。」

「はア、先刻お歸りの少し前に、あの坂倉さんがお出でになりました。別に御用事ではないと言つてお歸りになつたさうです。私の方へは松井さん處の豐子さんが…………。」

「むゝ、あのお饒舌の、」

「はア、彼の人ですの。今日もさん〴〵に種々な事を言つて來るから歸るまで調戯はれ拔きましたわ。やれ、貴女はお幸福だの、お羨ましいの肖かりたいの何の彼のつて、本當に彼の人は何故那麼でしやう。仕舞には餘り憎らしくなりましたから、最う那樣事ばかり言つてお弄りなすつてばかり居らつしや

るなら、最う家へお出でなさいますなッて言つて遣りましたら、おや、付いて居る方が出來ると、最う那樣に氣が強くおなりなさる。まご／＼して居て追出されない中に歸りましやうと言つて、行くかと思へば、又種々な事を言つて笑はせたり怒らせたりして、漸との事歸つて行きましたの、私跡でほッとして了ひましたわ。貴方、彼の人なぞは別ですけれど、お客樣も時に依つては良し惡しですね。私今の中は誰も來てくれなければ可いと思ひますわ。」

「ふむ、何故、」

「でも一人で居た方が、貴方の事を考へたりなんかして、其方が身に着いて甚麼にか好ござんすわ。」

と態と伏目に、稍羞かしげの擧止、大浦は其姿を又、飽かず打目戍りながら、

「むゝ、私の甚麼事を、」

「そりや種々な事を、」

「言つて御覽な。」

「厭ですよ那樣事。いくら貴方の前でも極りが惡いではありませんか。で

もねえ貴方、一人で居ると言つたつて、待ちぼけして一人で居るのはそれは厭ですわ。一昨日なんぞ、仕舞には最う泣出したくなりましたわ。」

「いや、彼の時は全く無據かつたのだ。だから今日も那麼羽目にならんやうにと、用を切上げて、これでも餘程浪江さんの爲に御奉公をしたのだ。」

「あら、それぢや私の爲に御用をお缺きなすつたの。」

大浦は打笑ひ、

「なに然うは言ふもんの、實は此方の勝手なのさ。いや、妙なものでね、馴れたら恁うでもなからうと思ふが、外に出て居ても全で何か手に物が付かんのだ。何といふのだか自分にも解らない事がある。」

「貴方、それは私もよ。此頃の私といふものは、何だか最う上の空で、時によると自分の身體を自分のものでないやうに思ふ事があるのですもの。それは私のやうなものでもね、此方へ參つたらば、何うして恁うしてといふ種々心掛けはして居たのですけれど、那樣事は何處へ行つて了つたんですか、只最う、うはうはとして何一つする事が出來はしませんの。いつまで那樣氣でばかり

居るのだらう。眞面目に些少これからの事を、と思つてもつい…………、おほゝほ、本當に何ういふのでしやうね。」

「なに然う早くから何も彼も出來るものか。追々と遣つて行くさ。時に明日は日曜だね、何處かへ行つて見やうかね。」

「はア、連れて行つて下さるなら何處へでも。」

「何うだ鎌倉へ行つて見やうか。」

「あら鎌倉、好い事ねえ、參りましやうとも。貴方さへ宜しくば。」

「可し、それぢや明日の一番で行かう。お前と鎌倉へ行くのは初めてだね。」

「はア、それだから私…………。」

「え、何う。」

「なにね、私貴方となら何處でも好うございますけれどね、彼處は其中にも好うございますわ。」

「むゝ、何うして。」

「でも一日邪魔が這入らないで二人ッきりで居られますもの。」

と袂を膝に、稍俯向いて、初々しげに微笑む態度、あゝ浪江の若い事。

滑稽 相續三人男

(一) 栗原三四郎住居

○上手、庭越しに隣家から下男作造、竊と來て、隔ての生垣近く、及び腰に向ふを見、ぬッと、乘出すやうにして、小手招。

作造「お鍋どん、おい、お鍋どん。」

下女お鍋、振返つて、それと見ると、雜巾掛けの手を止めて、縁を下に、駈出して來る。

お鍋「おや、作どんかえ。逢ひたかつたよ。」

作造「ヤ、お前、女ッ振りが又上がつたね。」

お鍋「お弄りでないよ。那樣事を言はれると氣耻かしいよ。」

ト惡身の擧止、途端に下手、枝折戸の外に西隣りの紺屋の若者、向ふを透し伸上つて、

喜之「おい、お鍋どん、」
　お鍋聞付けて、と見ると直に、駈出して來る。
お鍋「おや、喜之さんかえ。逢ひたかつたよ。」
喜之「へん、うまく言つてやがらア。」
お鍋「あら、厭だよ此人は。本當に、人の氣も知らないで。」
喜之「へゝ、宜しく申しておくれとさ。」
お鍋「あれ何うしたんだよ喜之さん。私や這麽に思つてるのに、いつも人にばッかり氣を揉ませて居るんだよ。憎らしいッたら有りやしない。」
　作造、向ふで一人、氣の揉める擧止、續けさまに、
作造「おい、お鍋どん、お鍋どん。」
お鍋「あいよ。今行くよ。」
　ト目顏で知らせ、向直つて小聲に、
お鍋「五月蠅いねえ。」
喜之「何だ。ありや彼家の權助ぢやねえか。」

お鍋「然うだよ。作造ッていふ唐變木さ。御覧なまア彼の樣子を、南瓜のお化が、糠味噌ん中へ落こつたやうな顏をして、全體晝間出て來る首ぢやアないやね。あれでお前、いゝ氣になつて厭な事を言つて、煩縟く付纏つて來るんだもの。冗談ぢやない、壽命が縮まつて了ふだらうぢやないか。」

喜之「ふむ、飛んでもねえ奴だ。構ふ事アねえ打ッ喰はして遣れ。あれ又呼んでるぜ。やい、いくら悶いても駄目だぞ。此阿魔にやア喜之さんが付いてるんだい。」

お鍋「あれ聞えるよ。靜かにおしよ。」

喜之「なに構ふもんか。やい、鼻ッ垂しめ、些少喜之さんに肖かるやうにしろい。」

作造氣が氣でなく、身を焦つて、

作造「お鍋どん、お鍋どん。」

お鍋「あいよ。喜之さん、待つてゝおくれ。一寸騙かして來るから。」

ト駈戻つて作造の方へ行く。

お鍋「作どん、何だねえ。せはしない。」

作造「こ、此阿魔ア、」

お鍋「おや〳〵〳〵。」

作造「て、手前は彼の、紺屋の、若藏と……。」

お鍋「おほゝゝ。まア、なんぼ私が醉興だつて、那麼へうたくれを何うするものかね。御覽な、彼のまアしやくれた貝杓子のやうな顏を、樂書きの瓢男の目鼻だつて最う少し氣が利いてるよ。何處と言つて、如彼も亦取柄のない男ッたら有りやしない。あれでお前、何の彼のッて始中終私に……、私本當に厭になつ了ふよ。」

作造「むう、然うか。飛んでもない篦棒だ。構ふ事はない。撲倒して遣れ。おや又呼んでるぜ、やい、いくら悶いても駄目だぞ。彼女にやア作さんが付いてるんだい。」

お鍋「あれ聞えるよ。」

作造「なに構ふもんか。やい、二本棒め、口惜しくば眞似をして見ろい。」

喜之助向ふで變な顏、せき立つ氣勢に、

喜之「お鍋どん、〳〵、」
お鍋「あいよ。作どん、一寸行つて來るよ。」
作造「止せ。打捨つて置け。」
お鍋「だがね。少しばかりだけれど、彼の人にやア借があるんだからね。」
作造「ふむ、幾何ばかり。」
お鍋「なに一圓ばかりだよ。」
作造「何だ。それッぱかり。見つともない。持つて行つて返して遣れ。さア。」
ト懐から出して遣る。
お鍋「あら濟まないねえ。ぢや一寸行て來るよ。」
トばた〳〵と喜之助の方へ行く。
喜之「變だぜ、おい。何だ、お前の今の樣子は。おい、賴むぜ、おい。俺を何と思つてるんだい。」
お鍋「あれさ、惡い取りやうだよ。なに實はね、あの作造には、些少ばかり借があるんだからね、」

喜之「何だ借があるの。見つともねえ事をするな。幾何ばかりだ。」
お鍋「なに二圓ばかりだよ。」
喜之「何だ。それッぱかりか。よし。」
ト懐を掻探つて、
喜之「さア、持つて行つて叩返して遣れ。」
と出して遣る。お鍋手に受けて、
お鍋「あら濟まないねえ。ぢやア行つて來るよ。」
ト駈出して、又作造の傍へ來る。
作造「何うした〳〵。」
お鍋「お蔭で本當に淸々したよ。」
作造「むゝ、これからは最う好きな事を言つて遣れ。馬鹿な、俺ッて者が付いて居るのに、那麼野郎に借りるッて事が有るもんかい。」
お鍋「だつてお前に心配させるのが氣の毒だつたからさ。だからこれからはお前にばつかり賴むから可いよ。早速だが直に借りやうか。」

作造「えッ、又かい。」

喜之助向ふで、

喜之「お鍋どん、〳〵、」

お鍋「おや又呼ぶよ。何だねえ。」

言ひつゝ又駈けて行く。作造急に、

作造「お鍋どん、」

喜之助同時に、

喜之「お鍋どん、」

兩人「お鍋どん、〳〵、〳〵、」

お鍋「あいよ。〳〵。〳〵。」

ト中に挾まつて、双方へ見得。此時正面、居間の外に、

○「なゝ、何だ、突如に、ど……何うしたのだ。」

×「えゝ、何が何うしたんですよ。能くもぬけ〳〵と那樣事が言はれたもんです。」

ト、どたばた物爭ひの音、お鍋吃驚して、

お鍋「おや、旦那のお歸りだ。あら御新造さんが、おゝ此方へ入つて入らつしやる。」

ト慌てゝ雜巾桶の方へ駈けて行く。作造喜之助同じく聲を聞付けて、こそこそと陰へ消える。お鍋そこ／＼に雜巾桶を提げて引込む。途端に主人、三四郎、女房お松、お松胸倉を取り、三四郎其手を押へ、二人取合ひながら入つて來る。

お松「えゝ、最う、本當に、貴方は、／＼／＼。」

三四「これ放せ。然う小突廻されちやアロも何も利けやしないわな。俺が惡かつたよ。後生だ、放してくれ。いや最う大凹み、張子の福助が拳固を喰つたといふ形だ。」

お松「えゝ、それ處ぢやありませんよ。本當にまア何うする氣ですよ。」

三四「然う胸倉を取つて居られちやア何うする事も出來ないわな。」

お松「人を馬鹿にして、何處まで然うづう／＼しいんだらう。えゝ腹が立つ。」

何處を風が吹くッて顏色で、平氣でしやアくとして、今歸つたよとは何の事ですよ。本當に、貴方はまア何といふ人だらう。」

三四「おい、賴むから少し手を緩めてくれ。息が止るよ。全くだ。」

お松「息位何ですよ。」

三四「驚いたね。亭主殺し。」

お松「えゝ、最う、何處まで人を嘲弄かして居る氣だらう。思出すほど業が煮えて仕樣がない、本當に貴方はく。」

三四「あッ、痛い。痛いよ。おい、謝罪つたから放してくれ。嬶ア大明神、左衞門大權現、樣樣々々、あッ、目が眩む。最う脈が止つた。そちこち臨終だい。助けてくれ。赦してくれ謝罪つたよ。謝罪つたから最う赦してくれ。」

お松「えゝ、口惜しいッ。」

ト力任せに突倒す。三四郎、態と大手を開き、空に輪を書いて、仰山に撞と倒れ、軈てむくくと起直り、

三四「やれく、漸つと息が通出した。恐ろしい力だせ。既の事で最う、地獄の

二町目へ宿替へをする處だつた。ア、何うも實に驚いた力だ。たゞの大力ぢやないね。お前のは怪力と言ふんだ。這麼隠し藝を持つて居やうとは今迄夢にも知らなかつたよ。這麼藝當を、只遊ばして置くのは惜しいもんだね。何うだい奥山あたりへ大島田で力持の看板を出して、飛離れて風の變つた口上言でも付けてさ、あいやお目通り正座に控へましたる太夫…。」

お松「えゝ此人は！」

三四「おツと、どツこい。最うお手並には懲り〳〵だ。相成るべく口上で願ひませう。ね其、口先で殺すといふ奴で。」

お松「もし、」

三四「へい、」

お松「確かりして返事をなさい。貴方出て行つたのは先一昨日ですよ。」

三四「成程ね、覺えが良いね。そこで、」

お松「今日で四日になりますよ。」

三四「いや、豪い事を知つて居るね。お前は智慧者だ。成程なア、先一昨日から

今日で四日になるかね。」

お松「然うでせう、貴方見たいな向不見には、日も何も解りますまいよ。然うでなくつて三日も四日も、打ッこ抜いて家を明けて遊びに夢中になつて居られませうかよ。」

三四「むゝ、そこで、」

お松「そこでとは何の事です。本當に了簡を何處に付けて居るんですよ。」

三四「さア、何處に付けて居るか、巾着なら腰に付けて居るんだが、其處等はいゝ加減に了簡するとしやうぢやないか。」

お松「本當に何うして然う平氣で居られるだらう私は最う、呆れて物が言はれません。這麼不始末をして了つて、家を何うする氣ですよ。貴方、此間取つて來たお金は何處へ遣つて了つたんです。」

三四「其處だて、」

お松「それも只の時ぢやありません。眼の前に入用なのが解り切つて居ながら、」

三四「其處だ。」
お松「何が其處ですよ。本當にまア、跡の仕末を何う付ける心算なんです。一度や二度の事ぢやなし、今度といふ今度は、最う何方へ轉んだつて手も足も出やアしません。何ぼ何ども最う目が覺めたらうと思つて居たのに、私もふつ〳〵愛想が盡きて了ひました。」
三四「其處だよ。ねえ、お松、」
お松「何です。薄ッ氣味の惡い聲を出して、今更ねえお松もないもんです。言ふ事があるならさつさと言つてお了ひなさい。」
お松「だから其處だと言つて居るではないか。ねえお松、」
お松「止して下さい、最う那樣變な聲を出すのは。冗談ぢやない蟲が起りますよ。」
三四「へッ、蟲が起るも凄まじい。」
お松「何ですとえ。」
三四「なに此方の事だよ。今大事の場合だ。御機嫌を損つて堪るものか。處

でお松、言ふまでもないお前は俺の女房だ。」

お松「はい、まア今の處はね、」

三四「何だ、那樣水ッ臭い事を言ひッこなし。女房さ。むゝ女房とも。何處までも女房さ。然も人の手本にもならうといふ類のない女房だなア、亭主の爲になら、罷り間違やア命でもといふ……。」

お松「もし、一寸、もし、」

三四「まアさ、聞きなよ。其賴もしい心意氣には實は、口に出してこそ言ないがね、腹ぢやア內々手を合せて居るんだ。ねえ、お前なればこそ、恁うまでにもしてくれる、と前から思つて居たのは度數も知れない位だ。其處だ。其處だよ。ねえお松……。」

お松「あゝぢれッたい。那樣事は何うでも可うござんすよ。手取早く本文を言つて下さい。」

三四「それがね、些少ばかり實は言難いのだ。何分其御氣色ぢやア、一寸口火が切難いよ。」

お松「ちよッ、何を愚圖々々して居るんですねえ、さつさとお言ひでなけりやア最う知りませんよ。」

三四「言ふよ。言ふがね、實は其、今言つた通りの其お前の事だから、折入つて此處で賴むんだが、差當つて此今度の跡仕末だ。濟まないが一つ、お前の智慧で何とか㑺う、可いやうに其處ん處をまぢくなつて貰ひたいんだが……。」

お松「お……お戲けなさるなよ。」

三四「えッ、」

お松「お戲けなさるなよ。人を。何處を押したら那樣音が出るだらう。世迷言もいゝ加減になさいまし。」

三四「おや、」

お松「呆れた〳〵。本當に呆返つて了つた。」

三四「はてな、」

お松「最う言ふ事はありません。貴方の爲た事は貴方が仕末をお付けなさるが可いのさ。私も最うつく〴〵厭になッ了ひましたから、これで思切つて

身の振方を付けて了ひませう。實は最う一昨日から、內々了簡を据ゑて居るんです。」

三四「いやはや飛んだものを据ゑたね。序に眼の玉も据ゑて居る。鼻は相變らず胡座を組いて居るが。」

お松「勝手になさい。私はね、今日限り、はい只つた今から、はい、お暇を貰つて出て行きますよ。」

三四「やッ、大變恐ろしい事になつて來たぞ。さア事だ。さア〳〵事だ。さア事だ。」

お松「何うせ又三日も四日も抛りッ放しにされて構付けられない私の事です。言はない先に出て行つたら、其方ぢや勿怪の幸ひでせう。」

三四「おい、おい〳〵〳〵。」

お松「いつも口癖によく仰有る、這麼南京豆に戯書きをしたやうな醜婦よりは今迄入浸りにして入らしつた、其美しい方でも早速お入れなすつた方が可いでせう。」

三四「待つた〳〵。待つてくれ一寸。」
お松「最う待つも何もありやアしません。別に申す事もありませんから、これから直に參ります。」
三四「これ、何うしたものだ。何も彼も俺が惡いのだ。謝罪つたから最う勘辨してくれ。」
お松「いゝえなりません。御免なさい、そろ〳〵支度に掛りますから、」
三四「これさ、〳〵。」
お松「離して下さい。日が短かうございますよ。兎も角私の物だけ何處か一つ處へ纒めて行きませう。」
ト無理に振離して立上る。三四郎同じく立つて、跡からぐる〳〵と付いて廻る。
三四「これさ、冗談ぢやない、何の眞似だな。馬鹿々々しい。」
お松「お構ひなさるな。私の者を私が片付けるのです。貴方のお指圖は受けません。」

三四「至當だ。至當だがね……。」

お松「邪魔ですよ。」

三四「まアさ、那樣……、」

お松「えゝ五月蠅い。知りませんよ最う。其方へ退いて居て下さい。」

トがたぴし癇癪紛れに當り散らして片付ける。三四郎、宥めては又拂振はれ、頻りと頭を掻きのめす。途端に彼方で、

脚夫「郵便！」

三四「それ郵便が來た。鍋は何處へ行つて居やがるのだ。おい、お前一寸行つて取つて來てくれ。」

お松「知りませんよ。」

脚夫「郵便ッ！　栗原さん郵便ッ！」

三四「おい、何をして居るんだ。一寸行つて來てくれないかよ。」

お松「知るもんですか。私や最う此の家の人ぢやありませんよ。」

三四「ちよッ、仕樣のない奴だな。」

ト小言をいひながら出て行く。やがて受取つた封書を手に、裏を返して出先を見ながら入つて來る。

三四「何だ、伯父の處からか。はてな、何の用だらう。」

ト其儘開封して讀始める。

三四「なに〳〵、拜啓時下愈〻御壯康……。那麼處は先づよしと、」

ト暫く口の内に讀下して、

三四「何だと、拙家相續之件に付、篤と御相談申度事有之候間、用事差繰明日午後四時頃より御來車相成度……、さア占めたぞ、むゝ、然うとも、かう來なくツちやならないのだ、いや然う言へば此間の伯父の樣子が、何うも只ではなかつたよ。此奴ア飛んでもない事になつて來たぞ。何しろ最う此方のものだ。占めッ、占めッ、大占めッ。」

ト額を叩いて悦に入る。お松聞て居る中に次第に模樣が變つて來た體。不意に向直て、

お松「もし、今仰有つたのは彼の涌井の伯父樣の事ですか。」

三四「知れた事だい。」
お松「えッ、あの七十萬からの身代の…………。」
三四「先づ其處等だな。」
お松「そして貴方が…………。」
　ト いきなり駈寄るやうに傍に來る。
三四「何うだかね、先づ知れないといふ事にして置かうよ。まア考へて見るが可い。彼の深川の伯父には な、子といふものは一人もないわ、そこで血の續きの一番近いものは誰だと思ふ。」
お松「知れてますわね。」
三四「ふむ、いくら感の惡いお前にも解るかい。何しろ占めたよ。惡くはないて。愡うなつて來る日になると、へん、男振から違つて來るからな。」
お松「そりや貴方、女房振だつて違つて來ますわ。」
三四「何だ女房振？」
　ト 態とらしく見上げ見おろし、

三四「お前は只つた今出て行くと言つたぢやないか。」

お松「まア何ですねえ那樣事を………。實はね、一寸貴方の氣を引いて見たのですよ。」

三四「むゝ氣を引いて、」

お松「然うですともさ。貴方だつて又、それが解らないで居る方ではないぢやありませんか。」

三四「處が解らないね。」

お松「え、」

三四「出て行つて貰はう。」

お松「えッ、」

三四「むゝたつた今出て行つて貰はう。」

お松「まア、急に何うしたのですよ。那麽に一生懸命になつて止めて置いて、」

三四「それがな、むゝ何よ。實は一寸其方の氣を引いて見たのだ。」

お松「まア、」

三四「實は最う一昨日から內々丁簡を据ゑて居るんだ。」

お松「あら嫌ですよ貴方は、人の聲色なんぞを遣つて、」

三四「へん、何うせ又三日も四日も、抛りッ放しにして構付けもしない手前の事だ。言はない先に出て行つたら、此方ぢや勿怪の幸ひなんだ。」

お松「何ですよまア、私の言つた通りぢやありませんか。」

三四「えゝと何だッけな。むゝ、いつも口癖によく言つた、那樣南京豆に戯畵きをしたやうな醜婦よりは、今迄入浸りにしけ込んで居た其美しい奴の…………。」

お松「待つて下さい。待つて下さい。待つて下さいよ一寸。」

三四「はゝゝゝ、今度は其方が聲色を遣ひ出しやがつたな。いや面白いぞ。ええ待つも何にも有るものかい。これから直に出で行きやアがれ。」

お松「あれ、本當に何うしたのですよ。何も彼も私が悪いのですよ。謝罪りましたから最う勘辨して下さい。」

三四「えゝ馬鹿々々しい、口眞似ばかりして居るない。冗談ぢやない。眞劍だ

ぞ。さア支度は何うしたんだ。さつさと爲ろ。日が暮れるぞ。」

お松「えッ、それぢや貴方は本當に、」

三四「知れたことだい。誰が最う手前のやうな者に…………。」

お松「口惜しいッ。ど…………何うしやう、何うしやう、何うしやう〳〵。」

三四「ちよッ、何を愚圖々々言つて居るんだ。直に消えて失くなりやアがれ。」

お松「お…………覺えて居るが可い。」

ト血相變へて駈出さうとする。三四郎稍や驚きたる體、急がはしく、

三四「これ、何をする。」

お松「死んで恨みのある奴を取殺して遣る。」

三四「な…………何だと、」

ト見て、俄に振をかへ、

三四「やれ〳〵藥が利き過ぎたか。なアにお松實はな、矢張其方の氣を引いて見たのだ。」

お松「えッ、あのそんなら…………。」

三四「はゝゝゝ、何だい其溶けさうな顔は。へゝゝ、お前も慾には不足はないな。」

お松「あれ、私は慾で那様……………」

三四「餘り然うでもあるまいよ。まア何でも可いわ。繋がる縁だけに我慢して遣るんだ。有難いと思へ。これ、以來最う粗末にするなよ。」

お松「何で粗末にするもんですかね。大事の／＼人ですもの。」

三四「厭だぜ。急に甘ッたるい聲を出して來やアがる。御調法なもんだな。よし悉うなりやア思切つて亭主風を吹かして遣らう。松、左を向け。」

お松「はい。」

三四「右を向け。」

お松「はい。」

三四「いや面白いぞ。一寸ベッかッこうをして見せろ。」

お松「あれさ、最ういゝ加減にして下さいよ。それよりは貴方、」

三四「えゝ胡魔化すなよ。」

お松「いゝえさ一寸お聞きなさいよ。其お談話は貴方いつ決るの。」

三四「知れた事だ。明日行きやア一も二もないさ。へん、甚麼もんだい。」
お松「見上げましたよ。本當に見上げましたよ。」
三四「五月蠅イ。澤山だ。最うお世辭は聞飽きたい。何しろ今から現にこれだ。いや大當りツ明日から兎も角、大福長者のお跡繼樣か。何うもなア、俺の耳ツ朶が不思議に恰好が好いと思つて居たよ。」
お松「私も始中終然う思つて居ましたよ。」
三四「お松、」
お松「何うしませうね。」
三四「俺は胸が込上げて來たやうだ。」
お松「私も最う嬉しくつて嬉しくつて…………。」
三四「お松、」
お松「はい〳〵、」
三四「へん、大層仲が好い事だな。」
お松「貴方、それよりか前祝ひに…………、」

三四「むゝ、それもある。えゝ、何から手を著けて可いか譯が解らないわ。」

お松「貴方、何をまご／＼して居るんですよ。」

三四「えゝ其方こそ狼狽いて居るぢやないか。」

お松「あれさ貴方ッていふのに。」

三四「解つて居るよ。お前はお松だ。」

お松「貴方は、」

三四「お松だ。」

お松「お松は、」

三四「貴方だ。えゝ何の事たい。あッはゝゝゝゝ。」

お松「おほゝゝゝゝ。」

(二) 上野公園大佛前

○上手、在來りの休茶屋、正面、二三の床几を据ゑ、此あたりの背景宜しく、ここに仕出し三四人、店の茶汲女を相手に、雜談思ひ〳〵にあつて軈て立つ。暫くして、檜山未亡人爲子、娘花子其處等を散歩の體で來る。

花子「もし、阿母樣、」

爲子「はい、何だえ。」

花子「今其處でお目に掛りました、彼の竹岡さんねえ、」

爲子「あゝ彼の若紳士、」

花子「彼の方は何うでせう。」

爲子「然うさねえ、有るには有りさうだねえ。指環位は稼げるだらうよ。」

花子「おや指環位、」

爲子「それでも無いよりは可いぢやないか。」

花子「那樣事ぢや商法になりませんよ。」

鶯子「そりやア、お前の腕次第で、何うにも談話が付くだらうよ。今別れる時に何か言つてお遣りかえ。」

花子「はア少しばかり、」

鶯子「おゝ、お前の事だから、一寸黄金時計が欲しいんですがッてな事を……。」

花子「まさか露出しに然うも言へませんからね、晩にお遊びに入らつしやいましな、と言つてね、」

鶯子「ふむ、それから、」

花子「見上げて、小さな聲で、」

鶯子「ふむ、」

花子「ゆツくりお話申したいことがございますから。」

鶯子「それから、」

花子「それッきり。」

鶯子「まア慾のない子だねえ。何故お土産を持つて來てと云はないのだねえ。」

花子「おほゝゝゝ、なに今夜來た時にね……………、實は利足を取つて遣らうと思つ

てお預けにして置いたのですよ。

爲子「まア頼もしいねえ。」

ト感に堪へた體、花子捨臺辭に、

花子「矢張親の子ですからねえ。」

ト言つて急に飛退き、下を見て、

花子「まア吃驚した。」

爲子「おや紙入でも落ちて居たのかえ。」

花子「なアに蛙を踏んだのですよ。」

爲子「まア何だねえ。」

ト言つて氣が付いたやうに、

爲子「併しお金が化けて居るのかも知れないよ。」

花子「おほゝゝゝ、隨分ですねえ。」

此時下手から、衝と松崎多見治、何心なく此處へ差懸つて、

多見「ヤ、これは、」

爲子「おや、松崎さん、」
花子「まア那邊へ、」
　多見治進寄つて、直に花子の傍へ、
多見「いや、よい處でお目に掛りました。實は今貴孃の處へ參らうと存じた處……………。」
花子「おや、私共も散歩がてら、近くの事でございますから實は歸りに、一寸、お邪魔を致さうと存じて居りました處…………。」
多見「幸ひだ。入らつしやいまし、これから。阿母樣には殊に差上げるものが有る。」
　爲子聞くより進出して、
爲子「それは〳〵。まア、お禮から先へ申して置きます。戴くものなら夏もお小袖、何でも結構ではございますがね、那麼物ですか何なら伺つて置きたいものですねえ。」
多見「いや、今言つて了つちやア價値がなくなる。」

爲子「おやそれぢやア、不躾ながら大した物ぢやございませんね。」

多見「なにさ、貴女のお喜びなさるものさ。」

爲子「まア何うしませう。濟みませんねえ。本當に松崎さん位氣前のいゝ方はないと申してね、此女と二人、始中終言暮らして居るのでございますよ。」

多見治小聲で獨語。

多見「ふむ、此奴は大分喰付きが好いわい。」

ト振直つて花子の方へ、

多見「時に花子さん。」

花子「あら私にも何か下さるの。」

多見「はア貴女になら何なりとも、それこそお望み次第のものを。」

花子「まア何うしませう。濟みませんねえ。本當に、松崎さん位氣前のいゝ方は有りやしないッてね、母と二人で、始中終申暮らして居るんですよ。」

多見「ヤ、何うも恐入りましたな。親の子だけに爭はれないもので……。」

花子「貴方、玉寶堂は直ぐ其處ですよ。」

多見「なに御意次第で三井へでも
花子「えッ、直ぐにですか。」
多見「勿論、」
花子「あら、嬉しい事、本當に、何うしませうねえ、阿母樣。」
爲子「まア、お前、まア、那樣おねだり事をして可いのかえ。」
花子「だつて外の方ぢやない松崎さんですもの。」
ト多見治に、態とらしく、
花子「ねえ、松崎さん、貴方と私の仲で、那樣…………、ねえ。」
多見「然うとも。勿論の事さ。就いては少しお談話もある。まア兎も角も一休み休みませう。」
ト前の床几に掛ける。女中取敢へず茶を運ぶ。多見治を上に、三人宜しく席を取ると、
多見「處で御後室、いやなに阿母樣、」
爲子「おや、又何か下さるの。」

多見「えッ、」

ト流石に驚く。爲子我にもあらず床几を離れ、ほく〳〵して、

爲子「何うも那樣に戴いちやア餘り何ですけれど、折角然う仰有るのですから、お辭儀なしに頂戴して置きますよ。」

多見「いや其は何うも恐入りましたね。」

爲子「して其下さるのは何なんですの。」

多見「そ…………それがね…………、」

爲子「あれ、お焦しなさるなよ。」

多見「まア、聞いて下さい、實はね、此花子さんの事なんですがね、」

爲子「えッ、それぢや彼の下さるのは…………、」

多見「まアさ、其方は貴女の好いやうになすつて、」

爲子「え、好いやうにすると申すと…………。」

多見「だから貴女のお好み次第にさ。仰せは背きませんよ。ね、それで御不承なさい。處で其花子さんの方のお談話ですがね、」

鶯子「はア、萬更惡くはないやうですから、兎も角承はりませう。花子が何うしましたの。何か十萬圓位の持參で來る氣の利いたお婿樣でもあるといふのですか。」

多見「然う、まアそれに近い處で。」

鶯子「えッ、近いッ？　近いと申して何の位？」

多見「さア、お隣りから出た小火よりも近い位で、」

鶯子「えッ、まア花子や。」

花子「まア、松崎さん、うッかりした事を仰有いますなよ。」

多見「處がね、それが正なんだから……………。」

鶯子「まア、まア〳〵〳〵。」

花子「松崎さん、誰方ですよ其方に、」

多見「はゝ、解りませんか貴孃にも、つい其眼と鼻の間に居るのが、」

鶯子「おや、まア貴方ですかそれおや。」

多見「ですかそれおやなどは賴もしくないね。私さ。正に私さ。何も不思議

はありますまい。お案じなさるな、馬車位には乘けますよ。貴女も御存じのそれ深川の伯父ね、」

爲子「おゝ、彼の涌井さん、花子や、こりやお談話が少し確かさうだよ。」

多見「其處でね、實はお二人に少し聞いて戴きたい事があるのです。」

爲子「承まはりませうとも、ねえ花子や。」

花子「はい、それは最う………。」

多見「占めたな。」

爲子「え、」

多見「なに此方の事で。」

ト紛らしながら、不意と向ふを見て、吃驚した擧止、度を失つて、まご〳〵する。同時に高利貸横井傳藏、うろ〳〵と來て多見治と顔を見合せるといきなり蹤々と傍へ、

傳藏「ヤア、見付けたぞ〳〵。」

多見治慌だしく、

多見　えへむ、〳〵〳〵、」

　　無暗と眼に稲光を見せて、

多見「ヤ、誰かと思つたら横井さんか。相變らず豪い元氣ですな。いや早速ながら貴方に喜ばせる事がある。」

傳藏「いんや、〳〵、今日は最う、うかとした手には乘りませぬぞ。これ、松崎さん、全體何うして下さるのだい。お約束も恁う違へられては、なんぼ、蟲の好い拙者でも、最う我慢が出來ませぬわい。」

多見「はゝア、何かと思へば、豫てお賴みの彼の繪卷物の件ですかい。」

　　ト又稲光を見せて、

多見「いや私も仲に立つて實は大弱りさ。何分先方が彼の通りの…………。」

傳藏「な…………何を言はつしやる。」

多見「はてさ、何も私にお任せなさい。貴方に喜ばせると言つたのは其處さ。ヤ、必ずお氣の濟むやうにして見せる。妙策々々、屹度貴方の腹に入るよ。ヤ、恁うしませう。御覽の通り今は連れも有る。後刻彼方へ行きますから、お

宅へ伺ひませう。」

傳藏「いやならぬ。なりませんわい。お連れがあらうと有るまいと、拙者に何の關はつた事。さア、四の五の言はず、受取るものを直に受取らう。」

多見治急に氣を替へ、

多見「はゝゝゝ、御老人、些少逆上氣味と見えますな。貴方に其病のある事は承はつて居たが、こりや惡い處で氣が逆つてくれたわい。」

傳藏「ナニ氣が違つたと…………。」

多見「醫者だ。醫者だ。醫者の事だ。もし御後室此處等に名醫はありませんかな。これは私の知人ですが、此通り少し血迷つた氣味、いつも恁う狂ひ出して來ると、何でも金の事ばかり言つて人を困らせると、聞いて居ましたが、何うか其やうな氣ざしが最う見えるやうですな。」

篤子「へいお金の事を餘ッ程其方に御執心だと見えますね。同じ氣違ひでも賴もしいぢやありませんか。」

多見「ヤ、貴女のお心持は格別ですな。」

と小聲に、

多見「係合ひがなけりや、取組ませるんだが。むゝ這麼相手は滅多にあるまいな。」

篤子「え、何ですとえ。」

見多「何さ。餘計な心配をしたんで。」

傳藏「これさ、………氣違ひとは何だ。期限の切れた貸金を、取りに來たのに不思議があるかい。」

多見「さア始まつた〳〵。はて、何うか嵩じない間に治めたいものだが。さてさて困つた病人だ。」

傳藏「ちよッ、業腹な、可し、これでも未だ白ばッくれるか。」

ト提げて居た鞄を開けて、いきなり目の前へ擴げた證書。

傳藏「こ…………これを見ろッ。」

多見「はゝゝ、ヤ御丁寧に那樣物まで拵へたのか。」

傳藏「えゝ、此奴が〳〵。最う容赦はせぬ。サア引替へに金を渡すか。せずば

直さま例の處分をするばかりだ。」

多見「いやはや飛んだ介抱役だ。此方は此位にして置いて、些少外樣へ當つて戴かうかね。」

傳藏「よし、覺えて居れ。跡で吠面かわくまいぞ。」

多見「はゝゝ、何でも可い。佛の言ふ通りにして遣らうかい。」

傳藏「むゝ何うあつても最う勘辨はならんわ。」

ト色を變へて下手へ入る。多見治はツとしながら、左あらぬ見得、

多見「いや飛んだ物に腰を折られて、談話の繼目を失して了つたわ。おゝ、それそれ花子さんの件だ。處で御後室、先刻の續きですがね…………。」

爲子花子と眼を見合せ、俄に樣子を變へ、

爲子「松崎さん、」

多見「おや、」

爲子「其お談話は最う見合はして戴きませう。」

多見「ヤツ、こりや風並が變つて來たぞ。」

花子「松崎さん、」

多見「ほい、彼方でも御用と仰有る。花子さん、貴孃は併し…………。」

花子「いゝえ、親の申す事は背けませんからね、」

多見「やツ、恐ろしい寸法違ひだ。横田め、飛んだ處まで祟つて來やがる。こりや何方から出直したら…………。」

爲子「いえもし、此方へは最う出直して入らつしやるには及びませんよ。それよりか今の證書の始末を早くお付けなすつた方が、何より身のお爲めでせう。花子や飛んだ御方に係合つて、いゝ暇潰しをしたぢやないか。」

花子「本當に、すつかり見損ひましたよ。」

爲子「恐圖々々して居た日にや此先又甚麽目に遇ふか知れないよ。」

花子「いゝ加減に最う切上げませうよ。」

多見「もし、もし〳〵〳〵。」

爲子「おほゝゝゝ、飛んだ電話ですね。お生憎さま、只今お話中ですよ。」

花子「もし阿母様、那麽電話は早く〳〵切つてお了ひなさいよ。」

直さま例の處分をするばかりだ。」

多見「いやはや飛んだ介抱役だ。此方は此位にして置いて、些少外樣へ當つて戴かうかね。」

傳藏「よし、覺えて居れ。跡で吠面かわくまいぞ。」

多見「はゝゝ、何でも可い。佛の言ふ通りにして遣らうかい。」

傳藏「むゝ何うあつても最う勘辨はならんわ。」

ト色を變へて下手へ入る。多見治はツとしながら、左あらぬ見得、

多見「いや飛んだ物に腰を折られて、談話の繼目を失して了つたわ。おゝ、それそれ花子さんの件だ。處で御後室、先刻の續きですがね…………。」

爲子花子と眼を見合せ、俄に樣子を變へ、

爲子「松崎さん、」

多見「おや、」

爲子「其お談話は最う見合はして戴きませう。」

多見「ヤツ、こりや風並が變つて來たぞ。」

花子「松崎さん、」
多見「ほい、彼方でも御用と仰有る。花子さん、貴孃は併し…………。」
花子「いゝえ、親の申す事は背けませんからね、」
多見「やッ、恐ろしい寸法違ひだ。横田め、飛んだ處まで祟つて來やがる。こりや何方から出直したら…………。」
鶴子「いえもし、此方へは最う出直して入らつしやるには及びませんよ。それよりか今の證書の始末を早くお付けなすつた方が、何より身のお爲めでせう。花子や飛んだ御方に係合つて、いゝ暇潰しをしたぢやないか。」
花子「本當に、すつかり見損ひましたよ。」
鶴子「愚圖々々して居た日にや此先又甚麼目に遇ふか知れないよ。」
花子「いゝ加減に最う切上げませうよ。」
多見「もし、もし〳〵〳〵。」
鶴子「おほゝゝゝ、飛んだ電話ですね。お生憎さま、只今お話中ですよ。」
花子「もし阿母樣、那麼電話は早く切つてお了ひなさいよ。」

篤子「あれ、娘も如彼言ひますよ。」
多見「意外々々、實に意外だ。花子さん、そ……それぢや何日の……。」
　花子聞かぬ振で、
花子「阿母樣そろ〳〵最う參りませうか。何だか空模樣が變つて來さうですよ。」
篤子「おゝ然うだね、それぢや出掛けやうね。」
　ト多見治に向ひ、態と優しく、
篤子「併しねえ、松崎さん、」
多見「えッ、其方の空模樣も序に些少變りましたかな。」
篤子「いゝえさ、先刻貴方が下さると仰有つた、彼の戴くものは矢張戴きますよ。」
篤子「えゝ何の事だい。」
　言ふ時下手から、きよろ〳〵眼で、涌井の小僧、
茶目吉「おゝ此處に居らしつた。若旦那、もし鹽町の若旦那。」
多見「ヤ、お前は伯父ん處の茶目公だな。」

茶目「へい、如何にも茶目公です。正に茶目吉です。へい、涌井家の大忠臣、藤原の茶目吉で。」

多見「えゝ、餘計な事を言ふない。むゝ、何處へ行くんだ。」

茶目「へゝ解りませんかい。流石凡夫の淺猿しさで。」

多見「何だ、生意氣な事を。」

茶目「おつと危ない。眞ッ平御免下さいまし。つい其口が過ぎましたんで、敢て、若旦那を辱めた譯ではないのです。平素慣れッこになつて居るもんですから、つい其ぺろと出ましたんで。併し其拳骨は野蠻です。若旦那にもお似合なさらない。これは些と伺ひませう。」

多見「えゝ、べら／＼と要もない事を饒舌らないで、肝心の事をさつさと言へ。」

茶目「へい有りやうはね、奥の御用で、今若旦那のお宅へ伺つたのです。するとお留守。何でも此方の方角へ入らしつたと言ふので、直に捜し當てた處は流石茶目吉でせう。何うです御褒美なら今の中ですよ。貴方のことだから夥多もくれまいが。」

多見「な…………何だ此野郎。」
茶目「おつと、又しても拳骨ですか、驚きますな。番頭さんのは始終喰べつけて居ますけれど、若旦那のは骨ッぽいや。」
多見「ちよッ、那樣事は何うでも可いわ。さつさと用を言へといふのに。」
茶目「それがね、大變なんです。若旦那目を廻しちや可けませんよ。」
多見「何だ。目を廻すやうな事なのか。」
茶目「なに目だけで助かりやア輕いんです。流石の茶目吉が驚いたんですからな。もし若旦那前以つて伺つて置きますが、お氣は勿論確かでせうな。」
多見「失禮な事を吐すない。さア用を言へ。」
茶目「へい、申しますよ。お急ぎなさらないで、まアお聞きなさいまし。ようございますか。家の旦那、旦つくがですよ、即ち貴方の伯父なるものが……。」
多見「ちよッ、兎角に口數の多い奴だな。餘計な冗ッ口を叩かないで、吩咐けられた通りをさつさと言へ。」
茶目「だからまア聞いて居らつしやいまし。今其口上を辯じ上げやうとする

處を然う腰を折られちやア困りますな。少し茶目吉を圖に乘らして下さらなくつちやア、此國家の大事を容易に口外は出來ませんて。」

多見「こ、此奴が。今言つた口の下からそれだ。己ッ懲らしめに一つ、」

茶目「そら來た。拳骨。どッこい、逃げたぞ。御免なさい、御免なすつて。私全く其拳骨は蟲が好きません。へい拳骨と堅麪麭は斷つて居ますんで。」

多見「さア、言へ直ぐに。二度と冗口を利くと容赦はしないぞ。」

茶目「承知、大承知、有體に申上げます。若旦那お喜びなさいまし。今度旦那がね、いよ〳〵貴方を相續人に……。」

多見「な、な、何だと、茶、茶目吉、」

茶目「へッ、ど、何うなさいましたんで、」

多見「彼の、を、伯父が俺を、」

ト突如胸倉を取つて、夢中にぐいと締めつける。

茶目「あッ、わ、若旦那、な、何だつて唐突に胸倉を。あ痛ッ然う逆に振ッちやア息が止ります。御免なすつて。何だか知りませんが御免なすつて下さい。

あ痛ッ、〳〵、〳〵、御免なすつて、お、お、離しなすつて。」

多見「離すものかい。誰が離すものかい。むゝ雷が落ちても離さないぞ。」

茶目「ヤッ、大變、助けてくれ！　人殺しい。」

多見「何だい。我慢しろ。貴様なんぞの一人や二人、殺される位が何の事だいさア、確かりと返答しろ。伯父は全く俺を相續人に……。」

茶目「ま、全くですよ。」

多見「全くか、〳〵。」

茶目「全くです、〳〵。あッ其度に力の入るのは驚きましたな。ぎやッ、最う息を引取ります。」

多見「むゝ、全くだな。」

ト漸と手を離す。茶目吉跡を揉立てゝほッと息。

茶目「ヤ、何うも飛んだ目に遇ふもんですな。這麼苦しい思をすると知つたら此使を承はるのぢやなかつたつけ。これぢやア些少ばかりの御褒美ぢや引合つたもんぢやないや。」

多見「はゝゝ、痛かつたか那樣に。堪忍しろよ。其代りには、褒美は貴樣の望み次第だ。」

茶目「えッ、然うなら然うと、前から能くお聞かせなすつて下すつたら、最う些少我慢の仕樣もありましたものを。若旦那、今のお言葉を伺つたら痛みは正直に何處かへ飛んで行つて了ひました。へい、なんなら最う一遍願ひませうか。そして御褒美の方を倍增しに……。」

多見「はゝゝ、貴樣も虫のいゝ方ぢやア敗けを取らないな。」

茶目「若旦那、今の口上の、未だ其跡があるんですよ。」

多見「むゝ何だ。早く言へ。」

茶目「へい、今申上げた其御相續の事に付きましてね、旦那が何か御相談がお有りなさるので、明日ですよ明日の午後四時頃から、深川のお宅へ入らしつて下さいと仰有るんで。」

多見「可し、心得た。直に行かう。」

茶目「いえさ、明日なんですよ。」

多見「默つて居ろ、知つてるわ。今ッから詰掛けるんだい。明日まで待つて居られるかい。」

茶目「でも旦那はお留守ですよ。大將早まりましたね。はて、然うまでも欲しいもんかなア。もし此茶目吉が若旦那なら、談話を聞いた時に態と落付拂ひますね。ふん然うかい位な事で、鼻の先で笑つて見せますよ。其癖正は胸どきだが。」

多見「ちよッ、又べら〱と饒舌り出しやアがる。併し留守とは少し氣がないな。さア、此一日を何うして暮らさう。」

茶目「先づ茶目吉と飲むですかな。」

多見 えゝ、引込んで居ろ。貴樣の出しやばる幕ではないわ。」

爲子、花子、此間何をか咡合ひ、肯首合ふと、急に打つて變つた調子で、

爲子「松崎さん、」

花子「もし松崎さん、」

多見「お出なすつた。へん、又空模樣が變つて來たかな。」

爲子「もし、」

花子「もし／＼、」

多見「はて、其電話は最う切れた筈だが。」

爲子「あれまア何うしたといふんですねえ。」

花子「本當に、松崎さんにはうッかり御冗談も言はれませんねえ。」

爲子「なにね、態と那麽事を言つて居らつしやるのかも知れないよ。」

花子「然うねえ。そりや松崎さんの事だから何とも知れませんよ。」

爲子「松崎さん、」

花子「あれさ松崎さん、」

多見「いやはや恐ろしく流行つて來たぞ。はて、持つべきものは伯父だよなア。」

爲子「あれさア一寸、」

花子「まア、お聞きなさいましよ。」

多見「はア、そりや聞くには聞きますがね、御覽の通りの仕末で、此方も一足飛びに飛上がるやうな事になつて見ると、花子さんぢやア少し不足だね。」

爲子「あれ、那麼事を言つて又お調戯なさるよ。」

花子「本當に憎らしい方だわねえ。」

爲子「花子や、些少たしなめてお上げよ。」

花子「松崎さん、」

ト立上り、衝と寄つて手を捉へ、

花子「貴方冗談ぢやありませんよ。」

多見「ヤツ、押掛け女房とは恐入つた。此鹽梅ぢやア強請り込みさうだぜ。」

花子「あれ最ういゝ加減にして下さいよ。まア何でも可うございますから、宅まで入らつしやいよ。」

爲子「おゝ、それ／＼、松崎さん、實はね、今日は貴方をお迎ひに出たのですよ。」

多見「いやはや、恁うも變るものかな。持つべきものは何うしても伯父かい。茶目吉、此通りだ。」

茶目「若旦那、何ですか大分味ですね。茶目吉拜見させられるのは少し役不足です。何とか片を付けて下さらなくツちや、兎に角目障りですな。」

爲子「花子や、可いから直にお連申しなよ。」

花子「承知して居ますよ。さア松崎さん、最う何と仰有つても駄目ですよ。はい、お約束が違ひますからね。參りませう、お立ちなさい。貴方、此手が恁う搦んだら、最う離れッこはありやしませんよ。」

多見「はて、恁うなると惡くはないがね、」

爲子「花子や、其處だよ。」

茶目「若旦那、其處ですよ。」

多見「茶目吉、何うしやう。」

茶目「何うともそりやアお心次第、こりやア茶目の力には及びませんな。」

花子「あれ、いつまで思はせ振をして居らつしやるんですね。さア最うい丶加減にして行きませうよ。本當に最う、離さうッたつて離れやしませんよ。」

多見「へん、金氣のある中はかね。」

花子「知れた事ですわね。」

多見「ヤッ、それぢや一生だ。茶目吉、茶目吉、」

茶目「ど、何うなさいました。」
多見「助けてくれ。」
茶目「心得ました。此時茶目吉少しも騒がずです。此處構はずと打拂つてお逃げなさい。跡は茶目キが引受けますよ。」
爲子「えゝ生意氣な、此猪尾助め、」
トどんと當てる。茶目吉脆く尻餅を搗く。爲子花子直に多見治の方へ双方から、
爲子「さア、」
花子「さア〳〵。」
多見「やれ、助け舟え。」
ト三人宜しからず見得、變な引張りで幕。

（三）涌井喜十郎奧

○正面、奧の一間に、今度の候補者の一人、大矢勘之助、先程から待倦んだ姿、大欠伸して、

勘之「やれ待たせるぞ待たせるぞ。座敷の客は未だ歸らないのか、長ッ尻にも程があつたもんだ。尤も俺の來やうも早かつたがな。餘り氣が急いたもんだから、泡を喰つて大早まりに早まつた奴さ。だが早まりもしやうかい。今日の呼出しが來なかつた日にやア、臺灣あたりへ高飛びでもしなけりやならない羽目なんだ。此方の早まつたのも周章て過ぎたが、何も係う皮肉に待たせなくつても可い。これぢや全く遣り切れないよ。跡の樂みがあればこそ、べん／＼と待つても居られるんだが、伯父も伯父だよ。俺の來て居る事は知つて居るだらうに、這麼にぢらして置かないで、一寸でも來てくれてさ。たつた一言で可いんだ。此方おやちやアんと用意して居る。勘之や、いよ／＼貴樣を相續人に。待つて居ました。勿論承知。二つ返事で直

にそれ決つて了ふ。伜や。阿父様か。何うだい、黄金の自動車でも買つて遣らうかな。然うですね、黄金位ぢや未だ幅が利きませんな　それぢや林檎ほどの金剛石でも買はうか。はい、なんなら西瓜位のにして戴きませう。あゝ最う、然ういふ中にも何だか先が見えるやうだ。」

ト次第に夢中になつて來る。此時栗原三四郎、上手の襖を押開き、衝と中へ入つて來る。

三四「ヤア勘さん、」

勘之「おゝ三さんか。ヤ、邪魔な處へ。」

三四「なに、」

勘之「なにさ好く來たといふ事よ。何うした其後は、今日は遊びに來たのか。」

三四「何の、呼ばれて用を打捨つといて來たんだ。」

勘之「え、お前もか。」

三四「何だ。お前も呼ばれたのか。」

ト二人顔を見合せて、互の思はく、首を傾げて、

二人「はてな。」

勘之「むゝ、てッきり俺を目指して來たと思つたに、玆へひよこたんな奴が飛出して來た。一人の跡目に二人の身内、俺か三四か、三四か俺か、此奴は油斷がならないわい。」

三四「いや待てよ。圖星俺だと飛込んで來たら、こゝに先樣がぬッとして居やアがる。何うせ札は此方のものだが、此奴は少し工合が違つて來たわい。」

ト互ひに獨語、勘之助暫くして不意に、

勘之「おい〳〵三さん、少しお前に談話がある。」

三四「私も少し談話がある。」

勘之「まアさ、聞くが可い。今更斷るまでもないが、お前とは親類合だ。默つて居られないから話すがね、實は先刻から、ぢッとお前の相を見て居ると、お前は此處に居ると何か災難があるぜ。私も人相ぢやそれ、一時道樂で天德寺の和尚の處へ通つて、隨分相應に憂身を窶したもんだ。惡い事は言はない直に歸つた方が可からうぜ。危ない。ヤ、恁う見て居る中にも、だん〳〵其

災難が近寄つて來るやうだ。」

三四「はゝゝ、いやお前の鑑定なら先づ大丈夫だ。然う／＼一時お前は那樣事があつたよ。人を見るとは天眼鏡を振廻はして、矢鱈と面の先へ突付けるのだ。何しろ血眼だつたからな。初手は大方、何處かで那麼拾物でもして、落し主でも探して居るのかと思つたら、大違ひで、何うだ一つ見て遣らうと來るのだ。ヤ、思出しても悚然とする。誰しも彼の見て遣らうかには當てられないものはなかつたぜ。親類だけに二段聞きの格で、此方なんぞは人一倍弱らせられたもんだ。惡い病だつたが、恐れるぜ、又ぶり返しかね。」

勘之「な、何を言ふのだ。彼の時だつて俺の爲に、危ない處を助かつたものは幾人あるか知れやしない。」

三四「助かつたのは見て貰はなかつた人さ。捕まつた日には全く災難だからね。」

勘之「へん、兎角けちを付けたがる奴さ。然ういふ風ぢや、折角爲を思つて言つて遣つた事も本當にしないな。可哀相に、それぢや兎ても助かるまいが、見

す見す知つて打捨つて置くのも、親類の好誼に缺けるといふものだ。三さん、血族の中で惡い事は言はない。欺されたと思つて歸つたら何うだい。全くだ。事に依つたら一命に關はるのだ。これが親類の身で默つて居られやうかい。」

三四「有難い。御忠告は如何にも有難い。無上に親類を振廻す處などは、殊に有難い。爲を思つて言つてくれるのだから、決して仇には聞かないがね、」

勘之「え、それぢや、歸るのか。」

三四「處が歸らないね。」

勘之「ヤ、呆返つた男だ。深切づくに係うまで言つて遣るのが、何うして耳に入らないのだ。勝手にしろと言ひたい處だが、併し如何にも氣の毒だ。最う少し此方へ寄り給へ。其方の得心の行くやうに、どれ詳しく說いて遣らう。」

三四「おツと、又講釋かい。澤山だ。最う食傷する位だ。人の事より御自分の方を氣を付けるが可い。陰陽師身の上知らず、憚りながら私の方が見通したせ。其方の身に變があらうとは、不便や全で知らないな。」

勘之「ナニ變があると」

三四「驚いたか、はゝゝ、勘さん、談話があると言つたのはそれだ。何も知らないで高慢な面をして居るのは、いや全く見られたもんぢやいよ。勘さん氣の毒ながらお前の家ぢやアな、今飛んでもない事が持上がつて居るんだ。」

勘之「おい〳〵お前は何か此方の忠告を履違へて、今の腹癒せに私を驚かさうと思ふんだらうが…………」

三四「あれだ。實に仕末に負へないな。お前はそれだから這麼事が起るんだ。おい、確かりしてくれなくッちやア困るぢやないか。賴むぜ勘さん、お前ん處の戀女房は、今何だか見知らない男と、家で小酒盛の眞ッ最中だぜ。」

勘之「えッ、な、何だと。これ、うッかりした事を言つてくれるない。」

三四「噓なら行つて見て來るが可い。私は然も行き道にお前の家へ寄つたんだ。いつもの通り案內なしに、づいと上つて驚いたね。向ふぢや未だ氣も付かなかつたが、私は慌てゝ飛出して了つた。早速知らせる手配りをしたが、此處で遇つたのは何より幸ひだ。勘さん何うする。いや最う、一目ひよ

いと見た時、此奴ア常事でないと思つたね。何しろ平の客とは、全で様子が違つて居るからね。何うだ、逐一に辯じて遣らうか。お前ん處の、それ彼の長火鉢だ。彼奴を間に差向ひだ。何だか知らない小鍋立、箸で挾んで相手の口へ…………。」

勘之「おい、おい〳〵。た、大概にするが可い。」

三四「全くだ。全くだから仕方がない。何うだい。これぢやア此處に居られまい。」

勘之「あツはゝゝゝゝ。」

三四「何だ。薄ツ氣味の惡い。何を唐突に笑出すんだい。」

勘之「いやはや肚の中が見え透くやうだ。矢張歸さう下心。おい三さん、同じ嵌めるなら、最う少し氣の利いた智惠を出すが可い。罪もない女にまで惡名を付けるなんぞは、餘り苦し過ぎて聞いて居る身が氣の毒だ。三さん、最う一度顏を洗つて出直して來るが可い。第一まア人を見て物を言つて貰ひたいね。」

三四「やれ〱、それぢや矢張歸らないのか。」

勘之「知れた事さ。」

三四「ほい何の事たい。」

途端に下手、襖の蔭から、

□「いや二人とも歸つた〱。」

二人「えゝ、」

ト驚いて振返る。同時に襖を開いて、松崎多見治。

多見「樣子は蔭で殘らず聞いたよ。二人とも冗な骨折だ。文句を言はずさア歸つた〱。」

勘之「ヤツ、又一人歸したがり屋が殖ゑて來たぞ。」

三四「おゝ多見さん、お前は全體何の用で此家へ。」

多見「えゝ、何の用とは何を聞くのだ。今日態々呼ばれて來た本尊樣を捕へて。」

勘之「何だ。お前が本尊樣ッ。」

多見「と聞いたら諦めが付いたらう。其方の二人は氣の毒だが實は付合せさ。」

伯父の内意を洩らして了ふのも何だけれど、其期に及んで狼狽かせるのも罪だから、内々好意づくで知らせるんだ。ね、解つたら直に歸つたが可からう。」

勘之「おい、三さん、」

三四「むゝ、勘さん、」

勘之「何うだい此片付けた面付は！　何うも此糞澄しに澄して居る自負ッ氣が有難いよ、無類だ全く。三さん、親類中にも這麼のが有るから堪らないね。」

三四「併しいつまで澄まさして置いた處が始まらない。いゝ加減に引導を渡して遣らうよ。」

勘之「然うさ。這麼亡者は、惡く又執念が強いもんだからね。」

三四「尤も化けて出るには面が拙過ぎるがね。何の道迷はないやうにして遣るのが、何よりの功徳だ。どれ、浮ばして遣らう。」

ト多見治に向ひ、只見て、

三四「おい多見さん、お先眞暗ぢや何も解るまいが、肝心思込んで居る其本尊樣

が、ちやアんと外樣にあるんだからね、然ういふお前こそまア、足下の明るい中に引下がつたが可からう。」

多見「はゝゝ、可哀や其調子ぢやア、全で何も知らないな。ふむ、全體誰だと思つて居るんだい。」

三四「私さ。栗原さんだよ。何う感違ひをして居るんだい。」

勘之「おい、おい三さん、慌てゝ戸迷ひをしちや可けないぜ。寢惚けるにや時刻が早い。多見さん其御本尊は實は私だよ。」

三四「な、何を言ふのだ。戯けちや可けない。勿論私さ。」

勘之「いゝや私さ。」

三四「いんや私だ。」

多見「馬鹿な何を血迷つて居るのだい。見つともない。大抵にするが可い。二人は知るまいが今度の事は、疾うから私と決つて居るのだ。」

勘之「何だ。そりや此方の事だ。」

三四「ちよッ、此方だと言ふに。」

多見「いやさ俺だよ。」
勘之「俺だ。」
三四「えゝ、俺だといふに。」
ト競合つて悶着する。此時、涌井喜十郎、奥から出てぢろりと一目、
喜十「何だ、騷々しい。何うしたのだ。」
三人振返つて吃驚。
多見「ヤア、これは、」
三四「伯父様、」
勘之「ヤ、豪く待ちましたぜ。」
喜十「おゝ、皆まア坐るが可い。何をまご／＼して居るのだ。」
多見「はい、それが其…………。」
三四「いゝえ多見治や勘之助が、何でも私でなくつてはと、二人で無理に申しますので……　……。」
勘之「いゝえ伯父様大違ひ。有りやう多見治と三四郎が、是非私にと申します

ので………。」

多見「飛んだ談話だ。伯父様、全で違つて居ます。三四郎と勘之助の二人が、ここは何でも私にと、何と言つても聞きませんので………。」

三四「いえ私で、」

勘之「なに私で、」

多見「いや私で、」

ト互ひに爭ふ。喜十郎づらりと見廻して、

喜十「そりや何の談話だい。」

勘之「はい。」

多見「何うも。」

三四「誠にはや。」

喜十「これ、最少し落付いてくれんでは困るぢやないか。今日は血族のお前達に、眞面目な相談があつて呼んだのだ。」

勘之「そら來た。」

多見「待つて居ました。」
三四「心得て居ります。さア、お話しなすつて下さいまし。内々御返事も最う、
　ちやんと用意をしてございますので。」
喜十「はて恐ろしく又手廻しが宜いな。そりや又何ういふのだ。」
三四「いえなに此方の事で。して其今日の御相談といふのは、」
喜十「むゝ、いや三人とも態々呼立てゝ氣の毒だつたが、各自用のある中を好く
　來てくれたよ。」
勘之「何の私共の間で、那樣御會釋に及びますものか。」
多見「それよりかまアお談話の方を早く。實は固唾を…………。」
喜十「何だと、」
多見「なに其、か、かたづけ物でも致しますかな。」
喜十「何だ妙な事を言ふな。」
三四「多見さん、何うしたもんだ。固唾を飲んで待つて居るなんて…………。」
多見「えゝ默つて居ろい。胸氣な奴め。」

勘之「伯父様、這麼者などにお構ひなさらないで、其方のお談話を願ひませう。」
喜十「むゝ、まア三人とも、わや〳〵せんで能く聞いてくれよ。扨なア、俺も老る年でな。」
勘之「御尤もで、
三四「しッ、其先だぞ。成程、處で、」
喜十「いろ〳〵末を考へて見ると………。」
多見「何うでも多見治を跡目にと………。」
勘之「何だ。俺を差置いて何を言ふのだ。」
多見「ちよッ、餘計な口を利くな。貴樣等の知つた事ぢやないわ。」
喜十「これ〳〵、喧嘩をしては困るよ。」
三四「いや、何うも持餘しもんだ。伯父様實に仕末に負へませんな。慾が手傳ふと這麼者かと思ひますよ。」
勘之「へん、惡く取澄しやアがつて、額を見ろ。まざ〳〵と書いて有らア。」
三四「何だ。星を指された口惜しまぎれに、俺の方まで突掛つて來るのか。た

しなめ、たしなめ。御人體が下るぞ。」

勘之「此奴、一人で好い子になりアがる。」

喜十「これ、勘之助。」

三四「態を見ろ。がりを喰つた。」

喜十「三四郎も默らつしやい。」

三四「はい、何うも………。」

勘之「それ見た事か。はゝゝ、べそを掻くない。」

喜十「いや困つた奴等だ。まア少し靜かにして談話を聞けよ。勘之助と三四郎には手紙で言つて遣つた通り、多見治には使で言つて遣つたがな、外でもない俺の跡目の事だ。知つてる通り一人も子供がないに付いては何うでも養子をせんではならんのだが、差當つて此跡を引受けてくれる者だ……。」

三四「おツと、皆まで仰有るには及びません。此三四郎が引受けました。萬事私にお任せなすつて………。」

多見「ちよツ、又差出やがる。」

喜十「待て。一通り聞け。其處でな。何せい血の近い三人の中で、何うか此家を繼いで貰ひたいと思つて居るんだが…………。」

三四「解りました。ずんと能く解りました。成程同じ甥といふので、三人恨みッこのないやうに呼んで置いて、詰りは矢張私にといふお思召、」

喜十「扨てそれがよ…………。」

勘之「いや讀めました。かねてのお含みは心得て居ります。自分で言ふのも妙なものですが、私なら其處は大丈夫で、御安心なさい、勘之助でございます。」

喜十「いや其處だて………。」

多見「はゝア、お言葉の濁る處を見ますと、二人ながら落第ですかな。宜しうござります。折角のお思召ですから、有難く御請けを致しませう。」

喜十「むゝ、然う言つてくれるのは忝けないがな…………。」

三四「何は然れ。第一に德用なのは私で、」

勘之「揃つたのは私で、」

多見「役に立つのは私で、」

三四「なに心掛の好いのは………。」

勘之「いや脱りのないのは………。」

多見「いやさ働きのあるのは………。」

喜十「むゝ、むゝ〳〵、氣に入つた。氣に入つた。」

三四「占めたぞ。」

勘之「此方だ。」

多見「えゝ此方だい。」

三四「伯父樣、私が、」

勘之「私、」

多見「いや私が、」

喜十「有難い、伯父と思へばこそ然う言つてくれるのだ。併しなア、恁ういふ相談をするに付いては、一應俺の內情も話して置かなけりやアならんがの、實は俺も思はん事で續けて恐ろしい損失をしてな………。」

三四「えゝッ、」

喜十「持込んで居た財産は、疾うの昔に失した仕末、」
多見「ヤツ、そ、それは。」
喜十「未だ其上に負債の上塗、いやお前達だからこそ話すがな。實は最う此住居さへ、近々人手に渡して了はねばならんのだ。」
勘之「ひやアツ、むゝう。」
喜十「な、然うした羽目になつて居るんだ。いや流石にな、他人でないお前達だけに、皆が俺への芳情は、實に何とも言ひやうがない。」
多見「三さん、」
勘之「多見さん、」
三四「勘さん、こりやア何といふ事だい。」
多見「泣きたくても、聲が出ないね。」
勘之「怒りたくも手が出ないよ。」
喜十郎落付拂ひ、
喜十「處で今お前達が、我勝ちに引受けてくれた相續の件だがね…………。」

多見治だしぬけに、

多見「あ痛ッ、〳〵、〳〵、」

喜十「これ、ど、何うしたのだ。」

多見「はい、な、何ですか急に胸が…………。」

三四「あ、痛ッ、〳〵〳〵〳〵、」

喜十「ヤッ、三四郎、お前も、ど、何うかしたのか。」

勘之「ど、何うしたのですか、俄かに係う下ッ腹が…………。」

勘之「あッ、あ痛々々々々ッ。」

喜十「やれ、勘之助お前もかッ。ど、何處が痛むのだ。」

勘之「はて、何處にしやうかな。」

喜十「なに、」

勘之「鳩尾、鳩尾、鳩尾です。」

喜十「何うしたんだ不意に、皆が皆、困つたもんだな。」

多見「いや私は、失禮ながら御免を蒙つて、歸つて手當を致して來ます。」

三四「私も失禮ながら、」

勘之「私も此仕儀で、何分お談話にも差支へます。御免、中坐を…………。」

喜十「むゝ、是非もない。それぢや手ッ取早く、多見治といふ事に決めて了はう。」

多見「あ痛ッ、あ痛々、々、々、々ッ。」

喜十「然うだ。多見治が打つて付けだ。」

三四「然樣々々〱、いやこりやア多見治に限ります。」

勘之「全くで、實は當人も望んで居ますので。」

喜十「むゝ、二人も然ういふものだから、可し、いよ〱多見治と決めた。多見治、それぢや然ういふ事にな。」

多見「飛んでもない。ど、何う致しまして、恁ういふ際に、私如きが及びもない事で。あ痛々、々、々、々ッ。」

喜十「然うか。それぢや三四郎としやう。」

三四「あ痛々、々、々、々ッ。」

喜十「多見治、こりや何うだらうな。」

多見「適任ッ、いやも三四郎なら實に切つて嵌めたやうなもので、」

喜十「それは何よりだ、三四郎、それぢや貴樣を跡目といふ事に、」

三四「あ痛々ッ、ちよ一寸お待ち下さい。私なんぞ兎ても仕樣がありません。平に御免を蒙りませう。あ痛々ッ、あゝ苦しい。」

喜十「むゝ、それぢや勘之助の外にないな。」

勘之「ヤッ、わッ、」

喜十「何だ何事だ。」

勘之「はい、矢張鳩尾です。わ、私が跡目になぞと、とても〳〵、こりや飽までも御辭退致します。あッ又鳩尾が、むッ、堪へきれなく痛いッ。」

喜十「むゝ、勘之助も可かんといふ。三人共それぢや斷るのだな。仕方がない、外へ決めやう。」

勘之「やれ〳〵助かつた。」

多見「ヤ、いゝ鹽梅に痛みが薄らいで來ました。」

三四「いや私も御同然だ。」

喜十「然うか、其は何よりだ。時に其相續だがな。」
多見「ヤッ又ですか。おゝ、そろ〳〵又痛み出して來たぞ。」
三四「天氣模樣で此方も然うだ。」
勘之「いやも御多分には洩れませんよ。」
多見「併しぶり返さない中に引退らうかな。」
三四「え、何方がさ、痛みの方か相續か。」
多見「なに何方も同じ事だい。」
喜十「待て〳〵、最う直だ。實は外に一人な、家の相續を喜んでしやうといふ者があるのだ。」
多見「いやはや恐しい變者もあつたものですな。」
三四「はてな、廢りはないもんですね。」
勘之「誰ですい。其茶人は。」
喜十「誰でも可い。併し其男が、俺の跡へ直つた處で、何もお前達に異存はあるまいな。」

三四「はい、それは最う………。」
勘之「異存處か、此方は白羽の矢を免れたんですからな。」
多見「それこそ祭上げます。それでも無かつた日には、いつ何時又鉾先が向いて來るかも知れませんからな。」
喜十「むゝ、それなら最う言ふ事はない。處で一寸知らせるがな、先刻俺の言つた、家の財産の失なつた事は、實はありや皆嘘だよ。」
三人「ヤア、ヤア、〳〵〳〵。」
喜十「なにさ、お前達の了簡を試す爲に言つたのさ。」
多見「を、伯父さん、」
三四「お願ひです。」
勘之「お助けです。」
トばら〳〵と寄て縋付く。喜十郎振拂つて、
喜十「えゝ最う、心底は見え透いたわ。」
勘之「それをお慈悲に、」

三四「これ、此通り、」
多見「拜みます、奉ります。」
喜十「ふむ、今更何の眞似だい。最うお前達に用はない。痛みは何うした。はゝ。むゝ、先刻から歸りたがつて居た、さア〱直に歸つて貰はう。」
三人「ヤア、」
トばつたり倒れる。
多見「伯父さん目を廻します。」
三四「此方でも廻します。」
勘之「申遲れました此方でも。」
喜十「はゝゝ、いゝ態だ。それから何うするのだい。」
多見「助けて下さらなきや死んで了ひます。」
三四「死ねば恨んで取憑きます。」
勘之「取殺します。」
多見「祟拔きます。」

喜十「えゝ、五月蠅いわい。」ト奥を振向き、「これ皆來い。」

大勢「はい〳〵。」

家の大勢出て來る。

喜十「それ、此奴等を撮出して了へ。」

大勢「合點ッ、」

ト大勢、寄つて集つて三人を摑出す。跡は大笑ひ、一騷ぎあつて、幕。

澪標

（一）

門には陶札で小野寺元衛とある。小石川安藤坂下を西へ一町ばかり先、外を高塀は、庭の樹深い家の奥、五月始めの若葉影、四時の日射の未だ高く、緑に走る前栽を前に、主人夫婦は、茶の間の緣に近く、膝を向合せて今談話の半ばであつた。

元衛は四十恰好の、色の黑い、でッぷりした男、伊勢物の茶の萬筋の袷に、稍古着した上田の鐵無地の羽織、むつくり高い膝の上に銀の如心張の煙管を持込んだ手を載せて、小脇に置いた手提の煙草盆の、刻葉を片手に捻掛けて居た。妻の靜子は十一二も年下の、髮の濃い、色白の細面、山繭織の龜甲綛の袷に、繻子と繻珍の腹合せの帶を締めて、冷しい張のある眼を、何心なく手近の高野槙の方へ振向けながら、談話の跡を追つて何やら言はうとした。途端に、

「や、歸つて來たな。」

と不意に首を上げた元衞は、煙草を詰掛けた儘で耳を欹てた。言はれて靜子も同じく耳を引立てたが、

「おゝ、貞男さんですよ。」

と何か知らず事ありげな態、二人眼を見合せた處へ、中の間から緣側傳ひに、元衞の異腹の弟の貞男といふ、二十五六の、水際立つた男振、兄ほどには肥滿して居ないが、見るから强壯らしい見事な體格、秩父の袷に同じ羽織、餘り取繕はぬ風で、つか〳〵と其處へ來たが、中に居た二人を見ると、

「只今。」

とばかり挨拶して其儘彼方の自分の室へ行かうとした。

「貞男、」

と振向きながら呼止めた元衞は、眼で追ふやうにして顏を見上げながら、

「今お前の歸りを待つて居たのだ。少し話す事があるから此處へ入つて來てくれ。」

貞男は訝かしげな眼に兄の顏を見て、一寸異樣な面色を見せたが、何氣なくト問ふやうに、

「は、何ですか何か、用が出來たのですか。」

言ひつゝ中へ入つて來た。元衞は首肯きながら、

「むゝ、まア坐れ。」

と膝を向直す、只見て會釋振りに靜子は坐を開きながら、

「貞男さん、貴方の思寄らない事なんですよ。」

「え、」

と貞男は聞咎めて、其儘兄の方へ、

「何です、兄さん。」

「むゝ、まア聞け。實は、今しがた此處へ山尾の叔母が見えたのだ。」

「はア山尾の叔母が…………。何ういふ談話でした、其後の村子の容態は。」

元衞は引取るやうに直ぐ、

「それだ。其事なんだがな。何分にも衰弱が甚いので、今の有樣で押して行

つたら、最う一週間は持つまいといふ事だ。」
「えッ、那樣事になつたのですか。そりやア實に氣の毒だ。此間見舞に行つた時は未だ然うまでにも見えなかつたが、」
と流石血續きの、何さま悼ましげの眼色で、ぢッと前を見詰めたが、
「叔母は嘸落膽して居たでしやう。」
「そりや言ふ迄もない。何せえ親一人子一人の仲ぢやないか。去年は叔父に死なれて了ふ。今歳は村子に先立たれる。叔母の身になつたら何うだらう。先刻も實に見るに忍びなかつたよ。」
「本當にねえ、お氣の毒のやうに窶れてお了ひなすつてね、」
と靜子も傍から口を添へて、
「何ですか恁う、お談話をして居るのも痛々しいやうでしたよ。」
「然うでしやうとも。彼の叔母の事だから何の位氣を傷めたか知れますまい。」
と兄に向つて促し顏に、

「兄さん、處で僕への談話といふのは、」
「むゝ、其何だ。村子も最う、いよ〳〵助からんといふのでな、叔母も此上は、せめて息のある中に、何か望む事でもあれば、何うか叶へさせて遣りたいと思つて種々と聞いたさうだがな、村子は只、誠に飛んだ御心配を掛けて濟みませんとばかりで、叔母の事ばかり言つて自分の事は何も言はない。處が何うも其時の樣子に何か胸に持つて居るやうな風が見えるので、叔母は猶さま〳〵に賺して聞いたのだ。村子はそれでも未だ、容易には言はなかつたが、終局に到頭今迄隱して居た事を打明けた。」
「何ですか。それは。」
「それがな、此處で打付けに言ふのも何だが、村子は疾うから其、」と苦笑の形で、「お前に其、何だといふのだ。」
「えゝ、」
と貞男は目を睜つたが、色に出して術なさうに、
「そ…………それは何うも…… ……。全く嫂さんの言はれた通り豫想外の事で

…………。」

元衛は煙管を置いて腕を組合せながら、

「いや、外ならん時だから叔母も來て割つて頼んだのだし、俺も這麼談話をするのだが、村子も知つて居る通り、隨分贔屓目に見た所が、先づ類のない不縹緻だから自分でも身に引けて是迄臆氣にも出さなかつたが、今度は兎ても最う、長くは生きて居まいと思つたので、到頭口に出したと見えるのだ。何分彼の村子だけに如何にも可哀相に思ふ。よく〳〵自分を抑へて居ると見えて、生きて居る中は知らせてくれるな。死んだらせめてと迄言つたさうだ。」

「併し僕がそれを…………。」

と貞男の、堪へず何か言はうとするのを抑へて、

「まア聞け。其所で叔母は、何分最う命のない者の事だから、若しお前が肯いてくれなかつたら從兄妹同士の情愛を思つて、譃でも可いから來て氣の濟むやうな事を言つて遣つて、目を瞑らしてくれまいかと言ふのだ。」

「で、兄さんは何ういふ返事をしたのです。」

「兎に角歸つたら能く言はうと言つて置いたが、それよりは當のお前の挨拶だ。お前は何う思ふな。」

貞男は答へかねて暫く言葉に躓くのみであつたが、二人に顏を双方から見入られて、退避ぎながら、

「然う…………何と言つて可いか、實際其…………何うも困つて了ふな。」

「むゝ、併し村子は今死ぬと言ふ場合ぢやないか。」

「いや、それは僕も、如何にも痛心すべき事には思ひますが、併しそれとこれとは別物です。那樣、僕に何うの恁うのと言はれたつて、僕が如何ともする事は出來ないので。」

「なに出來ない事が有るものか。」

「何うして。」

元衞は態とであつたか、手もない調子で

「解切つて居るぢやないか。快く肯いて遣ればそれで可いのだ。」

「えッ、それぢや今現に起つて居る、僕の結婚の談話は何うするので。」

「なにそれはそれさ。」

「そ、那麼事を言つたつて、僕は自ら欺く事は出來ない。」

「え〻、那樣暢氣な事を言つて居る場合かい。相手は死掛つて居るのだ。」

「併し然う言はれた所で仕方のない談話で、怎ういふ事が、無理に何うしやうと言つて出來る譯のものではないぢやありませんか。假に貴方にした所が、若し………。」

「待て。よしお前は何うで有らうとも何の彼のと今贅澤を言つて居られる時ではない。お前にも唯つた一人の從妹ではないか。其從妹の最後が最う迫つて居る事を考へて遣れ。これが一生の思出になるのだ。村子の身になつて察して遣れ。那樣變な顏色をして居る事はない。まアさ、お前にしてからが、眞底人に思込まれて決して惡い心持はしまい。」

「戯謔ではありませんか。」

「誰が戯謔を言ふものか。此所は他人でも情を酌んで遣らねばならん所だ。貞男、お前次第で村子は死切れないぞ。」

「…………………。」

靜子は先刻から口も出さず、二人の談話を聞きさして居たが、此時其優しげな眉を上に、星のやうな眼を振向けると、

「貞男さん、それは貴方のお氣の進まないのは、其筈の事もお有りなさるでしやうけれど、餘所の方でない村子さんですのに、何より最うむづかしいといふのですもの。何の道打捨つて置く事は出來ますまいが。」

「さア、それだから弱つて居るのです。」

「貴方、功德ですわ。何とかしてねえ、僅かの中でも喜ばせるやうにしてお上げなさいまし。」

元衞は不意に又、

「何の道見舞には行くだらうな。」

「は、それは無論行きますが…………。」

「むゝ、それも早いが可いぞ。なに、跡に面倒の起る譯ぢやなし厭ならせめて氣休めでも言つて遣れ。其所は人情だ。俺なら進んで假祝言位はして遣る

か。」

貞男は眉を顰めながら、ほのかな笑を口元に、

「貴方は自分の事でないから、何の事もなく言つて了ふけど…………」

「はゝゝ、お前の氣も知らないか。むゝ、兎も角悪いやうにはしまいな。」

「はア、それは。」

元衛は跡を言はせず、談話を切上げるやうにして、

「可し。それぢや兎も角行つて遣つてくれ。」

と其儘靜子に、

「靜、何か見舞物を心配して遣つてくれ。」

（二）

磨立てた八疊敷の座敷を潰して、裾を引廻らした屏風の中、下に黄八丈の敷蒲團を重ねて、釣夜具の色の鮮やかなのも、物とはなしに悲しげな姿で、病細つた身を弱々と、血の氣の褪せた骨立つた顏の削つたやうな頰先の影を深く、亂れ髮に高枕して居るのは、此家の一粒種の村子といふ、更けて見えるが二十前。

暮れかけてから程もなく、外は名殘の光に未だほの白く見えて居るが、雨戸は最う繰引かれて室は燈火の夜の影、宵も此處ばかりは夜更のやうなのである。

枕元には、村子に久しい馴染の女中、秀といふ三十一二の色の小白い、ずんぐりとした女、聞けば十二の年から傳女に來て、一旦餘所へ此家の世話で嫁付いたのが、亭主に不慮の事で死別れてから、又舞戻つて來たのだといふ。罪のない、忠實々々しいのが、一月餘りの晝夜の看病にも、疲れも見せず氣を盡して、今の程すや／＼と寢入つた村子に、ほッと一休みの息をつきながら、脇に坐つて居た母の直枝と、聲を憚つてひそ／＼と、

「いゝえね、貴方の行らしやつた跡でも、到頭阿母様は行つてお了ひなすつた。本當に言はなければ可かつたのに。」と繰返しては仰有るのでございますよ。彼方の所思をお氣遣ひなさるのかと思ひますと、本當にお可哀相でなりませんでしたが、それでも種々とお力を付けるやうに申しましたら、ちッと何かしら考へて居らつしやいましたが、終局にね、何うせ最う死んで行くのだから、せめて聞いて戴くだけ戴いて置かう。秀も何うぞ笑はないでねと仰有つて、それから暫く默つて居らつしやいますから、何うなさいましたかと、思ひますと、いつか最う泣いて居らつしやるのでございますよ。」

「まア、泣いて、」

「種々とお考へなさるからでございましやう。何を申すにも先のお有りなさらない事ですから、一刻でも早い中にお望みの叶ひますやうにと存じては居りますが、今のお談話の御様子では、小野寺の若旦那様は其御縁談の方へ………。」

「然う、貞男もねえ、大層それを望んで居るといふ事だから、押付けに何うとは

言へないがね、若し承知してくれないまでも、村は未だ何も知らないのだから、先のない僅かの間を、目を瞑つて何とか氣の濟むやうな事を言つて遣つてくれるやうにと頼んでは置いたがね。」

「左樣でございます。無據ければまア、然うでもして戴くのでございますが、ならう事なら恁ういふ時でございますから……………。」

と言掛けた時、村子は不圖眼を開いた。只見て秀は、談話を差置いて其方へ、

「おや、お目覺めでございますか。」

と目近く膝行寄る。村子は眼を燈火の方へ押向けたが、細い、憑りのなさゝうな聲で、

「最う夜になつたのねえ。」

と言つて思出したやうに、

「阿母樣は?」

「はい、今しがたお歸りでございます。」

「おや、此方に居たもんだから氣が付かなかつたのだね。」

と直枝は前へ進出して、顔を差窺きながら
「なに歸りに濱町の太田の方へ寄つたもんだから、今迄手間を取つたんだがね。村や、何だよ、彼の小野寺の方はね、皆好い談話になつたから、何も氣をかねないで私に任せてお置き。」
「濟みません。本當に濟みません。全體親の前で、那麼事が言はれた譯では有りませんが…………。」
「あれさお前、那樣身體で居て、餘計な心遣ひをするには及びません。何も私が許したのだから最う可いではないかえ。」
「はい、其は阿母樣も、私が最う這麼になつて了つたのですから許して下すつたのでしやうけれど…………私は、自分で本當に濟みませんので…………。」
直枝は態と聲を強めて、
「何だね、最う那麼事を思ふのは止してお了ひ。それよりか事が恁う、お前の望む方へ近寄つて來たのだから、最つと氣を張つて引立つやうにしてくれなくつては困るぢやないかね。病氣が癒つたら直ぐ、屹度願ひは叶へさせて上

げるから、」

村子は押して何か言はうとしたが、言敢へず聲を消して、暫くして只、

「濟みません。濟みません。」

とばかり、寢ながら額突くやうに重く頭を動かした。其時次の間から敷居越しに、

「奧樣、あの小野寺樣の若旦那樣がお越しになりましたが、」

と膝を落して片手支き、秋といふ出額の、睫毛の長い二側瞼の、十五ばかりの小間使が、何も樣子を知らないので、いつものやうに其儘取次いだ。

座の三人は、それと聞くと、いづれもはツと、心々の眼色に動いたが、眞先に振返つて直枝は、

「おや、最う來てくれたのかえ。」

言ふなり膝も置かせず、直に座を立つて、走つて迎へるやうに出て行つた。秀は秋の後姿の、跡から襖の彼方になつた時、聲さへ何時か調子付いて、いそ〳〵と顏を近く、

「お孃様、お出でになりましたよ。嘸お嬉しいでございませう。」

と直と見る。窶返つた村子の沈んだ蒼白い面に、はッと色のちらめいたのは、只一時の事で、跡は惱ましげに、流石に併し眼は向けず、

「あゝ秀や、最う那麼事言はないでおくれ。私やそれ處ぢやないのだから。」

「まア、何でございますね。貴孃、恁ういふ時でございますもの、甚麼事でも貞男樣に仰有つて、些少でもお氣の紛れるやうになさらないでは可けないぢやございませんか、」と勢込んで、「然うすりや詰りお望みの…………。」

村子は不意に聲を細りながらも角を見せて、

「秀、止しておくれといふのに。」

と言つて靜かに又、

「私は這麼大病で居るのではないかね。それに、」と淋しげに、「私は世間の方達と同じやうなのではないのだから、」

と伏目になつたが、跡を追つて

「あのね、」と聲を切つて、「あの何だけれど、其處の燈光をね、直に私の方へ射

さないやうしておくれな。」
「はい〳〵、それぢや此方へ置きましやう。」
と心得顔に二三尺片寄せるのを見て、
「有難う。」
と眼顔に會釋しながら、何か言難さうに、
「あのそれからね、お前は些少の間此處を遠慮して居ておくれな。」
秀は只見て直に首肯いた。
「はい、それは最う、前から能く存じて居りましたので、貴孃のお心をも知らないやうに、お邪魔を致します氣は些少もございませんでした。只お孃樣のお力のお付きなすつたお顏を見たいと思ひましたから、つい那麼事も申しましたので。」
「いゝえ、なにもお前を邪魔にするのぢやないけれどね…………。」
秀は元氣よく、態と晴やかに、
「おほゝゝ、まア宜しうございます。跡で澤山に承はりましやう。樂みにし

て彼方へ行つて居ります。では御免遊ばせ。」とそこ〳〵にして座を立つた。村子は後影を見送つて、軈て眼を引くといつか烈しい胸の轟きを、衰へた身に犇と覺えて居る。盜むやうに眼のほとりへ、再び色がさしたかと思ふと、影は亂れて、物悲しげに細つた糸のやうな手を胸に押當てゝ、枕に顔を打沈めたのであつた。

猶其間を十五分。

室を隔てゝ、母と其人とは、何をか暫く話合つて居たが、やがて立つた氣勢がすると、近づく足音、はッと思ふ隙もあらせず、襖を開いて次の間へ、直枝を先に押續いて、影から流入るやうに貞男の姿が、火影を浴びて衝と前へ進寄つた。

（三）

只其注意を喚ぶまでの言葉で、勿論何の意味もないのだが、さながら奥から絞出されたやうに、聲音は殊更に低かつたけれど、

「貞男さん。」

さや〳〵と若葉の上を流れて來た風が、窓には音もせず、圍んで立つた宵闇の中へ消込んで行つた時。

恰も庭越しに、突として起る隣家の素謠、鞍馬天狗と聞きなされたが、遮那王殿の金切聲と、僧正坊の鵺のやうなが、主客の酒興に入亂れた時。

察し心の直枝は今一わたり座の談話が切れると、跡を貞男に任せて次へ立つて行つた。

貞男は別に心に期して居る事があつて、到底其意志を飜へして了ふ事は出來ぬとは思つて居るが、流石目のあたり、此幾日を限りといふ衰へ果てた村子の姿を見ると、情として其死を早めるやうな事は言へなかつた。今此場合、假令

口先だけであつても、村子が其爲に快く世を終る事が出來るといふならば、進まぬながら矢張然うにでもせねばなるまいか、併しそれが、果して眞に村子の好意に報いやうといふ仕方であらうか。と未だ胸にとつおいつ繰返して又、兄の言葉、叔母の賴み、此室へ來る前に彼方の間で、叔母に引受けた事などを思合せながら、暫く接穗なく、ぢつと前に打向つて居た。

村子は自分でも最う餘命の幾程もないのを覺悟して居るので、心竊かにこれを思出にと弱る力を奮起して、暫し病も忘れるばかり、動ともすれば臆れる心を只一筋に取直して居たが、無言の跡を、堰かれた水の出口を求めて、一口先へ恁う切出した跡、流石打付けに言ふ勇氣もなく、何と思つたか稍涙含んで、

「本當に、本當に好く來て下さいました。那麼事をお聞きなすつたら、最う來ては下さるまいかと思つて居ましたに。」

貞男は意を測るまでもなく打消した。

「飛んだ事を言ふ。いや全く知らんかつたから、と言つたら情の無いやうに聞えるだらうが、恁うして親類合で餘り近しく〱して居るから、實の處妹のやう

に思つて居たので、然ういふ事は全で考へやうともしなかつた。

と隔てのない態に、

「併し村さん、私は決して仇には聞かなかつたよ。」

「え、」

と村子は耳を疑ふやうに、思はずさと眼を上げたが、思の色を其儘聲に、

「あゝ私、其お言葉で澤山でございます。思通りお目に掛かれたのさへ過ぎたやうに思つて居ますのに、今のお言葉で最う思殘す事は有りません。堪忍して下さいまし。全體私のやうな、這麼人並でない姿をして、然ういふ事を思ふといふのが身の不幸なので詰りは悲しい思ひをしなければならない位の事は存じては居りますが、那樣事に氣の付く時分には最う私の心は自分にも何うにもならないやうになつて居ましたので、思ふと長い事ですが、言はずに一人で切ない思ひをして居ましたのは、あゝ最う何年になるか知れませんので。」

と息を繼ぎ〳〵に、此所まで聲を續けると、言葉に連れて過去を思出したが、ち

つと彼方に据ゑた眼を屢叩いたと思ふと、たばしるやうに、いつか涙が枕を傳ふのであつた。貞男は手を差置いた儘、物も言はず打目戍つて居たが、

「村さん、何故それを一言でも前に言つてくれなかつたのだ。お前と私との間で、假令結果が何うとあつたにした所が、那樣氣をかねるといふ事があるものか。然うと知つたら、全くだ、何うでも取る道はあつたものを、今更言つた所で仕樣のない談話だが、何方にしても這麼時に慌てゝ來るやうな事はしないで可かつたのだ。」

何樣然うと以前に知つたなら、自分の心の餘所に移る事はなかつたかも知れぬ。容貌などで人を左右するやうな事はせぬ積りだが、よし進まぬにした所で、それほどの事を犧牲にするのを躊躇するやうな自分ではないのだ。時は過ぎて、再び此心を動かす事の出來ぬやうな、深い關係を餘所に結んで了つた今になつて、恁かる場合に身を置かせた、返らぬ過去を心ない事に思ふのだ。とばかり中の思ひに深く、眉根に曇る面色を、村子はそれと讀む由もなく、

「ですがそれを、私のやうな者の身で、何う臆面なく言出すことが出來ましや

う、それが出來ます位なら…………。」

跡は得言はず、枕に押當てゝ居た頭を力無げに、眼を沈ませて了つた。貞男は座ろに身を近く、

むゝ、まア過ぎた事は仕方がない。それにしても早く病氣を癒してくれんでは困るが、お前も何うか身體を厭つて、自由に談話の出來るやうに、一日も早くなつてくれなくつちや可けない。私も其時には、」

お前に能く、聞いて貰ひたい事もあるのだから、と言掛けたが心付いて、

「なにね、」と打笑むやうにして小聲に、「是迄の悦びとは違ふといふものだから。」

村子は聞入つたが其儘物悲しげに頭を掉つた。

「いゝえ、いゝえ、私は最う兎ても癒らうとは思ひません。それでなくて今度の事も、母にさへ言出すのでは有りはしません。只此上のお願ひは、目を眠る時貴方と母とに能くお別れをして逝きたいと思つて居ますばかりで…………。」

「何を、那樣氣の弱い。確かりしなくつちや可けないぢやないか。なに身體

が衰へてくると、種々な事を思ふものだが、那樣大切な容體ぢやない。奮つて元氣を出すやうにしなけりや仕樣がない。」

「はい、ですけれど…………。」

「なに大丈夫さ。いくら村さんが一人で然う決めても、醫者が然うはさせんからね。」

と言つて不意に調子をかへて、

「いや併し、這麼に談話をして可いかね。なにも今に限つた事ぢやないのだから、少し休んで又話さうぢやないか。知らずに居たが疲れたらうに。何うだね、氣分は。」

「はい、いゝえ何とも有りはしません。怎うして息の切れますのは、お談話をしないで居ても同じなのですから、あの何うぞ此儘で…………。」

「だが身體に障ると惡い。跡で弱つては何にもならない事だから、まア暫く休んでくれた方が可い。私は彼方で、叔母と少し話して居るから。」

精氣を氣遣つたのもあるが、一つには又、心ならぬ今の態で、まざ／＼と痛々し

い姿を長く見て居るに忍びないので、跡を言葉短に折しも外出先から歸つて來た看護婦に代らせて、立つて茶の間の直枝と秀の潜めきながら話して居る方へ行つた。

「おや、」

と秀は直に座を設けて、退つて脇に差控へた。直枝は迎入るやうに、急がはしく膝を押向けて、

「おゝ、貞男、濟まなかつたね。彼女は嘸悦びましたらう。先刻の談話で見ると、お前にも氣の毒でならないけれど、何分にも此僅な中だから、繋がる縁でお前も不承してねえ、幾重にも何うぞ頼みますよ。」

「は、其事は御念には及びません。實は今、餘りに氣を使はせて跡で又甚い疲勞でも起しては可けないと思ひましてね、一寸中座して來ましたが、何うも少しの間に豪く痩せて了ひましたね。氣は未だ何處までも確かなやうですけれど。や併し、御心配な事でありましやう。」

「いえ最も心配といふものはね、兎ても助かるまいと聞いてからは、全で張合

が抜けて了つてね、物は爲て居ても何だか自分の身體ではないやうな氣がするではないかね。」

「御至當です。いや私も、以前御夫婦で北海道へ行つてお居での時分、然う彼の間は八年ばかりでしたね、村子は私の方へ來て居つたものですから、長い間一所に育つて來て、今でも未だ妹と外思はれませんので、先刻兄から永い事はないと聞いた時には、全く手のものを取つて行かれたやうな心持がしました。」

「然うだつたね、村がお前の方へ行つて居たのは七つから十四まで。此家へ歸つて來ても、お前の方へ行く度に、全で自分の家へ行くやうな氣がすると言つて居たが、病氣になつてからも、池の藤が最う咲いて居るだらう、達者ならば見に行くのだが、と那樣事を能く言つては、いつも懷かしがつてばかり居たがねえ、何にしても最う恁うなつて了つては………。」

と憮然として差俯向く。貞男は何か物思はしげの面を衝と押向けると、

「叔母さん、此際何か私の力で、村子を慰められるやうな事があるならば、進んで何かして遣りたいと思つて居ますが、」

と我から却つて言出した。直枝は聞くより、
「おゝ、能く言つてくれました。今の處お前がね、最う何よりの藥なのだから、何うぞねえ、」
とすがれて薄い髮の毛の、小さな髷を載せた頭を下に、わりない色でひたと見た。
「實は此處へ來る途々も其事を考へましたがね、私もお談話した通りの譯で、全く困るには困るですが、併し今は那樣事を言つて居る場合ではないといふ事を、來て見てから一層深く思ふやうになりましたから。」
直枝は更に力を得た態で、重ねて首肯きながら、
「お前が然う言つてくれゝば、村も本當に浮び上る。私からも心からお禮を言ひますよ。」
秀は其時、脇からおづ〳〵と、
「もし、若旦那樣、私風情が差出て申上げられるのではございませんが、今の思召で、若し此處で內祝言でも遊ばして下さいましたら、お孃樣のお心はまァ甚

麽でございましやう。」

「むゝ、」

「何うでございましやう。御承知遊ばして下さいましやうか。」

貞男は意を決したやうに、屹と面を上げた。

「叔母さん、」

「おゝ、貞男、然うしてくれたら、私は實恩に着る。」

「可うござります。何方にも村子の氣の濟むやうにしましやう。」

「えッ、」

と兩女は双方から打仰いだ。秀は矢庭に身を前に、額を下に擦付けるやうにして、

「有難うござります。本當にお禮の申上げやうもございません。あゝお孃樣は…………。お孃樣は…………。奥樣何う思召します。」

「秀私も這麽嬉しい事は有りません。」

「おゝ私、一寸此事を、お孃樣にお知らせ申して參りましやう。」

と慌てゝ、振も忘れて、足の立てどもない態に急がはしく病室へと立つて行つた。

貞男は中に、言知らず未だ安からぬ思ひではあつたが、併し悪い心持はしなかつた。

村子はそれと聞いて、物も言はず、はら〳〵と涙を流して深い感謝の色を面に見せたのであつた。

(四)

近い植込の、若葉に搦んで湯殿の煙も、久振りで勢ひよく渦巻立つて見えた。聞える話聲も振變つて冴えて來たやうで空も思の儘に晴渡つたやうに思はれる心地よい湯浴の跡を直枝は縁に立つて今迄目にも入らなんだが、いつか新緑に粧ひを替へて居る庭を、初めて心行くばかり打眺めた。

「お上り遊ばせ。」

と秀は見て茶の間から、これも俄に活々とした色で、

「大層お早うございました。」

直枝は振返ると、忘れたやうな笑顔を見せて此方へ歩寄つた。

「然うかね、餘ッ程緩くりして居た積りだつたけれど、」

言ひつゝ中へ入つて、近く坐を取りながら、

「だが久し振で心持よくお湯にも入れたよ。何うだらうまア、おち／＼庭も見なかつたから、這麼に最うすつかり葉になつて了つたのも知らずに居たぢ

やないかね。今も珍らしいので、つい彼の築山の方を見惚れて居た仕末さ。」
「おう然うでございましやうとも。私でさへも全で生れ變つたやうな心持が致しますもの。」
「本當にお前にも飛んだ心配を掛けたが、いゝ鹽梅にまア恁うなつてくれたから骨を折つてくれた甲斐があつたといふものだね。」
「なに私なぞが、何う心配したと申して仕様のない事でございますが、全くお孃樣の御運の好いのでございますね。先生さへも拾物だと仰有つたではございませんか。」
「全く拾物さね。秀や、甚麼お祝ひでもしましやうよ。」
「本當に、何をなすつても宜しうございます。たつたお一人のお孃樣でございますもの。」
「然う言へば村は、」
と不意に言つて、一寸病室の方へ振返つた。秀は其儘、
「はい、今大層よくお寢つてゞございます。」

「然うかい。それぢや、」

と安心したやうに向直つて、

「あゝ先刻彼の梅代さんが見舞に來てくれた時、餘り談話が奮み過ぎたと思つたが、それで屹度疲れが來たのだらう。何と言つても未だ彼の身體だからね。」

「いゝえ、最う甚麼事があつても大丈夫でございます。肝心の先生が如彼仰有るのでございますもの。」

「併し然うかと言つて、餘り輕躁をしてもねえ。」

「はい、それは最う然うには違ひございませんけれど、なに那樣事をなさる事も、又おさせ申すやうな事も有りは致しませんから。」

「然うさ、餘計な取越し苦勞かも知れないよ。おほゝゝ、彼女に掛けると本當に馬鹿になつてねえ。」

「いゝえ御無理はございません。お大事なお方でございますものを。」

曩の夜から丁度四日目の事。

村子は思出の、其内祝言の翌日から、見違へるばかり急に引立つて見えたが、二日を過ぎると、醫師も驚いたほど樣子を持直して來た。今日は最う此分ならば決して憂ふべき事にはならぬとさへ言はれたので、一家は全で夜の明けたやうになつて來たのであつた。

二人は更に、時の喜びを言交したが、秀は不圖、上眼に顏を見入るやうにして、衝と膝を押進めると、

「奧樣、それは然うと彼の、貞男樣の事でございますが………。」

言はれて直枝は、俄に面を曇らせた。

「おゝ、私も實は其事をね、內々苦には病んで居るのだがね、今の處はそれよりも病氣を直す方が大事だから、それにばかり掛つては居るものゝ、全く恁うなつて見るとねえ、先とは譯が違つて來たのだからねえ。」

「全くでございます。まアお喜びはお喜びでございますけれど、それに付いて此事を、何う遊ばしたら可からうと思ひますと、何ですか又先に、恁う雲が掛つて居りますやうで、」

なに、それも村が快くなつてから、又何とか法の付けやうも有るだらうとばかり、大摑みには思つて居るけれど、」

と言葉を切つて氣遣はしげに、

「村の彼の思込みやうでは、譯もなく濟まされやうとは思はれないし、と言つて此間の談話で見ても、貞男の方を何うするといふのもむづかしいしねえ。」

秀は更に身を前へ、

「奥樣、其處でございます。貞男樣だと申して、根が他人ではございませんし、お孃樣とは又格別の間柄では居らつしやるし、特更彼の通りの思遣りの深い方で居らつしやるのですから、事が何う變りましたと言つて全々菅なくはなさるまいかとは思ひますが、事に依りましたら、又存外案じるより產むが安いと申すやうな、好い終結になりますかも知れません。」

「處がお前、此間私がしみ〴〵村の事を賴んだ時も、恁う申しては、甚だ氣まづいやうですが、此爲に今度の緣談を破つて了ふといふ事は出來ない事情があるのですから、これだけは前以てよくお斷申して置きますと、確かり腹に決め

て居るやうなのだから、」

「ですが其處がお談話でございましやう。」

「然う、それは私も考へないぢやないけれど、元衛や靜子などの口裏でも、兎てもそれは出來なからうと思はれるのでねえ、」

と力なげの態、秀は上眼に、ぢッと顏を打目戍つて居たが

「ではまア何う遊ばさうとして居らつしやるので、」

「さア、未だ何うといふまでにも決めては居ないがね、村は如彼見えて、人の知らない所に中々確かりした、私なぞの眞似の出來ない強味があつてね、彼の溫順しい控勝ちの子がと驚くやうな事があるのだから、それに何よりなのは、隨分解りが早い方だからね、身體が元々通りになつてから能く譯を言つて聞かせたら、必ず聞分けてくれるだらうと思ふがね、併しそれはまア一番後の談話で、出來るだけは何うか都合の好いやうにしたいと思ふのさ。」

秀は甲の厚い丸い、手を膝の上に打重ねて、物思はしげに、差俯向いて聞きさして居たが、直枝の聲の切れるを待兼ねたやうに、

「奥様、あの恁う申しては何でございますが、お嬢様も外の事ではございませんから、其所には御遠慮もあつて、未だ奥様にはお話殘しをして居らつしやいますかと存じます。奥様、お嬢様の此事は、全で隱して居らつしやいましたが最う前の前からの事で、兎ても御理解だけでお思切りになるやうな事はございますまいかと存じます。それは如彼したお方でございますから、押して何うとは屹度仰有いますまいけれど、然うすりや御一生を甚麼悲しい思ひでお暮らさせ申さなければならないかと存じますと、私は最う、寔にお痛はしくつて仕樣がございません。」

「おゝ、其事も考へないぢやない。いよ／＼又其やうなら、無理にも貞男に、何うともして納得して貰はにやならないが。」

それでございます。奥様、此所は何と遊ばしても然うなさらねばなるまいかと存じます。貞男樣も今申上げました通りで何とかお心入れはございましやうから、彼方の旦那樣、彼の小野寺樣のお力をもお借り遊ばして、折入つて能く仰有いましたら何ういふものでございましやう。」

「然う、何の道一應は然うする積りで居たのだから、出來ないまでもまア……
……。」

秀は爭ふやうに、

「なに出來ない事がございましやう。先夜も彼の通り、快く御承知遊ばして下さつたではございませんか。」

「だがあれはお前只の時ぢやないのだもの。あれで推す事はそりやア出來ない。」

「まア、然う可けない方へばかりお取り遊ばしては何うもなりは致しません。いえ〳〵邪が非でも然う遊ばさなければ、折角お癒り遊ばした所でお孃樣の立場は何うだらうと思召す。」

「まア〳〵那樣事言ふもんぢやない。私だつて村の事だもの、それは最う手の盡せるだけは盡して見るさ。なんなら村の樣子次第で今日にも元衞の方へ行つて話して見やう。實の所村の知らない中に事を纏めたいのは山々だから。」

秀は熱蒸立つた顔を上に、我知らず聲をも奮ませて

「おゝ、それぢや彼の今日にもお出遊ばして。何うぞ、何うぞ、然う遊ばして下さいまし。お早いには越した事はございません。若しかして、彼方の御縁談の方が、尚の事進みましたら、それこそ拔差しが出來ないやうにもなりましやう。」

「然う、それも有るね。成る成らないは二の次にして、何方にしても此儘にしては置けないのだから、押付けられるものなら無理にも押付けて見やう。近い親類だけに、談話の爲好いのだけがまア何よりさね。」

「左樣でございます。それだけお氣をかねないで、何でも仰有れると申すものですから、」

と言つて、何を言ふかと思ふと、

「奥樣、今度お孃樣の危ない所をお持直しになりましたのは、全く貞男樣の彼の事から急に張合がお出なすつたからでございます。お孃樣は那樣にも思込んで居らつしやるのでございますものを、これが本當に何うなりましやう。」

直枝は太息ついて、

「さアねえ。」

とばかり聲を曳いて、跡は言葉もなく、ぢッと一つ方に目を注いだ儘、暫く口を噤んで考込んで了つた。村子は何も知らず、夢は何所を彷徨つて居るか、病室は寂として、枕に近く看護婦が、何やら小形の美しげな書籍を默讀して居たが、襖の外からは、全で夜のやうに靜かでゐつた。

（五）

其時貞男は、左手の椅子に、腰を淺く、黒のフロックの腕を組んで、背後に凭せた身を反氣味に、切長の眼を半眼にして、靜かに耳を傾けて居たが、今しもソナータの一曲い、餘韻を曳いて洋琴の音の絶えたと共に、身を起して前の卓子の白葡萄酒の洋盃を干した。

「や、非常に面白かつた。」

「あら、今日は大變出來が惡くつて、」

と衝と洋琴の傍を離れたのは、此家の令嬢の小夜子といふ、二十一二の艶なる人近く平常着に下したと見える、鼠の紺の角繫ぎの平御召、薄赤豆地の褄を返して、微笑みながら傍の椅子に、しやなりとした身を差寄せた時、

「と言ふといつもは甚く出來が好いやうだがな、」

と太い銹のある聲で、嘲るやうに打笑つたのは、貞男と對合せに卓子を狹んで居た、小夜子の兄の國彌といふ、貞男と同じ出の工學士。

可くつてよ。兄さんなんぞは解りもしない癖に

「はゝゝゝ、怒つちや可けない。何もお前を貶した譯ぢやないのだからな。併しなア、俺は兄妹だから聞いて居て遣るのだが………」

最う仰有らなくつても可うござんすよ。貴方に又褒められたら大變だわ。

何故」

「直ぐ其下から、一番輕くつて一つ靴下を編んでくれですわ。」

「當つた。其通りだ。はゝゝゝ。」

と譯もなく笑捨てゝ、片肱前の卓子に羽織の紐を手弄りながら、

いや、總別此洋樂といふ奴は、一向に何うも有難くない。今無據く承はつたのは、ベートーヴエンか抵當品か、何だか質流れのやうな代物だが、彈手が彈手だからね、全く見世物小屋より以上には聞かれなかつたよ。」

と一寸妹の顏を見て、

「はゝゝゝ、又餘所行の顏色をし出したな。や、今も聞いて居る途中で正直の處、狆でも踊らして見たかつた。だがそれよりも僕は小野寺の何か感服した

やうな面色をして、温順しく默つて聞いて居た辛抱の強いのに驚いたね。併し内々で實は、此鹽梅では嘸尻に敷かれる事だらうと思つてな、氣の毒ながら行先が案じられたのだ。」

貞男は事ともせず、裏もなく打笑ひながら、

「相變らず口が惡いな、可哀相に、小夜子さんも君に遇つては形なしだ。」

なにこれでも穩便なのだ。少しでも又白い齒を見せて見たまへ、何處まで增長するか知れたものぢやない。」

小夜子は怫然として、忽ち口早に、

「兄さん、いゝ加減になさい。失敬な。」

「はゝゝ、氣に觸つたら取消すがね、小野寺も注意せんと嬶天下の目も當てられないやうな事に、何うもなりさうでならないよ。」

貞男は心にも止めぬ態に、

「若しも然うなつたら、僕は寧ろ小夜子さんを多とするね。」

「ヤッ、其了簡ぢや堪らない。君は何う思ふか知んが元來牝といふものは……。」

小夜子は聞きも敢へず、
「兄さん、婦人の前で何といふお言葉です。」
國彌は落付拂つて、
「ふむ、淑女の前でと言ひたかつたのだらう。併し姫樣だらうが、女王だらうが、牝は何處へ行つても牝には違ひあるまい。」
「知りません。那樣お方の言ふ事を聞いて居る耳は持合せません。」
貞男は取支へるやうに脇から、
「河野、君の言葉も甚だ穩かでない。いくら妹の前だからと言つて、些少愼んだが可からう。」
「ほい〳〵、御挨拶で痛み入る。賴む味方が二心と來ては始まらない。折角の名說だが先づ取つて置かう。いや憎まれ口を利いて居て、つい出掛けるのが遲くなつた。どれ。」
と掛けて居た椅子を離れたが、何樣出掛前と見えて、折目の立つた羽織袴の、襟を正して立上ると、

「では小野寺、失敬して一寸行つて來る。なに家嚴は、氣の置けぬ君といふので、一處に晩餐でも遣つて緩くり話さうとでも思つて居るのだらうから、退屈だらうが最少し待つて居てくれたまへ。幸ひ此間に、小夜と二人で些少新家庭の稽古でもして置くさ。」

小夜子は突返すやうに、

「ちよッ、餘計なお世話だわ。」

「はゝゝ、敢て多言を要せんか。それぢや兩爲だ。邪魔にならない中に俺も急いで行つて來やうよ。」

「おゝ五月蠅い口なこと。默つてさッさと出て行らつしやい。邪魔にならない中もないもんだ。初めつから甚麼に邪魔だか知れやしない。」

「やッ、氣焔當るべからず。早速逃出さう。これぢや何だか追出されの形だな。では小野寺。」

「むゝ、早く歸つて來たまへ。」

小夜子は振向きもせず、容さぬ色に、

なに歸つて來るには及びませんよ。」

男二人は眼を見合せて、

「はゝゝゝ。」

時も置かず國彌は出て行つた。小夜子は跡に、色も解かず、未だ其言葉を忘れかねたやうに、

「本當に、兄さんのやうな人と言つたら有りやしない。いつも人を厭がらせて一人で喜んで居る。何といふ旋毛の曲つた性質なんでしやう。」

「なに貴孃が餘り眞氣になるから、面白がつて態と調戯ふのさ。兄さんが蔭で貴孃を庇ふのは、又非常なものだからな。」

小夜子は略其消息を知らぬのでもないが、不滿らしく、聲を疊んで、

「なに那樣事をしてくれなくつても、好んで腹を立たせるやうな事を態々言つてくれない方が餘ッ程可うござんすわ。」

と立つて窓際の、緩く開いた窓帳の陰から、廣く清げに、しッとりとした築庭の、中に牡丹の日に驕つた方を、目覺ましいものに打眺めたが

「貴方、庭へ出て見ましやう。父は急に歸りさうもございませんよ。」

貞男は衣兜から時計を抽出して蓋を押開けたが、見てもとへ納めると、

「然う、大分緩くりですな。」

と葉卷に火を點けて立上つた。

其昔或旗本の邸の一部であつたといふ、千坪餘りの廣庭の石も樹も皆名あるものであるから、佇立む度に何等かの景趣を見せでは止まぬほどに手を盡してある。風情を語る庭面に、暫くして二人の影は、前後して飛石を踏んで立つた。流れて婀娜やかな小夜子の姿と、立つて鮮やかな貞男の姿とは、未だ日の柔かな、若葉の庭を拔いて取つたやうに、此處に佇立み、彼處に連れて、花を評し、水を評し、綠を離れて、綠に入り良久あつて背後の花園の中へ見えずなつた。

「小野寺さん。」

と不意に呼掛けた小夜子は、日中にぼッと上氣した顔を、今折取つて來た黄の大輪の薔薇に押當てるやうにして、近く小田卷や金盞花や、虞美人草吾妻菊などの咲亂れた脇の、華奢な腰掛に身を休めると、

「伯父は明後日歸京するさうですが、今朝父の方へ來た手紙で見ますと、今度の私共の事も大抵同意してくれたやうですから、事によつたら父は今日、貴方に決つたお談話をするかも知れませんよ。」

貞男は聞くと共に衝と近く、

「や、それは何よりだ。實は彼方に異議が有りはせんかと、理窟はないが妙に氣遣はれたけれど、」

「なに貴方、假令伯父が、甚麼事を又言出したからと言つて、父も兄も、神谷さんだと言つて、默つては居ませんからね。」

と言つて思出したやうに、

「然う言へば貴方、お轉宅なさるのは何日？」

「さア、何日になるか……………。」

「あら未だ決らないの。」

「なに詰らない支度にばかり手間を取つて、些少も埒が明かないもんだから、無據く決めずに居るのですがね、併し次の日曜よりは遲くならない積りです。」

「然う、それぢや最う何方にしても間がないのですねえ」
と美しい眼を擧げて先を數へるやうにしたが、やがて笑ましげに、
「でもねえ、事が恁う段々と運んで行くのは樂みなものですねえ。」
「だが餘りいゝ方にばかり想像し過ぎると、却つて失望するやうな事が有るかも知れない。」
「何故？」
「何を言ふにも相手が僕といふのだもの。」
「あら、何故？」
「何故と言つて、」
と稍言惱んだやうに見えたが、笑つて其儘、
「第一恁う固り上つたのを、容易に何う改良する事も出來やしない。」
「まア、何を仰有ると思つたら、おほゝゝゝ、那樣改良なんて事して下さらない方が可いわ。」
「ふむ、それぢや請合つて一度は失望する。」

小夜子は面白げに、

「譃、譃々、貴方が那様お方ぢやない事を私は能く知つて居るわ。それは私にした處で、今持つて居る空想を、殘らず實行しやうなんて、那様事を夢にも思ひはしませんわ。」

「又思はれた日には大變だが、」

「大丈夫よ貴方、然ういふ方は、私自分でも呆れるやうに質實な事ばかり考へて居るんですもの。」

と言つて追掛けて直ぐ、

「勿論全で慣れない事ですから、初めは最う遣損ひだらけでしやうけれど、貴方を苦ませるやうな事は、それこそ甚麼場合にも屹度しない事よ。」

「はう、そりや何分にも願つて置かう。」

「おほゝゝゝ、と言つて甚麼脊負込み者になつて了ふか、本當は能く知れはしませんわ。」

と稍思込む氣色に、

「それはね、言へば私の身に取つては、大事な晴れの試驗なのですから、眞面目に考へれば心配でならないのですけれど、學校の時のそれとは違つて、何故又這麼に待遠しいのでしやう。」

彼方にはた〳〵と來る足音が聞えた。

二人は餘りに接近して居るのに心付いて、俄に離れて左あらぬ振。

花の小徑を、輪なりに縫つて近付いたのは、仲働きの八重といふのであつた。

差寄るまゝに小腰を屈めて、

「旦那樣がお歸りでございます。」

二人は直ぐに立上つた。夏は名ばかりの、花と花と花の中を、縺れて二つ蝶の影。時に駒鳥の、遠い彼方の軒端に釣られた籠の中から、未だ其春を尙いまでも喚ぶのであつた。

（六）

茶の間に一人嫂の靜子は、裁物板を前に控へて、燃立つやうな緋の板締の、脊縫の針を動かして居たが、隣室の居間に良人と貞男の、談話にともすれば氣を取られて、折に其手を休めた儘で居る。元衞は隅の唐机に、横に凭れて膝を斜めに、貞男は少し此方に離れて、四角にぴたりと坐つて居たが、聲も常に似ず稍調子高に、

「だが然うすりや只、迷惑するのは僕ばかりで。」

元衞は眞顏に聲を重く、

「だから叔母も、あれまでに言つて賴むのぢやないか。前の關係があるから事が如何にも勝手に聞えるが、それとこれとは別にして考へてくれなくつては困る。」

「無論、那樣點で何うといふやうな事は更に思ひません。叔母にも貴方にも、殊更村子にも、僕は飽まで同情を表して居る。貴方の先刻から、噛んで含める

やうに言つて下さつた事も、僕には十二分に能く解つて居る。併し此事ばかりは、何と言はれても承諾する事は出來ません。利害や得失や情實などで動くべき事ではないのですから。」

「では何うあつても肯かれんといふのだな。」

最早言ふ事も盡きたやうに、最後の念を押してぢつと瞳を据ゑた。貞男は如何にも意を決した色を、殘りなく面に現して屹と、

「無情と思はれるかも知れませんが、こればかりは何うあつてもお斷申します。」

「むゝ、」

とばかり手を拱いて、元衛も已むなく口を噤んで了つた。貞男も流石氣の毒さうに、言葉も繼がれぬ態で下に眼を落した。

暫くして、元衛は不意に、

「で、結局何う處置する。」

「已むを得ません。事情を話して村子に諦めて貰ふのです。」

「併しそれが容易に出來ると思ふのかい。」

「ですが、それを言つて下さつては、前の事を繰返すばかりで、僕が只困切るより外仕方はないので。」

元衛は吐息ついて、

「いや困ると言へば俺も實に困るよ。叔父と叔母には非常に深い義理がある。俺の方で出來る限りの事は盡して遣らねばならんのだからな。」

「兄さん、何うかこれが一時の夢で濟んで了ふやうな事にはならんでしやうか。」

「そりや併し此方から言へば、河野の方が然うなつてくれる事が出來んだらうかと言ひたいのだ。いや這麼事を繰返して居ては何時までも談話は盡きない。俺も先刻言つたやうな非常手段は、兄弟の間で兎ても取る事は出來んから、叔母と三人で今一度よく相談するとしやう。お前も其座で充分に思ふ處を言ふが可い。

「はゝ、それぢや何うか然ういふ事に願ひましやう。や、つい情に驅られて隨分

失敬な事も言つたやうでしたが、何うか悪しからず思つて下さい。」

「何の、那樣事を何う思ふものか。それよりかお前の熱情には驚いた。俺には甚麼相手が來やうが、那樣深い處へは到底行かれないな。」

貞男は少からず退避きながら、

「や、何うも飛んだ事から、飛んだ事まで聞かせるやうになつて…………。」

「はゝゝ、秘密が曝れて了つたか。ふむ、些少は其位の事があつても可からう。」

「なに可い事があるものですか。實際今度の仕末位初めから弱らせられた事は有りはしない。」

「いや俺も疲れて了つた。」

と聲高に次の間へ、

「おい、靜、チヨコレートか何か持つて來て貰ひたいな。」

と吩咐けて下の煙管を手に取ると、

「だがなア貞男、全體ならば今頃は、お前の目出度い談話で愉快な事を言合つて日を送つて居るのだが、」

「いやそれに付いても、叔母の手前、村子の手前、然ういふ事を思ふのが罪のやうに感じる時があるので、

「其時の厭な心持と言つたらないですよ。」

と眉根の皺のきと寄つた時、がら／＼と續いて二臺、門へ引込んで來た車の音、後のは直枝、前のは親戚の中の古老、伴野といふ官吏出の、今は隱居株の元氣のいゝ老人、直枝に賴込まれて應援に出て來たので、今一人谷岡といふ親戚も、後刻其爲にこゝへ見えるとの事であつた。

「又か。」

と貞男はそれと聞いて、思はず口に出して二人の居る座敷の方を見返つた。

元衞は其前に彼方へ立つて行つたが、何か靜子に吩咐ける爲に暫くして又引返して來ると、

「おゝ、貞男、氣の毒だが今度は包圍攻擊だぞ。」

貞男は觀念したやうに、

「是非がありません。たゞ最後まで戰ふのです。」

「まア。」

「まア〳〵。」

（七）

といふ。別れて三年ばかりにしかならなかつたが互の姿の見違へるほどに變つたのを、見交はして互に驚いた。

村子の離れて居ても懷かしがつた人同じ琴の師匠へ通つたのが緣で長い事親しくして、隔ても置かず互に往き來して居た龜岡信子といふ、三年以前未だ十七の春、さる會社員の梅原といふ先へ嫁付いて、良人と共に神戸の支店の方へ行つて居たのが、近く此方へ歸つて來たので、取敢ず訪ねて來たのであつた。

村子は此二三日前から、漸く床を離れるやうになつて、昨日は二月振りで母と初めて外出したが、出がけに氣遣はれたほど疲れもしなかつた。併し打見には未だ病上りの弱々しく、起居も憑無さゝうに色も肉付も以前の張切つて居た影には未だ遠い態で、坐つて居た膝の先も、目を削いて哀れげに細つて見え

た。一別來の懷しさを、言交はしてから互の上、丸髷姿も華美作りに、未だ子の一人もない信子は、聲も調子も昔の儘に若やいで居たが、病氣の概略を聞くと、流石に眉を打寄せながら、ぢつと村子を打目成るばかりに、

「本當にねえ、那樣にもまアお惡かつたの。」

「いゝえ最う、一時は自分でも覺悟して、遺言までもしたのですもの、跡で聞けば、其一しきりは醫者も見離したのですつて、全く命拾ひをしたのですわ。」

「然う。まア。」

とさも思遣つた氣色で、

「でも快くおなりで本當に可かつた事。歸つて來る途中も那樣に樂みにして來たのですものを、もしかして那樣だつたら私は何うしましたらう。然う思ふと這麽嬉しい事は有りやしませんわ。」

「私だつて癒りやこそ貴女に逢はれたのですから、今の嬉しいのは、只久々でお目に掛つたばかりぢや有りやしませんの。全體去年の今頃に最う歸つて入らつしやるお談話でしたから、あれから爾來、今日か明日かと思つて甚麽に

待つて居ましたらう。」

「いゝえ私もね、あの時分そら、手紙でも那麼に言ひましたらう、一人で最う氣ばかり焦躁つてね、良人を責拔いたのですけれどね、良人でも然う自儘にばかりはならないものですからね、焦れたくつて〳〵、今思ふと解らなさ過ぎるやうに、飛んだ八つ當りなんぞして居たのですわ。」

と言つて急に調子をかへて、

「だけど最う恁うなつたのですから、何も可いとして了はうぢやありませんか。貴方もお癒りなすつたし、私もこれからは、逢はうと思や何時だつて來られますわ。ねえ最う一度又蒔直して、二人で昔のやうに、飽きるまで種々な事をして遊ばうぢやありませんか。」

「あれ、貴方は最う昔のやうな閑暇な身體ではないぢやありませんか。」

「なに用も何も全で有りやしないんですもの。それは生家に居た時よりも用無しで、本當、閑暇で困つて居る位なの。貴方の方でさへ邪魔にして下さらなければ、それこそ五月蠅いやうに上りますわ。」

「それぢや願つたり叶つたりだけれど、なんぼ何でも那樣自由に…………。」

「いゝえ、本當に私の何も爲る事がない家なの。それに私の氣が、自分でも何故恁うだらうと思ふ位に、全で昔と變らないんですもの。良人にも能く言ふのですが、餘所に嫁付いて居るやうな氣が未だ本當にしないんですよ。」

「まア。」

「でもね、這麼に我儘にして居ても未だ置いてくれるのですから、心ぢや難有いとは思つて居ますの。なに其位なら、最う些少氣を付けりや可いのですがね。」

と自分で嘲るやうに笑つて居る。口より外の晴々とした色を、村子も見て快げに、

「矢張苦勞がないからですわ。貴女は何處へ行つてもお幸福ねえ。」

「幸福ですか何ですか、私には何も解りやしませんわ。でもこれが若し幸福なら、那樣事言つちや勿體ないのね。」

「本當に罰が當りますよ。」

「少しは當つた方が身に染みるでしやう。此方が無我夢中だと、解らないだけつい粗末にして可けませんからね、でも私那樣に幸福遣ひが荒いでしやうか。」

「まア、好いやうな事ばッかり、」と笑つて聲を打つて、「那樣事言つて居られるから幸福だといふのですよ。」

「はい〳〵。それぢやまア幸福ごかしにされて居ましやうよ。おゝ幸福と言へば、あの玉江さんねえ。」

「はア、龍野さんの、」

「然う。あの方なんぞは本當に幸福者と言つて可いんですわ。私のやうな何も構はない者が思つても二度と人の中へ出られないやうな事をした方が、あのまア田能村さんの奥樣になるんですつて。」

「あれ最う御存じなの。まア早い事。遠くから來た人だと言つて油斷がならないのねえ。私は今朝初めて聞いたばかりなのに。」

「なに少し土地に離れて居たからと言つて、最う田舍者扱ひをされるのが口

惜しいと思つて、大抵の事には驚かないやうに、前からちやんとして置いたのですもの。此位の事はお茶の子ですわ。」

「おや〳〵それぢや私なんぞは、反對に何でも敎はらなけりやなりませんね。病氣で居たもんですから此頃の外の事は全ッきり知らないの。」

「おほゝゝ、那樣事お言ひだと圖に乘つて了ふわ。あゝ貴方を驚かすには好いものがある。そら、私も當家で能くお目に掛りました、御親類の、あの貞男さんねえ、私あの方の事も知つて居ますわ。早いでしやう是こそ。」

「早いでしやうつて、何を、」

「御縁談。」

「あら。」

よもやと思つた只中を、まともにはッとした胸の、思はず聲の高かつたのを、信子は固よりそれとも知らず、

「なに實はね、良人の親戚の者で、河野さんの方と大層御懇意にして居るのが有るのでね、皆それから聞いたのですよ。大層お美しい方だと言ふ事ですか

ら、貞男さんとは、お二人揃つて嘸好い事でしやう。」
「え、何ですの、其河野さんといふのは。」
と既面の色が變りかけて居る。思ひの外の談話の素振を、怪むそれより、恐れに轟く胸の奥。
「あれまア貞男さんの奥さんになる方の御苗子ではありませんか。」
「えッ貞男さんの奥さんに…………。」
「まア、何うなすつたの。」
村子は度を失つて、危く裏を見透されやうとしたが、僅に紛らして、
「でも那樣談話まだ聞かなかつたもんですから。」
「あら御存じないのまア。」
と異樣な面色訝かしげに顏を打目戍りながら、
「尤も決つたのはつい此頃ださうですが、最う餘ッ程前からのお談話だといふのですから、貴方の御存じない事はあるまいと思つたのに、」
「いゝえ、それは母や何かは能く知つて居たでしやうけれど、私はあの大病で

したから……。」

「まアそれぢや全で御存じなかつたのね。いづれお聞きなさるでしやうけれど、私のが初耳だつたら、それこそ田舎者にしちや大手柄ねえ。」

村子は俄に血路を見付出したやうに、言葉を捉へて、事々しく、

「あら田舎者だなんて。」

「でも田舎者に違ひありませんわ。最う三年も土地の水を飲まなかつたのですもの。」

「だつて神戸なんぞで田舎者と言つた日には、本當の田舎の方は何と言ふのでしやう。第一貴方が又何處へ行つたからと言つて、何う田舎者になれましやう。那樣事を言へば私なんぞは、生れが生れだから、」

と上の空に、聲ばかりを續けた。信子は舌も引かせず、

「あれ何ですねえ那樣、それぢやお談話にも何にもなりはしませんわ。まア何方でも可いとしましやう。ねえ、何う轉んだつて知れた事ですもの。」

と笑ひながら、脇に置かれた錦手の、茶碗を不圖手に取つたが、口を付けると、

「おや、談話に浮かれてすッかり冷めて了つた。一寸、最少しお熱いのを戴きましやうか。」

「あら、氣が付かないで。御免なさいましよ。」

なほ好い機に、急がはしく前の、湯沸の銀瓶を持つて、其儘衝と立つて行つた。

信子は暫く、身を捻向けて其間意味もなく庭などを眺めて居たが、近づく小刻みの足音に、それと振返ると、其銀瓶を捧げて小間使の秋が來た。

「おや、村子さんは。」

「はい、今一寸お居間へ。」

「然う。」

と何か用でもあつた事と、深くは氣にも止めず、一つ二つ秋と坐なりの談話をして居たが、村子は急に來やうともしなかつた。

やがて秋も、引返して行つてから時を經つて、村子はたど／＼しい足元で、眞蒼な顔をして入つて來た。

「あら、まア何うかなすつたの。」

と信子は驚いて眼をひたと
「貴方のお顔色ッたら有りませんわ。」
村子は努めて何氣なく、
「何うも失禮しましたね。なに今、何ですか急に氣持が惡くなつて來たものですからね、一寸藥を飲んで來ましたの。」
「おや未だ藥を飲んで居らつしやるの。」
「えゝ未だ、すッかり止めッ切りにする事も出來ませんの。」
と當座に額を押へて俯向きながら、
「時々這麼事が有るので困るのですよ。」
「可けない事ねえ。未だ那樣ぢやア。」
と眉を顰めてぢッと見る。村子は屹と、其儘手を離して振直ると、作つた笑顏の淋しげに、
「なに最う那樣でもないのですからね、何うぞ御緩りね。」
と押して前に打向つた。

（八）

秀も直枝も、其日留守の事で何も知らなかつた。信子が歸つて行つた跡、村子は部屋へ入つて了つたきり、長い事一人何をして居たか、閉切つた障子の外に、幾條立つた若竹の葉影は、莕板を外れて彼方の垣へ移つて、時を置いて隣家の犬が、往返りに庭を横切つて行つたが、中を窺ふものは誰もなかつたから、此間の村子の消息を、知つて居たものは一人もなかつた。

事に寄せて、信子に先刻、河野家の事、小夜子の事、談話の起りから今までを、信子の知つて居るだけ詳しく聞いてから、丁ど最う小半日。

夕暮近く直枝は急がしさうに歸つて來た。

「何うも遲くなつた事。一人で嘸何だつたらうねえ。今日は秀も留守の事だから、早く歸らうと思つて出來るだけ急いだ積りだけれど、用が足しきれなくつてつい今迄掛つて了つたよ。外は熱い事。最う夏だよ。」

言ひ〳〵次の間に着物を脱替へて、やがて茶の間へ入つて來ると、隅の茶簞笥

の上の、小さな包に目を止めて、
「おやまア、そツくりちやんとしてあるよ。餘り慌てたもんだからすツかり忘れて、彼方へ行つて了つてから漸つと氣が付いたのさ。本當に何うしたといふのだらうね。」
「いゝえ私も、持つて居らつしやつた事とばかり思つて、最う餘ッ程お出になつた跡で氣が付いたものですから、」
と村子は、何としたのか最う常に變らぬ態の微笑みながら、
「いつにもない、阿母樣も隨分何うかして居らしつたのですわね。」
「おほゝゝ、いえ年を取るとね、段々惚うなつて來るのだよ。」
と寛ぎながら機嫌好く
「おゝ、田村でも吉本でも、皆お前に宜しくとよ。出られるやうなら是非遊びに來るやうにと言つて居たよ。專之助は吃驚するやうに大きくなつたよ。お前が今度行つたら嘸驚く事だらう。」
「おや／＼那樣にも最う、嘸可愛いでしやうねえ。」

「全で人形のやうさ。何うして又那麼好い兒が出來たらうねえ。親達には些少も似もしないで。」

と村子の酌んでくれた茶を、

「はい有難う。おゝ能く出た事。」

と甘さうに三口ばかり。下に置くと、

「留守には誰も來なかつたかえ。」

「はいお出掛けになつてから間もなく彼の、高輪の鳥居さんが見えましたが、なに別に用ぢやないからと言つて直にお歸りでした。それから暫く經つて安兵衛ん處の島が忙がしい中を私の見舞に一寸寄つてくれました。島が歸ると直ぐ、今度は珍らしい人が…………。」

「誰？」

「神戸へ行つて居た信子さん。」

「おゝ、大層早く。いつまア此方へ着いたの。まだ〳〵急ぢやないやうに聞いて居たのに。」

「昨日の朝着いたのですつて、何でも未だ殘つて居る用があつたのを、信子さんが早く歸つて來たいばつかりに、無理に梅原さんを勸込んで了つたのですとさ。いづれ此方の近所へ來るといふ事ですから、私には合口の人が出來て這麼いゝ事はありませんわ。」

「おゝ、それは何よりだね。今日も久し振で嘸種々と談話があつた事だらう。」

「はい、それは種々」

「何か變つた面白い事でもなかつたかね。」

村子は我ながらも驚かれるばかり、色も亂さず、調子こそ稍高かつたが、さながら他人事のやうに、

「阿母樣、私思掛けない談話を聞いたのですよ。」

「え、何を。」

「それが遠い神戸から來た信子さんに聞いたのですから、不思議では有りませんか。あの貞男さんのね」

「おゝ、」

「今度の御縁談の事ですよ。」

「えヽッ。」

直枝は愕として思はず色を變へた。　村子は最う先刻信子の前で見た村子ではなかつた。　息も繼かず、

「阿母樣、最う何も仰有つて下さいますな。　私は確かりと心に決めた事がございます。　それに付いて阿母樣にお願ひがございますが、私貞男さんにお祝物を上げたいと思ひます。　明日何うぞ私を貞男さんの方へ遣つて下さいまし。」

直枝は重ねて驚いて、目を睜つたなり、直には聲も出なかつたが、一搖り身を搖つて、衝と前に出ると、

「村や、實は其事に付いて疾うにお前に言ふのだつたがね…………。」

村子は遮つて直ぐ、

「あれ最う、前の事は仰有つて下さいますなと言つて居ますのに。　大變我儘のやうでございますが、最う其事を私からは言ひたくもなし。　出來るならば

何方からも承はりたくはないのでございます。あれから以來、阿母様にも甚麼に御心配を掛けましたかと思へば、たゞ幾重にも濟みませんので、何と言つてお詫をして可いか知れは致しませんが、私にも思はない羽目で那麼事になつたんだと、それに免じて何うぞ宥して下すつて、何も仰有らないで氣任せにさしては下さいませんか。」

「だがお前、そして何うしやうと言ふのだえ。私には未だお前の心が能く了解めないが。」

「阿母様、私は貞男さんを些少も怨んでは居りませんよ。今度お祝ひ物を上げるのも、心から喜んで祝つて上げたいので。」

「まア、お前……。」

「ですから明日行つて、お目に掛つて能く申して來やうと思ひます。貞男さんも屹度、惡くは思つて下さいますまい。」

「それは最う、お前が其心で祝つて遣つたら、惡く思ふ所ぢやありやしない。貞男も此事では、甚麼にお前に氣の毒がつて居るのだか知れないのだから。」

「然うすりや何も事もなく濟むではありませんか。」

「だがお前はそれで……。」

「おほゝゝ、阿母樣は何を那樣に氣遣つて居らつしやるの。私最う何とも思つて居はしませんわ。」

「本當かえ。お前。」

「まア阿母樣は疑ぐり深いのねえ、私阿母樣には又、よく御相談もし、折入つて又、お願申す事もございますけれど、それは先の事ですから。」

何だねそれは。言つて御覽。」

あれ、阿母樣は何だか危險がつて許り居らつしやるのね。おや、最ういつの間にか暗くなつて了つた事。」

秋は臺洋燈を持つて入つて來た。

「御飯が宜しうございますが、」

村子は振仰いで元氣好く、

「阿母樣では後に又能く、お話申しましやう……

（一九一）

眞男の今の住居は、兄の元衛から貰受けたので、つい先頃まで醫師の何某といふのに貸してあつた。同じ小石川の原町の口、未だ古からぬ二階作、辰巳の角を東へ長く、木口を選んだ見好げな構。

今日出勤先の會社から歸つて、折しも外國から來た二通の封書の、いづれも留學中の友人からの便りであつたが、一通細字の殊に長々しく言越して來たのを、丁ど讀了つた時であつた。思掛けなく不意に村子の訪問を受けて驚いて迎へた。

「や、誰かと思つたら、好く來た。最う出られるやうになつたのかね。」

と直に二階の書齋へ延いて、何心なくは粧つたが、流石疚しい胸に、不意の來意を測りかねて、我にもあらず跡から打目戍られる。

「何うだね、最うすッかり快いのかね。」

村子は最初、門のあたり其人の前に立つた時、面を掠めて異樣の影の、ひらめく

如く颯と過ぎたが、僅かに一時意を決しては常に返つて、再び色を動かさなかつた。

「はい、有難うございます。此分ならば最う氣遣ふ事はございません。」

と一わたり、珍らしげに其所等を見廻して、

「まア、好いお住居だ事、談話に聞いた所ではありませんのねえ。」

「はゝゝ、然う見てくれゝば結構だ。此方も貰つた家といふのだから、然う惡くも言はれないからね。それよりか此持ちたての家の、未だ何も備はらない、埒口のない所を見るが可い。」

「あら那樣事は些少も有りませんわ。」と見て、やがて向直ると、

「貞男さん、私今日上りましたのは、病氣の中種々とお世話になりましたお禮と、最一つ差當つての用事があるのでございますがね、貴方決してお心にさへて下さらないやうに。私は些少も惡い心は持つて居ないのですから。」

さてはと貞男は、稍眼を屹として見たが、「むゝ、何だね。」

村子は最早淀みもなく、

「私あの小夜子さんと貴方の今度のお慶びに付いて、詰らないものですがお祝物を差上げたいと思つて參つたのですが、」

「えッ、」と流石に氣を打たれて、

「お祝物を‥‥」

「はい、心ばかりですけれど何うぞ。あの此所には持つて參りませんが、跡から秀が、母のと一所にお屆申します筈になつて居ります。」

「むゝ、や、突然然う出られては何とも挨拶が出ないやうな事だが、恁うなれば一應私の事情をも貴方に聞いて戴きたい。」

「いえ、それは最う能く存じて居りますから、甚だ何ですけれど伺ひますまい。私も最う何も申しません。有りやうは彼のお談話を全で忘れて載きたいので。私の此お祝物の事を申しに參りました心の中をお察し下すつて、病氣の以前の通りに美しく交際つて下すつたら、私は最う此上の願ひはございません。」

ときつぱりと言つた。貞男は物も言はず、ぢッと見詰めて、身動きもせずに居

たが、

「解りました。や、然いふ村さんだとは知らなかつた。私は殊に感謝する。其ぢや最う何も言ふまい。あゝ、叔母なり兄なり私は尚更貴方に對して耻かしいね。」

何様、這麽結果を見やうとは、誰しも思ひ及ばなかつた。村子の自ら抑へ、自ら耐へた事は、何れ程であつたのか、表にそれとは見せなかつたから、餘所には何も知れず、思ひ〳〵に只解釋したのであつた。

談話は直に餘事に移つて、村子の其日の冴えた事はなかつたが、貞男は併し、中に言ふべからざる苦痛を覺えたのであつた。

其日談笑の間、貞男はそれとなく村子に後の身の置方を聞いたが、村子は笑つて何も言はなかつた。

萬平

（一）

「呆れた。呆れた。本當に呆返つて了つたわ。」

と口から先に、仲働の初といふ、廿一二の肥り肉、色の白い丸々しいのが、朋輩二人、女中部屋の高窓の下に、御用の閑暇を一人は何か針仕事、一人は奥からお借申して來た新聞に餘念もない中へ、言ひながら衝と入つて來て、近く鼎に座を取つた。

「まア、何を那樣に呆れたの。」

と針を休めて年上の、稍大柄の由といふのが、顎の詰つた淺黑い顔を振上げた。

「いゝえね、飛んだ事なんだよ。誰にも默つて居てくれッて言はれたんだけれど…………。」

と何か知らず、異樣な笑を口元に浮べて、不意と口を噤んだ。

「え、」

と聞耳に、眼を讀みさしの新聞の上から離した、今一人の糸といふのが、

「何？　何なのお初さん。」

「お聞きよ。餘り思掛けない事で、私も初めは挨拶が出なかつたのさ。」

「だから何だと言つて、聞いて居るぢやないか。ぢれッたい。早く言つてお了ひな。何が何うしたといふのだよ。一人で那樣事ばかり言つて居ちや、何時まで經つたつて解りやしないやね。」

「あれ又初めたよ。本當にお糸さん位氣の短ッかい人は有りやアしないね。まア默つてお聞きよ。あの萬さんね、お前さん達は何うお思ひだか知らないけれど、あの色氣なしの、尨犬のやうな人が、と思つたのが大違ひで、まア何うだらう、疾うから家のお孃樣に、」

「えゝッ、」

と由も糸も言合はしたやうに眼を瞬つた。初は調子付いて直ぐ、

「本當に氣が知れないぢやないか。彼の分際で那樣及びもない事を思つて

何うしやうといふのだらう。私でなくつたつて、呆れて了ふわ。でも當人は一生懸命なんだから、可笑いやうな、氣の毒のやうな、私は何と言つて可いか解らなかつたらうぢやないか。」

聞いた二人は顔を見合はせて、暫く物も言はなかつた。

「嘘だらう。」

と由が先づ口を切る。粂も受取らぬ色で、

「なんぼ何でもお孃樣にねえ。」

と聲を合せた。聞きも終らず、初は身を前に、

「いゝえ、それが本當なんだから呆れるぢやないか。」

「まア、」

「本當に彼のお孃樣に、」

「本當とも、誰が酔興に那樣嘘を吐くものかね。嘘なら最う少し氣の利いた嘘を吐くよ。」

「然う。まア、本當なら全く呆返つた談話だね。」

「それにしたつて餘り馬鹿々々しいぢやないか。」

「馬鹿々々しいッたつて仕方がない。現に然うなんだもの。そりやア萬さん處より外に持込んで行き處は有りやしない。」

粂は繰返して又獨言のやうに、

「でもなんぼ何でもお孃様に……。」

勿論三人とも今、四邊に人が居やうとは思はなかつた。窓の向ふは裏手の植込で、左手は土藏の白壁に、紅く李の實の色づんだのが、枝を壓するやうに犇と着いて、半ば障子の蔭になつて居たが、其處に近く、此家の令孃の鮮やかな姿が見えた。

中では全で氣も付かず、

「けれどもお前何うして又それを知つたの。」

と譯を聞きた顔に由は膝を押向けた。初は待構へたやうに、

「何うしたつてお前、當人の萬さんから直に頼まれたんだもの、知るも知らないも有りやしないやね。」

「まア頼んだつてお前に、」と傍から粂が、成程お前はお嬢様附だからそれで見込んだのだね。だが厚顏しい、能く那樣事が言はれたもんだねえ。」

「本當にさ、身の程知らずも大概が有らうぢやないか。見込まれた私こそ災難だね。お粂さん、なんならお前引受けておくれでないか。」

「まア、馬鹿にしないよ。折角ですが、今手が塞がつて居ますからね。」

「私も全く然う言ひたかつたよ。」

「何故又言つて遣らなかつたんだね。お前まア全體何うして來たの。」

「でも先が餘りむきだから、まさかに面と向つて然うとも言へなかつたわね。だから寧そ戲謔にして頭から取合はないやうな事にして了はうと思つたがね、何しろ相手が大眞面目だもんだから、終局に此方が根負けをして了つたらうぢやないか。だが然うなつて又始末が惡いと思つたから、態と餘所行きの言葉を遣つて、ぴツたり斷つて見たんだけれど、袖に縋るやうにして無理やりに頼むんだもの、實ん處持て餘して了つたよ。」

由は忘れて居たやうに、膝の上に置いた縫物を不意と手に取りながら、

「それでお前何うして來たの。まさか受合つて來はしまいが。」

「だから糢糊な事を言つて到頭逃げて了つたんだけれど………。」

「第一お前那樣お取次が出來る譯のもんぢやないぢやないかね。それも相手に事を缺いて萬さんとはまア何事だらう。お前も又お前だと思ふわ。」

「あれ私は只捉まへられて困つたばかりで、何も彼の人の爲にしやうと言つたのぢやないぢやないか。」

「いゝえ彼の人の身の爲だよ。お前這麼事が若し一寸でも知れて御覽な。彼の人は直にお暇になつて了ふよ。お庭の掃除や、あればかりの作物の手入れ位の事で、那麼によくして下さるお邸が外に又と有るものかね。那樣愚にも付かない倒まになつたつて出來もしない事を考へたつて、何うせ仕樣がないのは解り切つて居ながら、みす／＼馬鹿な目を見ないやうにさせるのが本當だらうぢやないか。」

「おや何うすれば可いの。」

「今の中に思切らせるのさ。私達が默つて居れば、餘所へ知れッこは有りや

しない。然うすりや事もなしに了ふぢやないか。全く彼の人の身の爲だよ。」

粂は前に擴げてあつた新聞の端を打返しながら、

「けれどもそれも餘計なおせつかいぢやないかね。お初さん、打捨つてお置きよ。此方の知つた事ぢやなし、各自の勝手ぢやないかね。」

「だが然う言つて了つちや仕樣がない。お互ひに一つお邸の內に居るんだもの。其處には好誼もあらうッてもんぢやないか。」

「おや、御深切樣だ事。」

「お冷かしでない。いゝえさ、冗談は除けてさ。」

「はい〳〵解りましたよ。まア精々最負にしてお上げなさいまし。」

「まア、何だねえ。何が解つたのだよ。」

「おほゝゝゝ、何でも可いわ。ねえお初さん」

「あら、私何だか那樣事知らないわ。」

途端に耳を打つて、談話を掻消すやうに壁際の電鈴が鳴響いた。

「おや、お召しなさるよ。」

言捨てゝ初は、とつかは立つて急がはしく奥へ行つた。窓の外に近く居た令孃、經子も此時彼方へ離れて、右手の木蔭へ衝と逸れたが、青葉の下を向ふへ拔けると、僅かに行つて立止つた。

こゝに小やかな畠地、鷄舍、竹藪、物干場から勝手口へと續いて、少し離れて塀際に、四五株立つた檜葉の横手、一棟低く、二間に分れた一間は車夫の吉藏の部屋、一間は下男の萬平の部屋である。

立つた儘に、いつか俯向かれた顏を振上げると、涼しい、星のやうな眼をぢッと其一棟の方へ注いで、言はれぬ愁はしげの眉を見せた。

畠を廻つて、其處まで距離を二十間足らず、行かうとしては躊躇するやうに、一つ處を往き返りして、心ともなく美しげな影を彷徨はせたが、思直したか不意と踵を返して、やがて庭口の方へ靜かに歸つて行つた。

「お孃樣、」

「あれ、」

と暫くして庭先近く、青葉の蔭の濃い下で互に驚いて立止つた。

「萬平、」

「へい、」

「お前まア何處に居たの。」

「へい、今お池の鴛鴦に餌を飼つて來ましたゞ。」

「然う、彼方に居たのかえ。些少も知らなかつたよ。今お前を探して居た處。」

「えッ、私をでがすか。」

經子は態とらしく打笑みながら、稍口早に、

「なにね、裏の巴旦杏を少し採つて來て貰はうと思つて、」

「へい、召上るでがすかね。」

「いゝえ、約束した先へ持たして上げるのだよ。だから成丈佳いのを選つてね、阿母樣にも申上げてあるのだから直に採つて來ておくれな。私其間に手紙を書いて置くから。」

「宜しうございます。數は何の位捥ぎませう。」

「然うさね、あの好い方の樹を三十ばかり。」

「畏りました。」

「あの、それから採つたら私の部屋へ持つて來ておくれな。籠に入れて一寸お飾りをするから。」

「宜しうございます。直にお縁側まで持つて參ります。」

と足早に裏へ廻つて居つた。汚れた、古い茶微塵の單衣に、小倉の帶の猫ぢやらし丈の低い、だぶ〳〵とした、三十前を言はねば知れぬほどに更けた老爺面胴の長い足の短かい、丸く下つた無恰好な肩付、見る方のない後姿を、經子はぢつと見送つて立つたが、物侘びしげに首を掉つて、伏目にしと〳〵と居間の方へ歸つて行つた。

（一一）

奥から縁を折れ曲つて、隅に突出した角の小座敷の久しく住馴れた自分の部屋へ歸つて來ると、障子に添つた唐机の前に經子は身を投掛けるやうにして座つたが、其儘何もせず、目近の障子の桟を見詰めたなりで、眼に只物を思はせて居た。主人夫婦は朝からの留守、入違ひに兄も今出て行つた跡、奥は靜かで近くに全で人氣もなかつた。

はた〳〵と庭先へ、暫くして笊を抱へて額に汗をにじませて、萬平は急がはしげに來た。

經子は只見て直に前へ出た。

「おゝ、御苦勞だつたね。」

「へい、」

と取直して笊を、兩手に前へ押据ゑて、同じく中を見入りながら、

「今年は豪い上出來でがす。何の樹も去年の三層倍から結實て居ますだ」

「眞箇に能く出來たのねえ。今年はこればかりでなく、家の果物は皆出來が好いのねえ。年柄ばかりぢやない、お前の骨折もあるのだよ。」

「なんに、私が何うしましやうよ。屆かねえ事ばかりでがすに。だがお孃樣に褒めて戴けば、全く鼻が高えでがす。あのお手紙が最う出來て居ますなら私お使に參りますでがす。」

「なに使は跡で初か粂かに賴むから可いよ。萬平、お前今別に用はないの。」

「へい、何もござりましねえが。」

「私少し談話があるのだがね。」

萬平は怪訝顏、

「え、何でがす。お談話が、あの、私にでがすか。」

「然うさ、お前にさ。」

と經子は色も移さず靜かに言つたが、流石に憚かるやうに人の居る方を振返つて後、

「今誰も居ないから話すがね、お前先刻だか、それとも何時だか知らないが、私

の事で初に話したのは、あれは本當かえ。」

「えッ、そ、それを最う………。」

と不意を打たれて驚くと同時に、赧くなり又蒼くなつた。僅かに氣色を盜見るやうにした眼は直ぐに俯向かれて、いぢらしいばかり身を慄はせたが、矢庭に跡へ飛退つて前の沓脱に平伏すばかり、吃りながらも慌たゞしく、

「もし、お、お孃樣、嘸お腹をお立てなすつた事でございましやうが、もし、私は決して、決して決して持ちまして、這麼身柄で何うかして我物にしやうなんぞといふ、大それた望みは持つて居るのではございましねえ。はア私口不調法で何と言つたら可いでがすか知りましねえが、何分にも勘辨してくらつしやいまし。これぎり臆氣にも出すなと仰有れば、親の戒名誓文に立てまして、二度と出す事ではございませぬ。飛んでもねえ事で、へい、飛んでもねえ事で……。」

經子は手を上げて制するやうに、

「あれ、靜かにおし。何も然う氣を揉む事はない。何うかして私のやうなものを、嘘はも心に掛けてくれるといふのだもの、私は腹を立てる處ぢやない。」

「ヤ、な、何と………。」

と萬平はずり出すやうにして下から見上げたが、僞りならぬ涙を眼に、

「はア。」

とばかり頭を下にした。

「萬平。」

と經子はぢッと見て、重ねて物優しげに、

「それはね、私も聞いた處で何うするといふ事も出來ないし、身分は兎に角、然ういふ事を口に出すのも本當ではないのだから、此上最う私の身では何う仕様もないのだがね、私は只嬉しく思ひましたよ。」

「へ、へい、勿體ねえ事で、私何とも申上げやうが有りましねえ。」

「お前の今來て言つてくれた言葉で、私は尙更に嬉しく思ふ。お前のやうな心持で、人を思つてくれる事が餘所の者に何うして出來やう。それを思ふと嬉しいよりも私は有難いと思はなければならない。」

「飛んでもねえ事で、私等風情に、那様お言葉が何うして要りましやう。」

「何のお前、人に那樣定まつた高下が有るものぢやない。身分と言つても、言はゞ拵へものぢやないかね。」

「ヘツ、何でござりますと、」

經子は深く言解かうともせず、

「まア、それはそれ、何方にしても可いけれどね、萬平、聞いておくれ。お前は未だ知らないだらうが、私はねえ、」

と言掛けて、不圖聲を止めた。流石目のあたり、しかも其身によし何者にもせよ、假初ならぬ心を寄せてくれるといふ人の前に、押して言ひかねた事であるから、面伏らしく跡を猶豫つたが、暫くして思切つたやうに、

「此頃に餘所へお嫁入りをするのだよ。」

「おゝ、」

とばかり萬平は思はず上を振仰いで面に色を走らせたが、慌てゝ俯向くと、聞えるほどの吐息と共に、

「それぢや最うお孃樣は、此の邸にはござらッしやらねえので。」

「あゝ、日取りは未だ決らないけれど、最う長い事ぢやないやうになつて居る。先はお前も知つて居る、あの高輪の廣岡さん、彼處の家へ私は遣られる事になつて了つたの。」

言ふと共にあり〳〵と苦痛の色を落付いて居た面にも浮べたが、心付いて急がはしく、

「おゝ萬平、何もお前の心持を惡くさせやう爲に這麼事を言ふのぢやない。厭だらうが最少し聞いておくれ。廣岡さんは若手の參事官、役所でも利け者で、財産もあり學問もあり、先の望みの充分なお方、阿父樣なり阿母樣が、念にも念を入れて選んで下さつたお方の事だから、難を言ふ處が有る筈のものぢやないのだけれど、人には好き不好きのあるものでね、私は此緣組を、死ぬほどにも辛く思つて居るのだよ。」

不意に萬平は、むくりと起上つて擴げた手を振つた。

「可けましねえ。可けましねえ。何で那樣不承知な緣組をさつしやいます。何の思はつしやる通りの甚麼處へも、大手を振つて嫁付かれるお方が、何の事

でございます、何故跳付けて了はつしやりませぬ。私がには全で了解めましねえが。」

經子は淋しげに打笑つて、

「それが出來る位なら、何のお前、事が恁う決つて了ふものかね。結納こそ未だ濟まないけれど、縒の戻せない約束は最う出來て了つたんだもの。勿論それまでには、敵はぬながらの抵抗ひ立ても、繰返して仕盡した揚句。私は女だもの。人の娘だもの。人の妹だもの。私を知つて居てくれた筈の兄までが今度は味方ではないのだもの。けれども那樣事を言つた處で今更何にならう。私も承知して了つた跡、最う何を言つたとて返りはしない。あゝ、人の考へてくれる事は甚麼に好くつても、心に染まない處へ行く者の不幸福は自分でなくつては誰にも解りはしない。」

萬平は更に又首を振立てた。

「可けましねえ。何が何でも可けましねえ。那樣筋の通らねえ事は有るもんでねえでがす。何うでもそりやなりませぬわ。」

「おゝ然う言つてくれるのは嬉しいけれどね、事は決つて了つて最う拔差しは出來ないのだから、これぎりそれは言はない事にしておくれ。私は自分を捨てゝ了はなければならない場合、此先の一生は今から見え透いて居る。義理で縛られて生きて居る中でも一人はお前のやうな這麼身を何うのと心に掛けてくれた人があつたと思ふと、甚麼に慰めになるだらう。お前の厚情には本當にお禮を言ひますよ。」

面に見せぬ不平の逆りが、思はず此處に濺いで來たとは誰が思はう。萬平は聞きも敢へず、額を下に、せきくるばかりの涙を手の甲に拂ひながら、

「あ、有難うござります。お孃樣、私がの心は通りました。萬平は最う何も要りませぬ。私はこれで、假令甚麼事になりましても構ふ事ではござりませぬ。全々此心が、及びも付きましねえ貴孃樣に、とても通ずる事の有る筈が、とそればかりを苦に病んでは、一年中を過ぎて來ましたゞが、私全く最う、何とも言ひやうを知りましねえ。」

と稍暫くは取亂して見えたが、不意に屹と振仰ぐと、

「したがお孃樣、お氣に染まねえ其御緣組は……。」
「あれ、又それを、」
萬平は爭ふやうに衝と前へ出た。
「いんね、いんね、言はせて下さりませ。もし、お孃樣、何うでも其事は破談には出來ねえのでござりますか。」
「まア、何うしたの急に血色を變へて。それは兎ても那麼に言つたではないかね。」
萬平は決然として、
「お孃樣、それほどお氣に染まねえものを、必ず嫁かつしやるには及びませぬ。もし、此萬平が屹度揉消して見せましやう。」
「えッ、お前が、」
と經子は眼をぱちりとさせて、思はず顏を打目戍つたが、投出したやうに、
「何うして那樣事が出來るものかね。」
萬平は勢込んで猶、

「屹度でございます。お孃樣、御安心なされませ。お力にも及びましねえなら、私が引受けますだ。私甚麼事をしても屹度破つて見せまする。何としてお孃樣には代へられませぬわ。」

經子は未だ打目戍つたまゝで、

「お前、那樣事を言つたつても…………。」

萬平は此處で初めて打笑つた。

「あゝ一度は私何うかしてお孃樣のこれと言つたお役に立つ事が有つてくれと、蔭ながら願つて居ましたが、今度のやうな一生の事で、お孃樣は其爲に助かつたとでも思つて下さりましたら、私全く本望でございます。其代り此次には、何處までも氣に入つた先を見付けさしつて、御夫婦揃つて、屹度繁昌して下さりませい。」

と聲音は奥に深かつたが、經子は未だ解きかねた心に、

「まアお前、一人で那樣に決めて了つても…………。」

と言はうとするを押へるやうに、

「はゝゝ、まア何も仰有らずに見てござらつしやいませ。」

經子は何かなし其調子の耳を打つたやうに聞いた。二人ゆくりなく眼と眼を見合はせたが、經子は此時の萬平の眼眸を、後までも永く忘られなかつたのであつた。

（三）

二日置いて邸の執事の許へ、不意に萬平は、昨日訪ねて來た同鄉の者から、國許の母の病氣で居るのを聞いたからとの事で、急に雇を解いてくれと言つて來た。危篤とまでには未だ聞かなかつたが、一人の親なり老人の事であるから俄かに取計らつて貰つて、翌日暇を取つて邸を出て行つた。

恰も前後して經子の緣組の沙汰が邸の內に知れ渡つたので、初も粂も萬平の俄かに去つたのを、いづれも其事に合點して母の病氣は勿論口實だと口を揃へたが、併し村の者が訪ねて來たのは事實で、母の事も其晚から言つた居たと由は言つたが、兩女は頭を掉つて、それぢや丁ど打付かつたのだ、と何うでも其事にして肯かなかつた。　がそれより以上には何も思及ばず、半ば笑はれて、いい話草にされたのであつた。　唯一人、竊かに眉を顰めたのは經子で、行つた前の日、何心なく奧庭へ出て居た處へ、何處から見付けたか竊と來て、意味ありげな告別の言葉を殘した其時の訝かしげな樣子が妙に心を惹いて、如何にも合

點が行かなかつた。

すると三日目に故郷の甲州から代筆の手紙が邸へ來た。これまで目を掛けられた一通り禮狀で、終りに母の病氣は案じたより輕く、全治の見込みがあるので安心したやうな事が書添へてあつた。人々は別に何とも思はなかつたが經子は聞いて案外の心地もし、これにも未だ合點が行かなかつた。

越えて七日、漸々近寄つて來た結婚の支度に奥は取り〳〵に忙がしくなつた朝意外の椿事が廣岡家から傳へられた。主人の良彌、當の花婿の君である人が、夜の中に臥床で、何者にか無殘に殺害されて居たとの事。

邸の騷ぎ、人々の驚きは勿論の事で、いづれも經子の不幸を悲まぬものはなかつたが、經子は其時、初めてそれと思當つた。よもや這麼事に出やうとは思ひも及ばなかつたが、それと聞いて思はず手にして居た物を取落した。あゝ萬平。

犯人は併し捕へられなかつた。經子の疑つた萬平の消息は、其後同じ村から出て來た人の口から傳へられた。萬平は歸鄕してから直ぐ間もなく、八王子

在に用があると言つて、四日ばかり家を明けて行つたが、軈て歸つて來て二日目に、大醉して山徑の崖から谷底へ誤つて足を踏外して、岩に碎かれて敢ない最期を遂げたといふ。

經子は人知れず胸の中に再び叫んだ。あゝ萬平。

今も菜男爵夫人の手許に貯へられた一葉の寫眞がある。それは夫人の兄が嘗て手ずさみに撮つた生家の昔の下男の寫眞で、下男は餘人でない萬平であつた。

凡人界

（一）

駐在巡査の一喝に、今を盛りの踊は崩れて、さながら蜘蛛の子を散したやうになつた其の人達は、さしもに廣い智月庵の境內を埋めて、五人十人位づゝ一團になつてわめいて居る。と思ふと旣や彼方の隅では、低聲の音頭にもう踊り出した輩もある。

今年の盆のまだ往かぬうちから、はや來年のを、日を數へて待つ此踊なので、踊つて〱踊り拔かねば氣が濟ぬのだ。であるから巡査の制止に一時は止まつても、長くは中々耐へて居られぬ。どつと崩れる踊の跡に、ちらりと影を見せて密と踊つて居る小娘の群へ、一人加はり二人入り、瞬く內に又元の盛となつた。

正月からして待ちに待つた盆の面白さは今なのである。廣い境內は狭い庵

の前に展げられて、片隅の念佛塔やら廻國の供養塔やら、廿三夜塔やらの並んだ背後は揃つて立つた榛木林に、深い濃い影を地に曳いて居る。木の間隠れにぼうと月を籠めて畑が續き、音頭の聲々は遠く谺に響いて彼方の末から返して來る。上は水のやうに澄み渡つて、一片中空に懸つた月は、さながら拋り出された鏡のやう。

雪に名高い高田から東へそれて四里、此頃町になつた東頸城の郡役所のある安塚から、また二里程脇へ寄つて今曾根と云ふ村がある。背後に峙つた菱ヶ岳が、中山峰と峰續きに、東へ天水山雁ヶ峰と走り、花立山大明神峠を西に渡つて、信州と劃して居る其山寄で、徹宵に踊る其賑は、背後の山脈も震ふばかりである。陰暦の盆會、十四、十五、十六の三晩を、二本木、今曾根、須川と順に踊るのが、このあたりの例で、今夜十五日の今曾根の踊は、山坂越えて隣村からも若い連中がやつて來る、村は總出のさまで、智月庵の廣場を一杯に、環狀に連なつて踊の手振、土地に自慢の咽を聞かせて、音頭が二人得意顏に調子を張ると、待構へた踊子が、更に張上げた高調子に、手拍子揃へて一齊に踊り出すのである。

大紋の印袢纏、腹掛股引に突かけ草履、腰に絞りの手拭をはさんで、髷のある大工や、帯を物々しくお太鼓に結んで、目覺めるばかりの背負上に、二枚襲の裾をさばいて、ぬつと毛脛の嫁御寮、陣笠陣羽織の古武士、モウニングコートに下駄穿きの官吏、月琴を抱へた法界、米あげ笊を冠つた虚無僧、甚しきは襤褸を纏つて、蹇ひき〳〵乞食の眞似まで、此土地の智慧さま〴〵の異形の扮裝で、互に奇拔を競ふのである。異形に洩れた若者等は、いづれも片肌脱ぎに向鉢卷、娘は裁下しの中形の浴衣、小娘の一群は一樣に、菅笠白足袋の揃に、淡紅や深紅や、鬱金淺黃思ひ〳〵の襷を、單衣の上にふつさり綾取つて、我を忘れて踊狂ふ。この同勢が夢中のさまを、見物はまた澤山の數で、さゞめき立つてとり〴〵に興ずるのである。

よどみの中に夜は更けて、上の空の小娘手合は、菌の化物其儘の姿で、止度もなくまだ踊返して居るが、異形の人數はちらほら影を匿くして、踊は少し下火になつたと思はれると、やがて孫の手をひきながら歸りかけた老人達と見ると今まで餘念もなく、踊が去年より盛つたとか、乞食の蹇が本物のやうだとか、話

し合つて居た若い男女は、何となくそは〳〵しだして、押返して見物の群が稍や崩れかけたと思ふと、手を握り合つた男女の影が、幾箇も〳〵地に曳き出した。

「おい吉作君。君はまだ歸らないか?」

「あゝ、もう少し………、」

「左樣か、それじや俺失敬するだ。左樣なら。」

と手織の白い瀧縞の單衣に、黑メリンスの兵兒帶を捲いた廿歳位の男が、突如脇に居つた娘の肩へ手を掛けると、とつと走つて一所に人込のなかへ入つてしまつた。村役場の書記を勤めて居る、高梨彌吉と云ふ男で、殘つた一人は、彌吉と連れ立つて見物に來た七越吉作と云ふ、瘠方の中背、細く切れ長の慧しさうな眼光をして、色白な圓顏の、年は彌吉と同じ程の、高田の第二師範學校の生徒で、今夏期の休暇に歸省して居るのである。彌吉と同じやうな縞柄の縮の單衣に、絞の兵子帶をきりゝと結んで、師範學校の嚴しい束縛の下に其寄宿舍に起き伏して居ても、流石に見やう見眞似の風采は、高田の風俗を移して、土地

に根生の彌吉の其れとは、何處となく類を異にして居る。

吉作は村では先づ三流の家で、小樂ではあるが、子供一人野良仕事の手傳もさせずに、師範學校へ入れて置く程の資産もない糀屋(家名)の三男である。親は源助と云つて別に變つた處のない百姓老爺、母親も只だ氣の好いばかりの女で、兄の豐市が嫁を貰つて家に居て、次のは隣村へ婿養子に行つて居る。で地價百五十圓程の田地と、なほ三反歩の小作を豐市と、吉作の弟の政平を相手に耕作して、少しづゝは殘つて行く生活向なのだ。けれども其生活向と來ては、いたくも低い程度のもので、此土地で源助程の資産でありながら、よしや師範學校は官費生であつたにしても働きざかりの吉作を、兵役でもないに、三年遊ばせると云ふことは、假令其れが兵役を免れる特典があるにしても、卒業後の結果が美しいにしても一寸と出來兼る處であるのだが、然し吉作は其れ等の事情に勝つて、來年卒業する處までに、漕ぎ付けて居るのである。と云ふのは、吉作が尋常小學にあつた日から、卓越して記憶のよかつたことで、折毎の試驗には常に首席を失はなかつた。尋常小學の卒業年齡は大低十一か十二、まだ

野良仕事の手助の出來ない年弱であるから、なほ二三年高等小學に其科程を踏ませるのが(敢て高等小學校の卒業は望まない)このあたりの小樂な家庭の子弟に敎育する程度で、其時にも首席に居据わりとは行かなかつたが、なほ三番とは下らなかつた。其れと天品の能書と、一寸とした才氣がありながらも、打見の溫和しさが小學校長の氣に入つて、高等二年の科程を卒へた其春、退學させやうとしたのを無理に引止めて高等小學を卒業させたのである。當人は學問好きであつたし、校長も仕込んで見たかつたので、卒業すると直樣、吉作を尋常小學の敎員助手に拔擢して、月給三圓を給することにした。この名譽に源助の心も動いて、强ひて野良仕事の手傳をさせやうともせず、其まゝ一二年放擲て置いたのであるが、吉作が秀才の評判は狹い村中の評判になつて、高材逸足の俊髦として待ち受けられた。これが源助よりは兄の豐市の心を衝いて、家の面目と氣も浮かれる、其時に、例の校長より寧ろこのまゝ學問に身をまかせることにして師範學校へ入學させてはどうだとの相談があつた。源助には異存がなく、豐市も弟の出世とわけもなく肩身が廣く覺えて、自分は政

平を相手に吉作が分まで出精しやうと覺悟して、このあたりの教員の癖として、少し出來のよい子弟だと、無暗に師範學校へ入學させたがつた其風に倣つた。このやうにして吉作は、尋常師範學校の生徒となつたのである。

夜はもう餘程更け、空は愈澄渡つて、只見ると、跡はいつの間にか崩れて、一人去り二人去る中に、流石に混雜合つた境内も次第に寂びれて、殘りの人影は數へられるばかり其處に徘徊する人の誰かゞわかるやうになつた。やがて其れすら大抵此處を去つて手を携へた男女の外には、殆んど居るものはない。吉作も緩やかな、歩調に月を眺める風情で、なほこの男女の有樣を見返りがてに境内を去りかけた。

靄が風に動いて、梢を蔽ひ裾をかくす榛木林から、漸つと萠芽かゝつた大根畑の巧に畝をきられたのが、ほのかに見える。其れと續いて村の西北の一角を、丘と云ふ程もないが、小高い平地が可なりの廣さに占めて居る。これが智月庵の境内である。畑の彼方は欅の木立、其れを背後にした芝生の小土堤に石塔が並んで居る。庵はこじんまりとした茅葺屋根、十間近く間を置いて、殆んど

欅と枝を交へるばかりの大杉に寄つて建てられてある。其處から斜に村の半を一目の坂が横はつて坂の左手は杉のまばらな林、右手の小崖に繁茂る夏草のうちには、松蟲や馬追がはや初秋の歌を謠つて居る。吉作は氣のない歩き振りで、坂の中途まで來た。折柄背後に急足、と振り返る脇へ、

「吉作さ今歸るだか、大層遲いでねえか。」

言ひながら押並んだ。見るとひつ詰めの銀杏返、踊の名殘の飜毛が輕く頰を掠めて、月にくつきりと白い、目鼻立の冴え〴〵しい、廿三四の大柄な背格向、華美な縮の中形の浴衣、繻子と小紋縮緬の腹合せの帶を引つかけに結んで、片袖捲上げた身の取廻し、二枚田(家名)のお高と云つて、去年まで桐生の機屋へ出稼いで、歸つて二月ばかり酌婦になつて、中頸城の柿崎へ行つて居たのである

「ア、、かう遲いとも思はなかつたが………」

「お前さ一人で………」

「イヤ彌吉君と一所なんだけれど、先刻分れてから、まだ踊を見て居たんで、つい遲くなつちやつた。」

と薄い眉を動かして莞爾した。

「うまく云つて居るでねえか。彌吉さと分れたは分れたでも外に待ち合せる人があるのだらう。」

「那樣者が。そりや彌吉君の事だ。」

「どうだか解らねえだ。それでなくつて這麼に遲く……………」

「這麼に遲くつて、お前だつて左樣ぢやないかお前こそ待ち合せる人があるんだらう。」

「那樣人でもあるなら賴もしいが、かう婆々になつちや誰も相手にしてくれねえだよ。」

と聲高に打笑つて、丁と途の小石を蹴付けた。後齒の鬼籐の下駄を素足に穿いて居る。盆會の踊には猫も杓子も白足袋を穿かないものゝない此土地で、素足で居るのも粹がつて居るからなので、言葉づかひの外は一も二も桐生と高田と混雜せの風俗を振廻して居るのである。であるから土地の若者の中中お齒に合つたものではない、高が好もしい人は長い衣服を着て居る人なの

だ。つい先頃までよい情交であつた須川の豪農の二男と絶れて、今は一人で居るのだとか。

「其處まで一所に行かうかね。可いでねえか這麼婆々だつて、稀にや厭な思もするもんだ。」

「え、一所に、」

「厭だよ此人は、何故さう人を嫌ふだ。那樣に彼の人が恐いだか。」

「彼の人つて、誰が。」

「しらばくれたつて駄目なこんだ。ちやんと證據があるだもの、ちつとは氣を揉してやるが可いだよ。」

「…………。」

「だけども御氣の毒だね。這麼見たくもない者につかまつて、」

「ハヽヽ、其りや誰の事だ、お前こそ叱られる人があるんだらう。僕なんか相手にしてくれる人がないから大丈夫なもんさ。通りかゝつた義理で、無據くなのだらうに、氣の毒な。」

「吉作さ、お前さ罪だよ其口前だもの。」
と不意に脊を一つ、其手を下して吉作の手を執つて、
「彼の子を迷はして。」
「飛んだ事を言ふ。」
と顏を見合して微笑み合つたが、場馴れぬさまに、吉作は、言知れず胸を騷がした樣子。高は握合つた手に力を入れて、
「サア家まで送つてあげるだよ。」
二人は何時か坂を下りて楮畑に取卷れた家の脇の月に隱れて小暗い道を互に寄添つて行き過ぎると、離れて向ふにちら〳〵する火影、道を挾んだ二軒の茅屋が夢のやうな影を投げて居る。此處にも秋を誘ふ虫の音を兩側に、離れて彼方を、月に歌ふか追分節が、

　一に追分二に輕井澤
　　三に坂本まゝならぬ
　　　スウい〳〵

と風に連れて來ると、若い美しい聲でまた背後から、

　忍路高島及びもないが
　　せめて松前江差まで
　　　スウい〳〵

とひきつけるやうに唄つて來る。誘ひ出されたか、高も低聲で、

　惚れちや居れども
　　云ひ出しやつらい

「オホヽヽ、吉作さこの跡を知つて居るだかね。」

と思切つた眼光、吉作は幽かに顫へて居たのであつた。

（二）

翌日の正午過ぎ、そよとも風のない暑さゞかりで、昨夜の勞れに晏起の若者には、精靈を送つて其まゝの午飯、午睡の夢のまだ穩かな頃。突當つて形ばかりの六尺床、並んで今日は佛壇に種々の供物の見える十二疊の坐敷で、障子を締めて魂棚を崩した跡の其坐敷へ、吉作も高枕に憚からぬ鼾聲。圍爐裡のある次の間で、源助は煙草を吹かし、小脇に豊市は大の字形、これも華胥へ遊んで居るのである。

急がしく下駄の音が聞える、とがらりと開けた座敷の障子に手をかけて、半身乘り出すやうに、

「おい吉作君。」

日に照されて大汗の彌吉が訪ねて來たのであつた。吉作は起きやうともせぬ。見るから源助は、突如吉作が肩をゆり立つて、

「これ吉、起きろッ。彌吉さ來てくだすつたゞ。さあ起きねえか。こらッど

うしたゞ。」

「うむ〳〵。」

「こらッ、起きねえかい。彌吉さ來だア。」

「うむ、ヤア失敬。」

「失敬もねえぜ。えらく寢て居るぢやねえか、眼の玉とろけ出さねえばッかだ。」

と起き上つて、枕を隅へ押しやりながら、衽をかき合せて座直した。此方に源助も、

「むゝなに昨夜遲かつたんでね、まあ上りたまへ。」

「其處は日が射し込んで暑いだに、まあお上りなせえよ。」と吉作を顧みて、

「吉、湯よく沸いて居るだ。茶は直ぐ出せるだからな。」

と云ひ捨てゝ背戸へ出た。

吉作が運んだ煙草盆を前に引いて、彌吉は口銀の煙管で一服吸付けて居る間に、土瓶に茶を煎じて、欅のくゝり盆に茶碗を二つ載せて、入つて來た吉作は、

「暑いぢやないか、今日はまた非常な暑さだね。」

「うむ今氣が注いたのか。」

と彌吉は頗る得意の態前に注がれた茶碗を取つてごつくり喉を濕した。

「日が射しこんでも、開けたら少しは風が入るだらう。すまないが殘らず開け放して、………左樣だ。」

と思ひ付いたやうに、其處へ拋り出されてあつた澁團扇を取上げて、忙がはしく煽ぎ立てるのである。

片隅にごた〳〵、檜葉やら躑躅やら亂次なく植ゑて、朝顏などを蔓ひかゝらせた柴垣で、外は往來の其中に十坪ばかり、庭ともつかぬ物干場を南向きに扣へた座敷である。

道の向ふは、まはりを夕顏や南瓜の棚でとりまいた汚くろしい小さな茅屋で、やがて離れてまた同じやうな家居。畑の畔には並べて植ゑた玉蜀黍の影、夏草の繁茂つた小崖を背後にして、上の岡に端近の胡桃が家根を半分陰らす程ひろがつて居る。

「馬鹿な事を、僕は那様……………」
と吉作は周章た物言で、何やら彌吉が言葉を打ち消さうとして居る。
折しも鷄頭の重げな花はそよめき立つて、すうつと蘇生るやうな風が座敷へ入つたと見ると、搖々岡の胡桃の梢を吹き下して、崖の夏草が裏を返して吹靡く。跡を追つてまた一陣、心ゆくばかり涼しさを送つて、襟から袖へ汗を拭つて、さも心地よく拔けて行く。
「うむ好い風だ。」
と吾知らず云つて、彌吉は風を助ける團扇使に、袖をまくり襟をくつろげて、何時か大胡坐に、振返つて、
「うまく云ふぢやねえか、那様しらばツくれたつて駄目なこんだ。」
「何もしらばつくれる事はない。僕は全く……………」
「其れぢや君の云ふことを全くとしてだ、可し全くとして、處で昨夜お高と彼所の楮畑の脇で、手を握り合つて居た人があるが、君は其人を知つて居るだらう。

「えッ、」

「ハヽヽハ、かくしたつて駄目だアよ。まだその先を云つて見やうか、ハヽヽハ、好い加減にしろ、匿したつて駄目だアと云ふだに。どうだ、めえッたか。」

と行きつまつて吉作は、初心らしく颯と顔を紅めた。彌吉は得々と、

「何しろハア、お芽出度。」

と浴せて勝ち誇つた顏色の更らに冷笑を浮べて、

「好男子何を奢るだ。」

と云つた其聲音が思はずも高かつたので、はつと二人は次の間の豐市を見返つた。が豐市は何時かもう居なかつた。吉作は今の談話の兄に聞かれぬのを、得しれず安心したやうで、

「吃驚したせ。君があんまり大きな聲を出すから、兄貴に聞かれたかと思つて……、……」

「何君、兄さだつて覺があるだ、那様にびく／＼するにや當らねえだよ。さあ恁樣なりや匿さずに談話し合ふぢやねえか。」

「なに匿すつて譯ぢやないけれど…………」

「矢張恥かしいだか。ハヽヽヽ、何も始めてのことぢやなし、今更恥かしいもねえもんだ。」

「だつて君、僕は今まで那麼事を…………」

「うむ、どうだか知れたもんぢやねえ。」

「いや全く…………始めてなんだよ。」

と言敢ず伏目になつて、又更に恥かしさに耐へぬばかりに見えた。

「何だかあてにやらならねえだ。尤もお高も左樣云つたて…………まるで弟のやうだつて云ひやがつて阿魔め…………君お高はすつかりハァ逆上せて居るぜ。君甚麼だつたね。」

「那樣事を、君も廢したまへ。」

「ハヽヽハ、ぢや廢すかな……　……。だけれど君可笑なもんでねえか。お互に學校に居た時分、外史の論文を習つた時を思ひ出すと、柳先生がそれ、爲吉(家名)のしほとそれ、彼の時わッわ騷いだ僕等が今ぢやかうやつて、ハヽヽヽ、」

「然うさ、さう言へば那樣もんだが…………」、と吉作は、包まれぬ忸怩の情を色に見せて、心竊かに或思ひに打たれて居るやうである。が彌吉はとんと無頓着で、生々した身の態度の、調子も自から興に乘つて、

「其れだつて君當然の話だて。左樣珍らしい事ぢやねえ。年をとれば誰だつて……………、ヤ君どうした、偉く鬱ぎこんだぢやねえか。オイどうしたゞよ、情婦の事でも思ひ出したゞか。」

「馬鹿な。那樣事を。」

「はゝゝ、餘ッ程面白えな。」

「え、何が、」

「何でもねえさ。お高の言つた通りだからさ。」

折柄、

「彌吉さかね、よくハア御出なすつた。」

と水板口から聲をかけて入つて來たのは、五十格向、櫛の目を久しゝ、見ない、無

造作な束ね髮の女で龜田出の千筋の單衣、今日は袖のあるのを着て居る。吉作が母のお岸である。見ると吉作は、不意に調子をかへて、

「君出やうか。えい出やうぢやないか。」

「うむ、左樣しやうかな。」

吉作は母の方へ、

「阿母、出てくるよ。」

と其處の折釘にかゝつた帽子をとつて外出の仕度。爐の脇で茶釜の番茶を子杓で汲んで喉を濕して居たお岸は、

「え、今出るだか。暑いでねえか、かう暑くちや身體に毒だに、後にしろよ。彌吉さも左樣しなせえよ。まあ緩くり談話してお出なせえよ。」

「なに暑い位、まア出て來う。」

「左樣かな。其れぢや帽子でも冠つて、霍亂患まねえやうにな。彌吉さアは帽子あるだか。なかつたら家のを貸してあげれよ。」

お岸が言葉を聞き流して、二人はふいと出た。

「何處へ行かう。」
「何處つて其處等歩いたら、誰にか遇うだよ。そろ〳〵もう出る頃だ。今夜は須川へ行くだから、左樣何時までもぐづ〳〵して居ねえだわ。」
と家の建築、周圍の樣子のいづれも同じやうなのに挾まれた路を歩いて、やがて一丁ばかり、其處のまがり角に、節瘤立つた橡の古木の蟠つた根方、廣い葉蔭に上の日射を遮ぎつて居るもとに、內側石疊みの共同水がある。前に敷きつめた五郎太石に近く、草履の濡れさうな處を拾つて、折から水を掬んで居た三人の娘があつた。
「何だ今起きたゞか、えらい朝寢坊ぢやねえか。はあ、昨晩氣だな。」
「オホヽヽ、お前樣だねえだよ。ヤア吉作さも來さしつたゞね。水汲んだあげやうかね。」
都の振がいつの間にか此處へも流れて、昔者を驚かせるばかりひろく前髮をとつた銀杏返、日に燒けた顏色の口は大きいが、片笑靨の頰の肉置、張のある眼光に人を惹く媚をさへ持つて居た。糸の入つた縞の單衣に、友禪メリンスの

帶を締めたのが、掉をたぐつて釣瓶を其まゝ吉作が前に、
「サアどうだね。」
今年十八の、お時と云つて彌吉の其れである。
「お時、汝、俺にやくれねえだか。」
「ハイお前樣のやうな浮氣者にや、外に澤山水汲んでやる人あるだから、其人から汲んで貰ひなせえよ。俺厭。ねお末。」
「左樣だとも、お時汲んでやるでねえぞ。」
「ハヽヽハ、お末まで向ふ方だな。むゝ、お時なんぞに汲んで貰ふめえよ。外に汲んでくれる人はちやんと付いてるんだ。」
「あれ此人は……。」
としたゝか彌吉が背中をたゝいたお末は、
「人の氣も知らねえたアお前樣の事だア。お前樣マアお時が可哀相でねえだが、何故那樣情のねえ事を云ふだよ……。お時サアたゝいてあげれよ。何に遠慮する事ねえだ。」

「ハヽヽ、左樣打たれちやたまらねえ。もうあやまつた。サア此處へ居ても仕樣がねえだ。何處へか行かうぢやねえか。」

「左樣だね、それぢや勘忍してやるだか。」

と年かさの廿才を越えたお末は、矢張同じやうな銀杏返、一人先に立つて步るき出した。中を吉作と彌吉、お時は同じ年頃のお澤と跡から連れ立つて行く向ふからお高と他に二人の若者がはしなく其處へやつて來た。

「お前樣方何處へ行くね。お末もお時も一所か。」

「なに今中井戸で逢つたのさ。彌吉君と來ると、お時が水を飲んで居たのを誘つて、其處等を步いたら、誰にか逢ふだらうと思つて…………」

「左樣だかぬ、其れぢやハア行つたつて駄目だ。俺等と一所に戻りなせえよ。彼方にや誰も居ねえだ。」

「左樣か。其れぢや戻らうか。」

と今來た路を引返して、ぶら／＼と又話しながら行く。

「吉作さ(吉作が家格として、此土地の習慣から頭字ばかり呼んで吉を呼び捨

にされるのであるが、久しく學校の敎員助手をして居たのと、今又學校生活をしてやがて訓導になると云ふところから、村のいゝ處の子弟と同じく吉作と呼ばれて居るのである。で吉作が此等に對する態度も、自から一階級を隔てゝ居るのだ。お前樣今夜須川へ行かしやるか……………」

「さア、どうしやうか、」

「彌吉さは、」

「行くとも。」

とお時にそれと眴せする。進まぬ足も談話のうちに、共同井の角も過ぎ、吉作が家の前も跡にして、やがて掛茶屋の駄菓子賣る店の前へ來た。お高は何事か吉作に囁くと共に、ふいと仲間を離れて、衝と家の蔭へ入つて行つた。小屋の中にはわけもない談話の時の移るのを待つ男女の群が、何か聲高に笑ひ興じて居る。彌吉を先にお末もお時も後につゞく中に吉作は小屋へ入らず、少し離れてやゝ少時立つて居たが、何にか話した彌吉が聲のきれた後から、どつと笑ふ一同の笑聲を背後に沿びてお高の跡を追ふた。

家の横手の、軒に寄せて積み重ねた丸太の脇を足早に、夕顔棚の中を縫つて葎をなして草深い崖へ付けた、徑ともつかぬ徑へかゝると、上は家並をおして立つた一帶の岡、端居に近く此方へ向つてお高は手招きをして立つて居た。大柄な飛白の單衣に、紫紺と黒繻子の腹合の帶、今日は英吉利銀杏に油染みたリボンを飾つて吉作を待構へて昇りきると、近寄つて莞爾した。

「今夜須川へ行くだかね。」

「むゝ、お前行くなら、」

言ひつゝ先の茅原に近く、二人は草を折敷いて押並んだ。

「昨夜は遲くなかつたゞかね。俺戻ると直ぐに一番鶏が鳴いたゞから、お前さ遲くなりやしねえだかと心配した居たゞ。」

「遲くなつたつて何でもないさ。盆會だもの誰が何と云ふものか。たが今日は眠くて弱つたよ。」

「まだ眠いだか。今夜は早く寢てえだね。」

「眠いたつて、お前に逢やア……………」

「おほゝゝゝ、何れちや何時までも恁樣して居てくだせえよ。俺ハア話もあるだからね。」

「話、どんな話が…………、」

「マア後によ。」

時知り顔の蜩に送られて、夕日は既や彼方の頂へ長く影を殘して、遠く田の面をかすめて、輕く烟が消え迷うて居る。

「彌吉さ、お前さに何にか言はなかつたかね。」

「言つたよ。つまらんことを、」

「お前さどうしたゞね、其時…………、」

「どうしたつて…………、」

「お前さまた冷笑されたでねえか。負けて居ねえで惚話けてやれば可いよ。」

「でも那樣事を…………、」

「何に搆はねえだ。惚話はやるが可いだ。此度遇つたら思ふさま聞かせてやらッせえよ。負けちやつまらねえだ。」

「でも、僕はまだ………」
「何に間の惡りいことあるもんか。俺傍に居たら其麼にでも助太刀するわ。」
「馬鹿な。」
「オホヽヽ、其れだからお前樣可愛いゝだ………お前さ何うするかね、此から須川へ行くだかね。」
「お前は………」
「俺ハアどうでも………」
「其れぢや恁うして居やうかね。」
とお高が視線をさけて、呟しさうに言ふ。
「オホヽヽヽ、お前さも恁樣して居るが可いかね。」
とお高はとけるやうな眼光に吉作を見やつた。暮近い四邊に靄が罩めて、薄れて行く田の面の末は、糢糊とした山の影、月の其肩に見えるももう僅かであらう。

(三)

年を越して三月、校規の束縛を小倉の制服と同時に脫き捨てゝ、寄宿舍の門を出ると造次もたまらず、懷しい今曾根の山に林に、此まで殺がれた自由を其處にと、其日高田を去つて父兄が笑顏の出迎を受けた。家庭はもとより村の人達からも、有る程の祝辭と歡待とを得、身につけられた重荷の、更におろされた心地がした。

僅か七ヶ月の間に出來事の、吉作が心を牽くものはあつたが、わけて彌吉の隣村の良家との結婚は耳新しく、お高が上州から入込んだ桐山師と出來合つて此春手を携へて村を去つたことは更に耳新しかつた。

濱島校長が多少の運動に依つて、吉作は校長の下に今曾根小學校の尋常小學部の首席訓導となり、父と兄とに超えて家格を脫いた待遇を得、村人から見て寧ろ閑散の身の上に悠長な日を送つて居た。

「やあお藤さん來て居るね。」

と吉作は今日土曜の授業を終へて、歸宅の途次濱島校長が寓を尋ねたのである。二子の薄綿の手織の大名縞の羽織を重ね、何やら教科書らしいのを小脇にして、庭口に立つたまゝ、

「奥樣、先生からは別に御音信もありませんですか。」

「えゝ、まだ何ともありませんよ。どうしたのでしやう。」

「サア…………、」

「まあお上りなさいな。今お茶を淹れる處なんですから、お藤さんも來てお出だし、まアお談話なすつて入らつしやいよ。」

「はい難有う。」

三坪ばかりの泉水に柳の影の稍深く、八重山吹と大粉團花の花の汀に亂れたさゝやかな庭の前に、卅七八小瀟洒とした丸髷の婦人が、お藤と對座に何か談話をして居たのである。

「ぢやお邪魔しましやうか。」

と吉作は上つて持つて居た本包を片隅に、

「お藤さん先刻から來て居るのかね。」

「ハイ。」

「奥樣どうかお構ひなく、お茶なら僕が入れますから。」

「アレ奥樣。お茶は私が………」

「まあようござんすよ。お藤さんも七越さんも左樣して居らつしやい。今其處へ行きますから。」

先に來て居た娘は、赤糸の目立つた子持縞の袢纒、手織木綿の綿入を着た、色白な十七八とも見える、瓜實顏の稍けんのある面色、邊鄙の此處等あたりには稍や立優つた縹緻。もとは富有で村でも家柄の中であつたが、今は家運の衰へた、津田と云ふ家の娘である。

「七越さん、貴君明日は御用がおありなさるの。」

「いや、別に用もありませんが、何にか御用ですか。」

「えゝ、大御用なの。ねえお藤さん。」

「ハイ。オホゝゝゝ、」

「全體何のお話なんです。えお藤さん。何の話なの…………」
「私知らねえだから、奥樣にお聞きなせえよ。」
「はゝア、ではお藤さんの御婚禮のお話でもあるんで、それはまあお芽出度。」
「アレマア…………」
「奥樣左樣でしやう。」
「おほゝゝ、それも有るかも知れませんがね、」
「あれ奥樣…………」
「まあそれはそれとして、貴君本當に明日は御閑暇ですか。お閑暇なら貴君も入つしやいませんか。明日狗脊狩に行かうと思つて居ますの。」
「左樣ですか、それは結構だ。お伴しましやう。連は誰と誰です。英(同僚)も參りますか。」
「えゝお出になりますよ。貴君もお出になるなら學校の方はこれで悉皆。高梨さんもお出になるんですよ。」
「左樣ですか、失敬な奴等だな、人に何とも話なしで默つて居やがる。」と舌打

して「參りますとも、狗脊蕨何でも腕を奮つて採つて御覽に入れる。」

「どうだか、吉作さの事だから。」

「へんお藤さんとは違ひますよ。覺えてお出。明日勞れて歩けねえつて、泣いたつて知らないから。」

「あらなんぼ私だつて、まさか那樣……」、

「どうだか解るもんか。明日は屹度泣くから覺えて居るが可い。」

「七越さん那樣にお藤さんを苛責て可いんですか、明日が恐くありませんか。」

と云つてお藤と眼を見合せて微笑ながら、

「あんまりお苛責なさると、仇を打たれますよ。」

「え、仇。」

「おほゝゝ、左樣惡口仰有つてだと、明日兵粮攻めに遇はされますよ。」

と辮の一寸と襟を直して打笑みながら、

「今佐村さんが入らつしやると、お藤さんと三人して始めますから、明日はどつさり御馳走を上げる積りです。おほゝゝ、尤も前觸ばかりで碌なものは拵

へはしませんけれど、」

「左樣ですか、其りや御面倒樣ですね……………、成程此りやお藤さんに惡まれちや後難が恐ろしい。いやお藤さん…………、其りやもうお藤さんは偉いものさ……………」

「吉作さ、何故左樣お前樣惡口だね、那樣事知らねえですよ。」

「ハヽヽヽ、さうお氣にさはつちや愈後難が恐しくなる。どれ兵粮攻めの申渡を受けないうちに御暇しましやう。奥樣左樣なら。お藤さん明日は最屓分に賴みますよ。左樣なら。」

と歸る吉作を見送つて居たが、二人は云ひ合はしたやうに微笑んだ。

「小兒だとばかし思つて居たのに、那麼に立派におなりだし、お藤さんは這麼綺麗な新造盛だもの、私のお婆さんになるのも無理はないかね。」

「マアお婆さんだなんて奥樣。貴女這麼に若くて居なさるだに。」

「何の若いもんですか。其りや在樣と佐村さんはどうして居なさるだらう。もう來ても可い時分だのに。」

「左樣でごせえますよ、もう直にお出なさるでしやう。那麼に言つて居なすつたゞから…………」

と話す折柄外の足音に、お藤は身を延ばして戸外を覗いたが、

「何處へ行つて來たゞか、お政が…………」

と向き直りながら、

「佐村さんは何にして居なさるだか、私行つて見ましやうかね。」

「何によござんすよ。もうお出になるでしやう。まだ早いから、」

「でもあんまりお出なさらねえだから…………」

「御用でもお有りになるんでしやう。もう少し御話して居ましやうよ。雜作もない事ですから。」

「左樣でごせえますね。」

とお藤はうつとりとして、的もない眼眸を投げて居る。

お藤が家は、先々代が見事造り上げた財産に一時近郷に鳴つたもので、家格もヅッと高まり、隣村の庄屋と縁を結んで、村では旦那樣と呼ばれるほどになつ

たのである。が丁ど先代の末からばつたり家運が衰へ初めて、當主の代になつて益はげしくなる、其れを挽回しやうと焦せるお藤が父の事業は、盡く失敗の跡を殘し僅かに家屋敷を殘したばかりとなつて、村の尊敬は殆んど地を拂ふ有様となつてしまつた。この間に生長したお藤は、いつも耳にして居る先代の禮遇の、せめて半なりとも得たいと云ふ果敢ない望に絶えず充されて居るので、今は其虛榮心の僅かだも滿足することの出來ないのにを關らず、曲りなりにも其れを得やうと、村の平百姓の娘共には交らず、出來得るだけは高く身を持つて居ても、其處にはまたさまぐ＼の隔があつて、村から今尊敬を受けて居る、豪農なり家柄なりの、一二軒の娘とは交られぬ據なさから、濱島校長の細君のもとへ遊びに來ては、其れから其れと交際を學校の女教員と結び、小百姓の娘とは立ち勝つた交友の間に立つて居るのを、僅かに心遣りにして居るのである。田舎わたりの這麼處ではあるが、このやうに思ひ上つた女であるから、平百姓からの縁談などは頭から耳にも入れず、左様かと云つて今の有様で此土地のいゝ處からの嫁の口はなし、獨氣をくさらして居るのである。

「佐村さんはどうしてかう遲いだかね。」
と思ひ付けたやうに立つて、お藤は主婦の顏を見上げた。
「本當にね何うして居なさるだらう。もう大抵お出になつたつて可い時分だに。あの方もあんまり氣が長過ぎるぢやありませんか。」
「本當でごせえますね。何をしてお出なさるだか、那麽に言つて居なすつただに。」
「遲いにも程があるぢやありませんかね。何かお氣にさはつたことでもあるのか知ら、」
「あれ那樣事はありはしますめえが……………」
「いゝえ、ないとは言はれませんよ。いつかも然うなんですからね。本當に生意氣だつちやありやしない。尋常科の正教員でしかない癖に、いやに氣位ばかり高くつて。」
「まさか那樣事はごせえますめえ。今にお出なさるでごせえましやう。」
と言つて一寸と四邊を顧盼しつゝ、眼には異樣の色を見せて、

「つかねえことだけんど、佐村さんの御生家はあんまり可くねえつて事聞きましたゞが、本當でごせえますかね。」

「左樣ですとも。可いどころですか。兄樣が大工ぢや知れたものですわね。其れをあの通りのお澄し屋だから隨分可笑くもなりますわね。」

「マア大工！　左樣でごせえますか。まあ…………。」

と感に打たれたやうに、言葉を途切らして口の内に、

「ア、私もなれば可かつたゞに、」

「何うなすつたの、お藤さん、え、何になれば可かつたの。何ですか佐村のやうに…………、」

「ハイ…………。」

「何ですね、お藤さんのやうでもない。私なんて厭なことだ。女教員なんぞに。ありや貴孃、オホヽヽ、嫁入口のない方のすることですわね。何が不足で、貴孃のやうな縹緻を持つて、」

「あら那樣事を…………、だつて奥樣、何家だつて私のやうな者貰つてくださる

處はごぜえませんよ。左樣かと云つてまさか、平百姓へは行かれましねえし………。」

「何ですねまア那樣事を、」

「いゝえ奧樣、全くでごぜえますよ………。」

と言ひ淀んだが、先が最も馴染んで居る主婦であるので、殊に心竊かに張合つて居る村の豪家の娘達と分隔てをしてくれない此人であるから、他所では意地や見得に堅く秘めて置く心の惱みも、つい此人の前では打ち明けたくなる。慰めても貰ひたいやうに、

「家が舊のやうでごぜいませば、其りや奧樣、私のやうなもんでも、貰つてくださる人がないとも限りましねえが、不幸續きで家はあの通り、昔の形もごぜえましねえだから、誰も相手にしてくれる先もありましねえ………。」

といつか鼻をつまらした。見上げて眼をうるませて、

「こんなこと奧樣にだつて、始めてお話しますだけんど、本當にどうなることかと、心細くなりますだよ。恁う言つちや生意氣のやうでごぜえますが、いく

ら家が困つて居たからつてね、奥様まさか平百姓でなくちや行かれねえと言はれちや、家の耻にもなりますし、又平百姓へでも行つた日には、一生お清さんやお染さんに頭が上りましねえもの、私、其れが口惜うごせえますだよ。どうせこんな不幸な身體でごせえますだから、思ふやうなことにはなりもしましねえし、お清さんやお染さんのやうに又ならうとも思ひましねえ、其りやもう諦めちや居ますだけんどせめて、せめて…………」

とほろりとする。引入れられてか主婦が慰籍の言葉もゝう先刻のやうに輕くは出ず、お藤を打目戍つて聞えぬ程の吐息をつく、途端に、

「奥様。」

と聲を先に急がしげの跫音がして、赤ら顔の廿一二、思切つた横ひろがり、二子の綿入に同じ羽織、派手な色糸の紐を弄りながら、大きな夜會髷が露はれた。

「どうもすみません。いゝえ何ですよ出やうとした處へ、折を惡く參つたものがあつたもんですからね、つい遲くなりまして。オヤお藤さんもゝう先刻から來て居らつしやるの。どうも濟みませんでしたねえ。」

「佐村さん、まあどうなすつたんです。もう御出がないんだと思つて、何かお氣にでもさはつたことがあつたんぢやないかと、二人して心配して居た處ですわ。だつて待たせるにも程があるぢやありませんか。」

「あれ奥樣、何うしましやう。那樣事があつて濟むものですか。ねえお藤さん。」

「左樣でごせえますとも…………、入らしつたのは誰方。」

「實はね、大事な方よ。オホヽヽヽ、」

「マア…………。」

と主婦と見合して、其眼を佐村に移した。主婦は笑ひながら、

「貴孃酷い方ね佐村さん。散々二人に待たして置いて、其れですもの…………。」

「なに嘘なんですよ奥樣。本當はね…………、」

「可うござんす、解つてますわ。おほヽヽヽ、」

「あら酷い。」

「さア、最う那樣事言つてないで掛りましやう。」

と細君は既や立上つた。

（四）

時は五月の末である。處柄春と夏を一時に運んで、今を一年中の好時節、東雲近い朝靄の下に、辨當を分けて持つ男の四人、女は例の三人の一組で、狗脊狩に今日の日曜を雪坪の原に送らうと、濱島校長が寓に結束して居る。

「ぐづ〳〵しちや遲くなる。サア出掛けましやう。奥樣」

と吉作は既や結下げた二升樽を、やつと肩へかけて先に立つた。彌吉も其跡に續いて、吉作が同僚の簡易科出身の英、八木原の二人も吾が分の持物を肩にした。

道は村を出離れて、やがて小一里蜒つた道を菱ケ岳の懷へ行くので、野には若草、梢の綠、馴れた景色も目に綾に、さゞめき立つて今日の歡樂をある程多く書いて先を掛けた。

紬の小紋の羽織、裾を高々と、白足袋に草履穿き、引詰めの銀杏返にして居るのは、濱島の細君お千代で、佐村は浮織のリボンを飾つた夜會髷、朽尾紬の袷に八

王子大島の荒い飛白の羽織同じやうに白足袋に草履穿きで、小さな風呂敷包を持つて居る。お藤は母のものを仕立直した昔縞の袷、これも昔もの〻縞繻子と、紫紺の紋繻子の腹合の帶をお太皷に、銀杏返に花簪して跡についたが、色から柄からいづれも昔物の扮裝が、大方ならず氣を愿いて、どうがなして人並に新柄の物を着る時もと、人目のつらさに、村は急ぎ足に、此處へ來ては思ひに又歩みも澁り勝ちである。

何やら教授上の意見を戰はして、後れ勝ちの英と八木原を殘し、吉作は彌吉と二人遙か先に、

「いや那樣事はない。そりや君の忖度が過ぎる。」

「どうだか、わかるもんでねえさ。」

「馬鹿な、英だつて那樣茶人ぢやないさ。」

「でも佐村さんの樣子は變でねえかい。」

「む〻左樣云へば少し臭い處もあるが、然し君が云ふやうな關係はありやしない。其りや僕が保證する。佐村に多少那樣積はあつたにしろ、あの潮吹面

ぢや君、いくら英だつて、」
「いゝや面にばかりよるもんでねえ。僕だつて覺があるがな………、」
「はゝゝ、君は名代の物好きだからな。」
「馬鹿云ふでねえ。那樣事言つたつて、佐村さんは村の阿魔共よりや可いだもの。」
「佐村がいゝ君、呆れたね。尤もいか物好きの君の事だから、何とも言へないが、」
「おい〳〵、餘り人の事は言つて貰ふめえぜ。何うした彼のお高の事は、今だに未練を殘して居る癖に、」
「何だ、下らん事を言つてくれるな。那麼奴に誰が未練を殘すものか。女のない國に居やしまいし、手腕次第で一人や二人は何時でも出來ることぢやないか。元來女なんてものは左樣重く考へて居ると買ひ被るよ。」
「えッ、吉作君、其りや君が持論だがね。」
「何故？」

「其れが君の持論だとすれば、大きに話せるだからさ、それなら彼のお藤さんはどうだ。」

「うむ、惡かアないね。」

と目を見合せて、意味もなく笑ひ合つて振返ると、背後の五人は一所になつて、何にか笑ひながら、緩つたりとした歩樣である。

「成程潮吹面して居るだなア、佐村さんは、お藤さんは中々可いね。」

「むゝ……………」

「オイ氣は確かゝ。」

「はゝゝゝ、何うだかな。」

遙かの彼方に樹間隱れの村は、半ば家居を霞ませて、道の兩側には笠を伏せたやうな山が、段を追うて起伏して居る。風は花の薰草の匂を籠めて、輕く袂にまつはつて來る。

「おい英君、早く來ないか。もう其處だよ。」

「待ち給へ、君達のやうに急ぐにも當るまいて、」

と靜かな語調で、英は先刻から低聲に唱つて居た唐詩を、古人無復洛城東、今人還對落花風、と跡を續けて、張のある澄んだ吟聲を風にはらませる。あとの四人は調を揃へて、田舍出の若々しく、青葉茂れるの唱歌に蝶を先に立てゝ來たが、

「七越さん、もう直ぐですの。」

と佐村は聊かがつかりした樣子で問ひかけた。

「えいもう其處、そら、其處の七曲りね、彼處を昇切ると、其裏です。もう一呼吸だから、さつさと行かう。這麼處でぐづ〳〵して居たつて、仕樣がない。」

「アラ那麼事を。這麼好景色を……、ねお藤さん。」

「左樣ですよ。這麼好景色を見ねえで行くのは、惜しいでねえかね。まあ待つて居なせえよ。左樣急いだつて仕樣もねえに。」

「甘く云ふぜ。景色に托つけたつて駄目だ。其足元ぢや日が暮れたつて埒が明くものか。まア緩つくりお出なさるさ。此方は先へ行へて晝眠でもして待つて居やうよ。」

と吉作は彌吉と歩を早めて、やがて林のうちに見えずなつた。

「七越は相變らず元氣だなア、學校以來よ。春日山で佐藤先生との議論なんて、めざましかつたからな。あの元氣は中々大抵の者にやないせ。」

「英さん、其りや何ですの。」

とお千代は口を出した。

「なに七越の事ですよ。學校に居たときから元氣の方ぢやひけを取んでしたが、入學つた翌年、佐藤つて歷史の先生と、景勝の事で議論したことがありましたがな。ひどい激論で驚いてしまひましたよ。だがあれでまた中々如才がありませんでね、どの先生にも可愛がられて居ましたよ。」

「左樣、七越さんの事ですか。全體子供の時から怜悧者でしたからね。良人もね、立派な校長さんになるだらうつて、よく言つて居ましたよ。」

談話は續いて吉作が上に移つて、思ふにました好もしい側の批評に、とり〱吉作が未來を畫いた話の脇道は、

「七越が細君になつた人は幸福だ、」など英が口から噂された。がら〱し

た口の輕い佐村は、はしやいで居るので、なほさらぼん〳〵言ひたい事を言ふ。お藤は一人口數もきかず、妙に欝いで晴々しからぬ。

談話に道はゝかどつて、いつか雪坪の原へ出た。

彼是もう十一時近くであらうか。煙るが如くぼうとした、雲井には雲雀の聲、若葉に粧ひ立つた菱ヶ岳の頂が推し冠さつて聳つた前は伏野朴木眞光寺のさきまで、一眸のうちに曠濶の風光を踏へた廣場は、一渡り採り歩いた後の休憩である。五ツ組の重箱を開けて、手に餘る大結飯に、口をつぼめる佐村やお藤をわきに、吉作等は、二重の煮しめ物を肴に、呑口をつけた二升樽を擧げて居る。彌吉はふいと立つて見る間に拔いた淺葱の一握を其方の清水に根を洗つて、

「どうだ淺葱は、」

と香物と小重に用意の味噌をつけて、葉ごと一口に、前にある盃をぐいとほした。

「むゝ其奴は可いものを…………、」

と應じたのは英で、

「山で肴はこれの事さ。」

と八木原は吉作と殆んど同時に手を出した。遅れた氣候も、夏の初めの流石にほか〳〵して、いづれも汗ばんで、うつとり眠を催すばかり、山の隈谷のあはひには、時に連れて長閑な炊煙を吐いて、高尾切光櫻瀧の茅根が、夢のやうな眺望をひくと、霞をもれた保倉川と、小黒川の上流は、波の綾に日光を碎いて、右と左に悠然と蜒り蜒つて、再び霞の中へ流れて入つた。

「アラお藤さんお待ちなさいよ。私も行きますわ。」

と空いた重箱を持つて立つたお藤を追つて、佐村は嗜みも忘れた風采の、踏付けるばかりに下つた下袵をそのまゝに、足袋跣足でかけ出した。

薦められるともなく薦められた酒も、浮心の今日の遊びに、つい顔色も出る程盃を重ねて、お藤も佐村も眼の縁を赤くし、呼吸づかひもはずんで居るのである。裙もほら〳〵纏り合つて、彼方の岩陰、まはりの草の際立つて勢の能い、一坪ばかりの凹地へ折れるやうに坐つて、其處に名代の雪坪の原の清水へ、投げ

るやうに入れた重箱を、ざつと洗つてぐいと一汲み、隅を傳つた雫が朱塗の色に映つて鮮かなるのを、お藤は先づ飲んで佐村へ渡した。佐村も二口三口續けざまに引いて、また手をさし延べてなみ〳〵汲んだのを、ぽた〳〵こぼしながら持つて來て、

「奥樣、如何でございますお冷水は。」

「オヤ難有…………。おうお甘しいこと。」

とお千代も甘さうに、やがて、

「七越さんお冷水は…………、」

「難有う頂きましやう。」

と吉作は喉を鳴らして勢よく飲んだが、飲みあげると心づかずさつとこぼして、

「ヤア、失策つた。」

と怨めしさうに覗きながら、

「お藤さん御苦勞樣。もう一つどうか…………、」

「誰が　お藤さん、厭だと仰有いよ。七越さんが汲みなさるが可いわ。罰に。」

と佐村がひき取つた返辭について、彌吉も英も、

「おい七越、汲んで來給へ。そりや何うしても君に汲ませなくちやならん。ねえ奧樣さうでしやう。」

「はゝゝ、僕はもう飮んぢやつたから、飮みたか君達が汲むさ。」

「マア、酷い事七越さんは。今にお藤さんと二人して、仇をとつて上げますから覺えて居らつしやい。ねえお藤さん。」

「左樣でござえますとも、吉作さ覺えて居なせえよ。」

と何時にないはずんだ目色で、吾知らず膝を進ませた。

「妙々、七越征伐は娘子軍に一任しやう。お藤さんしつかりやり給へ。」

と英の敎唆顏。

「サア〳〵お冷水の議論は其位にして、また一息狩りましやうが。八木原さん何ですね。もうお廢しなさいよお杯は。また飮がられるぢやありませんか。」

とお千代が高調子。顏へ出た色のこれも杯を重ねたらしく、はや立ち上つて草履を穿きかけた。男はもとより跡もかまはずどつと立つのを、佐村はお藤と形ばかりの跡片付に重を重ね、押續いて直ちに草履を穿込んだ。

「おい、佐村君しつかり依むよ。先刻のは大分杪欏があつたぜ。杪欏は食はれませんからね。」

「アラ那麽事を、譃ばつかりお言ひなさるよ七越さんは。何處へ杪欏が交つて居ました。ねえお藤さん。」

「左樣でございますよ。吉作さは譃云はしやるだから、構はんで置くがようごせえますよ。」

「駄目だ〳〵。那樣胡魔化を云つたつて、お藤さんのだつて杪欏澤山だつたから、何だらう二人とも蕨も杪欏も識別がつかないんだらう。」

「まア酷い事を、覺えて居らつしやい。」

「覺えて居ればどうするんだい。」

を捨言葉にかけ出した。殘る人々も競爭の姿で、各自が氣儘の場所に、分れ分

れに引離れて行つた。

狩立てゝ半時あまり、

「お藤さん一人か、もう杪欏は可けないぜ。」

と聲をかけて、お藤が脇へ歩み寄つたのは吉作である。

中食をしたゝめた先刻の場所から離れて、廣い楢林に引添うた處で、林は山毛欅に續いて頂まで延びて居る。目的の狗脊は林に連らなつた小笹交りに生えて居るのである。上は建てきつた林の木立、山のひだがゆるく流れて左右を塞ぎ、裙は遠く麓まで遙か彼方に苗代田、鍬をふるつて畦をとる百姓のさまも繪のやうに見える。

「奥樣や佐村は。」

「何處へ居なさるだか。各自にわかれ〳〵になつたゝから……」

「何だ。まだ其丈かい。此處にや澤山ないと見えるね。」

「此處は澤山あるだけんど、今まで歩るいた場所が些少もねえだから……吉作さお前さも一人になつたゝかね。」

「むゝ……、先刻から歩いても些少も有る處がないから、方々さがして何てことなしに此處へ來たんだが、此處にあれば仕合だ。邪魔しつこなしに採らうかね。」

上には囀り返す諸鳥の聲、榛莽の中には虫を漁るのが、枝から枝へ移つて行く方に近く、心は蕨にとられて、二人は餘念もなく狩立つて居た。折知り顏にさやさやと綠を分けて吹いて來る僅かな風は、お藤が裙を返して無心の脛も白く見え、今日を晴れに髮をあげた油の香りは、其度毎に吉作の方を吹過ぎる。いつか袂の觸合ふ程に近付いた途端、足元近く一もとすいと出て居るのを見出すから早く、お藤は聲を擧げて驅け寄りざま、手ばしこく採らうとする。其れと見るより素早く吉作も手を伸す。お藤は思はず、

「あれ、吉作さ、お前さづるいだ。此りや俺が見付けたゞから、お前さ他に見付けなせえよ。」

「なに那樣事があるもんか。」

「あれ採つちや可けねえだよ。」

「いゝや僕のだ。」

「お前さ其りや無理だ。離しなせえよ。痛えだから、痛えだつてのにさ。」

二人とも冷酒を飲んで日光に照されて、なほ醉の出る程に歩いて居るのである。お藤は一際飲みつけぬ酒に只ならず醉ふて居るのだ。佐村の聲も八木原の聲も、幽かに遠く向ふに聞えて、此處には二人の外に誰も來ないのであつた。

爭ふはずみに見合はした顏、生々とした眼色に動いて、物をも言はず吉作は矢庭にひたと寄つた。

（五）

言敢ず惱ましげに、

「あゝ、」

と溜息したお藤は、昨日の銀杏返の輪も亂れ、屈托顏に堅く結んだ脣の、常からあまり愛嬌のない眼は、更らに際立つて嶮を持つて居た。

「俺が氣が弱かつたゞかしら………、」

と不意に襟から染め上げて、得耐へぬばかり嬌羞さに包まれて見えたが、僅かの間で、又もとの六づかしい顏に返つた。

あゝ、何うしたら可いのであるか。あれから此方、吉作さ一人に限られたやうに、其人の事ばかりが思はれるが、然し此思ひは捨てねばならぬ。俺は津田の娘である。どうしても家格と相應した家へ嫁かなくてはならないのだ。と云つて御父樣の蹉跌から、今のやうに財産が衰へては、兎ても家相應の處へは嫁かれないだらう。學校もお染さんよりもお清さんよりも上の席順で卒業

したのだし、外の事だつて何一の彼人達に負けやしない。家さへ今のやうでなかつたならば思ふ程の處へ嫁つて、此見よがしに見返してやれるものを、兎ても今のやうでは彼人達と同樣な事は出來さうにもせぬ。口惜しい腹が立つ、貧乏な家へ生れて來た程切ないものはない。御父樣さへ確りして居てくだすつたら、這麼悲しい身にはならなかつたらうものを、勿體ない事だが這麼悲しい思ひをさせてくださる御父樣が怨めしい。彼人達に負ける位ならば寧そ何處へも行かずに獨身で居る方が肩身が廣い。もう〳〵何處へも行くまいか。一生獨身で暮さうか。と思ひ詰める後から、また種々な物思ひが胸を惱ましてわいてくる。何の一人でやつて行かれないことはあるまいが、御父樣はそれを許してくださるだらうか。それは兎も角として、もしも左樣なつたとなれば、世間で屹度默つて居まい。自分勝手な忖度で、あることないこと云ひふらして身の耻家の耻になることまで口の端に載せられて、尚更つらい思ひをさせられることはわかりきつて居る。あゝ俺が身はどうなることだらうと、懊惱のうちにいつか又優しい情が閃めいて、現ともなく吉作の姿が

目の前に浮んで來る。

心付いて又吐息ついて、津田とも云はれる家に生れた身で、身分の違つた平百姓へ嫁つたとして見れば、世間は何と云ふだらう。自分も今が今まで平百姓へ行かうなどゝは、夢にも思つて居なかつた。つい此頃のことであつた。井田(同村で今は可なりの財産を持つて村相談の席でも多少の位置を持つて居る家)からの縁談でさへも、あのやうに腹が立つて、よくも考へず斷を云つて貰つたのに、其れをまあ、まアあの糀屋の家……、と脊筋から水を浴せられたやうに、ぞつとして見返れば幾度か水を潜つて藍の色も褪め、其處等裏つぎが當つた袷に、これも手織の心に染まぬ古襦袢、帶の片側のメレンスも模樣の失せて居る扮裝は、人目も耻しい。あゝこれが津田とも云はれる家の娘の平常の扮裝であらうとは、昔の名殘の殘つた此六疊の部屋も、平百姓に見られぬ娘の居間なり裁縫部屋ではあるが、手入れの屆かぬ疊は破れ、壁さへ處々剝れて、障子は反古張の其れすら破れて居るのだ。と見廻すと草の生えかゝつた茅屋根が犇と目に映つて來る。

「あゝ……。」

とまた吐息を漏らして、お染が家の全盛のさまが羨しく、

「あゝ、俺はまあ何で、かう不仕合だか……これぢや到底も望む處で貰つてもくれめえー、また仕度も出來ねえだ……。」

としほれて、眼を濕ませて凝と障子を見詰めて居る。

あゝ右も左もまゝならぬ事ばかりだ。一生獨身で居ることはどうも出來ないらしいし、と云つていつまで待つたとて、中々思ふ程の緣談はなし、あゝ俺が一生はどうなるのだらう。ならうことなら此まゝ身をかくしてもしまひたい。知らぬ他鄕へ行つたならば、此のつらさが少しは無くなりもしやう。ああ一思ひに他鄕へ行つてしまひたい。若しも今左樣してくれる人があつたなら此身をまかせても惜みはせぬ。

「濱島の奧樣だつて……」

と思ひは端なく、濱島校長の細君の上に辿りついた。

濱島先生の「生活向きは…………、財產と云つてはないのであらう。聞けば故鄕

に家も持たないと云ふことであるが、日常の生活方はお染さんの家に比較て些少も負けては居ない。奥様の持物だつて其通り、お染さんのよりは良い物を澤山持つて居らつしやる。村中の人達も濱島先生に向つては、お染さんの御父樣と別段の差別なく尊敬して居る。これから見ても廿五圓の月給はたいしたものだ。先生と奥樣二人しかない家内で廿五圓の生活であるもの、派手にも出來るわけ、奥樣はお仕合のものだ。俺だつて、お染さんの家のやうな處へ嫁つた程の事はないが、奥樣の身分になれば、左樣無下にひけをとらずに居られる。那樣事はない事だけれど、もしもあつたとし見れば、先生と二人、やかましい姑小姑の機嫌氣褄をとる事の入らないだけ、結句其方が氣樂かも知れぬ。其時々々を人にたてられて自分もみぢめな思ひをせずに暮されさへすれば、それがもう何よりの仕合ぢやなからうか。

「其日せえ立派にして行けるなら、其れでハア仕合のことだから……吉作さだつて濱島先生のやうにや今に屹度なるだが……」

と云ひかけて思ひあまる眼光をあげた。かきあげぬ鬢毛は顏へかゝつて、艶

のうせた顔色は思ひ傲しか蒼白めて、目色を打つた瞼も消えて、がつかりとした態度は、見るから心もくづ折れて居るやう。

「彼人一人にまかした身體と云ふぢやねえだけれど……、それにしても吉作さが、糀屋の家が平百姓でせえなけりや……」

と又沈んで行く。

このやうな思ひは、狗脊狩の翌日から、お藤が心に徂徠するので、お藤は運命の悲しさを泣きつゝも何物にかあやつられて居るやうに、吉作との出合を樂むともなく樂んで居る。

「お前さ、嘘つきだね。」

と怨じ顔に見上げたのはお藤で、髪は珍らしい結綿、荒い双子の袷に唐繻子にメレンスの腹合せの帯を締めて、手織の藍縞の厚い單衣をきちんと着た吉作に縋るやうに寄り添つて居る。

「え、何故僕が嘘つきだ。」

「何故つてお前さ、昨晩はどうしたゞア。」

「昨晩かい。昨晩はね、僕もやる瀬がなかつたけれど、仕方がなかつたのだ。來やうと思つて出掛けると、ひよツくり佐村に遇つたらう、彼奴お染さんの處へ湯を貰ひに(此土地では湯屋がないので、家で沸せば格別、左もなければ物持の家へ貰ひに行くのである。)行つた歸りだつて、一所に先生の處へ行かないかつて據なく行くと、英が來て居て、學校の事で相談なんてがあつたもんだから、つい行かれなくなつて了つたのさ。面白くもない。誰が記憶がよくて誰が行狀が惡るいのなんて、くだらない話に氣が氣でなく、一人焦り〴〵して居た僕にだつてなつて見てくれ。」

「どうだか知れたもんでねえだ。佐村さんと談話が面白くて、俺が事なんて忘れて居たのだらう。お前さ實がねえから。」

「くだらない事を、誰が佐村となんて……、其れだからお藤さんは氣樂だつてんだ。」

「まアお前さは、人をさんざ待たして置いて、氣樂だなんて、お前さ其りやあんまりでねえかい。」

と暫くして、
「本當に昨晩は困つたゞよ。お前さ待つて此處に居ると、どうしたゞか、お清さにひよつくッり遇つたでねえか。一人でどうして居るだと聞かれたにや何てつて返辭して可いだか、那麼に困つたことはなかつたゞよ。」
「で、お藤さんは何と云つたい。」
「何と云つたつて、困つたゞ。仕方がねえから何んだか氣が欝いで仕樣がねえだから、歩いたら些少ア晴れるかと思つてつてと云つたゞ。」
「左樣か、其りや面白かつたね。お清さんはどうしたね。」
「何が面白いだア、本當に困つたゞよ。那樣事アねえだ、ねえだけんどもしも感づかれちやどうしやうかと思つて、怘うした交情ア人にでも知れちや、全く耻だからね。お前さも敎員して居なさるし、俺も津田の娘でねえか。」
「大きに左樣だ。」
「それをお前さ、俺に這麼に心配さして、平氣で浮氣するだから、本當に惡くらしいだよ。」

「誰が浮氣なんて……」

「うそ〳〵、俺が知らねえかと思つて、お時とお前さの噂はありやどうしたゞね。」

「え、那樣噂が……」

「あれまあ、人が云ふぢやねえ。お前さ云ひ出したゞと、俺聞いたゞア。」

「ハヽヽヽ、それなら然うとして置くさ。」

「それ其れだもの。俺なんぞ何う思つてるだか知れはしねえ。」

「嘘ぢやない。お藤さんは全く別さ。其位の事又お藤さんに解らない事はないだらう。」

「どうだか、だけれど吉作さお前さ假にも二人が情交は口に出してくださるなよ。もしも那樣事が一寸でも世間の噂に立ちや俺等はかうして居られねだから、身の潔白を立てるために、お前さと絶縁なければならねえだア。」

と確りした口吻に、

「出世前の身體だから。」

と繼足したのは、恐らく吉作にはわからなかつたであらう。

「大丈夫々々々、お藤さんこそ浮氣をしてくれないやうに賴むぜ。また何時遇ふね、僕は何時でも可いから。」

と女の肩へ手を廻はして、四邊を眺める目は勝ち誇つた色を見せて、微笑は唇の上に漏れて居る。何を畫いて居るか、吉作はそは／＼して居るが、なほ左り氣なく、片手にお藤が手を握つて情を籠めた目にお藤を見やつて莞爾した。

お藤は只だ嬉しさうに見えた。

糀屋の吉作さはいろどりだアよ、と云ふ噂が村に立つて一年あまりにもなる其間お藤との情交も續いて折毎の口說の種は、吉作が浮氣からであつた。

お藤は今年もう十九、今を婚期の同じ年のお清も、一つ下のお染も立派な仕度に此頃芽出度輿入をすましたがお藤には其氣振さへない。井田のを斷つてから、平百姓からの緣談も絕えてしまつた。

焦れば焦る程、身はだん／＼と深淵にはまるやうな心地がして、

「俺、かうして一生埋木になるだらうか………」

と心細さがつい口にも出る。何時までもかうして居たなら、どんなにか人の口が喧しからう。今のやうではこの先何時他家から話があることだか、廿才を過ぎて何時までも、かうして居るのは耻の上の耻と云つて此先確な當があるぢやなし、ならうことなら何うかして今の中に身を定めたい。濱島の奥樣のやうになれば仕合だし、貞女兩夫に見えずと云ふこともあるし……、それにしても吉作さは……、御父樣は屹度喜んで許し下さるだが、那樣氣振のないでないし……、とまたとつおいつ。

曇つた空の、星の影さへ稀な闇を、馴れて居るか蹉きもせず、屈曲つた石高路を平氣で歩いて行く二人の男女がある。枝を離れて枝を打つ落葉の音はうそ淋しく、風は霜を捲いて肌も凍付くばかりの夜であつた。夜業の藁をたゝく窓の隙間を漏れる燈影に遠く引離れて、談話は縺れ氣味の、

「何だかお藤さんの云ふことは、先刻から些少も要領を得ないぢやないか。」

「可いだ。何うでもなせえよ。吉作さこそ身に沁みて聞いてくれねえだから。」

「なに身に沁みて聞かない……、身に沁みて聞きやうもないぢやないか。左樣要領を得なくちや、それぢや何うすれば可いんだね。」

「どうすれば可いつて、お前さどうしてくれる積だかね。お前さ次第の事だもの…………。」

「左樣わけがわからなくつちや、どうしやうもありやしない。お藤さんは今夜は餘程どうかしてるね。」

「お前さ不實だからさ。」

「また其れか……、僕ア最う知らないよ。」

「あれ吉作さ、お前さ俺をどう思つて居てくれるだね。」

と云つて押返して、

「何とも思つて居ちやくれねえのだらうね。」

「實に要領を得ないな……、思つて居ないことがあるもんか。いつも言つてるぢやないか、お藤さんは僕の命づくの人だつて。」

「其れでも左樣思つて居てくださるだかね。」

「其れでもは酷い。左樣思はなくてどうするものか。」

「嘘々、其りや嘘。お前さ左樣思つてくださるなら些少俺が身にもなつてくれても可いだけれど、左樣はしてくれねえだし……、本當にお前さ俺をどう思つて居てくれるだよ。」

「むゝ、今更又那樣事を繰返してどうする積だね。」

「アレマア……、」

と急き込んで、

「吉作さ、そ、其りや餘でねえか。何ぼ何でも其りや餘りでねえか。」

といつか泣き聲になつた。

夜業も其中に終つたか、其處此處の槌の音は礑と止んで、闇をとほして若者の歌が聞えて來た。夜は移つたのであらう。

「お藤さんは餘りだつて云ふけれど、僕は今更那樣事を聞く必要はないだらうと思ふ。」

「何故に何うしてだね。」

「何うしてつて、つまり聞くだけお藤さんは僕を知らんのだ。今も云つたぢやないか。お藤さんは僕の命づくの人だつて。それだからかうして遇ひもすれば、其人に浮名のたゝないやうに氣もつけて居るぢやないか。」

「お前さ本當に左樣思つて居てくだされぱだけれど、俺、どうも、どうも左樣は思はれねえだ」とほつと溜息を吐いて、

「俺お前さに欺されて居るやうな氣がしてなんねえだ。左樣思つて居てくれるお前さにしちや、どうもお前さの言つたり爲たりすることが、俺が腑に落ちねえ事だらけだもの。俺本當に心配でならねえだ、悋氣で云ふぢやねえだけんど、お前さ方々に浮氣もするだし、聞けばお時のお末のつて情交はあつても其れもほんの一時の慰み者で跡ぢや、目もくれねえつて話だし、それやこれで俺つく〴〵左樣思ふだ。お前さ口上手だから、口ぢや可い事云つて居るだけんど、矢張俺も那樣事になるのぢやねえかと、そりやお時やお末は……、這麼事云つちやなんだけれど、お前さの前に外にも情交した人もあるつて話だからお前さと絶縁ても左樣も思やアしめえけれど、俺は、俺は那樣やうなもんぢや

ねえだもの。其りや男と云ふもんは氣も強けりや心も廣いだから、何とも思つちや居めえけれど、女つてもんはね、吉作さ、」

と耐りかねたやうな泣吃逆りして、

「そ、そりや女つてもんはね、氣も小さけりや、其かはり一旦かうと思つた人の外にや、誰だつて、誰だつて見返りやしねえですよ。」

と聲に張を持たせて、

「俺だつて左様でねえか、津田の娘ともあらう者が嗜忘れてかうした情交になつてみりや、尚更俺にだつて女の意地はありますだよ。お前さ故なら親だつて何だつて、生命だつて何とも思つちや居ねえだ。其れをお前さが浮氣をすれば、腹も立つでねえか氣だつて揉めるでねえか。お前さ何とも思つちや居めえけんど、女は本當に何でも彼でも其人が便だから、其れをお前さ浮氣はするだし、身に沁みて俺がいふ事聞いちやくれねえだもの、俺心細くて……。」

と俯向いて、頭を男の胸に、身を其まゝに打任せて、また泣聲に吃逆上げながら吉作が衣服を確り握つて居る。

お藤が言葉、お藤が樣子が、言ふばかりなく〳〵しほらしいやうに覺えて、吉作は此まで觸れたことのないものに觸れた心地がした。無茶苦茶であつたお高との其れの時は措いて、村の風義に連れては、矢張吉作も同じ輪の中の人であつたが、流石に今萬更知らぬではない道義の上の刺戟を受けると、お藤の言つた事も有るよりは寧ろ多く買ひかぶつて、

「いや其りやお藤さん、君の邪推だ。全く邪推だ。僕は決してお藤さんを左樣思つちや居ないんだから……、左樣泣いたつて仕樣がない。まあ髪が壞れて了ふぢやないか。左樣お藤さんのやうに一圖になつて了つちや困る。まあどうすれば可いと云ふのだい、邪推は廢し給へ。僕は決してお藤さんの思つてるやうぢやないだから、お藤さんをお時や何にかと一所にしちや居ないから、お藤さんのやうに自分で忖度して、獨でさう泣いて了つたつて仕樣がない話だ。」

「吉作さ、そ、そりや本當かね。お前さ本當に左樣なら、俺此位嬉しいことはねえだけんど…………」

「本當も本當でないもない、氣休めを云つたつて仕樣がないぢやないか。お藤さんはまだ邪推して居るね。」

「何で邪推なんてお前さが全く左樣なら俺心配も何にもねえ。だけれど吉作さ只た一つ心配でならねえのは、俺は年頃だで、這麼者でも脇から何か云つてくるだ。此間の井田のなんかは直ぐ斷つて貰つたゞけんど、左樣々々斷つても貰へねえし、俺お前さでなくちや死んだつて厭だから吉作さねどうかして…………」

「どうかしてつて、どうすれば可いのだよ、」

「お前さ、寧そ俺を…………」

「お藤さんを…………、お藤さんの親父樣が僕になんかくれるだらうか。」

「其りや最う…………」

とお藤は跡の言葉はなく、吉作も默つて思案して居るやうであつたが、やがて

「お藤さんの親父樣さへ許してくれゝば、僕の家の方は話のつかん事はないと思ふが…………」

「えッ、それぢや俺は最う…………。」

とお藤は又縋りついたのであつた。

（十八）

津田のお藤は、今曾根小學校尋常科主任訓導七越吉作の妻となつた。其處には種々ないきさつもあつたとやら。色々な浮說も沸いて出たが、兎に角家は衰へてもあの縹緻よしのお藤さは、糀屋の吉作さには、勿體ないお嫁だと云ふのが噂の何時もの結句であつて。かくて月は過ぎた。お藤は得意か何か知らぬが權が高いと人々に云はれて居た。吉作は空に其日を送つて無事な學校の務の外には例の浮氣は止まなかつたが、お藤との夫婦間は密かで

お藤は姑の下、嫂の下に格別の事なしに働いて居た。

靄に昏れて穩かに夕至れた空に、畑や木立を隔てゝ野良歸りのさま〴〵の歌が彼方此方に入亂れて聞える。今日を田植の惣仕舞と七越の家では、幾人の男女の手傳があつて家內のものと雜つて、十二三人の同勢が景氣よく歸つて來た。腰から下は、泥にまみれ水に濡れて、乾いた處もない程で、女は殊に見る影もなく紺木綿の脛巾は勿論、身體は半ばづぶ濡の肌も氣味惡るさうに、今日

のは深田かして殊更濡れ方も甚かつた。嫂は其まゝ戸外に手傳の衆を欵待り、お藤は家内で姑をたすけ夜食の仕度に目をまはして居る。大事な期節の仕付時の此頃に、お藤が年輩の者で、家に居るものと云つては、病人か二三の豪家の娘ばかりであるが、お藤は今迄に田植をしたことがないので、嫂が野良仕事に泥に濡れて居るにもかゝはらず、姑や嫂が優しい同情から家に殘つて居るのである。若者は其まゝの野良着で花色木綿の半股引を穿いて、女共は濡れた野良着を平常着の袷に更へ、づらりと夕食の膳についた。若者が茶椀であふつて居るのを餘所に、女は既や飯を始めて居る。

手織木綿の筒袖にやはり手織のせまい帶、派手なメリンスの紐のついた二子の前垂をして、二三日前に結ふたらしい、銀杏返のそゝけたなりに、お藤は給仕に立つて居る。

七越の家でのお藤の位置は、妙なものであつた。お藤は津田の娘である。家運は衰へても、其生家は、兎に角村である地位を保つて居るのと、吉作が境遇につれて、常に交際する人達は、濱島校長の妻君や女教員の佐村など村に尊敬を

拂はれる側の人達で、津田の娘であるのと、吉作が妻であるのである點からはお藤は其姑や嫂より立ち勝つた地位に居るのである。けれどもお藤は七越の三男吉作が妻』として『は姑には勿論、當然豊市が妻にも義妹としての態度を取らねばならぬ。

元來此高田附近、今曾根あたりの嫁と言へば、嫁づいて其家で自分の衣服を洗濯などは爲れぬものと思つて居る。古着は盡く生家へ送つて生家で洗濯をして貰ひ、一年三十日ばかりの生家歸があつて、其折になほ殘りを洗濯するのであるから、土地でこの歸省を洗濯泊と云ふて居る。子が産れるとなると、其子の衣類はもとより、子守乳母まで生家で傭ふて、食扶持を持たしてつれさせる。嫁はつまり給金の入らぬ仕着を着せぬ信用を措かれる奉公人とも言へば言はれるのだ。小姑との對話の中に鳥渡と敬語を失したと言ふので離緣せられた女が、直江津在の某と云ふ村にあつた。此の如き習慣の高田地方と何の距離もなく、何事も高田を眞似る東頸城郡の上部の今曾根あたりは又、其等をすべて普通の事と信じて居るのである。況んやお藤は三男の嫁である

地位は殊に察すべきものであらう。かねてこれは覺悟して居つたのではあり、土地の久しい習慣から普通の事とは思ひながらも、お藤が今の境遇はお藤が例の心寄に衰へても、多少昔の面影を殘した生家と、七越との家庭の相違からこの新生涯を如何に思つたらう。然しながら習ふより慣れろの式で、お藤は今は餘程沈着いて來た。何樣お藤が嫁いてからもう七ケ月程は過ぎたので。

「お藤は皆に强ひろや。サアお前方どうか澤山食がらしつて……………。」

とお藤に指圖して居るのは姑で、逞しい割に皺の多い、氣の好さゝうな女である。

「ヨウお島、まだ可いでねえか。もう少し食れや、サア俺に盛らしてくれ。」

「もう澤山だね。」

「お島何だよ今から…………、お藤が手を出して居るでねえか、若者に耻かゝせるでねえだ……　……。お藤お島へ盛つたら俺にも盛つてくれ。俺御免蒙つて始めるだよ。」

「本に、左樣しなせえよ。」
と姑に給仕して、お藤は鬢を氣にしてかきあげた。 嫂のお倉も其處へ給仕に立つて居たが、
「お藤さ、俺此處の給仕するだから、お前彼方で酌してあげなせえよ。」
「何、此處も私給仕しますだ。 姉やお前さ、勞れて居なさるだに、構はず御免蒙つて始めなせえよ。」
「まあ可いだよ。 此處の給仕は俺がしるだから…………。」
「左樣かね。 其れぢや賴みますだよ。」
とお藤は男の方の酌に立つて、手近の五合德利を引き寄せた。
「阿舅どうだね。 兄さもお干しなせえよ。」
「オ、お藤か、まア可いわ。 俺等は可いだから若衆の酌してやつてくれ……
……。」
「其れでもまあお干しなせえ。」
「左樣か。 其れぢやこれを甚吉へ。」

と源助は干した盃を、若者の一人へさして、

「甚吉、一つ献さうでねえか。皆樣どうか十分食らしつて……………、何に、あゝ左樣だよ。可い出來だ。俺此年になつても、今のやうな苗は澤山見たことがねえだ。これで土用日和と彼岸日和がすりや、申分ねえ豐作だ。」

「どうか左樣なつて貰えてえだ。左樣なりや些少不景氣も回復るだらう、かう不景氣ぢやゝりきれねえだ。」

「本によ。」

と互に談話して茶呑茶碗の杯を擧げて居る。田植仕舞の祝の献立は、一本鯡と板昆布の味噌煮、夏菜の胡麻よごしとか此處等に定まつた肴で、無暗に强ひる酒を馳走として、誰も彼もはや大分醉が廻つて來た。

「サア平造、飲れな。マア可いでねえか。日常のやうでもねえ、サアお酌しるだよ。」

とお藤は、權が高いと蔭口される程もない輕い調子で、誰彼となく愛想よく酒を薦めて居る源助は注意して、

「お藤、燗が温いでねえか。彼方の熱いのと代へちやどうだ。」

「アイ、左樣しますだよ。」

と立つたお藤を見送つて、今酌された平造は仔細らしく首をかたげて、脇の若者に何か話しかけた。

「左樣だ、うむ何にも時節だなア。お藤さんがかうならうとは本に思はなかつたゝ。津田の孃樣がお前彼の通でねえか。お藤お藤つて、呼びつけにしやうとア、源助殿も思はなかつたらうよ。其れにしても吉作さは仕合もんだな。」

「仕合もんとも。何と云つたつてお前、津田は津田だからな。お藤さのあの姿はまアどうだ、俺本家の孃樣が此通だと何だか可哀想だよ。寧そ俺が處へでも來たんなら。」

「何だと、馬鹿、いゝ加減に戯けろ。われが處へ行きやどうするだア。」

この談話は、源助はもとより豐市にも聞えなかつた。源助は愈上機嫌に、

「耕の助さが居ねえだから、俺が始めるだ。皆續いでくだせえい。芽出度田植歌始めるだから、」

と祝立つてやがて田植歌を始めた。後に續いて節を知つたものは、聲を揃へて歌ひ出す。お藤は舅の言葉に熱い銚子を持つて來たが、もう以前のやうな輕い調子はなくなつて、持前の眼光も目に立つやうに際立つて取濟まして來た。お藤は平造が言葉を聞いたのであつた。

まことお藤は思はぬことはなかつたのだ。津田の娘ともあらうものが、平百姓の七越の嫁となつて今まで呼び捨てにした、源助やお岸を親と侍き、齒にもかけなかつたお倉まで、嫂と立てねばならぬことゝならうとは、何たることであらう。舅姑が嫁と扱ひ、嫂が義妹と見るのは、當然の事ではあるが、これとてこの扱を平百姓の家で受けたとすれば、津田の家の……、其家の娘の耻ではあるまいか。只だ僅か昔の名殘のかたを留めて普通の平百姓の嫁よりも聊さか立勝つた敬意を拂はれるばかり、惣て平百姓の嫁として、扱はれない身は、ああ何たる肩身の狹いことであらう。此のやうな行末を見やうとて吉作に嫁いだものではなかつたものを、とばかり覺悟も動いてお藤がいつもの見得張つた心は、攪亂されずには居られなかつたが。其樣な思ひのお藤にあらうと

は若者の知らう筈はない。醉はまはる陽氣にはなる。此まで家柄の相違から、常に權識をとつて居つたお藤が、今はもう其樣な事を許さぬ七越の嫁であるのでついした好奇心からして、一種の嫉妬心からも前に居れば弄りたくもなる。

「お藤さどうしたゞ。お酌してくだせえよ。茫然して居ちや仕樣がねえ、其處の肴を此方へまはして……、……おつと左樣だ。」

津田の家柄に對してお藤には、態度に言語に常にある敬意を表して居て、このやうな口吻さへ漏らしたことは此まで更になかつたのだが、かうなると面白づくに調子に乘つて、寄宿で仲間の娘達へ話すやうな語氣で、如何はしいことまでそれは敬意も糸瓜もあつたものではない。がこれも此邊の所謂平百姓へには普通な事なのである。けれども常から思ひ上がつたお藤に、何として平氣に聞流して居られやう。凝と耐へて其場をすまし、後の片付も匆々に生れて始めて此やうな目に逥つたやうにも思はれて、遲く歸つた吉作が腕に人目がなければ泣いて縋つたのだ。

越えて二日目の夜、お藤が生家へ行つた跡、學校から歸つた吉作は、何か濱島校長の云つたことを、父兄に相談して、其判斷を請ふたので、

「先生が左樣云ひなさるのなら、其りや惡くもあんめえが、然しよく考へて見るだの、俺別段異存つてねえけんど、これがお前の身體のきまり時だでなア、念にも念を入れて、考へて見なきやなんねえだ。其れに俺一存でも行かねえ事だで、豐市が考も聞いて見なきやならねえだが、豐市お前の考はどうだ？」

「俺異存所でねえ、其方が可いと思ふ。色々お世話になつた先生が、折角の御心配だで、左樣しなくちやどうも濟むめえて、其れに第一吉作が出世だから、阿父さへ異存がなけりや、吉作一つやつて見ちやどうだ。」

「左樣さね…………阿父どうしやう。」

「左樣さなア、豐市どうしたもんだらうなア。任地が任地だからなア。人氣がよくねえ處だで…………」

「成程其れも左樣だ。若者二人をやるだから人氣がよくなくちや、心配は心配だが…………、何しろ月給が十八兩になつて、ともあれ下船渡學校の校長にな

る、甘え口だから惜しいもんだのう。村に居ても其れや吉作が腕次第で、廿兩にも廿五兩にもなれもしやうが、何時までも校長にやなれねえ。折角骨を折つて吉作に卒業さして見りや一日も早く校長にして見てえし、吉作もなつて見たからう。阿父、どんなもんだらうのう…………」

「左樣よなア、其れも左樣だなア…………、どうだらう嚊、お前の心持も聞いて見なけりやなんねえだが、お前の考へは…………」

と源助は振返つて離れの火のない圍爐裡の傍に、お倉と二人、此方の相談に耳を傾けて居たお岸の方へ談話を向けた。今まで幾度か云ひ出したかつたのを、我慢して聞いて居たやうに、お岸は吾知らず膝を進めて、

「そりや村に居ても、廿兩も取れるやうになるなら、何にも遠へ行くにも當らねえでねえか。那樣人氣のよくねえ處へやるのは、俺どうも心配でならねえだ。吉作もお藤もゝう少し年でも老つて居ると可いけんど、まだ二人ともほんの子供でねえで。村で世帯を持つと異つて、他村ちや中々六づかしいだ。右も左も他人ばかしの村へやるのは、俺どうも吉作よりかお藤が可哀想で…

…………」

と絶對に反對の意を漏らして、ぢッと源助の面を見上げた。

「むゝ無理もねえけんど、お前のやうな事も云つても居られねえが…………」

「だつてお前さ、吉もお藤もまだ子供でねえか。村に居られるなら、俺村へ置きてえだ。」

「那樣事言つてちやおへねえ。何しろ吉作が出世になる話だから…………然しなアどうしたもんかな、豐市。」

と又決を豐市に求めるやうな口吻。

「左樣さのう。阿母の故障もあるし、年若の新世帶だから心配は心配だが、此まゝで居ちや先生に濟まねえやうぢやあるし。折角の出世の緒をなくなすやうで…………」

「さア大きにそれもあるて。」

と稍少時行き惱んだ。源助は向直つて、

「どうだ吉お前の考は…………お前校長になつて、やつて行ける積りか。どう

だ。」
「其りややつて行けない事はないですが…………、」
「ふむ、其れなら行くことにするかなア…………。」
「だつてお前さ…………、」
と耐らずお岸がまた口を出すのを、
「阿母のやうに、左樣一圖でも困るが…………、行くとしても、何や彼や色々面倒なことは面倒だて。阿母の心配も無理のねえ處だが…………、」
「それも左樣だが、一應又お藤にも聞いて見ようでねえか。家内の方はお藤が切り盛りしなきやなんねえだから、何だつてお藤の考が大先だでなア。」
「ぢや今にお藤が戻つて來たら、俺阿父と篤りお藤に話して見やうから、お前もよく相談してのう。」
「ハイ左樣しましやう。何と云ひますか、あれが。」
「吉、これお前よく考へろよ。俺もお藤によく云ふだけんど…………、」
とお岸は何處までも不安心の樣子であつた。このうちにお倉は圍爐裡に火

を燃して、茶の仕度、此度吉作は中魚沼郡下船渡小學校の校長に榮轉するやう濱島校長が運動してくれて、ほゞ其樣な好結果を得たので、吉作に赴任の意向を聞いた處から、吉作は自分一存で挨拶も出來かぬると、赴任についての相談が今のやうな結局であつたのだ。

（七）

日ならずして、吉作は下船渡の校長となつて行つた。

お藤はかねてからして望んで居た地位を、吉作は又多少懷抱した教授上の意見を、他から掣肘されることなしに行ふ機會に到達したのである。

濱島校長の意見と、學校を出たての吉作が意見とは、中々合つて行かなかつたのを主張を殺して固陋な――吉作が目から見た――教授法の下に這麼事では子供が萎縮てしまふわと思ひつゝ、仕方なしに從つて居たが、今こそと、かねての意見を具體した改革案を出して同僚にはかつた。同僚も若手揃ひの事とて、一も二もなく贊成したので、折柄先任校長の質實なやり方で經常費の大分餘裕のあつたのを幸に、改革案の實行をきび〱やつて退ける。教案の細目から運動機關の設備まで、思ひ切つて新しいやり方をしたのであつた。

恰も其時新任校長の教授の樣子を見やうと、一日村長を始め學務委員の三人が、二三の有志と參觀に見えたことがあつた。迎へて教場へひいた吉作は、直

ちに全校の生徒を集めて教育勅語の一節を講じ、濟むと高等科生一同の亞鈴運動を示し、其れから他の學科についても教授の模樣を説明して、事々しい仕掛けで參觀人を送つた。

やがて時を過ごして九月の末方、下船渡校が主動となつて、小學校の生徒打ち群つて七百人信濃川の川沿の原で、このあたりの聯合運動會を催して郡長の臨場を仰いだ。このやうな仕方が妻有輕佻（このあたりに高田生意氣妻有輕佻と昔から言ひなされて居る）と云はれる土地の人氣に適つて、吉作校長の受けは頗る好評であつた。

お藤には待ち設けられた今の身の上の、彼樣して恁樣してと、さま〴〵に畫いた胸の望みの、其れは七越の御新造と呼ばれて、登記所を預る裁判書記の妻や駐在巡査の妻と往來し、土地の豪家の妻や娘や、女教員の三木春江等と立ち交つた一團を作り、此處等あたりでの一流なるべき生活をして、如才なく取回して居る。生活向き萬端總て濱島の細君の其れを手本として居るのである。

かくて此處に一年を過ごした。

先任校長が住つて居つた家を其まゝ引繼いで居るので、狹くはあるが手入も屆き、屋敷廻りの落着いた一構、刈入に間もない稻は既や黃味かゝり。鳴子の響雀の羽音に景氣づいて、案山子のわざとならぬ趣を一目の田の面を越え川の彼方の村家を匿す杉の森まで目のうちに、吉作が書齋の一間は紙表裝の蜀山の軸をかけ、陶製の壽老人の置物を据ゑた六疊の部屋で、二棹立の本箱の上になほ山上の地理書藤澤の算術書など、師範學校在學の折の參考書を重ね、新しい綿フランネルを掛けた机を障子の方へ押向けて、吉作は今帝國文庫の八犬傳を讀み耽つて居る。

去年の六月、任に此處に就いてから、もう今曾根在任の折の氣輕さを、たづねる事は出來なかつた。身に負ふ責任の稍や重い事を思ふと、何彼に付けて前後を思慮するやうにもなり、有つた以前に引きかへて吾ながら老成じみたと思ふ事もないでもない。吉作は本を離れて四邊の風物に目を吳れて、茫然空を見遣つて居た。

「お藤、お藤。」

「ハイ。」

と次の間から、髪を夜會に取上げたお藤は、瓦斯大島の袷に、繻子とメリンスの腹合の帶、藤色縮緬の半襟を見せて、

「何が御用だかね。」

「茶をくれないか。」

「ハイ只今……。」

と欅のくり盆に急須を載せて、相馬燒の大振な湯呑を、夫に纖灑な京燒の自分のも取添へて、

「今日はまだ誰方も入らつしやらねえだね。」

「左樣だ。今に誰か來るだらう。」

「此二三日三木さんが些少も入らつしやらねえだが、何うかなすつたゞかね。學校へはお出になりますだか。」

「ウム欠席はせんが、何だか氣分が勝れんとかつて、良くない顏色をして居るよ。」

「おや左樣。私行つて見やうかしら。」
と獨語くやうに言つたが、
「三木さんと云へば、佐村さんはどうして居らつしやるだらうか。」
「どうして居るかさ、相變らずだらうよ…………。おゝ、つかん事だがね、此頃鮭はあるだらうか、お前知らんかね。」
「ごせえましやうよ。昨日も卯の木の簗で、五六本もとれたつて話聞きましたゞから、どうかなせえますかね」
「どうもせんが、もしあつたら先生へ上げたいと思つて……………」
「左樣でごせえまッすか。可い處へお氣がつきましたね。左樣したらどんなにお喜びなさるだか、奥樣が私共からでもなければ食られはしねえだから、あの山の中ぢや…………」
「左樣ともさ。生家の方ぢや河魚は無理だ。と云つて海魚はなしな、何處へ行くにも便利は惡し、同じ生れるなら山間は損だな。だが其山間が戀しくはないか。」

「其りや自分が生れて處でねえかね。戀しくなくつて何うしましやうよ。身贔負ぢやねえですけれど、生家の方の人達は此處見たやうな事は些少もごせえませんよ。此方の人達は何故此樣でごせえましやうね。一寸談話するにも何だかゝう澄し切てゝ、人を輕蔑むやうな風でごせえますわ、氣位が高いからだかね。生家の人達が奥樣に話しるつて何しるつて、お染さの母上だつてもつと丁寧だに、此地の人は那樣事は些少もねえだ。其れに人氣だつて何だつて比較物になりましねえ。此地で奥樣の樣な身體になつて見たいつて夢にも出來る事ではごせえましねえ。」

「イヤ其りや人氣の故ばかしぢやない。先生が故里の學校へ御出なすつてからは、もう十五六年、やがて二昔にもならうつてもんぢやないか、馴染も古けりや、人望も僕等の比ぢやないし、殊に村の若手の頭だつた人達は、一人として先生のお世話にならない者はないから、那麼わけにも行かうといふもんだ。」

「其れもごせえますね。だけんどねお前樣、此地のやうな處へ居たつて、先生のやうにも奥樣のやうにもなれねえことはごせえませんわね。また同じ居

る位なら、あれ位でなけりやつまらねえだから、」

「其りや左樣だ。先生のやうになれば萬事好都合だが、無暗に焦つて出來る事ぢやない。つまり其人の德だな眞面目に仕事をして、年限を經て行けば自然左樣なるわさ。然しお前からも其積で居て貰はなくちやならんのは、先生のやうに、那麼に惡く固まつた引込思案でも困るが、またあの中に面白い處はある、誰にしても恒產を貯へ、其分に安ずる覺悟は持たねばならん。其分に安ずると云つて、何にも一生此儘に埋まれと云ふわけぢやないが、分を越した慾望を持たんやうにしなくちやならんと云ふ事だね。」

「左樣でごせえますね。そりや私も先生のやうでもよくあるまめえと思ふですよ。あれぢやオホヽヽヽ、」

「イヤお前のやうに、左樣取るもよくない。僕等に今のやうにしろと云つて、出來ることぢやないが、然し少くともあの心懸けはなけらねばならん事だよ。僕等のやうな薄給の敎育家に、派手な事の出來んのは當然の話だから、寧ろ其派手にやつた結果の惡聲を聞かんやうに注意せねばならんが、これはお前の

心懸けに依ることだから、お前も其積で居つてくれ。」

「ハイ、其れぢやどうすれば可いですかね、何だか六づかしいことで、よく解りもしねえですけんど、それは勿論何にも派手な眞似をするには當らねえですわね。派手な事はよくありませんが、みじめな事をして暮すのは、私厭ですよ。」

「ハヽヽ、みじめな生活をしろぢやない。派手な眞似はせんやうに、氣をつけてくれと云ふのだ。然しこれも今が今、お前が派手の生活をして居るからと云ふぢやない。これからの事を氣をつけてくれるやうに云ふので…………」、と今更の感に打たれたやうに吉作は見るともなしにお藤を見ながら、

「何にも心配するには當らんよ。此處へ來てからもう一年、別に困つたこともなく恁うして來たから。新世帶で困ることだらけだと思つたら、左樣でもなくてやつて行けるから可笑なものさ。お前も苦勞だらうが、このさきは一層氣をつけて……」

「本當でごせえましたね、何だか嬉しいやうな恐しいやうな、心持でごせえましたが、來て見れば其程でもごせえましねえ。どうも奥樣のやうにや行きま

せんけれど、これだつて今にやなれますだから、彼樣なりませば仕合せでごせえまさね。お前樣が先生のやうになりなされば、私だつて……」

「むゝ、どうか奥樣のやうになつてくれ。然し僕の先生のやうになるのは中中六づかしいよ……。だが學校は先生より、もう少しどうかして見せる。僕は彼樣まで引込思案でないから、」

「はア、先生の引込思案はありや別ですもの可哀想なのは奥樣でごせえますよ。萬事がなさり難くごせえましやう。」

「何左樣でもないよ。あれで持つたものだよ。ハゝゝゝ。」

「オホゝゝゝ、」

と罪もなく、折柄の興を興にして、二人は深く心も留めず、明日の樂みを待ち受けの此土曜を、悠然と心を休めて居る。

眞向に日射をうけて、瑞穂の色は更に豐かに田の面に溢れ、波に動いて川風が吹き上げると、鳴子はから〳〵音をひいて、ゆら〳〵點頭き渡る穂の中を、元氣よく蝗が飛ぶ。川向には外丸村を壓して峙つ、東頸城界の山脈が目をひいて、

此方は中津川の奥深く、苗場山、鳥甲山、さては秋山郷の山々まで、空を離れて影も清く、何時より近く鮮かに眺められる。折しも澄切つた空を横に、颯と渡鳥の一群が勇しい羽音を立てゝ過ぎた。

「お出ですか。」

と垣を隔てゝ呼ぶ聲が聞えた。

「ヤア土岐君か、サア上り給へ。誰も來ないから、今君達の噂をして居た處だ。」

「左樣でしたか、」

とやがて廻つて庭先へ來た。

「何ぞ面白いお談話でもありましたか。」

「イヤ相變らずさ。歸つて直ぐに來るだらうと思つたに、君達はまた遲いぢやないか。」

「はい、何日も御厄介にばかりなつて居ますから、今日は一つさまをかへて、豐川の處へ集らうと思ひましてね、來しなに一寸寄つて見ましたものですから、つい遲くなりました。先生今日は彼方で皆お待受けをする事にしてありま

す。よろしければ直にお出掛けなすつてわ、」

「左樣かね、では出掛けるかね。がマア上り給へ。」

吉作が此處へ來てから、互の親睦をまし、かた〴〵敎授上の意見を疏通するやうにと、殆んど例のやうにして、同僚を宅へ集め、種々の談話に打解けて每土曜を送るのである。今日も其れなので。

茶の仕度をして居たお藤も其處へ、心安だてに挨拶もなく、

「土岐さん、マア、可いでしやう。」

「ハア難有う。」

「上り給へな君。」

「お上りなせえな。まあお茶でも…………」

「左樣ですか。じや一寸失敬しましやうか。」

と机の脇へ、お藤が汲んだ茶を呑んで、

「好時候になりましたね。」

「はァ全く。おゝ然う言へば三木さんは何だか、氣分がお勝なさらぬやうに

聞きましたゞ、何麼工合でごせえますかね。」
「なに何でもありやしません。風でも引いたでしやう。もう豊川の處へ行つてるかも知れません。奥様どうです、御一所に入らしつたら、」
「ハア難有うごせえます。彼方で三木さんにお逢ひなすつたら、明日にでも入らつしやるやうに、よろしくどうか。」
土岐は不意と吉作が机に目を觸れて、
「先生、其りや何です。お讀みになつて居る其本は？」
「これですか。ハヽヽヽ八犬傳ですよ。始めて讀んで見ましたが、面白いですね。」
「面白いですね。あ、それで思出しましたが、先達の平家物語をまだお返し申しませんで、」
「可いさ、何うせあいて居るのだから。平家物語と言へば、君は國文の太田先生を知つて居るだらう。あの左の眼尻に黒子のある、美聲の讀み上手な、あの先生が平家物語が好きでね、よく科外に講義をしたつけが、」

「左様でしたか、僕等はとう〳〵聞きませんでしたよ。尤も簡易科で年限も早かつたからでしやうが、惜しい事をしましたな、聞きたいもんでした。其時先生は誰方なんぞと御一所でした。」

「左様でしたね、かうと……、一々覺えても居ないが、新村川崎植木鈴川、其れに僕なんどが上の方でした。」

「ハア植木……、植木常五郎と云ふ方でしやう。あの漢文科の檢定試驗に合格した。」

「えッ植木が漢文を……、川崎の和文は知つて居たが、」

と云ふ吉作が聲は、何かは知らず異様に聞えた。

「まだ御存知ぢやございませんでしたか、僕は御存知とばかし思つて居ましたが」

「イヤ始めて聞いたが、よく合格つたなア。」

と言つて口早に、

「豐川君が待つて居るとよくない、出かけやう。」

「えい、出かけましやう。」
二人やがて連れ立つて行くのを、跡に見送つて居たお藤は、常と變りはなかつたが、其日からして吉作が心に一變革を來した事は、お藤が心づかぬ處であつた。
卒業證書を握つて、四年の日子を朝夕懷しんだ其校門に、袂を同窓の人々と分つた以來、自分が行動の經路はどうあつたか。川崎は和文に植木は漢文に、既にかねての希望を實にしたではないか。寄宿の窓に未來を望んで、臂を執つて語り合ふたのは何であつたか。互に妙な反撥から、川崎と二人、植木や鈴川に先を越されまいと、誓つた言葉もあつたのに、自分の今のさまは、可かぬ、可かぬ、這麼事で安じて何うなるものか。然うだ。遲くとも今から志を立てやう。せめてまた自分が職責と、身の持ち方は、何處までも眞面目にしやう。此くすれば何うか川崎等に合す面目もあり、内にして心の滿足妻の喜びも買へるであらう。左樣だ、左樣しやうとばかり吉作は胸に問ひ胸に答へたのであつた。
受驗の科目も何にしやうと、種々の思案の末に、國文漢文倫理の三科を撰んで、

手近にあつた文章軌範やら、竹取物語やらを讀んで行くうちに、此處にまた年も過ぎた。

新年の客受の献立やら、其他についてお藤が仕こなしが、派手に過ぎたと吉作が言つたのを、去年もかうでごせえましたにと其儘にして、なほ日を改めて女の客を、吉作が眉を顰めるのも知らず顔にもてなして、生活は次第に分を過ぎて行くばかりである。學校の經常費についての請求やら、學齡兒童の調査、就學奬勵の方法など、さま〴〵な校務に、此頃吉作は日毎に歸校の後役場へ通つて、村長や助役と相談に幾日を過ごす。今日も其れで、まだ歸らぬ家內は、村の舊家馬場の娘のおきく、女敎員の三木春江と、春の末の長閑な日を、田の面を見晴しの例の吉作が書齋に、三人打寄つて時の移るも知らずに居た。

「左樣は仰有いますけれども、然し奥樣なんですよ。外の事とは違ひますから、其りや何ですわ。」

と春江は語を次いで、

「よしんば私達がいくら左樣思つても、外の人達が其氣になつてくれません

ければ、何にもならんぢやございませんか。ですから私はかうしやうと思ひますが、如何でございましやうか。かうです。最初に私と奥樣と二人して、皆樣と御相談をしますですね、其時おきくさんから贊成していたゞきましたら、何うか出來ない事はございますまいと思ひますが、おきくさんが先に贊成してくだされば、皆樣もつられて、贊成なさるやうな事になるだらうと思ひますわ。」

「左樣でごせえますね…………、然し私や左樣までしねえでも可いだらうと思ふですよ。何にも私どもが好んで始めたと云ふ譯ぢやなし、始めたからつて又、得の行くことぢやねえですもの、幾等私どもが云ひ出した事でも、大抵なら出來るだらうと思ひますが、私の今晉根に居つた時には、先生の奥樣と佐村さんが云ひ出して、私とお染さんが仲間になつて始たのですが、其時なんか直ぐに出來ましたからね、今度も左樣までしなくたつてと思ひますけんどねえどうしたものでしやう。おきくさん。」

「左樣でごせえますね。どちらが可いですか私にやわかりましねえが……

三木さんどうしますだかね。」

「さア、どうしたものでしやうか。其りや奥樣の仰有る通り、なにも見得や慾で始めるんぢやないですから、村の人達だつて少しや察してくれゝば可いんですに、其れが中々左樣は行かないから困るんですよ。私達が始めるとさへ云へば、直ぐ最う一口に生意氣なと云はれて了ふですから、本當に仕樣がないぢやありませんか。」

「全ですわ。それは生家の方なんて這麼事は先生の奥樣が云ひ出せば最う一も二もねえですがね…………此地の人が六づかしいだか、私等が到らねえからですか…………」

とお藤は今更のやうに鬱いだ眼色を見せて差俯向いた。

折柄書類らしい小包を脇に歸つて來た吉作は、庭を廻つて書齋の前に立つた。

「オヤお歸りなさいまし。」

と先づ聲をかけたのは春江で、この聲に心づいたやうで、お藤もおきくと同じ樣に挨拶した。思はぬ吉作が歸つたので、おきくはきまり惡るさうに。そこそ

こ會釋して歸つて行く、包を机に載せてお藤が煙草の火を取りに立つたあと、春江が汲んだ茶を呑んで、がつかりしたやうに吐息をして部屋を見廻すと、何時も變らぬ蜀山の軸、壽老人の置物、本箱が一つ増えて、本挿の一列が、心理學哲學概論倫理學史などの種類と變り、なほ其本箱の脇に、四書大全郭註莊子徒然草鐵鎚などの和本が重ねられて、撿定試驗の準備の其れは、種々な本やら雜誌やらが目につく。

机に載せた包を撫でゝ、

「何か變つたお談でもありましたか。」

「何もお話申すやうな事はありやしませんわ。厭なことばかりで、ね奧樣。」

と煙草盆を持つて入つて來たお藤を迎へて言つた。

「本當でごせえますねえ。何故此地の方の人は這麼だか。」

「え、何だね。」

「なに此間御話しましたつけ。あの私どもの會の相談を、三人してして居たですよ。其れが何だかどうも………、何故此地の人はかうでごせえますかね。

私達が少し何かすれば直ぐ生意氣だとか何とか云つて、好い事と思つて居ても壞して了ふですもの。生家の方ぢやお前樣、濱島の奧樣でも始めりや、誰でも先に立つて入りますだに、此方ぢや井田の奧樣(裁判書記の妻)始めもう左樣ですもの、厭になりますだ。」

「ハヽヽ、然うお前達の思ふやうに甘く行くものか。奧樣のやうになるにや、第一年功が要る事だもの。然しお前達の會は那樣に心配しなくても可いよ。村長さんが甚く贊成して居られたから、もう出來たやうなものだ。」

「おや左樣でごせえますか。其れなら……………ねえ三木さん。」

「はア、それなら最う…………」

「はゝゝ、然う安心するとまた直に泣言が出るかも知れんぜ。會が出來てから、君達は滅茶に骨が折れるから。」

と言つて、少し調子をかへて、

「君達は兎に角會が出來るから可いが、僕の方は全で可かんよ。三木さん村ぢや何故かう教育に不熱心だらうね。學務委員で候としかつめらしく顏を

揃へて居たつて、何にもなりやしない。」

「何うでしたか。學校の方の要求は………」

「可かん／＼。まるで盲目の揃ひだ、實に仕末に可かんよ。水島さんなんて少しはわかつて居るだらうと思つて居たら、何にも那樣必要はないだらうと云ふぢやないか。癪にさはつたから存分に言つて遣つたが、然うすると又、其處等の修繕や器具の新調までも見合せないかつて、古澤さんの意見さね。那樣醜汚事がして置けるものか。いろ／＼說いた末が、成程其れぢや必要だらうが、今年は何分にも村費の加附が大きくて負擔が重過ぎるから、何うか來年に延ばしてくれつて、勝手にすれば可い。それでも何うかゝうか修繕の方と器具の新調丈はすることにしたが、例のは駄目さ。些少ア遊戲の道具も揃へてやらなくちや、子供が可哀想だ。」

「村の方もあんまり自分勝手過ぎますわね。其れで學齡兒童の獎勵の方はどうなさいましたの。」

「其れですか。其れはね、」と苦笑して、とう／＼脊負込みましたよ。土岐

君は大叱言だらうが仕樣がない。那麽連中にまかせて置いた日にや、何時事務が擧るか知れやしない。産業期休業が濟めば、どうしても十分の六までにしなくちや、此村は不成績の方だから、僕も多忙のは恐入るが、皆樣からも何うか骨を折つて貰つて………」

「なに骨を折るも何もございませんわ。皆學校の爲ですもの。」

「實際左樣思つて貰はなくちや可かん。僕も何も彼も放擲たい程心が急くけれども、其職に居るうちは、其職に盡さんければならんから………」

と一服吸ひつけた。お藤は二人が對話を熱心に聞いて居たが、立つて茶を代へ菓子などを改め、其から三人暫くまた話合つて春江はやがて歸つた。

吉作は去年の暮、二圓增俸せられて、月給廿圓を給せられる事となつたが、お藤が手許は以前よりは苦しくなつたのである。前と違つて、吉作は今俸給の餘分を許さなかつた。餘す處があれば盡く書籍に代へ、只ださへ質素を喜ぶやうな傾向は、未來を望むやうになつて、お藤がよしない見得を張るのが頗る目についても來た。敢て干涉するでもないが、然りとてあまりによい顏はせぬの

である。

「お前樣、本當に村長さんが私共の會に贊成してくだすつたゞかね。」

「何の譃を云ふものか、お前達の意見を話したら、左樣云ふ事なら早速家内にも盡力させましやうつて言つて居たからな。」

「左樣、大丈夫ですね。私と三木さんが云ひ出したので、可けなかないかと思つて心配して居たですよ。本當に此地の人位變な人達はねえですよ。私達だと直ぐ目の敵にして……、先生の奥樣を羨むわけぢやねえですけれど、早く彼樣ならなくちや、本當に肩身が狹めえですわ。」

「直ぐ左樣も行かん。時をまつさ。」

「時を待つてお前樣……、同位なら早い方が可いだから、私、……、」

「マア可いさ。那麼事ばかり言つて居たつて仕樣がない。會の話は其れ切か。何か發會式に別に催はないのか。」

「いゝえ別に何もねえですよ。只だ學校を借りて發會式をして、女生徒の唱歌に、福引でもしやうかつて位でごせえます。」

「うむ、其れも可からう。」
「御前様、それで私御願がありますが……、」
「何だ。」
「あの……、其時着て出る着物でごせえますがね。三木さんはあの通りの衣裳持で居なさるしおきくさんだつて中々まけちや居なさらねえ。其中へ私一人見すぼらしい扮装も厭ですから、どうか一枚……、」
「ふむ……、其折の仕度が欲しいと云ふのだね。イヤ拵へてやらんこともないが、只だ其丈に着るものならば別段着物の仕度をする必要もないぢやないか。」
「でごせえますけれど、皆様が立派な扮装をして居なさる中に、私一人……、那様みじめな事私厭ですもの。」
「餘計な見得だ。那様ものならお前が月々のうちで拵へるさ。」
と吉作は苦りきつてお藤を見下し、詰めた煙草を吸ひつけやうともとせぬ。
「月々のつてお前様、それぢや出來やうがねえぢやごせえませんか。長く居

ればそれだけ交際も廣くなりますし來る人達も多くなる。其れにお前樣本ばかりお買ひなさるだから、全で殘つて行くものはねえぢやごせえませんか。やつと足して行く位ですもの。それで出來ましやうかよ。私此れつて着物も持ちましねえで、全く肩身が狹くて、其日が心配でなりましねえだ。お願でごせえますから、然う言つちや何でごせえますが、貯金もあることでごせえますし……」

「いや其りや可かん。お前はまだ解らんのか。ありや用意金だ、不時の災禍に備へて置くので、餘計な見得を飾る着物を拵へるためぢやない。新しくはないがいゝ加減に着物も持つて居るではないか。お前は月々のが足りんと云ふが、僕は足りないわけがないだらうと思ふ。細く云ふにも及ばんが、うちに來る人達だな、彼等へ愛想に出すもの、加減でも年に衣服の一枚や二枚は出來やうと思ふがどうだ。必要以外の愛想が何の役に立つ。それればかりでない。村の小娘や老婆連にまでのお前のやり方は、決して當を得たものではあるまいが。」

「ありやお前様、いつも云つてあるぢやごせえませんか。どうせかうして居るなら、濱島の奥様のやうにならなけりやつまらねえですもの。其れにや少しやお愛想だつて見得だつて入るぢやごせえませんか。那麼にして居てもまだ私等の事と云へば、直ぐ目の敵にする村の人達ですもの。今日だつて私や何故さうだらうと思つた位ですもの。もしか發會式の時にみじめな扮裝でもして居ましたら、それこそ村の人達は何と云ひますだか……、無えちやねえあの貯金が……」

「むゝ又其れか。あれを使用して若し不時の災禍のあつたときにどうするのだ。」

「それは災難の用心も入りますだけんど、現在みじめな眞似をしてまで、そ、そりやお前様……」

「それがどうした。那様見得が何になる。」

「あれ、何でこれが見得でごずえましやう。這麼時耻かしい思をする位ならお前様何にも……」

と其處へ突伏した。吉作は其樣を眺めて怒のうちにも憐みを含んだ面色をしたが、胸の惱みの聲さへ澁つて、

「お前も少しは僕になつても見るが可い。學校の事に一日追ひつかはれて自分の勉強は出來ず、學校の事も甘く行かん。學校の仕事はやらねばならん事だから可いとしても、役場の人達は、とんと教育には不熱心だ。其不愉快を家に歸ればお前は一向僕の心を汲分てもくれない。多少の餘裕はない事はないが、其りや何彼の時の不時の用意と、實際必要の本を買ふのに入るので。むだな衣服を拵へる贅澤には使用れん。自分のやうに自修するものは多く讀まなくてはどうすることもならんのに、まして思ふ程の時間もない身だ。どうしても註釋の本が必要だ。何故お前は月々のを殘して、僕の身に差當つて必要の本を買ふのにもするやうな心懸けで居てくれないのだ。愚にもつかん見得を張つて……」

「お前樣は又見得々々つて仰有るけんど。お前樣が本を買ふ金つて那麼に澤山の本、まだ讀みあげねえものもいかい事あるだに、其上にまだ本ばかり買つ

て、私にや、私にや人中へも出られねえやうなみじめな思ひをさせなさるだが……」

と泣聲まじりに訴へるのであつた。

お藤が春江等と發起して下船渡女子奬勵會と云ふ、平百姓の娘に裁縫を敎へる其會の發會式が、やがて學校の講堂に開かれた。其折お藤は春江と揃ひの栃尾紬の薄綿に、お納戸繻珍の帶を締めて出た。

吉作が口にして居た、心理學書解題と國語の字書はまだ買はれないやうだ。このもつれが始まりであつた。吉作とお藤との衝突は時々起つて、やがて嵩じて出るの引くのとの騷ぎのあつたときには、お藤はもう酢の物好をする容體であつた。

妖艶

（一）

時に夕日の物の色、十月半ばの秋の姿を、庭の樹々にもあらはにした。麹町四番町、靖國神社の裏通りに、未だ新築の木の匂、塀越しに見る二階の一間に、からりと障子を開放して卓を圍んだ三人の影。

中に五六の取肴、所謂家庭料理とかいふ、此家の内室が心盡しの數が見えて、キユラソーの壜、シエリーのそれと、ウキスキーと、好めるまゝに差置かれて、主客の顏の夕紅葉、既半ばを過した態であつた。

柱を脊にして、三十二三の赧顏、横肥りのどしりとしたのは主人の彌之助、近藤氏、折に剽輕者の名を取つたさる省の技師、手にした洋盃を下に置くと、豐かな頬に笑を帶びて、

「いや、此方には一段上を越したのがある。」

「此方とは、」

と向ひ合つて居た美しげな八字髯、廣い額に髪のしなやかな、眼の鋭い細面の紳士、彌之助の竹馬の友、丸尾英作といふ會社員。

「關係筋かね。」

と今一人の、鼻の高い、頰のこけた、度の強い金縁の眼鏡を掛けた、これも舊友の藥學士、高木陽一。

彌之助は打笑つて、

「むゝ、無きにしもあらずだ。」

「串戲ぢやない。那樣者を擔出されて堪るものか。」

「はゝゝ、いや安心して聞くが可い。僕の事なぞは言はずとも可いのだから。」

と葉卷を取つて吸付けながら、

「此處から二町と離れて居ない。通つて見覺えがあるか知らないが、前に銀杏の大木がある、左右板塀に、冠木門、女名前で八木雪枝としてある家、それだ、其女主人だ。」

「なに八木雪枝、」
と英作は聞咎めて、一寸目を瞬つたが、
「待ちたまへ。其婦人なら僕も知つて居る。」
「え、知つて居る。」
と彌之助は眼を見合せて、ト顏を打目成つたが、
「はゝゝゝ、矢張り氏子中か。」
「何だ、氏子中とは。いや其婦人は知つては居るがね、全體何者だか今日まで實は知らないのだ。むゝ、あれなら屹度奇談があるだらう。」
「ヤ、知つて居る人があれば尙妙だ。今高木の話したのは、黑人だけに類のない事もないが、此方は素人だから驚くのだ。兩親は最うとうに亡くなつたが父は長い事官海に游泳して居た人で、晩年實業界へ入つて少からぬ產を殘して逝つた。母は女大學式の、良人には何事も背いた事がないといふ、極めて柔順な羊のやうな婦人だつた。
「一寸、其戶籍調べのやうな處は、成るべく簡單にして直と本題に入つて貰ひ

たいね。」

と陽一は稍待ちかねた顏。

「宜しい。勿論那樣系圖を言立てゝ掛る談話ぢやないがね、順序だから一寸出處だけを言つて置くのだ、一人娘で滅法な美人で、ちんと濟すと光輝いた。

お急ぎだから本文の方へ直ぐ駈付けるが、事の起りは十六の歲。

今ならば庇髮だが、其時分は未だ高髷だ。荒い風にも當てなかつたのだから全くの懷子、尤も虫も殺さないやうな顏で、簪で金魚の藻を掻分けて居る處などを見ると、誰しも未だ罪のない兒供のやうに思つて居た。すると突如に紅入りの友禪の帶が段々と前へせり出して來たらうぢやないか。母親は仰天する。父親は火のやうになる。相手はと問詰めたが、泣いて了つて仕樣がない。段々と詮議して、漸くに家の書生と解つた。今更のやうに、慌てゝ直に引離して、書生は放逐、娘は病氣と言觸して世間を繕つて、當分田舍へ出養生、母が付いて逗子あたりの別莊へ隱して、其處で人知れず身二つにしやうといふのだ。

男の方はそれとも知らず追はれた後も度々、近所へ姿を見せたさうだが、娘が別莊へ遣られて居ると聞くと、其足で直ぐ跡を追つて行つた。心臟病で以前から惡かつたのだが激しい感情の、火の玉のやうな靑年で、思立つと、遮に無に汽車へ飛乘つたのだ。」

「ふむ、そろ〳〵談話になつて來たな。」

と英作は又ウヰスキーの洋盃を上げた。彌之助は聲も殘さず、

「處がならない。」

「え、何うして。」

「男は顏を見る處が、逗子の土をも踏む事が出來なかつた。」

「何うしたのだ。」

「勿論當人はそれほどゝも、思つて居なかつたのだらう。運も惡く途中で持病が俄かに差重つた。戸塚へ着いた頃は最う身動きも出來なかつた位。其處で下されて種々に介抱されたが、それッ切りだ、遺言さへ出來ないで息を引取つて了つた。」

「何うしたい娘は。」
と脇から陽一、
「娘は春になつて歸つて來た。依然として眄たる美目だ。以前と少しも變らない。いや前より一層あざやかなものになつた。」
「腹の其塊りは、」
「月が滿ちて男の兒、玉のやうだか何うだつたか、其處まで能くは知らないがね、生れ落ちると親知らずで何處かへくれて了つた。」
「それから、」
「むゝ、それからだ。娘もこれまでは只の孃樣だつた。嘘でない涙も餘したのだらう。冷たい心持も知らなかつたらうが、これから先が大變。
一先づ事が收つたので、ホッと息をついた母親は幸ひ世間へもぱッとせず、娘もいつか諦めたか、其事は最う氣振にも出さず何か殊勝にして居るので先づ先づと安心して、それからは最う少しも油斷をしなかつたが、丁ど半歲、秋の取口になるかならないに、今度は先のに輪を掛けて、相手が三人といふぢやない

か。
一人は齒醫師、一人は出入りの經師屋の息子、一人は生花の相弟子といふのだ。何處を何う目を忍んだのか、母親は全く出し拔かれたのだね。驚いて又一騷ぎ。それ〴〵漸くの事で手を切つて、又も間違ひのない中に、寧そ婿を取らしたらといふので急に相手を探す事になつた。世間は廣いね、何も知らずに其處へ喜んで來たのがあつた。尤も家は頗る裕かで、當の代物が一寸其處等にないやうな縹緻で、えて有る奴の、不具でもなく癩でもない、身分に相當した學藝もあるといふのだから、知らない者は喰付かうぢやないか。世間は廣いよ。苦もなく候補者が、以上九人と註せられた。婿八人に一人多いのだから可いぢやないか。
評議の末に白羽の矢が幸か不幸か其中の一人に立つた。地方の豪家の次男で應用化學を專修して來た洋行歸りの、一寸利けたのだつた。男も好かつたよ。養子としちやアりうとしたものだ。
双方承諾、目出度づくめで談話が決つて、黃道吉日、椎茸さん、干瓢さん、蓬來だ、島

臺だ、茶番ぢやないのだから親達ちや併し大眞面目さ。娘は大方肚ぢや存分に嘲つて居たらう、けれども所謂華燭の典、鮮やかな式服で、眉を齊へて澄ました處は、端嚴微妙も大袈裟だが、那樣いかもの喰ひの影を、微塵何處にも見られるのぢやなかつた。」

「で、納りは、」

「當座は至極好かつたよ。餘所の見る目も羨しか。はゝゝ、飛んだ出語りにもならうといふ姿さ。いや此婦人、雪枝女史の説によると、男と疊は新らしいのに限るとゐるかも知れない。尤も初めから喰足りないやうな婿ぢやなかつたがね、何分目に餘るほども睦ましかつたのさ。

親達や大安心、跡の始末を見ない中に、間もなく父親は先に世を去つた。一家の愁傷は勿論だが、雪枝女史の身に取つて見ると、頭の壓手の最も烈いのが無くなつたといふ譯さね。四十九日の涙が乾くと、そろ〳〵持病が始まつて來た。珍らしかつた花婿も、大方鼻に付いて來たのだらう。法事の席の無常が直に戀になつて、座の取持に來た何とかといふ野幇間だ、先代の腰巾着だつた

藝のない狸だがね、初めは串戯から、何うした機勢か不意と此奴に手を出したのがそも〳〵さ。金で相手を買出したのはそれからで、いつの間にか待合這入、氣に入つた野郎の酌で飮まないと、溜飮が下らないといふ奥樣が出來上つたらうぢやないか。」

「女は幾歳だつたね、其時は、」

と英作は其切長の眼を上にした。彌之助は振向いて直ぐ、

「行年十九歳、餘所ぢや未だ肩揚も取れやしない。時に引詰めの銀杏返御召の長羽織か何かで、拳の一つも打つたといふから驚くぢやないか。狸を買ふ。鹿を買ふ。馬を買ふ。見る中に事が嵩じて來た。積つても見たまへ。凡そ十代の女で、麼這仕事を平氣で遣つて退けるのは然う類はなからう。」

「ふむ、婿が能く默つて居られたね。それが知れずに居る事は無い筈だ。惚れた弱身に、小糠三合を加味した處で、其始末ぢや捨てちや置くまい。」

と陽一は酒に熱くなつた横顔を撫でた。彌之助は微笑みながら、

「處が其手際が中々見事だつたので、母も婿殿も、知らぬは亭主と、勿體ないが欺しよい例の阿母の數には洩れなかつた。阿母は兎に角だが、婿は何方かと言へば輕俊な、抜目のない方の質で、那樣事には疾うに氣が付かなければならないのが、お氣の付かれなかつた處を見ると鼻の下が些少怪まれるがね、全體初めから全で買冠つて居たのだから、皆くれ其方へは目が行かなつた。其奴が飛んだ事から突如に暴露て了つた。」

「新聞か。」

「いや最つと小說染みた出來事だらう。」

と相繼いで二人、彌之助は葉卷を下に、

「當らずと雖遠からずだ。其婿殿も全つきりの堅人ぢやない。勿論ほんの交際だが偶には惡所の酒を飲みにも行く處が一日、其仲間とさる待合へしけ込んだと思ひたまへ。中で一寸、手水か何かに立つた時、廊下でばツたり、向ふから來た一組の客に行逢つて顏を見合せた。客といふのは女客だ。跡から骨の細い生白けた男が怪しげな媚を呈して跟

いて來たが、一見して直に知れた。舞臺ですばらしい人氣のあつた、當時の花形役者。

女は誰あらう雪枝ぢやないか。擬ひもない。現に自分の女房と來ては恐らく興のさめない者もなからうぢやないか。」

英作は又ウヰスキーを手に取つた。

「可哀想に婿の器量は此處に至つてめちや〱だね。」

「君なぞは歸つて細君に感謝するが可い。」

と陽一は冷かし顏に言ふ。

「馬鹿にしちや可けない。憚りながら那樣のとは譯が違ふ。」

と言つて自ら嘲けるやうに、

「尤も那樣眞似をする程の小遣ひも宛行はないがね、」

と美しい齒を見せて打笑つた。

「はゝゝ、大いにそれが有るかも知れない。」

「いや、それよりも今の談話の跡だ近藤それから。」

彌之助は引取つて其儘、

「何の道ろくな結果が有る筈がない。其明日から別れ談話さ。婿は一も二もなく家を飛出して了つた。これが此婦人の、いの一番のお婿樣だ。これから二番手、三番手、一々辯じて行つた日には大變だが、多くて一年、二年とは續いたのがない。婿を更へる事今迄に十六人とは何うだい。外に手に掛けた男の數は恐らく當人も覺え切れまい。相手の種類も百方面、千人斬の願でも掛けたやうに當るを幸ひ切つて廻すのだね。凡そ婦人が男子の爲に弄ばれる復讐の爲に出現したやうな、今ぢや全く一個の怪物だよ。容顏は少しも衰へない。歳も取らないのだから驚くだらう。若い、艶ツぽい水々しいのが、年一年に逆戻しになつて來る處などは、到底普通のには無い圖だね。

それが又た、一見した處、素直な溫柔しさうな白無垢でつかと來て居るのだから、見掛けぢや誰も一杯喰はない者は無い位だ。一寸見透せない妖婦だよ。亭主も五月蠅くなつたか、三年此方獨身で居る。母親は最う亡くなつた。金

は自由だから好き放題な眞似をして日を送つて居る。男は全で物の數とも思つて居ないのだね、だから今迄ついに一度欺された事はない。男狂ひで身の皮を剝がれるやうなのは普通の女に能く有るのだが、思ふ存分に飜弄して平氣で其中を濶歩して來て居るのを見ると、何處か凡でない處が有るのかも知れないよ。

何うだい。手近かに恁ういふ代物が居る。お望みなら何時でも紹介せやうが、這麼のは一寸類が無いだらうね。」

と語終つて、波々と注いだシエリーを一口に銜と干した。陽一は壁に凭れて居た身を起したが、

「ふむ、それで今でも未だ盛んに拵へて居るのかい。」

「勿論さ。」

「いや、そいつは妙だ。」

「何が妙だ。はゝゝ、野心なきにしもあらずかね。なに、それならば易い事だ。大手から押寄せたまへ。」

「いゝや那樣醉興半分で遣るのぢやない。大いに研究するのだ。」

「はゝゝ研究が可いぢやないか。何も修業だ。遠慮は入らない早速當つて見るが可い。跡で新説を承はらう。

向ふに口を噤んで居た英作は、其時不圖、

「全體今幾歳なんだい。」

「然うさ最う、彼是三十六七にもなるだらう。だが何う見ても廿四五位にしか見えはしない。扮裝も華美は華美だが、彼の婦人は全く別物だよ。實際の萬年新造だ。」

英作は何か知らず呆れたやうに、

「然うか最う三十七にもなるのかい。驚くね全く。正直僕は十二三年、いやそれよりも餘計に買冠つたよ。」

彌之助は只見て身を前に、

「むゝ、先刻君は名を聞いて驚いたね。何うだい其談話を一つ聞かうぢやないか。相手が君だといふと、僕等に取つては大いに聞きでが有るといふもの

だ。」

英作は苦笑した。

「いゝや、僕のなんぞは談話にもならない。それよりも君の實驗談を聞きたいね。」

「いや僕のは全でお茶番さ。双方内情を知拔いて居るのだから、頭から串戲で、其代りには跡ぢや根も殘らないで、何方も大笑ひで濟んで了つた。君は正體を知らないで掛つたのだ。談話が無い事はない。何も聞いたからと言つて心持を惡くするといふのぢやなし、座興に聞かせるが可いぢやないかね。」

「むゝ、そりや何も我々の仲で隱すにも當らないがね、」

「だから話すが可い。全體何時の事だい。」

「今歳さ。」

「え、今歳それぢや、未だ煙が出て居る位のものだ。ヤ、最う暗くなつて來たな。」と灰皿の脇の燐寸を取ると、勢ひよく立上つて手早く上の瓦斯に火を點けた。同時にはツとした光を浴びて、客の二人は酒機嫌の、蒸されたやうな顏を齊し

く上に押向けた。高い薩摩杉の天井に、眞新しい根岸の壁、抱一の秋草の額が光に榮えて極彩色のさながら目を奪ふやうに見えた。

彌之助はどかりと下へ、重さうな腰を下すと、膝を崩して更に寛いで、

「いや談話も酒も夜に限る。何うだい肴でも新らしくしやうか。」

（一一）

「話すが自慢にやならないのだから、跡で笑ふなんぞといふ、良くない事をしてくれないやうに前から頼んで置く。」

と暫くして英作は、重ねて二人に望まれてやをら談話の口を開いた。

「僕は只有りの儘を話さう。口は餘り達者の方ぢやないのだから前後の揃はない處は可いやうに推量して聞いて貰ひたい。實の處此件では何の事はない狐に魅まれたやうな心持で、全で譯が解らずに居たのだがね、今の談話で見ると、矢張り此方が遊ばれたんだから、何處まで行つても氣が利かないには違ひないさ。

いや這麼事を並べて居た處で解るまい。聞きたまへ。逢つたのは此五月の末、社用で靜岡まで出掛けて行つた歸りだ。豫定の日が一日餘つたから君等も知つて居る田原組の安岡ね、彼男が病氣で箱根へ行つて居るのを一寸見舞つて遣らうと思つて國府津で降りて向ふへ行つたと思ひたまへ。

先は塔の澤の玉の湯だ。日の暮れ方に漸と着いて、安岡はと聞くと何うだい、昨日お發ちになりましたがと言はれたらうぢやないか。遠方御苦勞有難い仕合せさ。いま〳〵しかつたが仕方がない。ちよッ、何うせ來たものだ。すご〳〵歸るのも業腹だから、湯にでも入つて行かうと言ふので、一人ぼッちぢや氣のないこと夥しかつたが、無據しに其晩は泊込む事にした。時候にやまだ早かつたから、客はちらほら、座敷は七分通り空いて居た。川に付いた一間に陣取つて、馴染の顏を呼んで蟲押へに酒といふ段取さ。內心併し手に立つ相手が馬鹿に欲しかつたよ。折角遣つて來て拍子脫けした物足りなさも付いて廻る。何だか恁う淋しいやうな氣がして、酒が些少も奮まないぢやないか。

此時隣座敷に居たのが、今近藤の話した美人なんだ。三十恰好の付添の女中と二人で其日の晝前に來たのださうだが、無論僕は誰が居るとも知らなかつた。」

彌之助は注意顏に、

「むゝ、其女中はお淺といふ雪枝の腹心だ。八木へ來てから久しい事になるが、餘程巧く手なづけてあると見えて、飛んだ忠義立に、いつもこれが手先になつて中を取持つたのだ。君のも矢張り其筆法で來たのだらう。」

「なに、僕のは直接だ。」

「それは盛だ。はゝゝ、何方も何方だから、那樣手間暇の入るのぢやないのかい。」

「串戯言つちや可けない。時の拍子だ。彼の女と一つにされて堪るものか。」

「餘り堪らない方でもあるまい。」

と陽一は薄笑の稍脣を反らしかけて、

「此方が相手欲しやで、向ふが同じく相手欲しやだ。打捨つて置いたつて、燃付かずに居るものか。」

「いや燃えは燃えたが、要するに狐火さ。どろんとも言はずに消えたのだから、一時は流石に面喰つたよ。」

「で、其段取は、」

「それが又頗る露骨なんだ。此方も此方と言はれるかも知れないが、最初は僕も少々氣味がよくなかつたよ。

談話が前に戻つて、酒も面白くなかつたから、いゝ加減に切上げて了つて、葉卷のすばらしい奴を、折よく持つて來たのがせめてもだ。心細い次第だがね、其奴に一時を紛らして、月が良かつたから、緣へ乘出しの、前の手摺へ憑掛つて、何か感じ入つたやうな面色で、下の溪流を眺めて居たと思ひたまへ。

時が時だつたから、茫然那樣藝もしたものゝ、てんで英作君の柄ぢやないやね飛んだ風流氣だ、ぢいッと見て居ると、笑はせるぢやないか、水力電氣の株の氣配が、此欲しがり屋の胸に不意と引掛つて來た。

兎も角も見て居たね。河ん中に轉がつて居る岩の頭を、ざア〳〵言つて有平糖のやうな波が越して行くのを、暫くの間見て居たのだ。

其時だ。突如に、

「もし。」

と來た。河鹿も鳴いて居なかつたから、水の音に紛れやうもない。宿の者でも來たのかと思つて振返ると、夜目だから傍の事だ。此方とすれ〳〵に、月を浴びて浴衣掛け、束髪の上のダイヤモンドがきらりと光つて、ふツくりとした目も文なのが、笑を含んで立つて居る。

勿論隣座敷のとは知る筈がない。天から降つたか、地から沸いたか、第一拔けるやうな好い縹緻なんだから、これ人かこれ妖かとまでには思はなかつたが、内々目を擦つて見たかつた。

すると玉のやうな、美音で鮮やかに、然も人柄で、妙に懐ッこいやうなんだ。

「良い晩ですこと。あの突如で大變失禮でございますけれど、何も旅先の事と御免遊ばして……………。」

此處で先づ名乘を揚げたね。隣りへ來て居るのと初めて知る。見た處何うしても素人なんだらう。歳は先刻の談話の通りで此方は殊に面喰つて居るのだから、廿二三にしか見なかつたんだらう。それに輪を掛けて、惡く美しいんだらう。安い野郎さ。白粉と香水の匂が、搦んで鼻に打付かつて來ると、何

か生息子のやうに妙に逆上せ氣味さ。心甚だ穩やかならずだね。それでなくても手持無沙汰で、無聊で全く堪らなかつたのだ。渡りに舟といふ處で、易々と擒になつた奴さ。口が解けて、四方山の談話になると、

「這麼處でも旅先ですから、東京のお方と聞くと、本當にお懷しいのでございます。お退屈凌ぎに御用が無くば、あの、お話しにお出遊ばして下さいませんか。何もお愛想はございませんけれども。」

と這麼事で、少しやア其處に振合も有つたがね、海鼠野郎めお先は眞暗で、半分は酔興か半分は其得たりかしこしかい、串戲口を利きながら、のこ〳〵跡に跟いて、其方の座敷へ入り込んだと思ひたまへ。

すると、お供の其お淺なるものだね、彼奴が待受けて居たやうに恐ろしく座を周旋して、無上に人を浮かし立てる。ちら〳〵中へ美人が巧く調子を合せる、併し此場は少し淺薄だつたよ。流石に這麼のぢや些少も參らなかつたからね。

其中にお淺の局は機を見て次へ引下がる。跡は二人差向ひだ。調子が粘つ

て來る。そろ〳〵形勢が違つて來た。談話が兎角、味な方へ傾いて來るぢやないか。

第一毒なのは相手の天の成せる麗質だ。此方の足元の惡い事。けれども樣子が通り一遍でなくなつて來ると、實は少し驚かない譯に行かなかつた。能く有る奴の色仕掛、お手盛ならば一芝居打つて見るのもお慰みだが、それとは肌が違つて居る。はて、と暫く氣を付けたが、要するに譯が解らないのだ。儘よ。何うなるものか。間違つた所が知れて居る。と未だ酒が醒めないのだ、脆いが、半分は迷されてね。調戲面にそびいて見ると、段々本物になりさうなんぢやないか。

串戲ぢやない。飛んでもない女だと。此時にも亦思つたがね淺猿しいぢやないか、野郎の眞の處を洗つて言ふと、內々少からず悅に入つて居たのさ。これより以上、聊か風俗を亂す恐れがあるから、多く立入つて言ふまいがね、跡は興に乘じて全く夢心地。」

「はゝゝ、飛んだ夢心地だ。で結局何うなつたのだね。」

と陽一は思出したやうに、前のキユラソーの洋盃に口を付けた。

「いやそれが甚だ氣が利かないのだ。卑しい意味の情人氣取りで、まさかに顎は撫でなかつたが、何か最う圖に乘つて、其晩部屋へ歸つて來た時なんぞは天下の色男を一人で脊負つて立つたやうな、愚劣極まつた心意氣で、誰も見て居なかつたから、或は知らず、氣味の惡いにた〳〵笑ひを遣つたらうと思ふよい〻氣なもので、明日は何うして恁うしてなんぞと下らない事を考へながら醉つても居たし疲れても居たし、第一夜が馬鹿に更けて居たから、其儘いつか一寐入夢も見なかつた位だから、恐らくぐッすりと遣つたのだらう。夜の明けたのも雨戸の開いたのも、枕元に日の射込んだのさへ知らなかつた。眼の覺めたのは八時過ぐ。

時計を見て、驚いて飛起きたが、扨それからだ。

言ふまでもなく、昨夜の事が直と胸に浮んで來る。そこ〳〵に顏を洗つて、女中が部屋を掃除して居る間、今日のきツかけを一つ付けやうと思つて、葉卷を吸掛けた儘で隣りへ出掛けたと思ひたまへ。

壁一重向ふの事だ。縁側傳ひにずッと行つて、何も知らないからがらりと障子を開けたのだ。

いや此時の面色を我ながら見て遣りたかつたよ。

座敷はから空きだ。誰も居ないぢやないか。裸の衣桁が隅に悄然淋しさうに立つて居るばかり。昨夜其處等に取散らかつて居た道具は、影も形もない

流石に少し驚きながら引返して、未だ掃除して居る女中に、

「おい、隣のお客は何處へ行つたんだ。」

と此訊ねやうから氣が利かなかつたが、返事を聞くと、や、申上げる言葉がない位だ、女中め顏を見てくすりと笑ひやがつて、

「お氣の毒樣、最うとツくの先お發程になりました。」

「むゝ、何時？」

「貴方のお目覺めになるずッと前。おほゝゝ、夢にでも御覽なさらなかつたの。然うですね、今頃は汽車の中で、屹度貴方の事でも思つて居らつしやるでしやうよ。」

と何うだい。こゝに至つて馬鹿にされた野郎の殼が、一人跡に指を啣へて殘つたといふ始末だらうぢいないか。ヤ、間の拔けた事夥だしい。

「全體何者だい彼女ア。」

「そりやア貴方の方が能く御存じでしやて。昨夜何ですか大層遲くまでお談話なすつて居らしつたぢやありませんか。」

係うなつて來るといよ〳〵惡い。串戲口で其場は何うにか紛らして了つたが、扨納まらないのは胸の中、第一地女に那樣が有らうとは知らないから、然うした亂暴な身持とまでには思はない。天狗の書いた艶書合せでも讀むやうに、いくら捻くつても譯が解らないぢやないか。念晴しに宿帳を取寄せて見ると、東京市麴町區云々として八木雪枝と有る。先刻の談話に名前を聞いて驚いたのは、其時見て覺えて居たからだ。名前は解つたにした處が、先のア此腹は矢張一向に解らない。今日まで實は疑問で居たんだが、談話の樣子ぢやア此位の事は向にや些少も珍らしくは無いのだらう。いや飛んでもない者に係合つたのだね、僕の出會はしたのは先づ係うした行立てさ。」

「歸つて何故復讐と出掛けなかつたね。」
と陽一は追掛けて洋盃を手にしながら言つた。
英作は打笑つて、
「實は少々氣味が惡かつたからね。」
「はゝゝ、那樣氣で能く初めに手が出せたもんだ。併し其の意氣ぢやア、縱令遇つた處で兎ても退治負せる事は出來ないな。」
「むゝ、退治ると何のといふ言葉を遣ふほど、此方は然う血眼になれないからな。」
「とまア言つて置くのか。初めから下げて掛つた目尻で、何として血眼になれるものか。」
「何方でも可い。此方は最う疾に緣が切れたのだから、お望みなら遠慮なく試して見るさ。だが食傷してくれないやうに氣を付けてね。」
陽一は打笑みながらしら〳〵と、
「幸ひ僕には色氣といふものが無いから、頰を燒くやうな心配は先づ御無用

だ。はゝゝ、臣願はくはこれに當らんか。僕は君達とは全で行方の違つた方面へ打つて出る。相手が談話の通りだとすると、甚く氣が乘つて來たやうだ。僕は其婦人が、何も世界を呪つた譯でもあるまいが、男子を物の屑ともしないで恣まゝに横行して居るのを甚だ頼母しいやうに思ふのだ。」

「はゝゝ、飛んだ處を頼母しがつたものだ。いくらでも信心したまへ。第一お賽錢が要る譯ぢやあるまいからね。」

と笑つて葉卷を口にしながら、彌之助は何心なく庭へ目を向けた。縁に鮮やかな松の影を映し、月はいつの間にか、澄渡つた水のやうな空に、季の秋の冴切つた色を掛けて居た。

「何うだい。良い月ぢやないか。こりや這麼處で飲んで居る晩ぢやないね、出掛けやう。何うだね、僕の案内に任せて何處かへ行つて見る氣はないかね。」

「むゝ、それも惡くはないが、」

と英作の跡を取つて、

「併し危險でない事もないね。」

と陽一は冷笑うやうに言つた。彌之助は聲を輕く、

「何故、」

「いや君の案内ぢや、甚麼欺し打を喰うかも知れない。」

「はゝゝ、喰つて驚くやうな君でもなからう。さアそれぢや此方は好い加減に切上げて出るとするかね。」

と飲殘しの洋盃を取つて衝と仰いだ。

と暫くして座を立つた三人は、前後して下へ降りて行つたが、月は其儘に照つて程もなく、門に賑やかな笑聲を迎へたのであつた。

（二）

恰も其月の光は軒を傳ひ、町を流れ、樹の間を潜り、窓を窺つて、こゝに差入る夜の隈今三人の談話に出た、八木なる家を畫のやうに見せた。庭に向つた辰巳の座敷に、花瓶の菊の香を重く、音せぬ露の光を返して、疊に清い物の影、態と燈光を遠くして、端居に二人、雪枝は今、月にお淺と、其なよやかな身を打向はせて居た。

此時空を鮮やかに雁の聲、瞳を凝すと、琴柱に渡る數さへ明かに數へられる。霧は薄れて露繁く、風もそよがぬしとりとした夜。

膝を辷つて銀煙管の、はたりと下に落ちたと思ふと、時も知らず華やかな、雪枝の美しい眉が稍顰まれた。

「まア何うしたんだらう。待たせるなんて贅澤ぢやないかね。」

「おほゝゝ、お珍らしい。貴女のお焦思なさるのを初めて拜見しましたわ。」

てら〳〵と一筋亂れぬ櫛の齒を其儘に、年に合せて小さな丸髷、色の黒い眼の

すゝどい見た處人の惡さうな、お淺はじろ〳〵と、上目遣ひに雪枝を見て微笑みながら言ふ。雪枝も同じく打笑つたが、投げたやうに直ぐ、

「でも那麽小僧ッ子の癖に待たせるなんて、全體生意氣ぢやないか。」

「けれども其位なら却つて賴もしいぢやありませんか。」

「おや〳〵飛んだ事だねえ。」

「あれ那樣笑つてばかり居らしつても、私能く存じて居ります。初めは眞個の御醉興だと思つて居ましたが、今度のは何うも只ではありませんわ。」

「人を厭だねえまア。彼の孩兒さんを、本氣になつて相手にされるとお思ひかえ。」

「あれ、お隱しなさいますなよ。」

「おほゝゝ、何も隱すほどの事ぢやないぢやないかね。淺は何うかして居るよ。」

お淺は思の外の色、訝かしげに、

「違ひましたか。まア、私今度ばかりは、いつもと御樣子が、全でお變りなすつ

て居らつしやるとばかり思つて居ましたが、本當に解りませんのねえ。」

雪枝は只莞爾々々と文に富んだ眼を細く、

「お前は又這麼事に何故那樣に氣を揉んで居るの。」

「何も氣を揉みはしませんけれど……………。」

「それぢや高處で見てお出でな。」

「然うも行きませんわ。」

「何故さ。おほゝゝ、可笑しいねえ。」

「いゝえ、そりや何方にした處て、私が何うなるといふのでは有りませんけれど、何ですか腑に落ちないとつい氣になるもんですからね。」

「それで？　何うといふの。」

「ですから伺つたのぢやございませんか。」

「異見でも言つてくれるのかえ。」

「まア、仰有います事。何も御承知の上でなさいますのを、今になつて何う御異見が申されましやう。第一私が串戲にも那樣事を申上げると思召して居

らつしやるのですか。」
雪枝は譯もなく、
「なにね、お前の異見なら嘸面白からうと思ふから。」
「あれ、笑つて居らつしやいますよ。私も大方那樣事だらうと思つて居りました。」
「おほゝゝ、それぢや言ふだけ損だつたね。」
と雪枝は其儘に笑つたが、暫くして不意に、と顏を打目戍るやうにして、
「淺、お前未だ何だか氣が濟まないで居るやうだから、それぢや本當の事を言つて了はうか。實はね、お前の察したやうな事も少しは有るのだよ。」
「え、」
とお淺は見上げて面を崩しながら、
「それ御覽なさいましな。」
雪枝は併し色も動かさず、
「でもね、不思議ぢやないか。男前こそまア難はないけれど、年は行かないし

何にも知りはしないし、何處に一つ手答へが有るといふのぢないのだもの、懸流しにしてそれッきり忘れて了ふのが當前なのに、可笑しいやぢないかね、這麼にして待つて居るなんて、私は自分で自分の氣が解らないよ。」

お淺は身を進めて、媚びるやうに、

「其處が可いのぢやございませんかね。解らない中が面白いのでしやう。最う何にでもお飽きなすつたのですもの、お珍らしいのは何處へ行らしつたつて有りはしません。」

「おや、それぢや最う恁うなつちや仕方がないやうだね。」

「何でございますね。今ッから那樣事を仰有つて何うなりましやう。態と惡い聞きやうをなさいますから仕樣が有りはしません。」

「なに良い聞きやうをしたつて始まりやしない。いゝえ私も今度は何だか愚に返つたやうに思ふよ。能く年を取ると兒供のやうになると言ふが私もそろ〳〵那樣氣が出て來たのかも知れない。」

「まア御串戲ばッかり。」

「いゝえ本當さ。此鹽梅で、行つたら、間もなく最う玩具でも持つてたわいなく遊んで居るやうになるかも知れないよ。」

「何を仰有るのです。本當に御串戯も大概になさいまし。」

「まアね、那樣氣がする位不思議なのさ。お前が先刻只ぢやないと言つたのもそれなんだらう。」

「いえそれは最う、いつもとは全で變つて居らつしやいます。私内々で實は今度は若し本氣で爲すつて居らつしやるのではないのかと思つた位ですもの。ですがなんなら其方が私…………。」

「おほゝゝゝ、お前本氣で彼の人が相手にされるとお思ひなのかえ。」

「おやそれぢや何にもなりはしませんわ。」

「そりや初めから知れた事さ。只ねそれほど難有くも思つて居ないのに、跡へ妙に氣が殘つてね、何だか手放して了ふのが惜しいやうで今迄這麼思切りの惡い事はついに無かつたのが、不思議でならないのさ。何時が何時だつて氣味のいゝやうにさば〳〵して居たものが、今度に限つて這麼事が有るのが

私にも本當に解らない。私は何時の間にか氣が弱くなつたんぢやないかと思ふと、最う先が無いやうな氣持がする。それこそ世の中が恐くなつて人を人とも思はないやうな事が何うして出來やう。詰り世の中に負けて了つて口惜ん坊の我儘も最う通せないやうになつて了ふだらうぢやないか。」

「まア本當に何うなすつたのでしやう。今夜に限つて何故那様いつにもない事ばかり仰有るのです。貴女にもお似合なさらないぢやありませんか。」

言はれるより早く、雪枝は颯と氣色を直したと見ると、直に調子をかへて、

「とまア言つたやうなものさ。おほゝゝ、然う又しッこしもなく思詰めて了つちや最う、お終局だわね。何でも當つて碎けやうぢやないか。氣を強くしなくつちや暴れられやしない。」

「ですが最う、那様にお暴れなさらなくつても可いではありませんか。」

「なにお前一日だつて羽を縮めて居て、何うして虫が納るものかね。」

「まア惡い虫です事。」

「おほゝゝ、持つたが病かも知れない。萬更初めから恁うでもなつたがね。」

言ひさま不意と聞耳を立てゝ、

「おや、あの足音は？」

「おゝ入らつしやつたのですよ。」

「まア漸とこさと。」

「あの、お座敷は何方に致しましやう。」

「然うさね、離座敷の方にしやうよ。」

お淺は迎へにと直に立く。雪枝は見送つたまゝに、再び烟管を手に取ると其處に面羞げの影もなく驕りの色に、微笑の跡が、未だ口元に殘つて居た。

（四）

離座敷の一間、こゝにも差入る月を迎へて、今宵の客は廿一二の、水際立つた美男であつた。其座に嘗て幾人か同じ思にあやなされたかをも固より知らず坐ろ心に見透し難い主婦の雪枝が、艶なる姿に眼を取られて、言葉も半ば上の空聲を返して、

「ヤ、一言も有りません。然う言はれると、何とも御返事の仕様がないので。」

「そりや有りますまいとも。又有られた義理ぢやありませんわ。なんぼ厚顏しい貴方でも。」

「え、厚顏しい、いや恐ろしく虐められる　何うも此位の事に這麼に、お灸を据ゑられやうとは思はなかつた。最ういゝ加減に免して下さい。」

と笑ひながら身を進める。雪枝は態と解けやらぬ面色を火影にそれさへも美しく、飽まで先を見拔いて居るので、口は自由に、

「大井さん、貴方未だ串戲にして居らつしやるのですか。」

「串戲とは、」
「然うぢやありませんか。それでなくつて平氣で那樣事を能く仰有れますね。はい何うせ此位の事でしやうよ。彼處此處、掛持の浮氣なんぞをして、このこ今時分口を拭いて入らつしやるやうな貴方の事ですから、人を待たせる位はお茶の子でしやうからね。」
「酷い。なんぼ貴女でも餘りだ。那樣浮氣なんぞの出來るやうな私か私でないか、貴女が御存じない事はないでしやうか。」
「知りませんわ、傍で見て居ない事を。何うして、些少だつて油斷の出來る貴方ぢやありませんもの。」
大井は術なげに苦笑して、
「何うも然う疑はれては仕樣がない。遲くなつたのは實際惡かつたけれど今も言つた通りの無據い譯で…………。」
「そりや口先ぢや何うでも言はれますわ。」
「はゝ、それぢや全で談話にならない。ヤ、這麼目に遇ふ位なら初めから、本

當の事を言はずに何か氣休めになるやうな、言譯をすれば可かつた。何うも人間が正直だもんだから、嘘を言ふ事が出來ないで、却つてさん〴〵痛められるやうな始末で。

雪枝は大人氣もなく、

「可うございます。何とでも有仰いまし。貴方は自分の事ばかり言つて、人の約束なんぞは何とも思つては居らつしやらないのだから、私も其氣でこれからお交際申しましやう。誰が最う待つたりぢれたりなんぞして居るものですか。私も貴方のやうに氣紛れで、さつさと何處へでも出て行きますよ。」

「ヤ、いよ〳〵始末が惡くなつて來た。貴女、何故然う柄をすげて下さるんです。私だつて割にも何にも合つた談話ぢやない。當前なら約束にも背かなきやならなかつた處を人の氣を惡くするまでにして切拔けて來たのです。自分勝手ぢやあるけれど此方の身にしちや埋らないぢやありませんか。」

「おや、それぢや私の方が謝罪らないぢやならないの。」

「那樣事を誰が言ふものですか。謝罪るにや私が彼の通り謝罪つて居る。

貴女が只解つてくれないのぢやありませんか。あゝ實に骨の折れる人だ。」
「おほゝゝゝ、それぢや寧その事お止しなさいましな。」
「え、」
「聞こえませんでしたの。」
「いや聞えなかつたのより解らなかつたのです。え、何です今のは。」
「何でもないのです。お止しなさいッて言ふの。」
「貴女那樣事を本氣で言ふのですか。」
「本氣だつたら何うなさるの。」
「いゝ加減になさい。」
と大井は怺へかねたやうに稍聲を荒らげた。
と見ると、雪枝は聲を打つて笑出した。
「おほゝゝゝ、今度は貴方がお怒りなすつたのね。私だつてさん〴〵待せられて、此位な事で腹癒せは出來ませんわ。」
「いや其氣でいぢり廻されちや堪つたもんぢやない。これだけ遣られりや

充分です。最うこれで切上げて戴きたい。來てから全で立て續けで、これぢや實際言譯をしに只來たやうな始末で。」

「おほゝゝ、些少は併し其位な事があつても可いでしやう。全く癖になりますからね。」

「いや全く懲り〳〵しましたよ。些少ばかり遲くなつたので此位だから、實際來なかつた日には命が無いかも知れない。」

「本當に、其心算で居らつしやい。」

「なに二度と又這麼目に遇つて遣切れるもんですか。何うです此位惱まされたから、何か些少、埋合せになるやうな事があつても可いでしやう。其方なら又少し位過ぎても結構です。」

「まア隨分自分勝手だこと。」

「だがまア私の身になつても見て下さい。」

「あれ、そりや私の方で言ふ事ですわ。」

「はゝゝ、那樣事言合つて居ちや切りがない。それに今夜は然う長くお邪魔

をしては居られないのですからね。」

「おや、何うして。」

「實は今夜の中に、一寸寄つて置かなければならない先があるので。」

「まア何を仰有るの。串戯ぢやありません。今夜は最う何と仰有つたつても歸しやしませんよ。」

「え、」

「貴方は全で、人の氣も知らないで居らつしやるのねえ。」

大井は額を押へて、無據さうに、

「ヤ、そりや、有難いけれど併し…………。」

雪枝は聞きも敢へず、

「何ですねえ。那樣不實な事を言ふもんぢや有りませんよ。」

「不實?　いやこりや又一つこれで虐められるかな。宜しい、跡の工合は惡いけれど、行くのは見合せましやう。何も貴方の爲だ。」

「まア、恩に着せて呆れるぢやありませんか。そりや貴方當前ですわね。」

「いや何うも然う出られちや堪らない。貴女には敵ひませんよ。全體荷が勝過ぎて居るのだから仕方はないが。」

「おほゝゝ、それぢやもつと崇め奉つて、何でも言ふ事をお聞きなさいな。」

「はゝゝ、併し此位聞いて居れば澤山でしやう。」

笑ひながら、

「足りませんね。」

「驚く。いや此上にするには甚麼事をしたら可いでしやう。」

「そりや貴方のお心次第ですわ。」

大井も聲を合せて、

「至當ですね。それぢや其心算で隨分氣を附けましやうよ。」

「何うですか。口へ出して仰有る方に其通りにした例は有りませんからね。」

「其處まで請合つた日にや大變です。」

「請合はれなかつた日にや此方が大變ですわ。」

「はゝゝゝ。」

「おほゝゝゝ。」

大井は卒然と、何をか思出したやうに、語るともなく、

「あゝ、實に夢のやうだ。貴女のやうな方に逢つて這麼大平樂を言つて居られるやうにならうとは、全で思つても居なかつたのですが、解らんものですねえ、雪枝さん、私はこれでも種々な苦勞をして來たものですよ。今も其事を不意と思出したのですが、去年の今頃は、這麼餘裕處ぢやない、それはお談話にもならない始末で居たのです。」

雪枝は稍意外の面色でぢッと見て、

「おや、貴方が那樣苦勞をなすつて居らしつた方。」

と眼を動かして、讀んで行くやうにして、

「まア、解らない事。」

「はゝゝ、那樣暢氣に見えますかね。何しろ十四の年に村を飛出して來て憑つて行く處は勿論なし、文久一つ持つて居るのぢやないのですから、初めて東京へ入つた晩なぞは知らない家の、軒下の天水桶の蔭で犬のやうになつて寐

たものです。」

「まア。」

「餘り好い運にや打突からなかつたんですから、遣上げたのか遣下げたのか解らない位のものですが、それから足掛け八年の間浮いたり沈んだり、隨分さまざまな目を見て來ましたよ。」

「然うでしたのまア。然うとは些少も氣が付きませんでしたよ。貴方それぢや餘ッ程猫を冠つて居らつしやるのですね。」

「はゝゝ、御安心なさい。那樣人の惡いのぢやありません。自體が涙ッぽいのですからね、爲やうたつて質の惡い事は出來やしません。」

「何うだか知れたもんぢやありませんわ。」

と言つて何か珍らしさうに、

「それでまア甚麼事して居らしつたの。」

大井は微笑みながら、

「なに取立てゝお談話するほどの事は有りはしません。初めは全で、風に吹

かれた鉋ッ屑のやうに、彼處此處轉がり廻つて下らない日を送つて居ましたよ。中途で一人、書生上りの商人でしたが、實に立派な人でした、私の恩人です此人に拾上げられましてね、商賣の片手間に學校へも通はせて貰つて、三年ばかりは好い夢を見て居ましたが、生憎と其人に死別れてから、又逆戻し地位こそ少しは違つて居ましたが、悶いて廻つたのは同じ事で、とん／＼拍子に、それは甚い處まで切拔けて來ましたよ。いや詳しくお談話をすれば、一晩位ぢや話しきれますまい。」

「それぢや今の方は？」

「それが又不思議な事から起つたのです。去年の十一月、假仕込みの際物を賣りに出て、大外れに外れた歸途、擔いで居た荷が、社長の乘つて居た車に衝突つたのが、縁でね、妙ぢやありませんか、思ひも寄らず社長に救はれるやうな事になつたのです。初めは見習ひで使はれて居ましたが、何處を見てくれたのか、何が又氣に入つたのか、最負過ぎた拔擢を受けて、這麼月日を見られるやうな事になつたのですつけが可くなつて來ると、仕事は小氣味のいゝやうに面

白く運んで行く。貴女といふものは現はれる。これで最一つ、望んで居る事が叶つた日には、實際甚麼事をしても可いと思ひますよ。」

「何です其望んで居らつしやるといふのは。」

大井は稍眞顔になつた。

「少し變つて居る事です。私は親を捜ねて居るので。」

「おや、御兩親はお國の方に居らつしやるのぢやないのですか。」

「いや實は生れると直ぐ、親知らずで貰はれて行つたので。」

「まア何ういふ事で、」

「何ういふのか譯は知りませんが、普通よりずッと多い金や衣裳なんぞを持つて來た處を見ると、餘り惡い家から來たとは思ひませんが。」

「それぢや先は全で御存じないのですね。でも些少は心當りがお有りなさるのですか。」

「いゝや少しも無いのです。たゞ東京だといふ事だけが知れて居るばかりで其外には全で何も知れないのですから、實際捜ねるにも捜ねやうが無いの

です。最初から用心して恐ろしく秘密にして來た事と見えて、隨分手は盡して見ましたが、未だに何の手掛りも出て來ないのです。」

といつか悄然として、

「村を飛出したのも、繼母が替つて二度目のに甚い虐待を受けたからとは言へ、一つには生みの親に遇ひたい子供の一心で出たので、それでなくて當てもなく樣子も知らない土地へ、十四位の餘り氣の強くもない田舍の子が何うして駈出して行かれるものですか。長い事ですよ。これぢや隨分人の知れない氣も遣つて來ました。」

座も引入れられたやうに、談話に連れてしんみりとして來た。雪枝の華やかな笑顏も流石に秋を知るばかりに、

「お氣の毒です事ね本當に。」

と奥は知らず殊勝な聲。大井は澁しげに打笑つて、

「芝居や何かに能くあるやうな、都合のいゝ邂逅は實際には容易に有りはしません。親知らずで遣るといふ事も言へば捨兒も同じやうな事で、殘酷と言

はれない事もないのですが、私は子として決して然うは思ひません。好んで那様事をする親が有る譯のもんぢやない。無論よく〳〵の事情があつて已むを得ないで離したくない手から離したのでしやう。何れ程涙を流してくれたでしやうか。私は其事をいつも思つて、自分にも泣きたくなるやうな心持がします。私が親を慕つて居るよりも、親は離れて居ても何れ程私の事を心に掛けて居るでしやう。雨に付け風に付け忘れる事はないだらうと思ふと、いよ〳〵逢ひたくなつて實に仕樣がないのです。」

と我にもあらず聲も曇つて來るやうに見えたが、其儘跡を繼いで、

「苦しい事、悲しい事が有る度に、慿ういふ時に親が居てくれたらといつも思ひますが、併し私には、嬉しい時にも矢張同じ事です。私には親といふ事が、此心から離れた時はないのです。私に少し僻んだ心が有つたなら親知らずでくれて了つたやうな親、何等の世話にもならなかつた親、無論子とは思ふまいが自分も親とは思はないと慿う言つた氣も出るでしやうが、私は幸福と那樣氣は出やうともしない。今でも若し逢つたら、其儘縋付いて思ふさま泣いて

見たいと思ひますよ。」

雪枝は先刻から、談話の中に恐ろしい疑念が、不意と胸を襲つて來たと思ふとさながら劍を當てられたやうに、悚然と身の粟立つを覺えたが、慌たゞしく思返して、ぢッと耳を傾けて居ると、何かは知らず黑い重い蟠塊が兎もすれば胸を押へるやうで、心付いては戰きながらも、跡から無理に押靜めて來たが、此時何か憚るやうに、面は努めてさり氣なく、

「不意に妙な事をお聞申すやうですが、貴方は慥か廿二で居らしつたのね。」

大井は訝かしげに、

「はア、それが何うか………。」

「いえ、なに。」

と雪枝は周章てたやうに、

「なにね、貴方のやうなお談話を聞いた事が有りますから、ですが歳が全で違つて居るから矢張然うぢやないのです。」と言つて直ぐ「然う言へば貴方お誕生は何日？」

「十二月の十五日だと言はれて居ましたがね、併し日は確かに解らんのですよ。」

雪枝は見る〳〵色を變へて來たが、ほのかな笑顏を僅かに見せて、

「貴方、お國は那方でしたかねえ。」

「いや種々の事を聞かれますね。國と言つて那樣遠くぢやありません。つい其處の鎌倉の在ですよ。」

「えッ、鎌倉の在。」

「いや最う一向に詰らない仕樣のない處ですよ。」

「貴方、今のお談話の、貴方が貰はれて行らしつた時、中に立つたのは何といふ人でしたの。」

大井は流石に顏を打目戍つた。

「え、何かそれぢや、貴女の方に心當りがお有りなさるのですか。」

雪枝は急がはしく、

「いゝえ、いゝえ、なに貴方が那樣にも思込んで居らつしやるから、聞いて置い

たら、何時か又お役に立つ事が有るかとも思ひますからね。」

「ヤ、然うですか。其中に立つたのは茂平といふ百姓なんですがね、遠い親類に當る、お清といふ女から賴まれたのださうで、其女も又人傳手に賴まれたのだといふ談話です。せめて其二人の中一人でも生きて居てくれると可いのですが、何方もとうに死んで了つて其方の手掛りは全で無くなつて了つたのです。」

「お清！」

と言つたけれど、最う聲には出なかつた。恐らく人傳手にと言つたのは、雪枝は知らない事だけれど、八木の家を隱さう爲に僞つたのであらう。お清といふのは其當時、母と自分に付添つて居た女、月も日も處もそれ、雪枝が十六の時の大井は其悲しげな形見であつた。

「あッ、」

とばかり炎にさながら燃ゆるかと見える眼色を前に投げたが、歳の半ばを若やいだ其華やかな色も香も、一時に消えて去つたかのやう、すつくと身を起さ

うとして矢庭に其處へ突伏した。
大井は不意を打たれて、思はず膝を立て掛けながらも、慌たゞしく、
「おゝッ、ど、何うなすつたのです。」
雪枝は其中にも悟らせまいとして必死の力に、
「な何ですか急に氣、氣分が……………。」
言ひも終らず身を震はして、むゝ、とばかり悶絕した。
大井の周章てゝ人を呼ぶ聲が、庭を掠めて次いで聞える。はたはたと裾を亂して來るお淺の足音、冴切つた月の中を、露は凝つて、九時の鐘が、抑して行く波のやうに、響を殘して拔けて行つた。

弱氣筋

（上）

其間一時間、華やかな朝日の影が、軒を移つて張替へた障子の片端にほッと射すと、松の上、塀の上、西に向つた隣家の屋根の上に、薄すり刷いて居た朝霜は疾くに消えて、きら／＼と葉末の露が、斜めに日を漉してさながら珠のやうに煌めいて見える上を、續いて二羽ばかり、小鳥が影を打つて勇ましげに聲を合せて行つた。四五日氷も掛けぬ暖かな冬の朝、主人は、居間に、昨夕國元から久振りで訪ねて來た兄と、つい長談話をして恐ろしく夜を更かした疲れを受けて机に頰杖した儘、うと／＼と何時か夢に入つて居たのが、不意に支へて居た肱を辷落して驚いて目を覺ました。

途端に、

「何うだ。信次。」

と笑ひながら入つて來た兄の彌平、素樸な茶微塵の綿入に大分着古した繭紬の羽織、酸漿の一つ紋が、時代に黄ばんで鼠色になつて居る。前齒の缺けた、四十一二の、年より早い胡麻鹽頭、骨の高い、がッしりとした風であつた。

主人は、ト見ると、

「ヤ、」

と急がはしく身を振向けたが、夢の名殘を未だ眼の前に留めて居るやうに、暫く我を忘れた態で居た。兄弟ながら面色は全で變つて、鼻の高い、眉の濃い、眼の涼しげな、打見も年よりは遙に若い、何處か身奇麗な取廻し、名乘りはせねど兄の彌平が其上野の國のお百姓、照る日に燒かれ、鍬に揉まれて、土の中から鍛上げられたのとは、似ても似付かぬ姿であつた。

「はッて、何うしたゞ。妙な顏して居るでねえかね。」

信次は我に返つて直に眼を擧げたが、流石に微笑みながら、稍、口早に、

「なに今、昨夜の寐不足でついとろ〳〵と遣ると、不思議に一昨日見た夢を又見たんで……いや、それが實は…………。」

と言掛けて口籠つた。彌平は思掛けない色で、
「何だ。夢見たゞ。はゝゝゝ、俺は又何か事でも起つたかと思つたわ。何の事だい。はゝゝゝ。」
と跡を笑足らぬやうに大口開いて遠慮もなく笑返した。信次は思つたより眞顏で、
「處が少し心得の好くない夢なので、實は此頃不意に氣に掛り出した事から恁う追掛けて這麼夢を見るのだらうが………。」
と物思ふやうに暫く言葉を止めたが、
「兄樣、懺悔しやうか。」
と唐突に言ふ。
「え、」
と彌平は眼を睜つて、喫掛けた煙草を止めて振仰いだ。信次は思直したやうに、
「いや止さう、折角久振りで來たものに、厭な談話は聞かすでもない。」

彌平は首を左右に振つた。言葉と共に乘出して、

「うんにや、聞かせるが可いだ。善惡共に兄弟の仲で、隱して置くといふ事が有るもんでねえ。夢だと聞いたからたわいも無え事だと思つて笑つたゞが懺悔だの厭な談話だのと、聞捨てになんねえでねえか。なに昨夜ッから最う好い方の談話はさん〴〵聞飽きたゞから、些少べい惡い談話を聞くも可いだよ。何んだ其談話といふは。」

「いや面目ない事で、すめぢや何うも話されないのだからそれに最う過ぎた昔の事で、今更言出された事でもないのだから…………。」

と跡を濁して躊躇ふ樣子、なまじ言出したのを悔いたやうにも見えた。

「だがの、俺の前で何も構ふ事はないだらうが。」

と眞向きにひたと見る。信次は俯向いて暫く口を噤んだが、やがて振仰ぐと色から惡びれず、言葉を衝いて、

「話さう。懺悔だ。殘らず話すから兎も角聞いて下さい。貴方は覺えて居るか知らないが、私が以前世話になつて居た栗山さんね、」

「然うです。私が二度目に東京へ出て來る少し前に、赴任先へ出發の途中で亡くなつた彼の栗山さんです。私が彼處の書生で居た時分、然う、彼是最う十七八年も前になるだらう。今から思ふと全で子供だつた。」

彌平は目を離さず、

「はて、何したゞい彼の時分、俺は別に變つた事はなかつたと思つて居るが。」

信次は微笑むやうに、

「貴方は國に居たから何も知らなかつた。」

「おゝ、それぢや何か…………。」

と迫つた調子に衝と寄つた。信次は遮ぎるやうに直ぐ、

「なに栗山樣には別に關係した談話ぢやない。女さはゝゝゝいや何分私も未だ圖分若かつたから、つい其、」

「はア、何か馬鹿したゞな。」

「内々惡い事と思はないではなかつたが、併し今から考へて見ると那樣了簡

が最初に出たか何うだか全く請合ひかねる。實際何の分別も有りはしない國に居た時分から覺えの有る事なんだからね。全體村の風儀がよくなかつたよ。」

「むゝ、相手は何者だ。」

「それが少し…………。」

何だ。言難いやうな相手なのか。」

「なに然ういふ譯ぢやない。裏隣りの孃樣なんだが、」

「はア、汝それぢや唆かしたゝな。」

「否彼の時分は未だ、ぽッと出からほんの一足蹈出した位の事で、那樣惡劫の入つたのぢやない。それに何から言つても向ふの方が上なんだから、何うして手出しをする處の談話ぢやない。第一私は、貴方も知つて居る通りの臆病者だ。」

「はゝ、那樣臆病者に能く又然ういふ事が出來たもんだな。村に居た時も其方ぢやア、隨分太ッ腹の事を仕出かしたでねえかい。」

「なアに皆無據しさ。まア然う外の疵まで洗立てしてくれちやア困る。何の道若氣の跡先見ずで居た時の事だから。」

「おう、そりや村の方のは、譯も事も違つて居るし、外に觸りにもならなかつただから、餘所にもざらに有つた始末で無事に濟んで了つたゞが、此方は田舍とは一つになんねえからな、全體何うして何うなつたゝ。初めから聞かうでねえかい。」

信次は額に手を押當てゝ、物とはなしに俯向かれた姿で、

「何の道圖に乘つて話された事ぢやないがね、這麼事ばかり言つて居た處で始まらない。私も彼の頃は、柄相應に跳廻つて、正直に勉強もしたもので、家に居ても暇さへあれば、矢張居候仲間の磯田川井なんぞといふ儕輩と冗話の時間も惜しいやうに、一人で能く邸の裏の築山を越した先、植込の中の芝の上へ轉がつて、學課の復習や、課題の答案なぞを一心に作つて居た。

二月ばかりは何の事もなく、毎日のやうに其處へ行つては、一人でこつ〱遣つて居たが、一日不意と氣が付くと、先刻から此方へ、ちッと目を付けて居る者

がある。

丁ど其處は、直に隣りとの地境になつて、疎らな要冬青垣を中に廣い邸内の背後が向ふへ透いて見える。左は梅林、右は山になつて樅や椿や紅葉や樫などが木深く先を隱して居る。下を地紙形に此方へ花園になつて、隅に華奢な東屋が見える。今何氣なく首を上げた時、大方隣りの書生か下男位に思つて振向くと意外だつた。花の中に十七八の恐ろしく美しいのに窺かれて居たのだ。

見たのは初めてだつたが、噂には聞いて居たので、一目で直に令孃だと解つた。ヤ、と思ふと、先は慌てゝ、急いで向きをかへて、足早に行つて了つた。眼といふ奴は馬鹿なもんで、一度染込むと、型を捺したやうに跡へ殘つて居る。まして其時分は、未だからツきしの田舍者だ。人が見て居たら甚麼樣子だつたか正直に言ふが一時茫として居た。

併し何を言つても、其頃の此方と先方ぢや、何う悶いたつて追付く談話ぢやない。指を啣へるのが落なんだから、默つて引退つて、溫順しく讀書の方へ移つ

て了つた。

すると翌日、矢張其處で又遇つた。其日二度ばかり、花の中を往つたり返つたり。

三日目には彼方が先へ來て居た。今話した東屋の中で。雜誌のやうなものを持つて來て讀んで居た。顏を見合せた事が四五度だつたよ。

其次の日は見えなかつた。みす／＼何うする事も出來ないとは知つて居ながら、何だか手の中のものを落したやうな氣がした。

五日目に又遇つた。其日も彼方が早かつた、矢張東屋で、此方へ横顏を見せて絹糸の編物をして居た。

恁うして生垣一つ越して全で約束でもしたやうに幾度も遇つた。人はたまたまにしか來ない處だから、いつも邪魔をされた事はない。先が先だから何處迄もたしなんで居たけれど、內々見て居ると、何うも氣振が只でない。眼が言ふ。顏が言ふ。樣子が言ふ。氣の迷ひか知らないが、此方の自惚れた根性は用捨なく出て來るぢやないか。だが直ぐ跡から、よし萬が一それにした處

て、何も自由の身で、わざ〳〵事を缺いて私のやうな者にと思ふと、言ふまでもない那樣氣は直ぐに消えて了ふ。

跡で聞いたんだが、先でも自分ながら不思議のやうだつたと言つて居た。合緣奇緣といふのかね。あゝ併し、貴賤賢愚などゝいふ事に少しも左右されなかつた彼の婦人の感情は、全く純粹のものだつたが……。」

と這麼言ひ方をした處で、勿論彌平には了解めぬ事も、全で忘れて了つたやうに、何かは知らず深く歎息して、

「いやそれは後の事だ。遇ふ度に這麼風で、此方は其心算ぢや居なかつたがいつの間にか深みへ入つて來て居るやうな仕末で、日が重つて來ると其處へ行くのが樂みのやうに、仕舞にや其爲ばかりで行くやうになつて來た。其癖妙に固くなつて、齒痒いやうな啞の芝居をして居たんだが、ヤ、不意に起つて切掛けでね、何さ例の芝の上に讀んで居ると、颯と下して來た風が、前に置いた書を逆に吹捲つて、中に挾んであつた二三枚の筆記を吹飛ばした。ヤ、と思ふ中にくるりと返つて、折つてあつたのが二つに開くと、機勢を打つて一枚々々、ば

らばらと舞上つた。急いで押へやうとする手元を拔けて、見る中に向ふへ吹流されて行つたが、一枚は此方で止つて、二枚は垣を越して隣邸の中へ落ちた。私が跡を追つて、垣根の傍へ來た途端に、彼方からも東屋を駈出して、手早く落散つた紙を拾つてくれたと思ふと、直に私の立つて居る垣根の前へ來た。言葉を交はしたのは此時が初めてなんだ。もつと早く吹いてくれりや助かつたんだが、尤も這麼媒人をしてくれやうとは思はなかつたからね。

口が解れた時は寶物でも掘當てたやうに思つたが、さて近しくなつて見ると又其上の慾が手傳つて來る。兎てもと思つて居ながら、肚では一人焦思つて居る。何の道恁うなつて來ると、行く處まで行かない中は胸が納まらないのだね。

處がそれを何うしても言出す事が出來ない。只の談話をするのでさへ、何か後暗い氣がさして、人目を憚るやうな仕末で、や、今思つても齒痒いやうだつた。」

「何だ。詰んねえ事に手間べい取つて居るでねえかい。那樣蟻の這つて居

るやうな段取を聞いた處で何になるでねえ。聞役だから無據えだが、其處等は端折つて了つて跡を話せよ。」

「はゝゝ、成程貴方にや面白くなからう。なに最う然うまだるッこく話して居る事もない。其中に恁ういふ事が起つた。慥か五月の末だつたと思ふ。いつものやうに學校から歸つて來ると、家から五六町手前の角に、人でも待合して居るやうな風で、四十恰好の、見馴れない女が立つて居たが、私を見ると思掛けなく傍へ來た。

「もし、貴方は市原さんとは仰有いませんですか。」

と恁ういふのだ。驚いて振向いたが、全ッきり逢つた事もない女だから、

「はア、然うですが……。」

と跡を言切らずに居ると、先を確めるやうに、

「あの栗山樣に居らつしやる？」

「然うです。其市原ですが。」

と言ふと、何か急に勇立つた樣子で、

「然うでしたか。まア、先刻から甚麽にお待申して居りましたらう。いえ實は折入つて貴方にお願申したい事がございますので、甚だ何ですけれど決してお手間は取らせませんから別にお差支が無くば、一寸私共へお寄りなすつて下さいませんか。なについ御近所でございますよ。」

何分突如だから、私には全で譯が解らない。

「貴方は未だお目に掛つた事もない方だが、全體何ですか用と言ふのは。」

すると先は不意に笑出した。

「いえ私ぢやないのですよ。貴方のお友達だと仰有いました。一寸と言つて呼んで來てくれ。名前を言はずにといふ事でしたから今のやうに申上げたのですが、何でも屹度貴方を驚かさうと思つて居らつしやるのでしやう。」

私は尚更變に思つた。

「ふむ、甚麽人？」

「矢張貴方のやうなお方です。」

「で、貴方の家で待つて居るのですね。」

「はい、先刻から。」

誰だらう。と思つたが一向に心當りがない。不審が晴れぬので決しかねて居ると、

「貴方、行らつしやれば直にお解りになりますよ。」

「なんなら名前を知らして下さらんか。」

「でもそれは口止めされて居るのですから、私から申上げる事は出來ません。」

「だから内所で一寸。」

「それぢや私がお使に參つたのが、何にもならなくなるではありませんか。」

私は未だ躊躇つて居たが、

「宜しい。それぢや兎も角お家まで行つて見ましやう。」

近所とは言つたが二十町足らず、新開町の通りから入つた處で、表は格子戸作りの、脇を建仁寺垣で圍つた、小さな庭の付いた、二階建ての家の前へ連れて行かれた。門口の標札を見ると、野村要三としてある。一度も聞いた事もない名前だ。いよ〳〵見當が付かないぢやないか。

何だか魅まれたやうな心持で、女の跡に跟いて入つて見ると、誰も居ない。更に解らなくなつて、坐りもせず立つたまゝで居ると、

「此方へ。」

と先に立つて横手の襖を開けた。見ると階子の上り段だ。むゝ、二階に居るのか。と跡から昇つて行くと、上は三疊と六疊の二間、全體が安普請の、其中ががた付きさうな構造ぢやあつたが、其處等手奇麗にして、床には一寸した花が挿つて。幅はお定りの不動樣や福祿壽や、寶珠の玉の烟が出て居るやうなのぢやなく、恐らく拜領物だらうが、本物の安信の幅が、兎も角も掛つて居た。それは可いが、其處へ行つても誰も居ないぢやないか。

「おや、此處にも居らつしやらない。」

と女も不思議さうに、

「まア何處へ行らしつたのだらう。」

立止つて見廻したが、引返して又降り口から下へ向つて、

「もし、其方に居らつしやいますの。」

言つたが何の返事もない。私は尚更に疑出すと、女は振返つて、不意に障子の外の手摺の方へ目を付けたが、首肯くやうにして、シか〳〵と其處へ出て行つた。

見て居ると障子越しに、緣の隅の方で、

「まア、那樣處に居らつしやるんですもの。ほゝゝ、何うなすつたのですねえ。」

すると小聲で何か言つたやう。相手は障子の蔭だから、未だ誰とも解らない。暫く何か押問答をして居るやうであつたが、再び前の女の聲で、

「あれさ、今になつて那樣事を仰有つたつて仕樣が無いぢやありませんか。さア行らつしやいまし。何も最う、其處へ來て待つて居らつしやるのぢやありませんか。」

と漸との事で引出して來た。男とばかり思つて居た私は全く意外だつた。連れられて出て來たのは、例の其隣りの令孃だらうぢやないか。

此方を見る處ぢやない。顏を火のやうにして、さも極りの惡さうに入つて來

たが、部屋へ來ると、袂で其顏を隱して前へ突伏して了つた。

私も少からず狼狽いたよ。何も未だ考へる暇もない。譯もなく只胸が騷ぐばかりだ。や、何うも、其時の慌て方といふものは無かつた。全く突如に這麼事にならうとは思ひも寄らなかつたのだからね。

跡で聞いたのだが、宿の此女は、もと令孃の乳母なんで、お紋といふ、最う後家さんで、當時何處とかの通ひ番頭をして居た息子と二人で此處に暮して居たのだ。恁うして二人を逢はせたのも、自分ぢや天晴忠義立ての積りで、飛んだおせつかいをして退けたのだ。

言ふのを忘れたが、令孃の名は友江といふ、其時十八、欄間の天人が脫出して來たやうな奇麗な人だつた。

さて、それからの談話だがね。」

と勿論佛頂面で言う事ではないので、片頰に微笑みながら、言葉を繼がうとして少し猶豫つて、手許の煙草を捻り出した。

誰か此時の只一しきりの輝きを、信次の面に見る事が出來たらう。眉にあらはれ、眼に冴えて、さながら秋の稻妻のやうに、枯葉の血潮を沸立たせたが、微笑む影を元に返すと、胸の名殘を未だ口元に、

「いや、馬鹿な事を言ふやうだが、其後二度と最う彼の時分のやうな心持になる事は出來なかつた。恐らく一生最う彼の心持になる事は出來なからうと思ふ。あれから二十年足らずの間には、それこそ山もあり川もあり。地獄も極樂も見て來たのだから、みす／＼玉子の殼の取れ切れない時代の事を、未だに擔いで居るのも、餘り氣の知れないやうな談話ぢやあるが、全體其口で言盡せないやうな心持といふものは、晩いと早いとの相違こそあれ、唯の一度しか人間には來ないものぢやないかと思ふのだ。」

と言つて不意と彌平の顏を見上げたが、急に調子をかへて、

いや、這麼事を貴方に話した處で仕方がない。はゝゝ、貴方には寐言としか

聞かれまいね。」

彌平は嚢から、けろりとした顔で、脂の詰つた煙管に跡から音を立てゝは、煙草ばかりを燻込んで居たが、言はれて苦笑ひして、

「むゝ。正直いゝ年して、馬鹿な事吐いてると思つたゞ。それよか前の談話の方の徑緯は何うしただよ。」

信次は首肯いて其儘、

「然うだ餘計な文句は拔く事にして、當分それからといふもの、双方先づ夢中の形さ。此方は鬼の首でも取つたやうな心持で居る。向ふも最初から串戯ぢやなかつた。勿論天下晴れた事ぢやなし、知つての通りの臆病者と來て居るから、上邊ぢやへチ隱しにして、隙を盗んでは其の野村といふ家で逢つて居た。

夢を見たやうに半歳ばかり、上の空で過ぎて了ふ。先ぢや私を、全くの事有望な青年で、何でもすばらしい榮達をするやうにも思つて居たやうだ。此方も買冠られたと氣が付くほど年も取つて居ないのだから、いゝ氣になつて熱を

吹いて、何かたわいもなく搦合つて居た。例の乳母のお紋が上手に遣つてくれたので、誰にも知れず、何の邪魔も入らないで、若氣の不埒を盡して居たが、ャ寐耳に水のやうに、突然に大敵が現はれた。

其時分未だ洋行歸りが、馬鹿に幅を利かした頃だつたが、時の歸朝者の一人、文部の留學生で、名は確か高山とか言つたよドクトルの肩書か何かを振廻して言葉に變な訛りを付けた、頭の光つた氣取つた男だつた。親は金持で、馬鹿に自由が利くのに、年は若し、恐ろしく又好い男なんだ。三德兼備の御大將と來て居る。此男が今度、友江さんのお婿さんとして選ばれたといふ事が持上つた。

何方から言つたつて、其時分の私なんぞに、向ふへ廻つて齒が立つのぢやない。第一表から名乘られた身の上ぢやなし、兎ても太刀打ちは出來ないのだからそれと聞くと意久地もなく目が眩んだやうに驚いたね、お紋の一寸、切拔け方に困つたやうな樣子だつたが、それよりも此方の慌てやうといふのは、實際見られたものぢやなかつたよ。

處が驚いたのは當の友江さんの落付き方だ。全で蚤が喰つた程にも思つちや居ない。いつものやうに嫣然して、あら何うなすつたの。那樣事を何ですねえ。私を御存じないやうに、厭ですわ。貴方はまア默つて見て居らしやいまし。とばかりで全で取合ひもしない。此方は一文の價値もなし、氣ばかり揉んで居ると、それから一週間ばかり過ぎて、何かの談話の序でに不意と、貴方此間の高山さんのお縁談は最う消えて了ひましたよ。私ずツきりと斷つて了ひましたわ。高山さんにはお氣の毒ですけれど、だつて仕方がありませんはねえと來た。」

「よう、色男め。」

と突然に、年にも似合はず兄の彌平は野良に畑打つ作男に向つた調子で、田舎訛りの頓興な聲を其儘繕ひ氣もなく顔の皮を緩ませて言つた。信次は苦笑ひして、

「いや全く、女の方が一枚上だつた。聞けば兩親と仲に立つた人の前で、押切つて跳付けて了つたのださうだ。私は其時、實の處馬鹿に嬉しかつたが、跡で

考へて見ると、あの時に引下つて了へばまだ〳〵事は易かつたんだが……。」

と言つて眼を下にしたが、其儘振直ると、

「兄樣、此跡が結局何うなつたと思ふ。」

彌平は手も付けず、

「解るものかな那樣事が。むゝ、何うしたそれから。」

「それが有つてから、仲は一層深くなつたがね……。」

「えゝ、那樣事を聞いて居るぢやねえ。其納りが何うなつたかと言ふだ。いい加減甘ッたるい處は最う拔いてくんろ。正直べん〳〵那樣處を聞いちや居られねえわ。」

「はゝゝ、大きに然うだらう。いや那樣甘ッたるい處は最うないから安心おしなさい。そこで先づ暫くの間、何事もなく過ぎたのだがね、今度は前とは違つて、當前だが其時分の此方に取つては大變な事が起つた。外でもない。うッかりして居る中に、はゝゝ、うッかりして居るといふのも變なもんだが、向の腹が大きくなつたのだ。

今更驚く筈のものぢやないが、私はそれと聞いた時は全く悸として了つた。友江は案外に落付いて、最う恁うなつたら隱しては居られないから、兩親に打明けるより外に仕方はない。寧その事これを幸ひに、世間晴れて二人で手を取つて歩かれるやうにしやう。貴方も其心算で確かりして下さいと云つた。付いては、無論男の事だから私は矢面に立てと言ふのだ。

臆病者！私は此處で、到頭本音を出して了つた。遲蒔だつたが、私は其時になつて初めて自分の、其當時の身の上から身の立場までを明瞭と見る事が出來た。慚愧、後悔、冷汗といふものを生れて初めてかいた。

それから種々と、世間で揉まれて來た今だつたなら、隨分面の皮も厚くなつて居るから外に分別の出やうもあつたらうけれど、うぶで、はにかみやで、見掛けは兎に角、馬鹿に氣の弱い男なんだから、只最う一竦みに竦んで了つて、何方へ何う向かせられたつて、全く、手も足も出るのぢやない。

其癖正は、心底から惚れて居るのだ。假令へば甚麼事をしても、一生自分の者にしたいといふ氣は、骨を割つた髓の髓まで沁徹つて居るのだが、それで居て

何うする事も出來ないのだ。」

と何か知らず苦しさうに、

「氣の知れない談話をするやうだが、自分の臆病には自分ながら呆れて了ふ。私は併し、彼の時位行惱んだ事はなかつた。それは可いが、私はそれから何うしたと思ふ。」

「むゝ、何うしたゞ。」

と彌平は押返した。信次は聲を異しく、

「私は駈落したよ。」

「おう、二人で。」

「いや、一人で。」

「なに一人ッ？　やア、それぢや………。」

信次は術なさゝうに、

「到頭逃げて了つたのさ。いや全く、貴方でなくつちや話された事ぢやない。私がそれ、二度目に突然に國へ歸つた事があつたらう、彼の時實は這麼不始末

をして來たのだ。」
「ふむ、那樣事と言全で知らなかつたが何故又俺にまで隱して居たゞ。」
「いや今でこそ言ふのだけれど、私にや全で口から先へ出されなかつた。出される位なら逃げて來はしなかつたのだが。」
と眞顏に、思入つた聲で、
「懺悔と言つたのは實はそれだ。私はそれッ切り音信をしなかつた。最初の中こそ、苦しくつて堪らなかつたが、日數を經つて行く中に、次第に薄らいで當座の事に紛れるやうになつて來ると、や、淺猿しいもんぢやないか、いつとなく忘れ勝ちになつて了つた。
流石に併し氣になると見えて、それも五六年後の事だから、全く言譯にもならないのだが、或晩こッそりと、友江の家の前へ行つて見た事があつた。町の樣子は其時分とは全で變つて、栗山さんの邸なぞは、幾軒かの商店になつて、以前の影は全でなくなつて居る。もとの儘で住んで居る家は數へるばかり、閑靜な屋敷町が、町屋續きの見違へるやうな賑やかな處になつて了つたので、一寸

は見當が付かないやうだつたが、漸くに其處の前へ來ると、かねて見馴れて居た檜の冠木門の影がない。

家は改築されて、人もいつの間にか最う變つて居た。軒燈には守山とある。標札には守山貞信。

おゝ、何處へか引越したのだな。と勿論逢へた義理ぢやないけれども、流石に居ないとなると失望して、すご〳〵歸つて來た途中、不意と思付いて、以前馴染の床屋が未だ其儘で店を開いて居るのを見付けて、其處へ這入込んで餘所ながら樣子を聞いた。

床屋は無論二人の關係を知らないのだから、顏を剃りながら種々と話してくれた。家は前の年麻布の方へ移つたといふ事、いづれも無事だといふ事、華美な大まかな屋敷であつたといふ事、それからそれと調子に乘つて口を解いて來た。

聞物だつたのは、友江が婿を取つたといふ事だ。婿さんは海軍士官で、花も實もある武士であるさうな。

婿と聞いて私は何か知らず、一方に安心したやうな心持がした。實の處肩の重荷が思つたよりは輕かつたやうな心持となつた。

それとなく子供の有無を聞いて見たが、那樣談話は何も未だ聞かぬといふ。以前の事などは、勿論氣振にも知つて居ない、すると彼の始末は何う付けたらう。ところがこれには流石に荷を下す事は出來なかつたが、それ以上を聞く譯には行かないので、いゝ程に切上げて了つて其處を出た。

それぎり最う逢ふ機もなければ、人傳手に聞く機も來なかつた。手近の事についに忙しくなつて忘れるともなく到頭全で忘れるやうになつて了つた。

それから十幾年といふもの、全で何も思出さずに過ぎたのだが、不思議ぢやないか、今になつて急に、憑う身の内を引搔廻されるやうに、此事ばかりが思はれてならないのは。

兄樣、私は其子が生きて居るやうに思ふ。今更言ひやうもない談話だが全く摑付きたいやうに逢ひたくて仕樣がない。去年赤痢で、思掛けず續いて妻子を亡くして、それから此方、自分も病氣勝ちで憑う弱込んで居る其所爲もある

だらうが、不意と氣に掛り出してから我ながら解らないやうに、それぱかりを一人で追廻して居るのだ。

馬鹿なやうだが聞いて下さい。一昨日も恁う云ふ夢を見た。夢だから全で辻褄は合はないが、私は何時の間にか死んで了つて、土の中に埋つて居る。埋つて居て外が見えるも可笑しなもんだが、何でも死んでから間がない樣子で生々しい土が盛上つて、市原信次之墓と書いた新しい、墓標が歴々と見える。すると其處へ何か言合ひながら來る者がある。一人は未だ年の若い男で、一人は其母親らしい婦人だ。若い男は無理に母の手を引張るやうにして、墓の前へ連れて來やうとする。母は頻りに其手を振拂つて行くまいとする。爭ひながら此方へ近寄つて來た。見ると母親といふのは友江だつた。若い男は、私の若かつた事分に酷肖の姿をして居るぢやないか。

私ははッとした。胸を刺されて居るやうな心持でぢッと見て居ると、何を言つて居るか聲は聞えず、長い事又言爭つて居たが若い男は、到頭無理遣りに母を墓の傍へ引張つて來た。其處で又も何か一心に割つ口説いつして居るや

うであつたが、阺は更に聞入れず、墓標を睨付けた儘ですつくと立つて居る。若い男は血を吐くやうにして尚も説立てゝ居る。私は堪らなくなつて其處へ飛出さうとしたが、動く事が出來ず下で悶込んで苦み拔いた處ではツとして目が覺めた。

處が全で同じ夢を、貴方の來る前に今此處で見たぢやないか。夢ぢやあるけれども私には忘れて了はれない。事が事だけにね。」

と言つて何と思つたか、不意に調子をかへて、

「兄樣、私は氣が違はなければ可いと思つて居る。」

「え。」

と彌平は初めから深い注意を拂ふまでもなく聞いて居たが、顏を打目成るばかりに、

「お前それほどに思ふだら、其子が何うなつたゞか、何よりそれを聞質して見ねえだ。」

信次は投出すやうに一言、

「それを私から聞かれやうか。」

と其儘口を噤んで了つた。日はいつか窓を一杯に丸くなつた猫の影が暖かさうに障子に映つて居た。午前九時廿五分。

希望

（一）

村の者は何も知らぬから、兄の與十郎が巧みに言拵へて、思ふさま吹立てたのを殘らず眞に受けたもので、坂の大盡の乙ちやんは、何でも豪い學者になつて歸つて來たと思つて居る。實の處今年の試驗にも亦落第して、かねて修學中の監督を賴んで置いた某博士は、今度も亦試驗委員の一人であつたが、何ういふ見込みを付けたものか、折節上京中の與十郎に向つて、最早受驗の事を思止まらせるやうにと、それとなく因果を含めたのであつた。兄も内々は失望しないでも無かつたが、大氣の男で、騷ぐ體もなく、新次、氣を落すな。俺に考へもあるから、兎も角一旦國へ歸れ。何も胸にある。俺が付いて居る以上惡いやうには決してせぬ。笑つて此日を振返つて見る時節もあるわ。と勵ますやうにして志を成さぬ中に、と容易に肯かなかつた弟を無理に引立てゝ歸つて

來たのである。

高村與十郎、松川村の一の長者で、坂の大盡と言へば近郷に誰知らぬものもない。七人ある同胞の中に三人の男の、中の弟は夭折して、季の新次といふのが、笈を負うて上京してから丁ど八年目で、不本意ながら故郷に歸つて來た其青年である。村に居つた頃、縣の中學に居つた頃などは、周圍の者にも全く舌を卷かせた程、恐ろしく能く出來たもので、人も許せば自らも亦したゝかに許して居つたが、京へ出てからといふもの、何う子返りがして了つたか、成績は次第に捗々しからず、果は監督の博士も全く匙を投げて了つたほど、隨分と刻苦して勉强した結果が到頭失敗に終つたので、新次の無念さは實に一通りではないのである。深切づくに、新次の成蹟に付いて諄々と說いてくれた博士の談話を聞いた時、あれほどに出來た新次が、何うして其やうな、と與十郎は不審に堪へんのであつたが、博士の言葉の中には動かすべからざる確かな節があつたので、新次の成功の全く覺束ないのを竊かに悲しんで、其鹽梅では縱令何をした處で、此末烈しい社會に馳驅して功名を爭ふといふやうな事は思ひも寄

らぬ。なまじ東京に置いて苦しませるよりは、見切を付けて故郷へ引込ませて、分家でもさせた上で、それから目鼻の付けやうは又いくらもある。と恁う思つて無理やりに弟を促して歸つて來たので、新次の身に取つては、初一念を果さずに歸るといふのが忍ぶ事の出來ない苦痛で、其苦痛は、何處にも付いて廻つて、骨肉の情からの兄の慰藉の聲も全く耳に入らず、故郷へ足を踏入れて、馴れた山河を目に入れるより、殊に深く其苦しさを覺えたのであつた。

兄の繕ひ方が上手であつたので、鄕黨の間には少しも襤褸を見せず、前にも言つたやうに、新次は立派なものになつて歸つて來たやうに信ぜられて居た。

嫂のお道といふのは初めから優しい人で、蔭日向なく何くれと氣を付けてくれるし、甥や姪などは何れも罪のない子供で、東京から來た叔父さんと珍らしがつて、周邊を取卷いて慕寄つて來る。大勢の婢僕は、主人が大切にするのを見て尙更に尊敬する。家は素より村では第一の勢力を持つて居るので、何處へ行つても、多くは頭を下げられる。歸鄕の其日から、いつの日にも、いかな人からも、好遇されぬといふ事はなかつたのであるが、新次の胸には、如何なる時

にも取除ける事の出來ぬこだはりが有るので、面には無據く笑つても、心に恥ぢて、氣は何時も鉛のやうに重く鈍つて了ふ。

他から強ひられても、進んで交りを求めやうともせず、失意と歎息の中に多く日を送つて居た。兄の諫めも、嫂の慰めも、心を動かさぬではないが、宿志を遂げぬ上は、新次は兎ても滿足して居られぬのである。新次は未だ自分は到底希望を達せられぬ身となつて居る事を少しも知らず、失意はしながらも、一時の蹉跌としてやがては勇氣を回復して、再び打つて出やうといふ事を胸には固く誓つて、絶えず未來を描いては、夢のやうな空想の中に果しもなく彷徨つて居た。二十四の秋の末の事。

(二)

縁側の、日の當る處へ出て、季の子のお鳥といふ、二歳ばかりなを乳母に抱かせて眩しさうな顏でお道は紅葉のやうな手の爪を剪つて遣つて居た、未だ朝露の乾かぬ頃で、裏の雜木林の方には、鵯だの、百舌だの、鶫などが、日和に機嫌のいい聲で囀散らして居た。不意に土藏の陰から足音が聞えたので、顏を振上げると、部屋着の上に、紺出の糸織の羽織を引掛けて、茶の中折の帽子に、村では珍らしいコンゴーの洋杖を持込んで、新次が衝と其土藏の角へ出て來たので、莞爾して、

「おや、那邊へ、」

と嬰兒の手を持つたまゝで聲を掛けた。新次は立止つて此方を見たが、

「一寸散歩に、」

と輕く會釋して其儘裏木戸を指して、栗やら柿やら秩序なく植込んである中を拔けて、ふらりと外へ出た。

路に立つと、蕭殺とした秋の氣は、直ちに身に迫るやうに覺えた。日は斜めに、深い雜木林の奧に射込んで、空は果てもなく澄徹つて、一つ二つ風に飄つて高く舞上つた木の葉が、ひら〳〵と輕く足元に落ちて來た。なだれに下つて軈て又上つて居る勾配の緩い地勢の、南に廣く見渡す方は一圓の田で、收穫時の忙がしさうに、野良に出て居る者は手を揃へて立働いて居た。ちよろ〳〵水の縁を縫つて、尾花がきら〳〵と穗を揃へて日に閃めいて、榛の木柵が處々に、秋の姿を見せて中を彩つて居る。間を通つて一條の路が、さながら蛇のやうに蜿つて、見えつ隱れつ彼方の岡へと續いて居る。新次は其路を辿つて行つた。

遇ふ人毎に挨拶されるのを煩擾さうに、心ならぬ笑顏を返して、やがて其岡を越すと、森を隔てゝ鏡のやうな沼が忽ち木の間から美しい影を見せた。左に折れて、鎮守の八幡の横を出ると既汀で、芦や蒲や眞菰に淺く深く縁を取つた、靜かな極めて靜かな水が、森を、社を、岡を、空を、横切る鳥を、輝く日を、其物よりも美しく色を合せて影を涵して居る。向は一帶の松原で、其端れに、土地には稀

な瓦葺の大きな二階家がある。菅沼守と言つて、地方の官吏上りで、今は此處から一里ばかり先の町の、其町の名を冠つた紡績會社の理事をして居る人の住居である。

汀に寄つて、駈出すやうな木振で横にのたり出して居る樫がある。其處から見渡すと、向の松原から、直ぐ目の先の菅沼の家は手に取るやうで、短い疎らな姬垣を越して、庭から座敷から一目に見える。新次が今何心なく其處まで來た途端、不意に其處の端れ、垣に寄つた間近の處で、

「お孃樣、貴方は本當にお可哀相です事。傍で見て居る私でさへ我慢が出來ないやうに思ひますものを、いくら何だつて那麼にお虐められなすつては、一日だつて御辛抱が續くまいと思ひますわ。

と丈の低い、横に肥つて下婢らしいのが、傍に立つて居る若い細面の婦人に向つて言つた。

「いゝえ、私が惡いのだから、」

と重い沈んだ聲で答へて、伏目になつて、ぢツと前のすがれ掛つて秋草を見詰

めて居る、其顔をゆくりなく見て新次は驚いたやうに目に留めた。かねて知つて居る、玉枝といふ菅沼の娘で、新次は此人が、未だ娘で、此家に居やうとは全く思ひも寄らなかつたのである。

お嬢様、と女中が言ふからには未だ定まつた人が無いのと見える。それは兎に角、此窶れ方は何うであらう。晴々しい昔の面色は全で無くなつて、さもさも憂愁に閉ぢられたやうな、我が見ぬ中に何のやうな事があつたのであらう。

八年以前、未だ此娘が十六の頃、下の鏡に庭の櫻の日射に驕つた酣の春であつた。つい此先に、乳母のお種といふのが縁付いて居る家がある。其處からの歸りがけに、新次は脇を通りすがつて玉枝を見た事がある。新次は其時ほど此人を美しく見た事はなかつた。水の上に、堤を彩つて若草の上に、櫻の精を其儘の、裾から上の裏若い姿を見せた。霞に咽ぶ空の色。花の諸枝、水の影、時に鶯の聲を餘所に、遠く彼方に在郷唄の節を長閑に水を隔てゝ、

花がエー、蝶々かナアソレ、
蝶々が花かエー、

來てはぢら〳〵ナアソレ、

迷はせるエー、

時も春、人も春、春を溢れた花の姿を、我にもあらず醉心地に、目を奪はれて佇立んだ時、玉枝は人に呼ばれて急がはしく引返して行つた。振の袂が風に零れて、襦袢の色の飜つた拍子に、手折つて頭に挿して居た白薔薇の花が、髮を離れてはらりと水の上に落ちたのを、とも知らずはた〳〵と裾を返して奥へ入つて行つた。新次は跡に、水に漂つて居た簪の花を、風が自づと足元近く吹寄せて來たのをも、常の態には見なかつた。新次は其花を持つて歸つて來た。

暫くして新次は上京した。修學の忙がしさに、何も知らず幾年かを過ぎて了つたが、以前と變果てた俤を再び此處で見やうとは、全く思の外であつた。

新次は尙も、ぢッと其方に目を付けて居たが、不意に何か心付いたやうに、左手の路を足早に、森を向ふへ突切つて行つた。森の彼方は村道で、其取付の松の木蔭に、御茶漬の看板を出した、中の薄暗い、煤ぼけた茶店がある。乳母のお種が緣付いた先は其處なのだ。

何喰はぬ通りすがりの顔で、新次は衝と中へ入つた。折節客もなく、脇の土竈の前に、四十五六の色の黒い顔の丸い、古女房が、火箸を片手に頻りに中の麁朶を鹽梅して居たが、顔を振上げると、吃驚したやうに、

「あれまア、坂の乙ちやんではねえかね。」

と火箸を捨てゝ慌たゞしく、

「好く來てくらしつた。さア、まア上つてくらつしやい。今日は何處へ行かしつたゞね。」

「なに一寸散歩に出たんだが、前を通り掛つたから、茶を一杯貰はうと思つて寄つたのさ。」

と新次は輕く、其まゝ前の床几の一つへ腰を掛けた。茶よ煙草の火と、お種は取持顔の、くる／＼立廻りながら、

「はア、然うでがすかい。何にしても能くまア寄つてくらしつた。あれ、何故上らつしやらねえ。其處は餘り端近でねえかね。」

「なに却つて此處が可い。」

と新次は居心よげに、煙草を取出しながら、
「何うだな商買は。」
「はい、お蔭樣でまア何うやら恁うやら遣つて居ますだ。有難え事に皆が最負にしてくれますで、惡い日は一日も喰ひましねえだよ。」
「然うか。それは何よりだ。」
と二つ三つ當座の挨拶の切れ目を機に何氣ない態で、
「時に種、今其處の菅沼の家の背後を通つたら、彼家の總領娘の庭に出て居るのを見掛けたが、何かえ彼の娘は未だに何處へも嫁付かずに居るのかい。」
「はア彼の孃樣かね、」
と種は首肯いて席を近く、
「彼のお子は可哀相に、詰らねえ者に欺されやしてね…………。」
「なに欺された？」
「はア、丁どお前樣が、東京へ修業に行かしつてから間も無え事でがしたよ。京都から來た若え畫工で、暫くの間菅沼樣ん處へ逗留して、畫を描いて居た合

點の行かねえ男があつたがね、孃樣其男にうツかり欺されて了つたゞよ。鎭守樣の祭の晩だつた。家の金え持出して、孃樣其男と突走つたゞ。」

「おゝ、彼の娘が、」

と新次は我にもあらず膝を進めて、

「むゝ、それから、」

「それなり三年ばかり音信もねえ、全で行衞が知れなかつたゞ。四年目の春になつて、阿父樣が會社の用で、急に大阪へ發つて行かしつたが、彼方で思掛けなく孃樣に遇つて、直に捉まへて歸つて來さしつた。何でも男には疾うに捨てられて、情けねえ身になつて居さしつたさうだが、歸つて來さしつた姿を見ても、甚麼に苦勞をさしつたかと、餘所ながらも思遣られるやうに、痛々しく變つて了はしつた。今でも美しいにや美しいがね、お前樣も知つて居さつしやる、以前の影は全で有りはしましねえわ。」

と言つて稍調子をかへて、

「それでも阿母樣が繼母でなかつたゞら、まだ／＼息をつかしッたらうがね、

然うでねえでさへ苛責まれて居さしつたのを、其事があつてからといふものは弱みを附け目にいびられ通しで孃樣一日だつて泣かねえ日は無えといふ談話でがす。心柄とは言ふもんの、若え身空の分別も付かねえ時分にやア、餘所にも無え事ではねえでがす。いつまで如彼して置かつしやるだか、他人事ぢやアあるけんど、俺等可哀相でなりましねえよ。」

「ふむ、那樣事があつたのか。」

と新次は腕を組んで、伏目に稍暫し、何か思入つた態に見えたが、軈て談話を外の事にして、間もなくそこ／＼に切上げて、其處を出ていつた。

（三十）

それから半歳ばかり過ぎた後の事であつた、夜に紛れて、新次と玉枝は手を執つて村を出奔した。丁ど兄の與十郎が、新次の爲に分家の準備を整へて、隣村の豪家の娘の、何とかいふのを配偶す手筈が出來て居た時、玉枝は又繼母の發意で、あらぬ方へ輿入れの談話を强付けられた時であつた。人目を忍んで、二人は村を跡にしたが、二人は併し、飽まで未來の光明を望んで、闇にも隱されず心に勇立つて居た。今度こそは、と新次は最期の成功を確信して、玉枝は又此人に憑つて、今迄の日を何のやうにも見返して遣らねばと、互みに心の急がれる東京を指して行つたのであつた。

小妾記

（一）

「旦那樣、もし、旦那樣。」

と妙に高調子の何處やら聞覺えのある聲で不意に呼ばれて、思はず立止つて振返つた。此間から足部の神經痛で、稍暫く引籠つて居たのが、今日半月振で珍らしく外へ出て見たのだから、五月半ばの晴渡つた空、目に爽やかな若葉の色も、何かなし一倍快く、つい此先の友人の家へ、一寸立寄つて歸つて來た途中丁ど前を、未だ裏若いブロンドの外國婦人が馬丁らしい黑鴨仕立の男と、柳隱れに話しながら行く後姿を何心なく目に留めた時。

振向く先を一尺ばかり、ひらりと燕が、矢を射るやうに拔けて行つた。途端に傍へ刻み足、來ると二三度、續けさまに頭を下げた、五十恰好の中老爺。茶の萬筋の秩父の袷に、大分古びた鐵無地の羽織、紺獻上の帶を狹く、白足袋に日和下

駄といふ扮裝の男。
「おゝ、慶造か。」
「はい、其後は御機嫌宜しうございますか。いや最うとんと大御無沙汰を致しまして、何とも申譯のございません始末で。」
と脱いで手にして居た中折帽を膝を割つて挾むやうにして、頻りに小腰を屈めながら、さも〳〵言譯が無さゝうに言つた。私は宥め顏、
「なにさ。御無沙汰はお互ひの事だ。何うだね、此頃は。」
「はい、お蔭樣で何うやらまア、ひく〳〵して居りますやうな事で、實は先頃つい此最寄へ引移りましてな、其節一寸書面で申上げては置きましたが……。」
「むゝ、諏訪町へ。」
「はい、なに此處から直ぐでございます。如何でございましやう穢ない處ではございますが、御用が無くば一寸お立寄下さいましては。」
「有難う。今日は散歩に出たのだから別に用はないのだが……………。」
と其時不意に思出した事があつたので、

「おゝ。丁ど可かつた。差當つてお前に少し頼みたい事がある。」

「へえ。何でございますか。私に叶ひます御用なら何なりとも承はりましやう。まア兎もあれ宅へ一寸お寄りを。」

私は此處で此男の事を一寸言つて置く。私の未だ附紐のあつた頃から、父の許へ出入して居た男。何彼と家の用を達しては、母などにも重寶がられて居た。中途二年ばかりの間家に食客で居た事もある。手先の器用な男で、私は能く、金魚の槽や燈籠や、押繪や箱庭などを拵へて貰つた事を覺えて居る。其後會社員、周旋屋、種物屋、碁會所、骨董屋など、兎角一つ事に尻が据わらず、又かと父にも能く言はれて居たが仕舞に何か、柄にない礦山師のやうな事を遣つて取返しの付かぬ穴を明けてから暫く家へも見えなかつたが、彼是一年ばかり過ぎて、八雲琴の女師匠の許へ、入夫のやうな事になつたと言つて、稍羽振を直して訪ねて來た。些少ばかり又資本が出來ましたので、以前手掛けました骨董を又始めます。存寄らず御無沙汰を致しましたから、何か旦那樣にと存じましたが、昨日不圖しました先から、恁ういふ物を手に入れましたから、と手土

産代りに箱入りの呉須の鉢を持つて來てくれたが、それから、落付いて、今に變らず遣つて居る。父には種々な事で、隨分と世話を掛けたので、其後父の亡くなつてからも、流石に昔を忘れず、心に掛けて寒暑には訪ねて來る。身體の丈夫でない爲か、近頃めツきりと年を取つたやうに見えるが、昔は隨分剽輕な、何をも苦にせぬ元氣者で、殆んど二十も年の違ふ私よりも若々しい程であつた家内はお京といふ、四十前後の一寸素性の知れぬ、黒人と素人の間を行つたやうな婦人。頗る付きの機嫌買ひで、時に天氣模樣が違つたとなると、忽ちに彼の河東の獅子吼なるものを遣るさうだ。

此男に頼む用といふのは、今度或友人の新宅開きに、其友人の殊に好きな文晁の軸でも贈らうと思つたので、幸ひ慶造に一つ探させやう、と顏を見て不圖思付いたのだ。

行くのは可いが併し、いつものやうに夫婦の者が、下へも置かずやれこれしてくれるのが氣の毒さに、用は此處で言つても濟むのだからと、望みの軸物の事を頼んで其儘別れやうとしたが無理に止められて、到頭家まで引張られて行

つた。店は諏訪町の中通りに、二間々口の、奥の深い、表を硝子戸にして、相應に價値のありさうな品物が頗る見好げに飾付けてある。十六ばかりの中小僧が一人、框に近く店番をして、下の土間は玩具のやうな小犬が、丸くなつて眠つて居た。並んで右に千本格子、前に相變らず八雲琴指南の文字。入ると片脇の染付の鉢に、棕櫚竹の見事に茂つたのが眼に付く。主人は案内顏の障子の外から聲を掛けて、

「お京。お客樣だ。何だ、原口さんの旦那樣だ。」

「おや。」

と、聞付けて直に立上つた氣勢。茶の間を駈出してお京が急がはしげに出迎へた。

「まア、お珍らしい。能く入らしつて下さいました。本當に、何ういふ風の吹廻しでしやう。いつもお噂ばかり申して居りましたのでございますよ。おほゝゝゝ。さア、何うぞ此方へ。」

といつもの調子。私は手を取られぬばかりにして、やがて奥の六疊の座敷に

通された。木口を好んだ氣の利いた室の、揃つて奇麗好きなので其處等整然として、調度の何れにも心盡しの跡が見える。庭は東南に狹いながら手入をよく、眞新しい建仁寺垣を境にして黄楊の古木の物寂びた石燈籠、未だ柔かい板屋の若葉が、日射を受けて下の飛石の淺緑の色を映して居る。さらりとして居心の好さゝうな住居。

「知らなかつたが好い家だね。」

と四邊を見廻しながら言ふと、

「はい。先の宅よりはまア些少ばかり勝手は可うございますが、なに格別の違ひは有りはしません。」

と少しは自慢の色。口ではさもない風に言つて、包みあへぬ得意の面を紛らすのであつた。

「前の家は讓つて來たのかね。」

「いえ彼家は望む者に貸して參りました。」

「ふむ大分好い景氣だな。」

「へゝ何でございますか。」
と白髪交りの頭を押へる。お京は其中に、いつもの手敏捷く支度して、それと氣の付かぬ間に既酒席の道具を運出した。
「ヤ、何か又心配してくれちや困るが。」
「まア、何ですねえ。私共へ入らしつて那樣事仰有るもんぢやありません。甚麼に心配したつて又何が出來ましやう。いえね、いつも言暮らしては御無沙汰ばかりして居りますから、お詫の印にもと思ひまして一寸……、何うせお口に合ふやうな物は出來はしませんけれど。」
と言ひつゝ膳部を前に据ゑた。私は笑ひながら、
「はゝゝ。那樣事で一々飲立てられちや堪つたもんぢやない。」
「いゝえ結構ですとも。本當に何にも有りませんけれど、御贔負分に些少お過しなすつて下さいまし。なに良夫などは最う、お相手などは附けたりで、自分が先へ立つて飲みたい方なんですから、內々得たり賢しで居るのです。いつでも貴方お客樣より此方が先に潰れて了ふのですからね。」

慶造は五月蠅さうに、一寸眉を顰めて、

「おい。餘計な事を言つて居ずに、跡の物を早く持つて來るが可い。」

「はい〳〵只今。」

と良人の方は能くも見ず、笑顔を其儘、愛想らしく、

「まア何うぞ御緩りと。」

と直に立つて行つた。慶造は物馴れた手付の、箸を割つて器用に杯洗の猪口を挾んで、水を切つて差出しながら、

「兎も角まアお一つ。跡から追々と、かねて御承知の怪しい手際ぢやございますが、何かお京が趣向を致しますさうですから。」

「いや何うか餘り構つてくれないやうにね。ぢや折角の何だから、とは言ふ者の、好きが病で、酒と見ると目が無くなつて來る。意地の汚ない談話さ。」

「はゝゝ。私の言ふやうな事を言つて居らつしやる。」

と暫く酒になつた。怪しい手際と慶造は言つたが似たもの夫婦の、お京も生付きの器用で、誰に習つたといふでのも無いが、其處等のざらな會席料理など

よりは遙かに優つた手際を遣る。酒は慶造が平素から嚴ましい方で、人にも自慢するほど充分吟味してあるのだから、こゝ左利には頗る妙なのである。それに此慶造といふ男には、私が未だ幼ない時分、惡遊戲をして能く父に叱付けられた時、始終傍から詫びて貰つたり、時に影芝居を遣つて貰つたりして、妙に懷いて居た癖を未だに何處にか殘して居ると見えて、第一私とは全で畠違ひの者であるに拘はらず、恁うして一座して居ると不意と昔のやうな心持になる事がある。然も機嫌上戸で、醉ふと其以前の俤も出て、能く父を笑はせたやうに面白い事を言つて私をも笑はせた。

知らぬ中に盃が重つて來る。病後の爲か醉が早く廻つて、今日は此方が危なくなつて來た。坐つて居たがふら〳〵するやうで、思はず片手を背後に支いた。其時だつた。東の垣越しに隣家の小窓から、不意に三味線の、冴えた撥の音が起つたと思ふと、幅のある、恐ろしい美い聲で、

「……草の葉に宿りし月も小夜風に、憎くや零れてはら〳〵と、露か雫か雫か露か濡れて色增す野邊の色。いきなお方に釣合はぬ、野暮なやの字の屋敷者

……」
思はず耳を欹てたが、
「馬鹿に美い聲ぢやないか、何だい彼女は。」
「はゝ。お耳に止りましたか、彼の子の喉は格別ですよ。全く素人離れがして居ますからね。」
「え、素人かい。」
と私は稍意外であつた。慶造は其積りで言つたのでは無いらしく、少し狼狽いたやうな樣子であつたが、氣にも見せぬやうに直ぐ、
「地は素人です。持つて生れたんですね。何しろあれだけの藝を寐かして置くのは惜しいやうに思ひますよ。あれで未だ二十にもならないんですからね。」
といつか醉の廻つた稍もつれ立つた言葉で、とろりとした眼を妙に柔げて言つた。
「ぢや只の娘で……。」

「へッ、それが少し……。」
「少しとは？」
慶造は彼方へ聞えるのを憚るやうに聲を低めにして、
「今ぢや最う素人ぢやないのですよ。」
「ふむ、といふと。」
「圍ひ者なんで。」
「はゝ。何の事たい。」
「えッ、何う思召したんで。」
「なにさ。俺は又最つと外の者かと思つたのさ。」
唄は進んで何時か。
「……蚊屋より胸に浪打ちて、紅麻うつる顏の色……。」
我にもあらず、音色に又も自づと耳を取られて行く。慶造は猪口を下に、
「筋のいゝのは妙なもんで。何ですよ、此頃慰みにね、家内の弟子になつて八雲を稽古して居ますが、並の者の二月も掛かる處を、十日も經たない中にすッ

かり手に入れて了ふのですからね。家内も今迄に無いと言つて居ますよ。何でも見て居る中にぐん〳〵手を上げて行くのださうで……。」

私は何といふ氣もなく、

「して旦那といふのは。」

すると慶造は、直と乘出すやうにして、

「それが又妙なんです。全く柄に無い人なんですからね。いや此取組は一寸お談話になりますよ。」

と絃の主の方へ一寸目を遣つて、

「彼處で彈いて居ますのは、直ぐ此先の水道町の金といふ鑄掛屋の娘で、親父は例の先の飛出した天秤棒の荷を擔いで鑄掛錠前直しで毎日流して歩いてるんで稼業は人並に遣つちやア居ますが、から始末に負へない飮んだくれで年中酒の氣なしぢや居られないといふんだから堪りません。子供は二人あつて總領のが今彈いて居るんで、下のは五つ違ひのこれも女で、この方は縹緻は臺なしですが、上のはそりやア御覽に入れたい位です。お夏と言つて十九

ですがね。
未だ私共の此方へ移して來る迄は、娘で家に居たんですが、今の旦つくなんですがね。いや最う飛んだ人に見込まれたんで。
矢張近所ですが、坂上の酒屋の隱居で、七十近い最う爺樣なんです。年だけでも呆れるんですが、其又爺樣が旦那莚破りとか何とか言ふのなら何ですけれど、これまでついぞ、女房の外に女なんぞ見向いた事もないといふ堅藏だつたんですからね。全體樽拾ひから仕上げて來た辛抱人で、いつもどんつくか何かで、死ぬ迄弗箱の番でもしさうな顏色をして居た人なんでしたが、飛んでもない、生れて六十七八になつて初めて色氣が付いたんです。
旦那。全くねえ解らないもんで、私が移して來たての其隱居の樣子ッてものは、松坂縞の洗洒した奴に、小倉の帶の萎切つた帶を克明に締込んで、むだな紙でも落ちてやしないかと言つた風で路を歩いて居るのが、此頃隣りへしけ込んで來る風を見ると、柄こそ樸素ですが何かぞろりとして髮は未だ黑い人ですが、惡く磨込むと見えて、顏も頭もてら〳〵と光つて居るぢやありませんか

類が何だかむくつりしたやうに思つたら、いつの間にか總入齒をして居る始末なんです。能く此前を通るものですから、宅の家内が調戲面に、私へ御覽なさい。貴方も最う追付け彼の年になるんですよ。年寄の身嗜みといふものを、能く見て覺えてお置きなさいよなんて串戲口を利くんですが、いえね、正の處柄にない變り方なんですから、何か其急にあやかしの憑いたやうな樣子ッ振ッてえものは、全く見られたもんぢや有りやしません。ですがねえ旦那。何う氣が若いかは知りませんが、七十近くもなつて那樣のは、餘り類はありませんね。

私は默つて慶造の、酒に調子付いて話込んで行くのを聞いて居たが、何かは知らず此老人を氣の毒のやうに思つた。然ういふ人も有るものかと酒の下物のやうに慶造が笑草にして話して行くのを、餘りいゝ心持でなく聞いたのであつた。

「むゝ。併し談話のやうな那樣人なら、勿論年の上も考へたらうし。世間の手前も居廻りも考へない事はなかつたらう。隱居といふから當主も無論有

るのだらう。孫も事に依つたら持つて居るのだらう。容易な事で無分別が起されるもんぢやない。よく〳〵何うかしたのだな。尤も人に依つて一概には言はれないが。」

「いえ全く何うかしたのです。當主は最う四十代で、子供は五人も有るのですからね。眞面目に言やア興が醒めた談話です。正氣の沙汰とは思へませんですがまア一生の思出なら、冥土の土産に其位の事も可いでしやうよ。」

此時絃の音は何時か調子を替へて、

「其日ぐらしの朝顔さへも、思ひ〳〵の色を持つ。それも縁なら、あゝ儘ならぬ。」

撥を置いて、不意に嬌な投出したやうな聲が次いで聞えた。

「本當だよ。吁！」

と三味線を捨てゝ立上つた樣子。襖を引開けた音がして、其儘奥へ行つたらしく、それなり何も聞えなかつた。

「旦那。呼んで來ましやうか。」

「え。何を。」
「いえさ。今の隣家のを。なんなら一段、お慰みにお聞なさるのも可いでしやう。」
「串戯言つちや可けない。人の持物ぢやないか。那様勝手な事が出來るものか。」
「なに懇意づくで頼むんですもの、構ふ事は有りやしません。何うせ用のない身體ですから、閑暇で困つて始終宅へ遊びに來て居るんです。何もさ、お慰みぢやありませんか。」
「むゝ。其氣で呼ばれて來る向ふは好い面の皮だ。」
「はゝゝ。なに先ぢや一向、那様事を苦にするやうなのぢやないのですから」
と立たうとした途端、不意に裏口の方で、
「おッ師匠さん。」
と騒々しい、華やかな聲。
「あら。」

とお京の、人に連れて若やいだ聲がした。　慶造は聲を潜めて、腭を突出すやうに、身を乘出すと其儘、

「旦那、來ましたぜ。」

（二）

兎角の返事もしない間に、慶造は獨合點の、逸早く座を立つて、お京と其お夏といふのが、茶の間に差向ひになつた處へ衝と行つた。酒の上の串戲交りに何か調戲つて居ると見えて、高い低い笑聲が二三度聞えたが暫くすると、無理に手を執つて座敷へ引込むやうにして來た。

「あれ。まア酷い事。」

と笑ひながら、搦合つて、中へ入つて來た。銀杏返しの、ふツくりした鬢の少しほつれて、しやなりとした身を斜かひに引かれた手を振拂ふやうにして襖に近く慶造の方へ、

「本當に、醉つてるものだから仕樣が有りやしない。」

と向直つて、高彫の黄金の指環の篏つた、しなやかな手を下に支いて、

「貴方。飛んだ失禮を……。」

私も慳うなつて默つて居る譯に行かない。

「いや這麼中へお氣の毒な。何分慶造が此仕末で、醉つて何も解らなくなつて居るもんだから。」

「いゝえ私はなに構やしませんけれど、初めてのお方に餘り何ですから、彼方で御遠慮をしたんですのに。何も聞かないで無理に連れて來るんですもの。」

慶造は莞爾々々と、又置注ぎの盃を舉げて獨り何か悅に入つて居たが、

「可いぢやないか何方だつて。まアさ、餘計の事はさらけ止めにして、前からお馴染と言ふ事にして心易くお談話をしやうぢやないか。旦那。何うです私が自慢したゞけの事は有りましやう。此美しい處を見て遣つて下さい。」

お夏は聞きも敢へず、

「まア厭な。叔父さんたら本當に有りやしない。いゝ加減にして下さいよ。いくら私が厚顏しいからッて、餘りですわ。」

慶造は態とらしく眼を睜つて、

「何だな。正直に只譽めて居るんぢやないか。譽めて怒られた日にや割にも何も合つたもんぢやない。」

「知りませんよ。人を。」

「おや〳〵。こりやア恐入つた。旦那。私だつてこれぢや少し埋らないぢや有りませんかね。」

「はゝゝ。なにね、お夏さんとか。私も實は惡かつたのさ。先刻お前さんが彼處の窓ん處で夕立を彈いてお出の時分、私が聞きさして甚く譽めたのがもとでね。到頭此處へ引張つて來るやうな事になつたのだから。」

お夏は颯と顏を赧らめながら、涼しい、ぱつちりとした眼を擧げて、

「まア。那麼ものをお聞きなすつたの。何うしたら可いでしやう。極りの惡い。」

すると慶造が、傍から差出るやうに、

「これさ、那樣餘所行きの事を言つて居ないで、何か一段聞かしてくれないか。」

「厭ですよ。那樣人前で彈かれるやうなんぢや無いんですよ。」

「と甚く奥床しくするね。那樣事を言はないでさ何か一寸一くさり。」

と尚も押付けやうとする。お夏は目を落して、

「だつて可けないんですもの。」

と微笑みながら、一寸姿態をする。其時敷居越しに、襖の彼方から半身を見せて、

「へい。行つて參りました。」

と廿一二の、色白の、輪廓の如何にも整つた美しい若者、巳之助といふ、慶造の甥で、行く〳〵家を嗣がせる事になつて居るのださうだ。お夏は振返つて逸早く、

「おや。巳之さん。」

巳之助は首を上げて顏を見合せると、笑つて親しげに、

「おゝ、お夏さんでしたか。彼方を向いてお出だつたから誰方かと思ひましたよ。」

「あら然う。なにね、今叔父さんに無理に引張つて來られて本當に困つちまつたの。」

「へえ。何ですか知りませんけれど、お夏さんでなけりやならなかつたので

しやう。」

「あれ、何の事そりやア。」

「はゝゝゝ。何ですか私は參つたばかりで何も解りません。」

と言つて更に私の方に向つて、いつもの丁寧に、

「旦那樣。入らつしやいまし。其後はつい御機嫌も伺ひませんで。」

「むゝ那樣事は要らない事だ。何だね、相變らず達者でいゝね。」

「へい。達者ばかりで何の役にも立ちませんで仕方が有りません。まア何うぞ御緩りと。」

挨拶して直に立たうとした。私は押止めて、

「まア入るが可いぢやないか。久し振だ。何うだ一盃。」

「へい、有難うございますが、御承知の無調法者で…………。」

「だが折角さしたもんだ。一盃位は可いだらう。」

「へい、でございますが。」

と頻りに揉手して、辭退しながらもぢ／＼して居る。と脇から慶造が、

「まア如彼に仰有るのだから、お盃だけ戴くが可い。」

「へい、それでは。」

「はいお酌。」

とお夏は銚子を取つて輕く膝を押向けた。巳之助は膝行出て私の盃を受けた。其時だつた。矢庭に裏口から慌だしく、お夏の家の、小婢の瀧といふのが、鼻緒の緩んだ日和下駄を歩惡くさうに、急がしげな足音を立てゝ臺所へ駈込むと、今不意に旦那が來て、用があるからお夏に直ぐといふ事であるとの意を傳へた。

お京は何事と直に其處へ出て來たが、聞くと笑つて、

「おや然うかえ。御苦勞だつたね。」

と取敢へずお夏に其由を通じた。お夏は怪訝な顏で、

「まア何うしたんだらう。今日は來ないと言つて居たのに。」

と獨語のやうに言つて一寸眉を顰めたが、其儘座を開いて、

「叔父さん。それぢや何ですけれど私御免を蒙りますよ。なにね、譯が解ら

なくつて厳ましいんですからね、全く厄介なんですよ。」

と衣紋を整へると、跡へ退つて華やかな聲で、私を初めて一同へ、

「貴方御免なさいましよ。おッ師匠さん、飛んだお邪魔を。巳之さん、左樣なら。」

と一々愛嬌を零して軈て歸つて行つた。私は此時、何心なく庭の方へ眼を遣つて、前の垣越しに不圖、横に突出て居る隣家の二階を見上げたが思掛けず其處に、見るから顔色を變へて、瞬きもせず此一室を、睨付けて立つて居る者があるので驚いて眼を止めた。

庭が狹いので、其處まで彼是三間ばかり、手摺に近く立つて居る、只ならぬ面の色は鮮やかに見えた。赭顔の、那方かと言へば瘠せた方の、眼の落込んだ、額の深く拔上つた老人であつた、何かは知らず殆んど我を忘れたやうに、口を緊しく一文字に、屹と此方を見下した、其眼のさながら精神病者のやうな物凄じさには一目見た時思はず息を引いた位であつた。私は慶造の袂を引いて、

「おい、あの老人が談話の其隱居といふのかい。」

「ヘッ、何處にッ……」

と慶造は例の高調子。首を差出して見上げた途端、彼方も流石に氣が付たと見えて、衝と身を返して中へ引込んで了つた。矢張其隱居であつた。お夏の未だ此方に居た時分から、彼處でぢッと見て居たらしい。

私は其眼色を、今も忘られぬやうな心持がする。

（二一）

其日の殆んど言ふにも足らぬ事が、勿論何うならうとも私は思ひもしなかつたが、四五日過ぎて慶造が、註文した軸物を持込んで來た時、不意と其談話が出ると、慶造は打付けに、

「いや最う何うの恁うのツて、お談話にならないやうな事から飛んでもない騒ぎになつて了つたんで。

彼の日何ですよ、旦那樣がお歸りになつてから、私は茶の間の此方の四疊半で、商賣物に少し手入れする物が有りましてね、怪しい手細工の繕ひをして居ますと、御承知の通り彼の部屋は隣家の二階の直ぐ下になつて居ります。別に立聞きをしたのぢやありませんが、上の談話が手に取るやうに聞えますから、此方で仕事しながら、其處に居る隱居とお夏の談話をいつか聞いて居ました。酒が始まつた樣子で、隱居は何か連りと跡から跡から呷付けて居るやうなんです。

「まア、那樣に飮つちや毒ぢやありませんか、いゝ加減になさいよ。跡で苦し

くなつたつて私知りませんよ。」
とお夏が止めて居るんです。隱居は少し角が立つた口吻で、
「可いやな。飮みたいから飮むんだ。變に指圖がましい事をするない。」
「あら、貴方は本當に今日は何うかして居るよ。」
「何うするものかい。見て居る通りだ。おい酒だッて言ふのに。」
「最うお止しなさいよ本當に。」
「ちよッ、默つて持つて來い。」
「まア、何うしたんですよ貴方は。今日に限つて可笑しいぢやありませんか。全體那樣に飮れもしないのに、最ういつもの倍も飮つて居ますよ。些少は身體を大事におしなさいよ。私だつて共難義だわ。」
「ふむ、それほど此方の爲を思つてくれる者が、まさかに俺に言譯のないやうな事はしやしまいな。」
「えッ、何を仰有るの。」
「恍けるなよ。」

「あれ、何だか知らないが判然言つて下さいよ。私にや薩張譯が解らないわ。」

「解らないもないもんだ。現在俺が見て居たのだ。此間も然うだ。今日も然うだ。いゝ加減人を馬鹿にするが可い。」

「まア、何だらう、思ひも付かない事を。全で見當が付きやしない。何ですかまア言つて見て下さらなけりや私には解りませんよ。私ア這麼うッかりですから、何かそりやア氣に障つた事が有るかも知れませんけれど、全ッきり覺えもない事を言はれて、痛くもない腹を探られるのは、餘りいゝ心持はしませんからね。」

「むゝ能く言つた。其口上を忘れるな。」

「忘れなけりや何うしたのです。さア、今の事を言つて御覽なさい。」

と、お夏も少し逆上せて來た樣子なんです。隱居は何かせゝら笑つたやうで、

「お前も顏に似合はない好い度胸だな。おいお前は隣家の巳之助ッて言ふ若い男を知つて居るだらうな。」

「はア、知つて居ます。彼の人が何うしたんです。」

「お前は此間も俺の目を忍んで、何處へ行つたのか彼の男と一處に、夜だから知れないだらうと思つて居たらうが、二人でぢやらくらして歩いて居た。」

お夏は怫然とした調子で、

「人を、面白くもない。又それですか、本當に厭になつて了ふ。貴方も根氣よく何時までも捌けないのね。彼の時も那麼に言譯をしたぢやありませんか。なんぼ何でも最う解つて居ておくれだらうと思つて居たのに、又蒸返して那樣事を。尤もこればかりには限らないけれど、貴方は恁ういふ事に掛けると本當に解らないのね。仕方がないから最う一遍言つて上げますがね。彼の時や紺屋へ誂物に行つた歸りで、途で巳之さんに不意に遇つたんですよ。同じ路だから一處に歸つて來たゞけで、何處を何う御覽なすつたか知りませんけれど、指頭んばかりも兎や角う言はれるやうな覺えは有りやしません。人聞きの惡い目を忍んでだの、ぢやらくらしてだのと、いくら口が自由だかつて、御自分の手前にもお嗜みなさい、然う〳〵默つて聞いちや居ませんよ。」

「おい、そればかりぢやないぞ。」

「え、何ですつて。」
「今日の彼の態は何だい。」
「態とは、甚麼態をしましたえ。」
「お夏、俺は慥か、今日は此方へ來ないと言つたなア。」
「はア、それが何うしました。」
「不意に遣つて來て氣の毒な事をしたな。」
「おや、又變な事を、那樣廻りツくどい言ひやうは止しにして下さい。私も相應に癇が有りますからね。これでも隨分虫を押へて居るんですよ。何も彼も平ッたく言つて戴きましやう。今日不意にお出になつたのが何うしたといふのですえ。」
「むゝ、何とでも言へ。俺が今日來ないといふのを幸ひに、お前は隣家へ遊びに行つて居たな。」
「行つたのが惡うございましたかえ。」
「可いか惡いか知らないけれど、隣家には逢ひたい人が居るんだ。」

「え。」

「おい、先刻俺が此方へ來た時、隣家の座敷でお前が酌をして遣つたのは誰だい。俺は此處から何も彼も見て居たぞ。へッ、一寸離れりや直にこれだ。目の屆かない處ぢや、何をして居るか知れたもんぢやない。」

お夏は思掛けなかつたんで噴飯して了つたんです。私もつい噴飯しましたが、聲を立てちや氣の毒と思つたので、ぐいと息を呑んで居ると、お夏は又も笑立てゝ、

「おほゝゝゝ、本當に呆返つて物が言はれないわ。貴方まア本氣に那樣事を言つて居らつしやるの。串戲ぢや有りませんよ、外聞が惡いぢや有りませんか。思出しても可笑しくなるわ。おほゝゝゝ、貴方本當に何うなすつたのですねえ。」

處が隱居の方ぢや大眞面目なんです。瞧目が据つて居たらうと思ふのです。彼の目が据られた日には堪りませんがね、で恁う言ふんです。

「何だ、笑ひ事ぢやない。人を馬鹿にするな。」

「最うお止しなさいよ。本氣にして聞いちや居られやしません。這麼まア解り切つた事を、おほゝゝ私未だ可笑しいわ。」

「何が可笑しい。へん、氣の毒だが笑ひこかしにされちや了はないぞ。」

と、これが始りなんです。さアそれから捏るの何のつて聞いて居ながらも堪らないほど解らなくなつて來るんです。お夏が有の儘に彼の時の事を少しも包まずに言つて聞かしても、全で腹に入らないやうなんです。何でも巳之助と譯が有るやうに、勘ぐつて居るんですね。なに貴方全で跡方も有りやしないので、私と違つて巳之助は、彼奴親讓りで其方は馬鹿に又堅いんで、口でこそ串戯は言ひますが、一向其方へは見向きもしません。惡い事に樣子が彼の御承知の通りですし、皮が一寸剝けて居ますからね、甚介一方に固まつた隱居の眼には、甚麼に見えるか知れはしませんが、何しろ其時の持つて廻した隱居の言立ッてものは、我慢にも聞いて居られない位で、私もよしや這麼ちやないと思つて居ましたが、あれにや實に呆れて了ひましたよ。

お夏は併し、ぢッと胸を擦つて、其中でも機嫌を直させやうとして、種々〱と梶を

取つて居るのです。隱居もそりやア、好くする方には一寸並の人には出來ないやうな事もして、自分の身から親元の方まで、其處だけは餘程行屆いた始末がしてあるのですから、那樣義理からも氣を盡して居るんですが、全く彼の隱居には些少過ぎて居ますね。なに、あの縹致で、あの腕で、あの氣前で、出る處へ出て御覽なさい。それこそ大したものですわ。那麼爺樣の、根の盡きる相手なんぞをして居ないでも、何處までだつて伸せるんです。馬鹿々々しいぢやありませんか。私は聞いて居て何だか可哀相になつて來ました。

隱居は虐り盡して、今度は愚痴を並べて來るんです。

「お前は俺を何とも思つてくれない。俺はこれでも隨分とお前には盡して居る積りだ。望む事は何でも聞いて遣る。見たいものは見せて遣る。着たいものは着せて遣る。行たい處へは連れて行く。俺に出來るだけの事は何一つ爲て遣らないものは無いと思つて居る。恩に着せるぢやないが、頭の頂上から足の爪先まで、言はゞ俺の世話になつて居るのだ。お前の爲にはお前の親達にも相應に手を貸して遣つて居る。時には隨分無理な願ひも聞いて

遣つて居るのだ。お前もまア若い身空で、這麽年寄の面倒を見てくれるのだと思ふから、お前の事に付いては、俺の目を瞑つた後までも考へて、一生氣樂に過して行かれるやうな取置も實はしてあるのだ。俺の心は未だお前には解らないのか。」

と、何か急にしんみりとして來た。お夏は聞くまでもなく、

「何ですねえ今更那樣事を。解るも解らないも有りやしません。今日は何だか厭な談話ばかりでくさ〳〵して了ふ。最う何も濟んだ事にし了つて氣を變へて些少陽氣にしやうぢやありませんか。あら未だ那麽顔をして居らつしやるよ。困つちまふわねえ。」

「お夏、何故然うなんだ。俺が今言つた事は解らないのかい。」

「だからさア。ちよッ、焦れッたいねえ。」

「な、何が焦れッたいのだ。」

「お察しなさいな。私だッてほッとするわね。先刻からまア解り切つた事を、只あゝ言つたりかう言つたりして居るんだもの。貴方見たやうな人は有

りやしないわ。いくら勉めたつて本當に仕樣がありやしない。今日は又其中にも甚いんだもの。つく〴〵厭になつちまふわ。」
と持て餘して投出し氣味になつた。隱居は退屈もせず、
「なに、何と言つた。最う一遍言つて見ろ。」
「あら、又蒔直しなの。私最う知らないから可い。」
「お夏、俺は本氣で言つて居るんだ。何故お前は思ふやうにないのだらうな。」
「だつて私ア言ふ事は言つて了つたし。お肚にや最う何もないんですもの。此上何う仕樣も有りやしないわ。貴方私の惡い處が有るなら謝罪りますから、ね、最う勘忍しておくんなさいよ。あれさ、私一人ぢや笑へないぢや有りませんか。あゝ、這麼時にや家に居ない方が可いわ。一寸貴方、何處かへ行つて見ましやうよ。」
「勝手にしろい。」
それなり寂として、双方暫く默然で居ましたが、不意にお夏の疳走つた聲で、
「あゝ厭だ！」

といきなり座を立つた樣子。すると直ぐ隱居の聲で、

「これ、何處へ行く。」

「何處へ行つたつて可いぢや有りませんか、お離しなさいよ。」

「待て。行くなら行くで片を付けて行け。」

「貴方のやうな人に片の付けやうは有りやしませんよ。今日に始つた事ぢやないけれど、私最う辛抱が仕切れないから事に依つたらこれでお別れにしますよ。」

隱居の此時の聲は全で其人とは思へませんでした。とんと跳上りでもしたやうに、

「な、な、何だと。」

お夏は却つて落付いて、

「最う言ふ事は有りません。左樣なら。」

此方から見えないのですから解りませんが、言ふなり袂を振拂つて、つゝッと階子段の方へ行つたやうでした。隱居は夢中になつて突立つたやうで。其

處へ飛出して行つて又捉まへたんですな。何か急込んだ、吃つたやうな調子で、

「待て、言ふ事がある。」

お夏は突離すやうに一聲。

「知りませんよ。」

「ま、ま、待てといふのに。」

「ちよッ、五月蠅いッ。」

二三度其處で揉合つて居ましたが、びりゝと袂の綻びたやうな音がしたかと思ふと、さらりと障子が開いて廊下をとん〳〵と軈て、一足階子段へ掛つた途端、機勢を打つて踏外したと見えて、あッ、と言つた聲と一處に、恐ろしい物音を立てゝ下へ落ちたんです。

何しろ一時に、がら〳〵ッ、どしん、ばたり、きやアッと來たんでしやう。や、と思ふと、うーむといふ、さも苦しさうな唸聲が聞えたんです。すると上から、何か慌てたやうに、

「お夏、お夏、ど、何うしたのだ　えッ、何うしたのだ。」

しどろになつて、どん〳〵〳〵ッと下へ駈降りて來た樣子。

「お夏、お夏。」

とおど〳〵して呼んで居るんです。何でも只事ぢやないのでしやう。其中に女中も駈付けて來たやうで、何だかわや〳〵と、甚く騒いで居るやうなんです。默つちや居られませんから、急いで家内を呼んで手短かに、樣子を話して直に出して遣りました。

聞くと階子段から、振拂つて降りやうとする拍手に、足を辷らして下へ落ちたんださうで、何でも中段位から撥飛されて横手の障子を突破つて、どッと下へ行つたさうですが、機勢といふものは恐ろしいもんで、上から突破つた障子の、棧が壞れて縱に恁う削げたんですが、其奴で運を惡くぐさと咽を突通したんです。

お京が行つた時には最う虫の息で、其處等血だらけの中で、隱居は只顛動して了つて談話も能く解らないやうな事で、女中はうろ〳〵と、どう〳〵廻りをし

て居るといふ仕末なんでしやう。取敢へずまア醫者を呼んで、直に手當をして貰つたんですが、何分突き處が惡かつたんで、到頭貴方助からないぢやありませんか。

まさかに那樣事にならうとは思ひもしませんでしたから、それと聞いた時には二の句がつけらいやうな心持がしましたが、一寸先は實に解らないもんですな。何しろ飛んだ可哀相な事をして了ひましたよ。彼の日旦那樣と、座敷で一座したのがお名殘になつたんですが、何うです彼の水々しい、咲いたばかりの花のやうだつたのが、最う貴方此世に居ないんだらうと思へるでしやうか。」

と言葉の終りには、いつもの慶造にも似合はぬ言はれぬ物佗しげな影が、年の頬に揉まれてめげぬ額を、時に曇らせて見せた。

「隱居は何うした。」

と聞くと、

「隱居は取逆上せたと見えて、それから此方、樣子が變なんです。初めは只其事から愚に返つたんだと思つて居ましたが、段々取止めもない事を言出した

り、途拍子もない事を仕出して來ましたので、到頭氣の觸れたのが解つたんですが、何處か變つた處へ行つて暫く紛らせるやうにでもしたらといふので、今日あたり誰かゞ伴いて何處とかの温泉場へ連れて行くといふ談話でした。」

慶造の談話を聞いて、私は兎も角其當人を見た事があるので、七十近くもなつて、初めて戀の火に身を燒かれた老人と、生若い身を墓にして、思はぬ年上の人に弔はれるお夏の影が、流石に眼の前に浮ぶやうに思ふと、何かは知らず、二人を通して、人の世の不調子の跡が妙に忍ばれるやうな心持がした。 さながら天品のやうな彼の時の絃の音は未だ耳に殘つて、次いで二階から見下した、隱居の凄ましげな眼の光を未だ忘れずに居るが、私は併し忙しい身體で、病氣の回復すると共に、其等の事を長く追想して居る事が出來なかつた。

喜劇 仙臺平

（一） 相川家令孃居間

上手縁傳ひに、孃様附きの女中お鳥、急がはしげに、ばた〳〵と來て、

お鳥「もし、お孃様、お孃様。」

と、立止つて、一寸考へ、

お鳥「おや、居らつしやらないのか知ら。」

と、四邊を見廻し、伸上つて、向ふに不圖、人の影を見付けた態、衝と出て聲高に、

お鳥「一寸と佐吉さん。其方にお孃様は居らつしやらないかえ。」

聞えず。返事が無いので、舌打しながら、ぢれッたさうに跡足でとんと縁を一つ。

お鳥「あれサ、佐吉さんッてば、」

此時下手、庭越しにぬつと、此家の抱車夫佐吉只唯て、顔を突出すと、

佐吉「何だ、呼んだのかい。」

お鳥「ちよッ、呼んだのかいもないもんだ。お前さんは耳を何處へ付けて居るんだよ。」

佐吉笑ひながら、

佐吉「矢張り面の兩脇へ付けて居るがね。」

お鳥「え〻、此人は！」

佐吉「どッこい。落こちるせ、危ない、は〻〻〻。其體軀でドシンと來た日にや氣の弱い土龍は目を廻して了ふぜ。」

お鳥「ちよッ、何とでも言ふが可い。お氣の毒さま、これでも好いと言ふ人が有るんだよ。」

佐吉「む〻、然うだらう、世間にや隨分茶人も有るもんだからね。廢りは無いもんだよねえ。」

お鳥「畜生ッ、言はせて置けば好い氣になつて……………え〻口惜しい。」

佐吉「はゝゝゝ、お前の怒つた面は丸で笑つて居るやうだぜ。よくもまア然うとぼけて出來たもんだね。」

お島「知るもんかい、一人で勝手に饒舌つて居るが可い。」

と、くるり身を返しびんしやんして行かうとする。佐吉、猶も笑ひながら一足前へ踏出して、

佐吉「おい〳〵人を呼んで置いて何うしたんだい。」

お島「最う那樣奴に誰が聞くもんかい用はないよ。さつさと行つてお了ひ。此處はお前なんぞの來る處ぢやないよ。」

佐吉「ヘッ、何の事だい、それぢやお前、丸で面の棚下しをされに呼んだやうなもんぢやないか。」

お島「ちよッ、未だ行かないのかねえ。五月蠅いッちやありやしない。」

佐吉「はゝ、些少は又五月蠅からうよ。然うでもなくつて此處まで徒勞足をした埋合せが付くもんかな。頼むぜ、色女！」

お島「知らないッてば煩縟い！」

佐吉「よう、其つんとした後姿が無類だ。いゝなア、癖ッ毛の坊主衿づんぐり肩のぶッくり脊中、何處の親だか知らないが、よくも恁う生付けたもんだよ首が象で、胴が豚で、腹が狸で、腰が熊だ。何の事はない動物園を一人で脊負つて立つてるんだね。」

お鳥「えゝッ、こ、この人は最う………。」

佐吉「おッと、此方を向いたな。やア、おまけに面が猿と來て居る。啼く聲鵺に似たりけりッ。」

お鳥「ち、畜生！ 覺えて居るが可い。」

佐吉「はゝゝ、いや惡い事は言はないがね、這麼お前奉公なんぞして居るよりは見世物に出る方が餘程可い。なに藝も何も要るもんかな、ぬうッと其面を出しさへすりや澤山だ。全體人並に着物を着て髷を結つて居るから何うか恁うかまア人間らしくも見えるんだが裸になつて其處へ飛出して見るが可い、誰しも化物と思はないものは有りやしない。」

お鳥「た、澤山だい最う。きり〳〵行つて了はないかい。」

佐吉「行かなくつてよ。頼まれたつて那様化物の傍に、いつまで長居が出來るもんかい、あばよ。追付け見世物小屋でお目に掛らうぜ。はゝゝゝ。」

と調戯ひ抜いて笑ひながら引込む。お鳥立ちつ居つ、無念の擧止。

お鳥「えゝ腹の立つ。何うして遣つたら……、口惜しいッ。口惜しい口惜しいッ。」

此時上手、同じく緣傳ひに、令孃美津子衝と來て部屋へ入らうとして、お鳥を見付け、驅寄るやうにして傍へ來る。

美津「おやお前、此處に居たのかえ。」

お鳥「あらまア、お孃樣。」

美津「私やお前を搜して居たのだよ。」

お鳥「あれまア、私も貴孃を搜して居たのですわ。」

美津「おや然うなの。まアお前聞いておくれよ。私最う口惜しくッて口惜しくッて…………。」

お鳥「お孃樣私も最う口惜しくッて口惜しくッて。」

美津「本當に最う、何うしたら可いかと思ふわ。」
お鳥「私も本當に、最う〳〵何うしたら可いかと思ひますわ。」
美津「私寧その事、最う死んで了はうかと思ふわ。」
お鳥「私も寧その事、最う死んで了つた方が可いと思ひますわ。」
美津「あらお前は人の口眞似ばかりして居るぢやないかね。」
お鳥「でも全く仰有る通りなんですもの。」
美津「おや、それぢやお前最う知つて居るのかえ。」
お鳥「知つて居るッて私の事ぢやありませんか。」
美津「まアお前は那樣にも私の事を思つてくれるの。」
　お鳥氣が付いて急に顔を見上げ、
お鳥「えッ、貴孃の事と言つて何でございますの。」
美津「あれまアそれぢやお前知らないのかえ。」
お鳥「え、全體何のお談話でございますの。」
美津「まア厭な、何にも知らないで何を那麽に口惜がつてくれたの。」

お島「いゝえ、あれは私の事でございますよ。」
美津「お前の事ッて何うしたのさ。」
お島「聞いて下さい。あの佐吉の奴が、私の事を化物だといふぢやありませんか。」
美津「まアそれだけの事かえ。化物位何でもないぢやないかね。」
お島「あれ那様事を仰有つたつて化物位情けない事は有りはしませんわ。私化物なら最う、一思ひに死んで了つた方が餘ッ程可うございます。惡く言ふのに事を缺いて、化物なんぞつて言はなくつたつて……。」
美津「あれさお泣きでないよ。佐吉は人が惡いから態と厭がらせに那様事を言つたんだわね。お前は化物處ぢやありやアしない。誰が見たつてそりやアいゝ女だわ。」
お島「え、」
美津「見て居るほど惚れ〴〵するわ。」
お島「あらまア、」

美津「何處へ行つたつて全く引けを取りやアしないわ。」
お島「まア、何うしませう。おほゝゝゝ。」
美津「あら厭だ。何だつて那樣氣味の惡い聲を出すの。」
お島「でもつい何なんですもの。」
美津「何さア。」
お島「何でも可うございますよ。那樣事を仰有ると耻かしくなりますわ。」
美津「そんならまア、その方はそれで可いとして、今度は私の方の談話を聞いておくれかえ。」
お島「はい／＼それは最う何でも承はりますわ。おや私肝心な事を言ふのをすつかり忘れて居ました。私實は先刻からお嬢樣を搜して居たのですよ。」
美津「あれ何だねえ。今になつて又那樣事を。まア何の用なの。」
お島「お嬢樣、貴孃お悦びなさいましよ。」
美津「あれ、私は悦ぶ處ぢやありやアしないわ。」

お島「那樣事を仰有つても今、奥に梅浦樣の若旦那が來て居らつしやるのを御存じなんでせう。」

美津「知らなくつてさ。那樣事は疾うに知つて居るわ。」

お島「あらまア御存じなのですか。でも彼方で今甚麼お談話をなすつて居らつしやるか、まさかにそれは御存じぢやないでせう。」

美津「知らなくつてさ。」

お島「まアそれまで御存じなのですか。それぢや何うしたつてお悦びなさらなけりやならない筈ぢやございませんか。」

美津「人を馬鹿におしでない。何處に悅ぶ事があるものかね。」

お島「おや、」

美津「言はなくつたつて知れた事ぢやないか。お前はまア何と思つて那樣事を言ふんだねえ。」

お島「まア〳〵本當に何うしたといふのでございませう。」

美津「何うも恁うも有るものかね。私が今しがた那麼に口惜しがつたのが解

らないのかい。」

お島「まア一寸お待ちなすつて下さいまし。でも彼方のお談話は御縁談でせう。」

美津「縁談は縁談さ。」

お島「御縁談なら決つて居るぢやございませんか。矢張しお孃様と若旦那と…………。」

美津「えゝまア此人は何を恍惚けた事を言つて居るのだねえ。」

お島「あれ何が恍惚けた事でせう。這麼恍惚けない事は有りはしませんわ。」

美津「焦躁ッたい最う。お前のやうな人を相手にして居ると、腹ばかり立つて仕様が有りやしない。今彼方で阿母様が話して居らつしやるのは若旦那に橋渡しをして貰つて、お友達の狹山さんといふ方を私のお婿様にしやうといふのだよ。」

お島「えゝッ、」

美津「私今襖の陰で、何も彼も聞いて了つたのだよ。私のお腹の中は何うだつ

たらう。然うと聞けばお前だつて、些少は察してくれるだらうね。」

お鳥「はい、それは最う甚麼にもお察し申しますけれど、何かのそりやツお間違ひなんぢやないのですか。」

美津「だつてお前、瞭然終局まで聞いたんだもの。」

お鳥「まア何うして那樣事になつたのでせう。それにしたつて若旦那が那樣お賴みをお引受けなさる事は有りはしませんよ。」

美津「いゝえそれならば未だしもなんだけれど、まア何ういふ了簡でお居でだか、若旦那は二つ返事で引受けてお了ひなすつたらうぢやないか。」

お鳥「まア何うして又」

美津「いゝえ、それも最う私には解つて居るよ。」

お鳥「あら何でございますの。」

幹雄「私はね、最う飽きられて了つたのだよ。」

と顏に袖を押當てゝさめ〴〵と泣く。お鳥躍起となつて調子高に、

お鳥「まア何でございますね。そ、那樣事があつて何うなるものですか。私若

旦那をお連申して參りますから、仰有られるだけ思入れ言つてお上げなさいまし。」

と立掛けやうとする。途端に奥の襖を押開けて、梅浦幹雄、

幹雄「ヤ、此方に居たのか。」

お鳥「おや入らつしやいましたよ、若旦那が。」

美津子物も言はず拗返つて、矢庭に背後を向いてつんとする。幹雄訝かしげに、

幹雄「何だ。何うしたのだい。」

美津子默つて居る。お鳥脇から甲高に、

お鳥「若旦那！」

幹雄「ヤツ、」

と驚く。お鳥疊を叩いて詰寄りながら、

お鳥「もし若旦那、貴方は何といふお方ですよ。」

幹雄「ヤツ、驚くね突如に。何だ、何といふお方とは何の事たい。知らなきや聞

かして遣らうが、俺は梅浦幹雄といふお方だよ。」
お鳥「えゝ、那樣事を伺つてるのぢやありやしませんよ。」
幹雄「むゝぢや何を聞いて居るのだい。」
お鳥「何をぢやありやしません。本當に貴方といふお方は、」
幹雄「おッと又始まつたな。むゝそれから、」
お鳥「憎らしい、何といふ落付きやうをして居らつしやるのでせう。貴方今彼方で何を話して居らつしやいましたよ。」
幹雄「はゝゝ彼の事かい。」
お鳥「えゝ笑ひ事ですかよ。本當に呆返つて物が言はれませんわ。」
幹雄「結構だね。お前が物を言はないと全く助かるよ。」
お鳥「おや何故でございます。」
幹雄「第一養生になる。お前の聲を聞くと壽命が縮まるよ。彼の何うも何とも譬へやうのない貉と家鴨の喧嘩をして居るやうな聲にや、實に降參するからね。」

お鳥「はい私は何うせ務でございます。

幹雄「むゝ、漸つと氣が付いたかい。」

お鳥「はい、家鴨でございます。」

幹雄「彼奴も喰つちやァ味美いがね。」

　お鳥突如にわッと泣出す。

お鳥「口惜しいッ、口惜しいッ、あゝ口惜しい。お孃樣、もしお孃樣ッ、ど何うぞ此仇をお取りなすつて下さいまし。なんぼ何でも餘りでございます。あ、餘りと言へば餘りでございます。」

　幹雄態とらしく顏を振向け、

幹雄「おゝ、美津子さん、其處に居たのか。」

　美津子返事もせず、いよ〳〵つんとする。

幹雄「はてな、未だ聾になる年ぢやないが、」

　と近寄つて聲を高く、

幹雄「おい、美津子さん。」

美津子未だ默つて居る。お鳥思出して又わーッと泣く。幹雄態と吃驚した擧止。身を開いて、

幹雄「ヤッ、客作るぢやないか。其變梃な泣聲は願下げにしやう。貉と家鴨は取消すよ。なにさ、串戲だから最う勘辨するさ。處で美津子だがね、全體何うしたといふのだい。」

お鳥「存じませんよ。」

幹雄「ヤア、」

お鳥「知るもんですか。ねえお孃樣。」

美津「然うとも、誰がねえ。」

お鳥「最う這麼お方を振向いても御覽なさいますな。」

美津「あゝ、最う見やうとも思やしないわ。」

幹雄笑ひながら、

幹雄「ヤッ、こりやア事だぞ。」

お鳥「本當に、何うして這麼平氣なお顏をして居られるでせう。私も這麼お方

とは全く思ひませんでしたよ。」
美津「私もまさかと思つて居たけれど、最う那樣事を言つても仕方がない。本當に何うしたら可からうね。」
お島「貴方構やしませんから、何でもお腹の癒えるやうな事をなさいまし。」
美津「だつて何をしたつてお腹が癒えるものかね。」
幹雄「はゝア、察する所鳥の奴彼方の談話を立聞きして、惡く美津子を焚付けたのだな。」
美津子くるりと向直る。詰寄りさまに、
美津「いゝえ、お談話を聞いたのは私ですよ。はい、私が直にお聞申したのですよ。」
幹雄「然うか、それぢや尚更だ。」
美津「まア、何が尚更ですよ。」
幹雄落付いて態と、
幹雄「お聞きの通りの始末だからね。」

美津子呆れた擧止。振返つて、

美津「お鳥お聞きかい。」

お鳥「聞いて居りますとも。お孃樣、貴方が甚麼に思召したつて、彼方に脈は最うございませんよ。」

美津子幹雄を見、俄に改まつて、

美津「もし貴方、梅浦さん。」

幹雄「梅浦さんと來たね。お前が私の苗字を呼んだのは、生れて恐らく初めてだらう。」

美津「はい、初めてゞございます。呼ぶには呼ぶだけの事があるからでございます。」

幹雄「むゝ、そこで、」

美津「貴方の本當のお心を承はりませう、何うぞ解るやうに明瞭仰有つて下さいまし。私にも私だけの了簡がございます。」

幹雄「よう、大分むづかしいね。其眼頭の段々上つて、次第に口元が締つて來た

處を見ると、成程南瓜を食ひたいといふ時の顏ぢやない。」

美津「貴方、串戲ではありませんよ。」

幹雄「何うか那樣やうな御樣子だね。宜しい、それぢや一つ豪勢氣取つて物語らんと座を構へやうかい。よしかね私の友人に狹山新一といふ一寸話せる男がある。」

美津「あれ、其お談話は最う彼方で何も彼も伺ひましたよ。私のお聞申すのは那樣事ぢや有りやしませんよ。」

幹雄「それぢや何を聞くのだ。」

美津「あゝ焦躁ッたい。貴方は本當に私を何うしやうと思つて居らつしやるのですよ。」

幹雄「そりやア私の胸にあるよ。羽織の紐で胸にある。角兵衞の太皷で胸にある。お前の乳房で胸にある。何處まで行つても同じ事だ。」

美津「貴方那樣事ばかり言つて居らつしやらないで、後生ですから本當の事を聞かせて下さい。私先刻から最う氣が狂ふやうになつて居るぢやあり

ませんか。」

幹雄「はゝゝ、私が付いて居るよ。」

美津「貴方が付いてりや何うなるのです。」

幹雄「明後日それとなし見合ひをするのさ。可ければ何れお嫁になるのさ。」

美津「えゝッ、」

幹雄「何も不思議は有りやしない。お前が惡く羞かしがつて、厭に片付ける處を見て遣りたいのだ。其氣で今ッから、精々まア艶飾して置くが可いさ。」

お鳥むきになつて前へ出る。

お鳥「もし、若旦那樣。」

幹雄「ヤッ、又這出して來たな。お前はまア引込んで彼方で雜巾でも刺して居なよ。全體お前なんぞは餡の中からでなけりや出て來る譯のもんぢやないんだ。」

お鳥「えゝ、それ處ですかよ。もし、今お嬢樣に仰有つたのはありや本氣ですかよ。」

幹雄「はゝゝ解らないかい。」
お島「解りませんとも。」
幹雄「ふむ、解らなけりや煤掃まで待つて居るさ。」
美津子恷切れず、矢庭に身を戰はして幹雄に取つて掛かる。
美津「えゝ、貴方といふお方は…………。」
幹雄「ヤア、」
美津「最う〳〵何うしたら…………。本當に、本當に〳〵、本當に〳〵…………。」
と取付いて力任せに小突廻す。
幹雄「ヤッ、どッこい。痛いぞ、此奴は。澤山ッ。待つた。謝罪る。何うも、何分こりや堪らない。一寸々々、一寸待つてくれ。」
美津「えゝ知るものですかよ。貴方は、貴方は、貴方ッて方はッ…………。」
幹雄「ま、待つてくれ。せめて一言だけ助けてくれ。」
美津「誰が人を……　……。思出すほどえゝ口惜しいッ。」
幹雄「ヤッ、衣服が切れるぢやないか。」

美津「衣服位何ですよ。」

幹雄「い…………息が詰る。」

美津「知れた事ですわ。」

幹雄「あッ、目、目が眩む。」

美津「えゝ、何うしたつて最う…………。」

幹雄「ヤッ、助け舟えーッ。」

お鳥勇立つてぞくぞくと、

お鳥「おほゝゝゝ、いゝ氣味だ事。お孃樣お負けなさいますな。」

幹雄「鳥公、鳥公。何うかしてくれ。」

お鳥「お氣の毒樣。貉の恨みを覺えて居らつしやい。這麼事で濟みやしませんよ。お孃樣思切つて虐拔いてお上げなさいよ。那樣事ぢや手緩くつて仕樣が有りません。恁うするんですよ。待つて居らつしやいまし。」

と奥へ驅込むと聽て、向鉢卷、紅襷、手頃の半棒を引摑んで引返して來る。

お鳥「お退きなさいまし、お孃樣。これで思ふさま打据ゑて上げます。はい、田

舍に居ました時分、鍬で狸を打殺した覺えが有ります。さア退いて下さい。殺さないまでも不具にして上げませう。」

幹雄「ヤア、ヤア、た、大變な事に成及んだぞ。」

お島「若旦那樣覺悟をなさいまし。」

幹雄「ヤア、」

と驚く。美津子振向いて見上ると、吃驚して思はず幹雄に取付いて居た手を離し、

美津「まアお前何をするの。」

お島「殺して了ひます、若旦那を。」

美津「あれ、まア、そ那樣お前…………。」

幹雄「大變ッ、それ逃げろ／＼。」

お島「に、逃がすものかッ。」

美津「あれ、まア、待つて。」

「えゝ、お離しなさいッ。」

幹雄「それッ、此の間だぞ。間一髪かい。桑原々々、桑原ッ。」

と追ふ、逃げる、止める、振離す。ごた〴〵の見得。一廻りして幕。

（二）狹山新一住居

正面瀟洒なる書齋。新一机を離れて幹雄と對坐の見得。恰も今談話半ば、

幹雄「時に新參事官！」

新一「何だ。厭な呼び方をするな。」

幹雄「併しそれには違ひなからう。假初にもお役人樣だ。僕のやうな銀行屋の小僧とは臺が違ふ。」

新一「何が違ふものか。君でもない馬鹿な事を言ふぢやないか。」

幹雄「第一太刀打ちの出來ないのは、僕と同じ次男ぢやあるけれど、田舍ぢや近國に肩を比べるものもない豪家といふのだ。君の兵站部の無盡藏なのは、僕等のとても及ぶ所でない。金があつて男が好くつて才がある。これぢや誰しも參らうぢやないか。」

新一「何だ。一體何うしたのだい。」

幹雄「はゝゝゝゝ、と先づ煽動てゝ置いてから、徐ろに本題に入るのだ。」

新一「はゝゝ、大方那樣事だらうと思つた。君に褒められるのは運の盡だよ。」

幹雄「何故。」

新一「直ぐ其跡で、何か乾度脊負はせられる。處で何だね、今日の御用は。」

幹雄「待ちたまへ。穩かでない事を言ふぢやないか。折角好意を拂つて遣つても、それぢや全で徒勞になる。」

新一「解つた、好意は敢て謝すとする。早く本題に入らうぢやないか。」

幹雄「むゝ、辯解はまア跡廻しにして、手短に用を先へ話さう。聞きたまへ、僕に一人の叔母がある。例の渡邊の綱以來、叔母と腕には緣があると見えて、此又叔母も大に僕の片腕になる。」

新一「むゝ、それで、」

幹雄「此叔母に一人娘がある。今歲十九で、絕世の美人だ。」

新一「むゝ、然ういふ談話か、其美人をくれさうといふのか。いや、然ういふ談話なら大に聞きやうがある。」

幹雄「失策つた。此奴は可かんぞ。」

新二「可かん事があるものか。美人大に可い。僕は先達から美人を探して居る。」

幹事「ヤ、ます〳〵可かんぞ。なに〳〵何だよ、其女は實は非常な醜婦なんだ。」

新二「なに醜婦！」

幹事「醜婦、大醜婦、二目と實は見られないのだ。」

新二「怪訝しいな。たつた今君は絶世の美人だと言つたぢやないか。」

幹事「それがさ、其處に少し都合が有つてね…………。」

新二「變だぜ、都合とは？」

幹事「まア、話すから聞いて行つてくれ。今言つた其の叔母だ。今度不圖した事から君の事を聞いて、然ういふ人を何うか娘の婿にしたいと言ひ出した。」

新二「其二目と見られない醜婦のか」

幹事「むゝ、先づ其邊の事にして置かう。」

新二「何だ其邊の事とは、」

幹雄「其處が此方の苦しい處だ。まアさ、終局まで聞いてくれ。處で叔母は、何しろ君を知らないのだから、公然談話を持つて行く前、一度それとなく逢つても見たいし、娘にも亦見せたいといふ望みで、幸ひ僕が親友といふ處から、何うか其處を都合よく取計つてくれと頼まれたんだ。其間にいろいろ有つたが、結局今日、向島の百花園で、雙方不意に落合つた積りで、それとなしの見合ひをする事になつた。」

新一「おい〳〵僕は未だ承諾も何もしやしないぜ。」

幹雄「處が昨日、先方へは最うちやんと承知したやうに話してある。君も非常に喜んで居ると言つてある。」

新一「えツ、そ、そんな專斷な談話が有るかよ。」

幹雄「有るよ。何しろ此緣談が、出來られた日にや大變だ。此方は初めから打壞す氣で居る。君に今日彼方へ行かれて、若しも叔母の氣に入られちや事だから、勿論落第しさうな替玉を見立てたのだ。」

新一「おい、君！　一人で勝手な事をするな。」

幹雄「可いさ、君と僕との仲だ。少し位は我慢するさ。あのそれ二三日前、君の大人が上京された時、何處へか奉公させるとか言つて、國から連れて來た男が有つたらう。」

新一「むゝあの吾作の事か。」

幹雄「然うだ、あれだ、あの男を今日借りて行く。」

新一「僕の身代りにか。」

幹雄「むゝ、君には些少氣の毒だけれど、」

新一「いや氣の毒よりは、何も那樣替玉騒ぎなどをするにや及ばない談話だ。暇潰しな那樣手數を掛けるよりは、最初に斷りやうはいくらも有らうぢやないか。」

幹雄「そこには種々譯も有る。僕の爲なら君も承知してくれるだらう。」

新一「そりや強ひて君の爲といふなら承知せん事もないが、」

幹雄「おゝ承知してくれたか。それで先づ一安心だ。扨然うなれば話すがね。其娘といふのは實は那樣醜婦ぢやないのだ。」

新一「えッ、」
幹雄「矢張絶世の美人なんだ。」
新一「何だ美人だ。人を馬鹿にするなよ。然う聞きや談話が違つて來る。何も吾作を遣る事はない。僕が行つて見屆けて來やう。
幹雄「待つた、待つてくれ一寸。」
新一「いや、怪しいぞ。君は中で、何か妙に操つて居るな。よし、これから出掛けて行つて正體を見て遣らう。」
幹雄「むゝ、矢張醜婦でなけりや納まらないかい。」
新一「何を言つて居るのだ。」
幹雄「醜婦、醜婦、醜婦だつた。」
新一「なにッ、」
幹雄「漸つと今思出した。」
新一「えゝ馬鹿な事を、」
雄幹「な、なに、慌てゝ實は隣家の令孃と間違へたのだ。」

新二「勝手にするが可い。僕は構はず支度するぞ。」
幹雄「ヤッ、醜婦ばかりぢや最う追付かなくなつた。」
新二「はゝゝ、何を一人で狼狽いて居るのだ。」
幹雄「狭山ッ！」
新二「ふゝ、」
幹雄「狭山君！」
新二「何だ、返事をして居るぢやないか。」
幹雄「いやさ。狭山君！」
新二「煩擾いな、何うしたんだよ。」
幹雄「こゝは何分目を眠つて、默つて吾作を貸してくれ。」
新二「むゝ貸すのは造作はないが、今の談話ぢや貸されないな。」
幹雄「今の談話は取消すよ。」
新二「もとの美人に戻るのか。」
幹雄「なに美人でも何でもない。實は先は女ぢやないのだ。」

新一「ええツ、

幹雄「はゝゝ何だ、其何だ。實は其出來心で一寸色を付けて見たのだ。」

新一「何だと、」

幹雄「正味を言へば何でもないのだ。吾作を一つ雇ひたいといふ人があるから、其處へ、なに、連れて行かうといふだけだ。不思議はないのさ。可からう、さア直に吾作を呼んでくれ。全く良い口だ、探しても一寸無い口だ。吾作の爲に喜んで遣れ。吾作だ。さア吾作を出してくれ。」

新一「はゝゝ、吾作で夢中になつて居る。一人で何か了解んで居るが、僕には薩張解らないよ。」

幹雄「解つて居るぢやないか。これほど解つて居る談話はない。ちよツ焦躁ツたいな。何うしたんだ吾作は。」

新一「吾作は品切れだよ。出直したまへ。」

幹雄「これでも可けなきや腕力だ。」

新一「勝手にするさ。」

と衝と立上る。幹雄慌たゞしく、

幹雄「何處へ行く。」

新一「はゝゝ、なにさ言はれぬ何か事情が有りさうだから、」

幹雄「むゝ、」

新一「安心しろ。何とかして遣らう。」

幹雄「えッ、それぢや頼みを………。」

新一「はゝゝ、何だ其顔は。」

幹雄俄かに勇立つ。新一面白げに打笑ふ。双方思ひ／＼の擧止宜しくあつて道具ぶん廻す。

（三）向島百花園內

正面園內の一部、秋草の盛りを見せた離亭の前、幹雄を上手に並んで狹山の下男吾作、裄丈合はぬ新一の借衣羽織袴の似つかはず、怪しげな判じ者のやうな風體で腰掛けて居る。幹雄時計を見、

幹雄「むゝ、そろ〳〵最う來る時分だ。おい、吾作君。」

吾作「やア、」

幹雄「確かり賴んだぞ。可いかい今言つた事をな。」

吾作「おゝ、請合つたゞ。心配打つでねえ。巧く化して遣るだよ。はゝゝゝだがねえ、小旦那。」

幹雄「それ、小旦那なんて言ふぢやないか。」

吾作「はア今の中は未だ可かんべえ。」

幹雄「可くない。今から馴らして置かないと、つい口に出るからな。」

吾作「然うかね。それぢや何だつけな。然うだ、梅浦くうん！」

幹雄「變な調子だなア。まア可いや、むゝ何だい。」

吾作「ねえもし、外でもねえだが、談話の阿魔ッ子が若し、俺に打惚れて了つたら何うしべえね。俺それが氣懸りだア。」

幹雄「ぷッ、お前にか、はゝゝ。」

吾作「はて、笑ひ事でねえよ。何でも俺を婿にッて事になると、村の俺が阿魔ア只で居ねえだ。首でも縊めておッ死ん了ふだ。やア、こりや這麼事しちや居られねえぞ。小旦那、俺最う此役は斷るだ。人一人の命には替へられねえ。」

と不意に立上つて行掛ける。幹雄驚きながら押止める。

幹雄「待つた。何うしたんだい。今になつて那樣事を言つてくれちや困るぢやないか。何うも串戲だと思つて居ると、これで大眞面目なんだから恐入つて了ふ。おい、大丈夫だよ那樣心配は決して無い、安心しろ。俺が首を賭けて請合つて遣るから可いだらう。」

吾作「然うでねえ、然うでねえだよ。俺これで全體女惚れがする男だからな。」

幹雄「はゝゝゝ、遣切れないな。なにそりやア、村ぢや間違つて女惚れもするだらうが、此地ぢや然ういふのはとんと流行らないからな。」

吾作「うんにや然うでねえ。俺が來た日にや直に流行るだ。」

幹雄「何うも仕末に負へないな。よし俺が付いて居る、決してお前に迷惑は掛けない。何うでもお前の氣の濟むやうに、屹度捌きを付けたら可からう。」

吾作「むゝ、確かだな。」

幹雄「知れた事だ、默つて俺に任せて置け。」

吾作「そんだらまア負けて遣らう。これ其代り若し間違ひが有つたら、いつでもお前樣出て來てくんろよ。」

幹雄「可いよ、解つて居るよ。承知々々、ずんと承知だ。おゝ、それ彼處へ來た、あれが然うだ。」

と下手を指さす、吾作伸上つて見る。

吾作「やア、あれかね。彼の中に居る阿魔ッ子が然うかね。やア、やア、此奴は豪えぞ。」

幹雄「これ、見ッともない。那樣大きな聲を出すなよ。」

　吾作耳にも入れず、夢中になつて前へ出る。

吾作「やア、魂消たよ。何うもこれ、目が眩むやうだア。やア、小旦那々々々。」

幹雄「これ、忘れたか、又それ小旦那と言ふ。」

吾作「おゝ然うだ。梅浦くうん！」

幹雄「はゝゝゝ、那樣餘所行きの聲を出すなよ。」

吾作「いや俺又了簡を變へたよ。」

幹雄「な、何だ。又身代りが厭だと言ふのか。」

吾作「なに、然うぢやねえだよ。これ、あの阿魔ッ子は俺に打惚れるだらう。」

幹雄「えゝ、那樣事は無いといふのに。」

吾作「いや打惚るよ。打惚れなきや又合點しねえだ。」

幹雄「え、そりや何ういふのだ。」

吾作「俺村の阿魔の方は止めにするだ。」

幹雄「はゝゝ、虫の好い談話だ。それ、那樣事を言つて居る中に最う其處へ來た。

シッ／＼、さア、片付けるんだ。

吾作「え、何を、」

幹雄「えゝ、茶碗なんぞを片付けるんぢやない。身體を片付けるんだ。」

吾作「えッ、何處へ、片付けるだね。押入へでも片付けるかね。」

幹雄「ちよッ、解らない。何でも可い、まご／＼しずに落付くんだ。ぷッ、いゝ恰好だ。叔母は定めし驚くだらう。言ふ事が又突拍子も無いのだからな。見立ては見立てたが、恁うまで妙とは思はなかつたよ。」

吾作「やア、一人で何言つてるだア。」

幹雄「なに此方の事だよ。いゝか忘れるな、狹山君と梅浦君だよ。」

吾作「解つてるだよ。梅浦くうん！」

幹雄「はゝゝ、何分助からない聲だ。そら來た。エヘン、エヘン、エヘン。」

途端に下手から、相川未亡人藤枝、美津子、お鳥打連れて來る。幹雄、立上り、衝と前へ出る。

幹雄「ヤ、相川の叔母さんでは有りませんか。」

藤枝「おや、幹雄さん。お前もこちらへ。」
幹雄「はい、友人と一寸來ました。ヤ、美津子さん。おゝ、お鳥も一處かい。」
美津子、お鳥、それ〴〵會釋する。幹雄何食はぬ顏で、
幹雄「いや丁ど幸ひだ。何うです、別に用もなくば御一處に成らうぢやありませんか。大勢賑やかな方が可いですよ。」
藤枝「それは丁ど願つたりだけれど、併しお連れもある御樣子だから、」
幹雄「なに少しも氣の置けない親友ですからな。」
藤枝「然うかい、それぢや願はうかね。」
吾作「梅浦くうん！」
と吾作、突然に奇聲を放つ。藤枝吃驚して目を睜る。美津子、お鳥、思はず噴出す。幹雄一人仕濟し顏、
幹雄「むゝ、何だ。」
吾作「俺一人默つて退屈でなんねえ。紹介はしてくんろ。」
幹雄「はゝゝ、御催促は恐入つた。叔母さん、狭山新一君で、いつかお談話をした

友人です。」

藤枝「おゝ、此お方で、」

と進寄つて、

藤枝「お初にお目に掛ります。幹雄の叔母でございます。お心易う、」

吾作「はア、俺よく挨拶は知んねえだがね。俺上州館林在のもんでがすよ。今度初めて東京へ………。」

幹雄「エヘン、エヘン、何だ原籍地なぞを言ふ奴が有るものか、叔母さん、狹山は串戲者ですから、うつかりなさると飛んだ脊負投を食ひますよ。」

藤枝「おほゝゝ、面白いお方だねえ。」

と入つて腰を掛ける。美津子、お鳥各よき處に住ふ。女中茶を運んで行く。吾作不意に又聲を掛ける。

吾作「おい、其方の阿魔ッ子。」

お鳥「はい、私でございますか。」

吾作「お前ぢやねえ。お前ぢや村の阿魔も變りはねえだ。其方の紅え玉の簪

挿してる阿魔ッ子だ。」

お鳥「まア紅い玉だつて、おほゝゝゝ。」

藤枝「なに態と那麼事を仰有るんだよ。」

吾作「梅浦くうん！」

幹雄「驚くな、何だよ。」

吾作「あの阿魔ッ子の名は何て言ふだ。」

幹雄「美津子といふのだ。」

吾作「美津子。うむ、お美津ッ子か。おい、お美津ッ子、此處へ來う。」

美津子眞紅になつて俯向く。

吾作「おい、此處へ來うよ。俺お前と談話打ちてえだ。」

美津「はい、私、あの…………。」

吾作「はゝゝ、何言つてるだか些少も聞えねえだ。だがなア、奇麗なもんだぞ。俺が村なんぞぢや見る事も出來ねえ。俺魂が悸う、頭の天邊から脱けて行くやうだ。やア、堪んねえぞ最う、梅浦くうん！」

幹雄「何だな一々。」
吾作「やア、何うかしてくんろよ。」
幹雄「え、何を、」
吾作「何をぢやねえ。お美津ッ子をよ。俺今夜ア寢られねえぞ。うーん、これ、何うにもなんねえだ。拜むだ、何うかしてくんろよ。梅浦くうん！」
幹雄「はゝゝゝ困つた男だ。」
藤枝「おほゝゝ、本當に何も飾らないで居らつしやるのね。」
吾作「叔母さア。俺氣に入つたゞかい。」
藤枝「はいさ、何と申しませうね。」
吾作「言へよ判然。」
藤枝「おほゝゝ、困りましたねえ。」
吾作「やア、何故言はねえだ。言はなけりや俺了簡が有るぞ。」
藤枝「まア、大變です事。はい氣に入りましたよ。おほゝゝゝ。」
吾作「入つたか。あはゝ、氣に入つたか。占めたぞ。さア、それだら俺を婿に取

れよ。」

藤枝「おほゝゝゝ、まア如何な事ても。」

吾作「やア、這麼いゝ婿は、何處へ行つたつて滅多に有るもんでねえぞ。」

藤枝「然うでせうとも。」

吾作「自慢ぢやねえが働き者だ。一日米の二俵は搗く。」

藤枝、まア、

吾作「第一お前辛抱人だ。」

藤枝「まア、」

吾作「小まめで何時も遊んぢや居ねえだ。器用で種々な細工もするだ。這麼重寶な男は無えだよ。」

藤枝、まア、

吾作、それで居て又藝人だ。萬作踊なんかと來ちやア、誰でもお前唸らせるだ。おう、一寸くら此處で見せて遣んべいか。」

藤枝、まア、御串戯ばつかり、」

吾作「それ、な、一寸這麼もんだア。」

と前へ出て、拍子を取つて踊出す。

吾作「ヨーホホーホイ、ナーハハーハイ、今出て踊るのは粉屋の娘だよ。ヨイトサ。なるほど好い子だ。あの子と添ふなら、三度に一度は、人目も忍んで、手鍋も提げましよ、お水も汲みましよ、ヨイトサ。なるほど好い子だ。セケコラサイ、トコ、ヨイトサ。」

藤枝「おほゝゝゝ。」

美津「おほゝゝゝ。」

と皆々笑ふ。吾作大得意。

吾作「はア、甚麼もんだい。」

藤枝「面白うござんしたよ。おほゝゝゝ。」

吾作「さア、それだら最一番何か遣るだ。梅浦くうん。」

幹雄「はゝゝ、いや何うも、無類だつたよ。」

吾作「おう、今度はお前、音頭を取つてくんろよ。」

と手拭取つて唐茄子冠、片肌脱ぎになり.

吾作「さア、始めるだぞ。

ヨーイヨイイ、サ——切れておくれよ去年の馴染。

ヨーイヨイ、今年馴染の邪魔になる。ヨイヨイトサ。」

幹雄「はゝゝゝ。」

藤枝「おほゝゝゝ。」

吾作「何うだ。巧えもんだらう。はゝゝゝ。」

と肌を入れて何心なく、ちん、と手洟をかむ。

美津「まア、おほゝゝゝ。」

お鳥「おほゝゝゝ。」

吾作「さア、俺を婿に取れよ。」

藤枝「おほゝゝゝ、いづれ其中にねえ。おゝ、私は用をつい忘れて居た。幹雄、それぢや何だけれど私共は一足お先へ行きますよ。」

吾作「やア、お前等最う歸るだか。俺もそれだら一處に行くべいよ。」

藤枝「でも路が違ひますからね。」

吾作「お前先へ歸つて阿魔ッ子殘して置けよ。」

藤枝「おほゝゝ、又お目に掛りませうよ。」

と藤枝、美津子、お鳥、一わたり挨拶して行く。

幹雄「おい、御苦勞だつた。踊は大當りだ」

吾作「おうさ、踊ぢや村で俺に敵ふものはねえだからな。何うだ、阿魔ッ子打惚れたらう。」

幹雄「はゝゝ、何うだかな。」

吾作「叔母さア、ほく／＼喜んで居たでねえかい。」

幹雄「はゝゝ一人で承知して居る。手が付られない。」

吾作「なに最う、手を付けるのは世話はねえだよ。」

幹雄「えゝ何を言つてるんだい。」

此時上手より、新一の父、狹山喜右衞門、何心なく來て、通りすがりに不圖振向いて吾作を見る。

喜衞「ヤア、吾作ぢやないか。」
吾作「おゝ、旦那樣。俺婿に行くだよ。阿魔ッ子打惚れたでよ。
喜衞「何を戯けた事を　ャ、其着物も、羽織も袴も見覺えがある。不埒な奴だ。
これ何處から持出して來た。」
吾作「これ、家から着て來たゞよ。それよりも俺阿魔ッ子の…………。
喜衞「何を吐す。横着者。」
吾作「あ痛ッ、やア、何故撲つしやるだ。俺撲たれる事ねえだ。これ、譯も無えに
俺默つて撲れて居ねえぞ。」
喜衞「おのれ、不屆な事を、」
と矢庭に組伏せて折檻する。吾作跳返して捩合ふ。幹雄見かねて脇から、
幹雄「あ、もしこれには少し…………。」
喜右衞門夢中に、目もくれず。
喜衞「いや、お止めなさいますな。これは私の召使でございます。不埒な奴で、」

と吾作の襟元を引摑んで、

喜衞「さア、來い、家へ。」

と遮に無に引立て、下手へ入る。幹雄手を付けかねて跡を見送りながら、

幹雄「ヤ、恐ろしい短氣な老人だ。全で何も受付けないのだから驚く。吾作には氣の毒だが、家へ歸つたら倂し解るだらう。」

途端に片脇から、藤枝、美津子、續いてお鳥、不意に出る。

藤枝「幹雄。」

幹雄「ヤッ、貴方は未だ居らしつたのですか。」

藤枝「お前は隨分人を馬鹿におしだつたね。」

幹雄「えッ、何を、」

藤枝「美津子が最う白狀しましたよ。」

幹雄「えゝッ、ヤ、それは、」

藤枝「あれ、お逃げでない。惡氣でした事ぢやないのだから、私は何も恕しますよ。」

幹雄「おゝ、恕して下さる、」

藤枝「二人の事も惡いやうにはしますまい。此處で立話も出來ないから、これから何處ぞへ行つて能く話しませう。」

と此模様宜しくあり、臺辭一わたりして幕。

裏座敷

(二)

臺所の脇に十坪ばかりの、下男の安造が手作りの畠がある。未だ豌豆も蠶豆も、寒さに畏縮けて延立ちもせぬ。一方蘿蔔、一方に菜、中を幾つかに仕切つて飯戲のやうに植込んである。門から中を建仁寺垣に隠れた此方、此畠を中心にして、隅に鳥小屋、植木室、塀に寄つて物干場、並んで物置、少し離れて別棟の二室ばかりの男部屋がある。左の一室に車夫の平吉は今供先から歸つて來て、車の始末をして一休みした處、部屋着に着更へて、どッかり箱火鉢の前に坐込むと、啣へ煙管で、暫く意味もなくぱくりぱくりと遣つてゐる。

と、のッそり其處へ、下男の安造、此家に十年から住込んで居るといふ、野州から出た六十男、母屋に飼はれて居る齒の脱けた猫よりも古い老爺。身體は併し年にもめげず、達者な腰を直にして、片足土間へ踏入れた、

「おゝ歸つてるのか、何うしたい、早いぢやないか。」
平吉は、と見ると、片手に煙管を持直して、火鉢の角を叩きながら、
「なに、停車場から直に歸つて來たからさ。旦那は湯島のソレ山本さんと、急の催しで鎌倉へ行らつしつたんだ。」
「ふむ、俺ア使に出て居たから何にも知らなかつた。然うかい、ぢやアお前は又、二三日甲羅が干せるツて言ふもんだ。」
「能くしたもんで那樣時にや、奥の用が又出て來るもんだよ。おゝ安さん、お前に好い土產がある。」
と脇に置いた新聞紙に包んだものを出す。
「何だい、壜詰のやうなもんだね。」
「むゝ、お前の好きな物だ。今歸りに友達の處で一寸遣つたんだが、餘り豪儀だから分けて貰つて來た。內地で言やアまア燒酎だね。口當りは然うでもないが強いんだよ。馬鹿に強いんだ。これだけでお前、只の酒の三升分にや相當ふからね。」

と包を解して、一合入りの正宗の壜に詰めた、コニャックらしい洋酒を見せる。

安造は手に取つて、

「へえ、矢張外國のもんだね。初物だ。有難い。生延びるぜ。」

平吉は又煙草入を引寄せて、

「何だか知らないが、それで滅方に高いんださ。其友達も、實は旦つくに貰つたんで、全體此方輩にや食過ぎる代物なんだ。」

「然う聞くと粗末にや飲めないな。」

「なアに貰ひ物だ。遠慮は入らない。何うだ一つ飲つて見ちやア、此間玉鮨で貰つて來た猪口があつたらう。」

「むゝ、だが今は何だから後にしやう。」

「可いやな。旦那は留守の事だ。何處だい猪口は、押入か。」

と立つて隅の押入を引開けて、景物の猪口を探し出して來て、

「さア、」

と薦める。安造も下地は好、一杯受けて、珍らしさうに中を窺込みながら、

「何だか初物となると妙な氣がする。變に藥のやうな匂がするね。」

と一口一寸付けて、

「ほう。」と息を引き、「此奴ア中々確かりして居る。ふう、一ツ滴しで喉が燒け付くやうになつた。成程これならそれで三升にも向ふだらうよ。」

「何うだい。」

「豪敵だ。」

「然うか。其奴ア持つて來て可かつた。お前が好きだと思つたから實は貰つて來たんだ。俺にやア少し強過ぎる。俺ア先刻水を割つて飮んだ。」

「むゝ、割つても可い位だ。何しろ素敵な物を持つて來てくれた。こりやア併しうツかり飮むと馬鹿に廻りさうだね。」

言ひながら又ちびりと飮る。跡から舌皷で、

「此何うも喉を通つて行く鹽梅が何とも言へない。」

「はゝゝゝ、相變らず目が無いな。こゝの旦那も隨分好きだが、お前にや兎ても敵ふまいよ。」

「俺が又こゝの旦那のやうに自由が利きやア、今頃は酒で往生して居るだらうよ。旦那は好きは好きだが、あれで度を過ごさない處が豪い。酒ばかりぢやない好い旦那だよ。」

平吉は一寸外の方へ目を遣つて、少し聲を落しながら、

「むゝ、だが好い中にも、奥樣にや特別に好いやうだね。」

「え、奥樣にか。そりやア其筈さ。」

「其筈とは？」

「お前は未だ知らなかつたかい。」

「知るにも何にも、俺は未だほんの昨今だらうぢやないか。此家へ住込んでから、幾時も經ちやアしない。旦那と奥樣とは、大分年が違ふとは思つたが、世間に無い事でもなし、甚く氣にも留めなかつたが、何か其處に樣子が有るのかい。」

「有るとも、大有りだ。」

「へえ、何ういふ？」

「話さうか、ぢやア最う一杯やらう。」

と手酌で注いで、又一口、舌なめずりして、

「お前も今年の違ふ事を言つたが、年から言やサ親子ほど違ふ。ねえ、全で娘だ。全體娘になる處だつたのが、轉覆つて急に奥樣になつ了つたんだ。勿論後添さ。

「麼那眞面目な旦那だが、こればかりは全く別物だね。」

お前は知るまいが、若い時分にや、人一倍の苦勞もした人で、隨分種々な中を潜つて來たといふ談話だ。龍泉寺町の百軒長屋に燻ぶつて居た頃は、いつか自分でも仰有つた、鍋一つで何も彼も足した、竈さへ無かつた活計。

それがお前、中途からめき／＼仕出して、今ぢや此通りの地面持、家作ばかりでも夥しいもんだ。其所得で這麼贅澤をして遊んで居られる。一つには運もあつたんだね。

今の奥樣は、芝の方の、五六箇所固まつた地面を預つて居る差配の娘なんだ。先の奥樣が大層可愛がつてね、全で自分の子のやうにして居らしつた。

俺が初めて此家へ住込んだ時分から最う始終泊ツきりに此方へ來て居て學校も此方から通つて居たんだ。其時分は未だやつと九歳か十歳位。初めは家のお孃樣かと思つたよ。知らない者には誰の目にも然う見える。何から何まで奧樣が世話をして、全で傍を離さない位、旦那もそれに連れて同じやうに可愛がつて居らしつた。尤も御夫婦の間に子が無かつたから、內々養女にと思つて居らしつたんだらう。親の方でも、如彼までにして下さるからと言ふので、實は其氣で居たんださうだ。それがお前今の奧樣だらうぢやないか。

中で三年ばかりそれでも親の方へ歸つて、時々遊びに來て居たが、其中奧樣が亡くなつたと思ひなさい。旦那も未だ一人で居る年ぢやないから、間もなく後添の談話が出た。此家の事だから、方々から種々の口があつたさうだが、旦那樣は皆斷つて了つた。當分は一人で居るとばかりでね。

暫くの間其儘で過ぎた。然う恁うする中に談話が運んだんだね。何にも知らずに居るとお加代さん今の奧樣の名なんだ、彼のお加代さんが入らつしや

るといふ女中達の噂を聞いた。はア、養女にかといふと、なにお嫁にさといふんで驚いた。

聞くと何でも、奥様は厭だと言つて肯かなかつたのを、生家の方ぢやア、旦那に逹てと言はれると、何でも聞入れなけりやならない深い義理が有るので、それにまア慾も手傳つたんだね、第一本人の出世だといふんで阿父さんなんぞは大乘氣だ、親や同胞が、寄つて集つて說得して漸との事で納めたんだといふことだ。

其人達の了簡ぢや、なに若いから那麼事を言つて居るが、今に解ると、恁うなんだらうがさア、何ういふもんだらうか、奥様は來てからは、餘り解つたやうな風でもないぜ。」

「だが納つて居るぢやないか。」

と平吉は事もなげに言ふ。安造は口を濁らして、

「むゝ、まア見た處は納つちや居るがね…………。」

「何だ。納らないやうな理窟でも外にあるのかい。」

「なに、那樣事はありやしないがね…………。」

「はゝゝ、何を言つてるのだ。それだけならなに大した變つた事でもない。俺アもつと込入つた談話でもあるのかと思つた。」

安造は何か言はうとしたが、直に思返したやうで、

「むゝ、まア言つて見れば然うだ。」

「言つて見なくッたつて然うだよ。」

「爺やさん。爺やさん。」

と其時、探して居るのか庭の方で女中の癇走つた聲が聞えた。

「おい、此方だ。」

「おや、其方かい。」

と踵を返して來た、仲働きの千代といふのが、庭下駄ながら小走りに近寄ると、

「あのね、奥樣が一寸と仰有るよ。」

「よし來た。」

千代は眼を早く、

「おや、お酒盛！」

「おい、饒舌つちや可けないぜ。」

「知らないよ。」

と笑ひながら言つて引返して行く。双方共に氣にも止めず、安造は其儘立つて、

「どれ行つて來やう。」

とぬいと出ると、禿げた額に日の匂、がらん〳〵と牛乳の配達車が門で止る。

（二）

其日引續いて二三の客が見えたが、いづれも留守と聞いて空しく歸つて行つた跡、玄關は閴として、臺所と女中部屋に只、譯もない賑やかな聲がする。此時、室を離れた奥の、人に遠い小座敷に二人。

美女美男、女は未だ二十前、丸髷姿が際立つて、手柄の色の眞紅に燃えたも、吐息の跡に力なく、差俯向いて默つて居る。男も愁はしげに眉を寄せて、同じ姿に、物も言はず手を拱いて居る。

女は先刻安造が、差配の娘の、彼のお加代さんと言つた此家の內室。男は久しい前から主人の世話になつて居る、遠いながら緣續きの、大浦眞次と呼ぶ青年である。

主人が吩咐けて行つたのだらう、七分は箱入りの、夥しい書畫の幅を、座に堆く積上げて、目錄やうのものを作つて居たのが、僅かに掛つたばかりで其儘にしてある。

「吁、いつまで這麼目に遇つて居るんでせう。本當に私ほど詰らないものは有りやしません。」

と暫くしてお加代が先に口を切つた。二人の言葉遣ひは、人目を離れると、いつもとは直に違ふ。眞次は聞くと共に顔を上げたが、困つた顔付で、

「又それを言ふ。いくら言つたつて返りやしない。時を待つより外に仕方はない。」

「時を、」とお加代は腹立たしげに、「人の氣も知らないで、貴方はそれだもの。時を待つて居る中にや私は死んで了ひますよ。」

眞次は苦笑ひして、

「那樣事を言つて又私を困らせるのかい。」

「まア、何を仰有るの。貴方を困らして何處が面白うござんすよ」

「それぢや最う、這麼事を言合ふのは止さうぢやないか」

「だつて私の身にもなつて御覧なさい。」

「解つて居る。そりやア能く解つて居るがね、何を言つたつて今貴方と私の

身の上で何う悶いても仕様はない、せめて私の自由の利くまでも…………」
と言掛けるのを、怺へずお加代は遮つて強く、
「貴方、貴方、其間の私は何うして居るのですよ。貴方はそれで可いでせうけれど私には最う此辛抱を兎ても長くはして居られません。貴方も私に這麼辛い思ひをさせて居るばかりが能でも有りますまいに、些少は私の事を考へても可いではありませんか。」
「誰が考へない事があるもんか。だから先刻も那麼に言つたぢやないか。」
「だつて貴方は、私が一人で甚麼血を吐くやうな思をして居るか、全で察しちや下さらないんだもの。」
「那様解らない事が有るものか、私が何故察しなからう。」
「でも然うぢやありませんか。私の言ふ事を能くも聞かないで、たゞ係うして居ろとばかり仰有るぢやありませんか。」
「けれどもそれがね、今の處貴方なり私なりの身の爲なら…………」
「だからそれを言ふのですよ。貴方は自分の爲ばかりを考へて、私の事は些

少も考へちや下さらない。」

「困るね。貴方には斯うなると些少も解つてくれない。」

お加代は何う取つたのか、聞くと躍起となつて、我を忘れて聲を高く、

「まア貴方は那樣…………。」

眞次は慌てゝ手を擧げた。

「しッ、那樣大きな聲を、聞かれたら何うなさる。」

言はれて流石に心付いて、聲は落しながら、未だ其儘の險しい色で、

「だつて貴方が餘りですもの、第一此家へ甚麼心持で嫁付いて來たか、貴方は本當に知つちや居らつしやらない。」

「何を言ふ。知らないで何うするものか。知つて居りやこそ彼の時も、二人で身を切るやうな思をしたぢやないか。貴方こそ私の苦しい胸の内を能く知らなかつた。」

お加代は只頭を掉つた。

「いゝえ、いゝえ、那樣事を仰有るけれど、矢張御存じなかつたんです。私は彼

の時に、那麼にも厭だと言つたのを、いろ〳〵義理で縛られて、何うにもならなくなつて了つたとは言ひ條、貴方さへ然うするなと仰有れば、私は甚麼事が有つたつて來はしなかつたのです。切羽に詰つて、貴方に何うしたらと相談した時、貴方は私が甚麼氣で居たかも知らないで、結局此方へ嫁付けと仰有つた。」

「併し然うしなけりや、身の納りが付かなつたぢやないか。」

「いゝえそれも、今ッから考へて見れば、私の事を本當に思つて下さらなかつたからです。貴方さへ變らなければと仰有つたけれど、見す〳〵私を人手に渡して了ふほど、矢張深くは思つて居て下さらなかつたのです。今もそれだから、私の身には本當になつて見ては下さらない。然う思ふと私には、貴方の眞のお心が解りませんわ。」

眞次は憫むやうな眼に、其儘お加代を打目戍つて居たが、

「弱らせるね。然う逆上せて了つちや仕樣がない。最少し氣を靜めて、跡先を考へてくれなくつちや困る。全く彼の時は、貴方は然うするより外に仕方がなかつたぢやないか。私が貴方の言ふ通りなら、彼の時限りで最う手を洗

つて了ふ。影護い這麼關係で決して居ない。又然うするのが道ぢやないか。何故それが出來ないのだらう。惡いと知つて、濟まないと知つて、つく〴〵自分を情ないやうに思ひながら、矢張貴方を忘れられない。貴方に言ふのも何だけれど、此爲には甚麼に身を責められたか。私には恩人の、こゝの若尾さん、血の續きこそ遠いけれど、親も同然の世話になつて氣樂に恁うして修學もして居られる、其深い義理さへも、貴方の爲には捨てゝ居るぢやないか。自分の事ばかり考へて居るなら、私は這麼馬鹿な眞似を決してしちや居ない。」

「貴方は口先ばかりで那樣事を仰有るけれど…………。」

眞次は聞咎めて、

「なに口先？」

「然うですわ。口先ですわ。貴方は矢張私より外の事を思つて居らつしやる。」

「むゝ、何を思つて居るね。」

「貴方の胸に聞いて御覽なさいよ。」

「那樣事を言はないで、明瞭然うと言つてくれたら可いぢやないか。

「いゝえ最う決めました。貴方が那樣風ぢや、私は此先屹度捨てられて了ひます。可うござんす。たんと人を…………。」

と言つて自分の言葉に自分で迫つて、忍音ながら不意に泣く。眞次は呆れて見入つたが、

「はゝゝ、いよ／＼解らない事を言出して來た。突如に何うしたといふのだね。」

「最う可うござんすよ。」

「何だ。それぢや薩張解らない。せめて私に了解ませるが可いぢやないか。」

「知りませんよ。何うでもなさい。」

眞次は衝と身を進めて、

「むゝ聞かう。兎も角何うすれば貴方は可いのだね。貴方の思つて居る事を打明けて貰はうぢやないか。」

お加代は僅に涙を拂つて、袂を下に、露に重げな顔を見せたが、半ば獨言のやう

に、

「言つたつて、貴方は何うせ背いてくれやしない。」

「言はない先に決めて了ふ奴があるものか。え、何うしやうといふのだい。」

「眞さん。」

と不意に調子をかへてぢつと見た。

「それぢや私本當の事を言ひますがね…………。」

「むゝ。」

「貴方も其氣で聞いて下さるでせうね。」

「無論さ。何だね。」

「私ねえ。實の處最う我慢にも堪うしちや居られませんよ。私を可哀相とお思ひなさるなら、後生ですから何處かへ私を連れて行つて下さい。」

「えッ。」

「今になつて一旦來たのが、口ぢや言切れないほど口惜しくつて仕樣がありませんけれど、無理に來た譯は貴方が能く知つて居らつしやる。貴方さへ知

つて居て下すつたら私は澤山です。ね、貴方、實があるなら私の望みを叶へて下さい。」

と思入つて直と見る。眞次も流石只ならぬ色に、屹と見返したが、言葉は存外に冷やかに、

「むゝ、して跡を何うする心算で居るのだ。」

「え、跡を？」

「跡さ。跡の始末をさ。」

お加代は氣色ばんで、

「貴方何を仰有るんです。だから私が言はない事ぢやない。」

「まアさ、直に那樣事を言つて了つちや仕樣がない。第一貴方の身が何うなると思つて居る。」

「まア、此場合に那樣、自分の身なんぞを厭つて居られますかよ。」

「貴方一人ぢやない。兩親もあれば同胞もある。」

「何ですね、今更那樣事を、貴方だつて言はれた義理ぢやないぢやありません

か。」

眞次は打首肯いて、

「然うだ。言れりや其通りだ。けれども今になつて、那樣跡先見ずの事をする位なら、初めから這麼事にしやしない。事が破れて了つたのなら仕方がないけれど、それでなければ、最う少し考へて上手に遣らうぢやないか。」

「だつて私。何うしても最う厭ですよ。」

「加代さん矢張孩兒だね。」

「串戯ぢやありませんよ。私や本氣で言つてるのぢやありませんか。」

「串戯處ぢやない。本當の談話だ。貴方もね、私の爲だと思つて、何にも知らせず此儘にして、最少し私に任せて置いて下さい。お互に辛い思をして係うして居るのも、跡で自由に手を引かれたいばかりぢやないか。」

お加代は何時か又垂首れて了つたが、苦しさうな吐息と共に、

「あゝ、貴方がそれぢや、仕方がありません。けれども貴方、察しちや下さるでせうね。」

「言ふまでもないぢやないか。」

「私や地獄の苦みだと思つて居ますよ。」

「能く知つて居るよ。」

「あのね、貴方、恁ういふ身だと、これぱツかりが氣懸りだから言ひますがね、何うぞね、變つて下さいますなよ。」

「知れた事だ。」

「あゝ私は何故這麼事を氣に懸けるやうになつたのだらう。」

と又しても座が濕める。途端に何やら、不意に襖の彼方で、物の觸合ふやうな氣勢がした。二人は愕として、思はず身を開いて振返ると、それかあらぬか、同時につか〳〵と來て、隔ての襖をさらりと引開けた。三十恰好、しや〳〵れた顏の髮の薄い、骨張つた男。敷居越しに膝を支くと、にやりとして、上目遣ひにぢろりと見る。

お加代は胸を轟かせながら、

「おや、久助か。」

「へい。」
とばかりで、ぢろりと又見て、氣味の惡い空笑。
「えへゝゝゝ、お樂みでございますね。」
二人は色を變へた。

（二一）

と見る中に、お加代はくるりと身を押向けた。腹立ち聲に浴せ掛けて、

「な、何だとえ。不躾な。お前は誰に斷つて入つて來ました。」

久助は態とらしく、無上に額を撫廻して、又しても上目遣ひに、人を馬鹿にしたやうな空笑。

「へゝゝ、何うも、何ともはや、へゝゝ、餘りお談話が面白さうでげすから、一寸其何なんで……。」

「失禮な。そりや誰に向つて言つてるのです。お前は出入りの才取ぢやないか。」

「へい、へい、御意にございます。」

お加代は尚更に赫として、

「お歸んなさい。歸つて下さい。二度と最う家へ足踏みをする事はなりません。」

「へゝ、何うも恐入りましたな。早速それぢや引下るべきでげすがね。折角參つたものでげすから、最少し其美味さうなお談話の續きをお聞かせなすつて。」

「久助。」

と眞次も脇から聲を掛けた。

「へい。」

と久助は態とらしくけろりとする。

「何を取違へて變な事を言つて居るのだ。此處はお前の來べき處ぢやない。歸れッ。」

久助はびくともせず。嘲り顔に、

「處がね。一寸歸られないんでげすよ。」

「何だと。」

「へゝ、これで二度目でげすからな。此間もそれ、成程那麼處ぢや一寸知れませんよ、田端のそれ、妙な家の奥で、お二人さんの積るお談話をね、つい伺つて

了つたんでげすよ。今日のはナニ今來たばかりでげすがね、これから面白くなると思ふと、何うも樂みで堪へられませんから態うして其續きを伺つて居たいんでげすよ。へい。えへゝゝゝ。」

二人は又更に冷りとして、急に二の句も吐けなかつたが、お加代は逸早く取直すと、弱身を見せまいとして、

「おほゝゝ、まア何を言つてるのだらう。思ひも付かない事を一人で饒舌つて居る。大浦さん此氣違を追出して下さい。」

久助は鼻の先に笑ひながら、首を傾げて、何か感心した身振で、

「へえ、成程、お年にしちや確かりして居らつしやる。成程ねえ、それでなくつちや那麼藝當は出來ますまいよ。」

眞次はぢつと見て居たが、何をか胸に首肯きながら、急に座を立つて、

「久助一寸來てくれ。少し談話がある。」

と伴れて次の室へ行かうとした。久助は動かうともせず、見上げて首を掉つて、

「なりません。」

「なにッ。」

「なりませんよ。貴方ばかりぢや有りません。お二人とも最う此室を出る事はなりませんよ。」

「久助ッ。」

とお加代は目を逆釣らせて言つた。

「はゝゝ、騒ぐな、俺が吩咐けたのだ。」

と何時の間に來て居たのか、此時襖の陰から、不意に出て來た主人の太一、酒肥りのでつぷりした身を前に、眞次の行手に立塞がると、片手に向ふへ突戻して、

「坐れッ。」

お加代はそれと見ると、蒼くなつて跡へ、我にもあらず身を引くやうにしたが、

「まア貴方は何時…………。」

と言掛けたが、中途に聲は消えて了つた。太一は苦り切つて、

「ふむ、解るまい、今日山本が急病で、行く處ぢやなく、途中から引返して、家へ送

屆けて、歸つて來る途で、此久助に遇つたのだ。」

久助は言譯らしく頭を搔いて、

「へい、お二人さんには濟みませんがね、根が正直者でげすからな、何うも斯ういふ事を胸に納めて居ちや、御恩を受けて居る旦那樣に申譯がないでげせう、申上げずにや居られない始末で、無據く少しばかりね…………。」

太一は眉を顰めて、

「貴樣はまア默つて居ろ。そこで久助を證人に連れて來たが、此態ぢや證人處ぢやなかつたな。」

二人は流石に返事も出ぬ。睨付けられた其顏を見る事さへも出來なかつた。

座は水を打つたやうになつた、そよとの外の風の戰ぎに、竹の葉音が際立つほどであつた。

突として太一の烈しい聲。

「不埒者ッ！　前へ出ろ。」

「…………………。」

「貴様等のやうな人非人に、何も最う言ふ事はない。揃ひも揃つて、恩を仇で返す畜生にも劣つた奴。恕す處は少しもない。俺はな俺の面目の爲に、穩かな處置を取るやうな事は決してしないぞ。俺の耻辱は耻辱で受ける。貴様等は貴様等の罪に相當した其筋の處刑を受けろ。」

「…………。」

太一は稍暫く二人を睨据ゑて居たが、矢庭に衝と立上つた。

「久助ッ、二人を逃がさないやうにしろ。俺は直に手續きをしてくれる。」

久助は曩の勢にも似ず、然うなると又急に慌てゝ、

「暫く、旦那様、一寸、そ、そりやァ最う、一言もない御尤もの處でげすが、何分其………………。」

「えゝ、默つて居ろ。餘計な邪魔をするな。」

「へえ、ですけれど…………。」

「ちよッ、默つて居ろといふに。」

と支へる手を振拂つて、勢込んで行掛けた。此時まで音も立てず、影をも動か

さず、俯向いた儘石のやうになつて居たお加代は、俄かに顏を上げて、跡から鋭く、

「もし。」

と聲を振絞つて呼止めた。太一は屹と振返つたが、

「何だ。今になつて何を言ふ事がある。」

「言ふ事は山ほどありますが、一言だけ聞かして上げませう。」

と打つて變つて、恐れ氣もなく向直ると、顏は熱して眼は異樣に光つたが、言葉は氣勢にも似ず却つて落付いて、

「長い事恨んで居ましたが、恨み仕舞に良い藥を下さるのね。」

「なにッ、恨んで居た？」

「恨まなくつて何うしませう。私と眞さんとは、貴方に此の家へ攫つて來られた前の前からの夫婦ですよ。貴方の方ぢや私が不埒でせうが、私からは貴方こそ、不埒な、沒義道な、無慈悲な、鬼のやうなと思詰めて居たのです。あゝ最うこれだけにして置いて上げませう。曳かれ者の何とやら言はれるのも下

さらない。ですがね、私は悪いとは些少も思つて居ませんよ。それだけを言つて置いてあげます。さア、御勝手に何うでもなさい。」

「馬鹿め、那樣事が何處で通る。むゝ、待つて居ろ。」

「もし旦那樣。」

と久助は再び口を入れた。

「えゝッ、引込んで居ろッ。」

と頭ごなし、言下に叱飛して、疊を蹴立てゝ室を出て行つた。

眞次は一語も言はず、覺悟を決めて居るやうな姿ではあるが、烈しい苦悶の色は流石に包まれず顏に現はれて居る。お加代は恁うなつて却つて、最う泣きも悲みもしなかつた。驚いたのは久助で前から這麼打算は少しもして置かなかつたので、一人で何かへどもどして居る。

突然として又、太一は其處へ入つて來た。二人の前に棒立ちに立つたが何を言ふかと思ふと、

「二人共直に行け。」

座に居る三人共、何の事か解らなかつた。太一は折返して、

「さア、今から直に行け。勝手な處で勝手に暮せ。近くへは立廻つて來るな。」

「えゝッ。」

とお加代は驚いて思はず振仰いだ。眞次ははッとしたが、顏は得上げず、著しく手の先を顫はして居た。久助は夢を見た心地、口を開いたなり顏を打目戍るのであつた。

太一は默つて、二人の手を取つて外へ押出した。途端にお加代の懷へ押入れた紙幣の束、身を引く同時に、襖をぴたりと閉めて了つた。いきなり座に復つたが、見えぬ其方を打目戍つて、

「早く行け。俺の氣の變らない中に早く行けッ。」

明眸

（一）

會社を例の時刻に出て、鐵彌は例の如く自轉車で歸つて來た。妻君は前からの約束で、子供と下女を伴れて朝から伯母の方へ、今夜は泊つて來る筈で揃つて出掛けて、志保子といふ妻君の妹が、一人留守居の有難からぬ役を勤めて居た。退屈紛れか、居室で琴を彈きさして居たが、逸早く歸つて來たのを聞付けて、絃を彈捨てに衝と立つて迎へに出た。

「お歸りなさいまし。」

「や、今日は留守番だね。はゝゝ、御苦勞樣。併し一人で淋しかつたらう。」

と乘つて來た自轉車をかたしながら、何時もの劬はるやうに言へば、

「いゝえ、」とばかり嫣然して、「義兄さんこそ誰も居なくつてお淋しいでしやう。能く歸つて入らしつた事。私何處かへ屹度お廻りなすつたと思ひま

したわ。」

と脱捨てた帽子と折鞄を受取つて立つ。鐵彌は打笑つゝ、其儘奥へ通りながら、

「なに何處へ行くものか。那樣事しちや志保さんが可哀相だ。いや明日は埋合せに、何處かお好みの處へ伴れて行かう。」

「本當？」

「嘘を言ふものか。」

「まあ、好い事。それぢやお約束してよ。おほゝゝゝ私種々な事を言つて強請るから可い。」

「宜しい。引受けた。志保さんの事なら何でも聞かう。」

「餘り安請合ぢや當にならないわ。」

「はゝゝ、然う思つて居りや間違ひはない。」

「それ、最う言ふ口の下から然うぢやありませんか。」

「そりや貴女が餘り信用しないからさ。」

「でも約束は約束よ。私何でも實行させるから可い。逃げたつて肯きやあしない。」

「や、恐ろしいな。はゝゝ志保さんには浮かりした事は言へない。」

「あら、それぢや今のは浮かりした事なの。」

「なに然うぢやない。可し。明日は一つ大負けに負けて、志保さんの言ふなり次第にならう。」

「屹度？」

「屹度！」

「何だか怪しいもんだわ。」

と這麼串戯の中に、いつもの納戸の脇で、いつものやうに服を脱替へる。志保子は姉の手代を、傍からまめ／＼しく手傳つて、女の事細かにそれ／＼仕末する。今日は手が無いので、湯が立つて居ないから、其儘茶の室へ來て、いつもの火鉢の前へ、どツかり腰を下して手近の煙草盆を引寄せた。

子供が居ないので、其處等何となく取片付いて見える。開放した障子の外か、

ら、穏やかな春の光が夢のやうに流れて入つて來る。松を彩つて、思切つて櫻が咲込んで居る。籠の中の、五軒先の家の駒鳥が、さながら林の奥で啼いて居るやうに聞える。煙草を燻らして居ると、

「はい。」

と志保子が氣を利かせて紅茶を淹れて出した。歸る時刻を計つて支度してあつたのだらう。手ばしこく準備して、跡からお手製の菓子が出る。

「や、大層氣が付くね。姉さんの代理の心算か。何か無暗に働くぢやないか。」

「ほゝゝ、其代り跡でたんと御褒美を戴きますわ。」

「やッ懸賞付きかい。それぢや迂濶にや褒められないな。」

「あら、義兄さんが一人でお可哀相だと思つたから、氣を盡して上げるのに。」

「解つて居るよ。全く志保さんに限るよ。」

「と持上げて置かないと、差當つて少し不自由だから。」

「はゝゝ、半分は當つたね。」

「可いわ。それぢや最う構つて上げないから。」

「謝罪つた。構はれなくちや、何うする事も出來ない。全くだ。志保さんでなくつちや助からないよ。」

「人を馬鹿におしなさい。好きな事ばかり言つて居らつしやる。」

「はゝゝゝ。」

志保子は今歳廿一。鐵彌の家で世話をするやうになつてから最う四年になる。去年さる女學校を卒業して、今歳二月、水野周一といふ、若い割には聞えた農學士と結婚の約が出來た。姉の道子とは三つ違ひで、たゞ二人きりの姉妹である。いつも快濶な、誰にも調子のいゝ肌で、默つて考へて居た事などは殆んど無いが、何處にか併し確りした處があつて、事に當つて容易に肚を見せないので、今日道子の行つた先の伯父などは、折に觸れて笑ひながら能く、何うして、志保はあゝ見えて、中々曲者だよと言つて居る。

暫くして鐵彌は、持つて居た煙管を下に置くと、不意と庭の方へ目を遣つたが、

「あゝ、今日は折角の土曜日だが、無據く籠城しなけりやならないのか。」

「あら何故？」と志保子は見て微笑みながら、「行らつしやりや可いぢやあ

りませんか。」

「でも志保さんが可哀相だもの。なに偶にや巣に入つて居るのも可い。志保さんは少し氣晴しに出てお出で。」

「私は別に行く處は有りません。私なんかに構はないで義兄さんこそ行つて入らつしやい。慣れて居るから私家に居るのは何とも思ひませんわ。」

「むゝまア兎も角も今日は居る事にしやう。全體其心算で居たのだから、それぢや、貴女にもお相伴をして貰つて、おとなしく香箱でも作つて居やうよ。」

「那樣事言はないでお出なされば可いのに。」

「はゝゝ、大層又出したがるぢやないか。」

「おほゝゝ、跡の御褒美を殖したいのかも知れないわ。」

「成程ね。」

「あら嘘ですよ那樣…………。」

「いや何とも知れないよ。」

「義兄さんは又調戯ひ出した。私知らないから可い。」

「はゝゝ、自分で言出して置いて知らないもないもんだ。可いさ。どッち道大福の一つ位は上げるよ。」

「憚りさま。聞いて居りませんよ。」

「え、聞えない？」

「はア聞えませんよ。」

「可哀相に、聾になるにや未だ年が若いが。」

「おほゝゝ、まア、貴方は本當に仕樣のない方ね。」

「はゝゝ、今知つたのかい。」

「可うござんす。覺えて居らつしやい。いつか讐を取つて上げるから。」

「や、事だぞ。それぢや何時寢首を掻かれるか知れないね。」

「はア、其位の覺悟はして居らつしやい。」

「さア、いよ／＼大變だ。寢覺の惡い事になつて來たぞ。先刻の大福は氣に入らないやうだつたから何うだい、鹽煎餅の一袋位の處でお詫は出來ないかね。」

「御勝手になさいよ。」

「はゝゝ、志保さんに調戯つて居るのが、罪が無くつて一番面白い。」

「まア、其氣で相手にされる私は、堪つたもんぢや有りませんわ。」

「はゝゝ、違ひないね。」

此時ほく〱と、門を入る靴の音がして、誰やら玄關に立つた氣勢がした。

「御免。」

「や、誰か來たな。」

と客好の鐵彌は、聞くと齊しく悦ばしげに身を開く。志保子は言ふまでもなく立つて、直に取次に出た。

（二）

親しい仲と見えて、二言三言の中に、續いて双方の笑聲が聞えたと思ふと、小走りに引返して來た志保子が、

「義兄さん、田邊さんですよ。」

「むゝ、田邊の聲だと思つた。何しろ好い處へ來てくれた。」

言ひながら出ると、客は遠慮のない交際の、最う上つて來るのである。

田邊といふのは、鐵彌の親友の一人、同じ學校の出身で、暫く同じ會社に出て居たが、今は父を扶けて或養魚場を經營して居る。此間一寸逢はなかつたので、互に懷かしさうに、やがて座敷に差向つたが鐵彌は其中にも押へられぬ笑顔を其儘、

「や、暫く駈違つて逢はなかつたね。能く來た。今日は殊に能く來てくれた。實は家族のものを脇へ遊びに遣つたので、一寸留守番といふやうな事で相手欲しやで居た處なんだ。其處へ君が來たのは望外の幸福だ。用が無くばゆ

ツくりして居てくれ。有つても無理に引止めるがね。」
と他事ない態で話掛ける。田邊も顏を見ると同じ思、裏もなく打笑ましげに、
「然うか。そりや好い都合の處へ來た。實は久し振だから、居たらば何處かへ誘出さうと思つて寄つたんだが。」
「むゝ、僕も近日には是非訪ねやうと思つて居たんだが、來てくれたのは何よりだ。今日は然ういふ譯だから家で大いに話してくれ。自慢にやならないが庭の花も丁ど見頃だ。これでも花見の印にはなる。」
「なる處ぢやない。僕の家のやうな殺風景の庭と違つて、君の處のは本物だ。あゝ能く咲いた。外の配合が好いから、恁うなると花も引立つね。相變らず何處も彼處も、能く手入れが屆いて居る。」
「や、お褒めに與つて恐入る。だがこりやア僕の設計したのぢやない、親父が殘して行つてくれた儘で、僕の手柄は何もない。」
「那樣事は何方でも可いさ。庭のいゝのは實際心持の好いものだな。」
と其儘暫く目を移して居る。鐵彌は身を返して、襖越しに右手の茶の室の方

へ、

「志保さん。志保さん。」

「はい。」

と志保子は聲と一つに立つて、隔ての襖を押開けて美しい笑顔を見せた。

「志保さん、今日は家ぢや何も出來ないから、何か美味さうな御馳走を取寄せておくれ。田邊は左利だから其心算でね、」

「畏りました。」

「いつもの處へ言つて遣つて、なるたけ早くと言つてね。」

田邊は振向いて急がはしく、

「何だ。僕に構立てなんぞしてくれちや仕樣がない。殊に手の無い時に、餘計な心配はしないやうにして貰ひたい。」

「え、君でもない。僕の家へ來て遠慮をする事があるものか。」

「なに別に遠慮はせんがね、何うも志保さんを然う使立てちや濟まんから。」

「あら御挨拶です事。」と志保子は華やかに、

「然う仰有られると、一ぱし何か働かなけりやなりませんのね。」

「はゝゝ、然うだ。何しろ志保さん可いやうにね、」

と鐵彌は吩咐けて頓て立たせると、何か調子付いて、

「いや、僕も今日は大いに飲むよ。」

田邊は咥へて居た葉卷を離して、一寸眼を瞬つた。

「なに大いに飲む？ 珍らしいな。だが口ばかりぢやないか。」

「然うぢやない。飲んで可い事があるのだ。」

「ふむ、面白いが、併し何うしたのだね。」

「實は年來の厄落しをしたのだ。君も知つて居る。連帯の一件で、田村の負債の尻を脊負込んだので長い事引續いて苦められて居たが、漸くの事で今朝殘らず償却濟になつた。今朝出勤前に寄つて、すッかり片を付けて來た。や、此爲には隨分酷い目に遇つて、時に身の皮を剝かれるやうな思をしたが、最う可い。これで全く足を洗つて了つた。だから今後を祝して一つ飲まうといふのだ。」

「然うか。そりや祝して可い。全體君のやうな男に質の惡い負債を脊負はして置くのは全く罪だつたよ。僕も最う少し事が自由に行つたら、何とか助けやうと思つて居たが、や何よりの事を聞いた。君の爲に喜ぶよ。併し隨分少くない額だつたが、人の手も藉らず能く一人で始末したね。」

鐵彌は苦笑して、

「其代り時々談話にもならない窮策を講じたからね。何處にも尻尾を出すまいと思つたから、何うかして水の手が切れた時の苦みといふものは、當事者でなけりや實際解らんよ。先づまァ一通りの體面は保つて行つて、何うか恁うか片を付けたんだから、何方かと言へばいゝ鹽梅に行つたのさ。」

「いゝ處ぢやない。大手柄だ。誰も殆んど知らん位だからね、兎も角能く切拔けたよ。君は心配すると可かんと言つて、妻君にも知らせなかつたといふぢやないか。」

「むゝ、知らせなかつた。這麼事の爲に、家庭の安寧を害されるのは殘念だと思つたから、內處で大いに働いた。惡事でないだけに到頭今迄隱し負せたよ。」

田邊は又葉卷を燻し出したが、其儘膝を組直して、
「ふむ、僕も其氣になつて一つ機密費を稼出さうかな。」
鐵彌は微笑みながら、
「君の機密費は用ひ處が違ふのだから可くない。」
「はゝゝ、違ふと言へば相變らず堅いのかい。君は喰はず嫌ひだから仕方が無いが、何うだい、最う可からう、偶には經驗の爲に一二度軟化して見ては。」
「いや、そりやァ御免蒙らう。君は何かと言ふと直ぐその方へ斬込んで來るから困る。僕にはそればかりは何うも出來んよ。」
「はゝゝ、未だ珠數を切らないかね。」
言ふ時晴やかな、心地よげの笑顏を先に、志保子が膳を捧げて入つて來た。繋ぎに手早く添へた取肴を其處へ、
「あの、跡から追々と參ります。」
田邊は取敢へず、
「いや、大恐縮。今日は貴女一人の貧乏鬮ですね。」

「いえ何う致しまして。お客様がお客様ですから、動くにも張合が有りますわ。」

「はゝゝ、中々外交術をお遣りなさるね。これから餘所へ出て其意氣で當られちや、到る處撫斬ですね。然う言へばお噂があつた御慶事は何日ですな。」

「おや誰方の？」

「何を仰有る。貴女ので。」

「あら、まア那様事がありますの。些少も存じないで居ましたよ。おほゝゝほ。」

と笑つて衝と立つて行く。

小町紅

（一）

「ちよいと、ちよいと芳岡樣、あれ芳岡樣てのに。」と焦れたさうに立止つた。十五ばかりの丸顏の表道具の見事に揃つた、恐ろしく愛らしいのであつた。唐人髷に、花櫛、花簪、鼈甲の前小僧を挿して居る。光琳模樣を地紙散らしにした華美な友禪に、下着は緋無地の八橋織、赤地の蝦夷錦の帶を締めて、言ふまでもなく厚化粧。

處は小田原の本通り、驛の中程に靑柳と言つて土地で鳴らして居る料理屋から三四間手前の角。呼掛けられたのは、此子の家の、菊菱といふ藝者屋の、つい近所に住つて居る醫士の藥局生で、二十三四の、薄ッぺらな、重みのない男だ。知らずに行過ぎたが漸くに聞付けて振返ると、忽ち其相を崩したもので、

「おゝ鈴ちやんか。甚く奇麗だな。お座敷だね。」

直ちに後戻りして傍へ寄つた。松山進といふ其醫士が、菊菱の掛り付けであるばかりでなく、其初め菊菱の家へ養女に來て、やがて亡くなつた養母の跡を受けて、今では大姐で切つて廻して居る、粂次といふのが、此小鈴の實の姉で、小鈴は又松山の一人息子の操といふ同い年のと乳兄弟といふ緣で、操は那樣處へ繁く立廻るのを家では叱られながら、子供の時分から、行くとちやほやされるのに浮かされて隱れては遊びに來る。其操を玉に使つて芳岡も、これは又謀判氣で時折しけ込むといふ手續きになつて居るので、芳岡は菊菱の家中、上は粂次から、下は駒といふ黑斑の猫に至るまで懇親いのだ。

「はア、今青柳さんへ出るの。」

と小鈴は小さな口元に言はれぬ愛嬌を見せて直にあどけなく、

「芳岡さん、あのね、貴方にね、私少し聞きたい事があつてよ。」

芳岡は打笑つた。

「ふむ、鈴ちやんの聞きたい事なら言はずと知れて居る。」

「あら、何うして。」

「きまつて居るさ。彼の人の事だらう。聞けば内所で鹽を斷つてるんだつてね。恐ろしい御執心だね。」

「あれ、」

場馴れず既顏を染めた。

「可くつてよ。芳岡さんは本當に人が惡い。」

「でも然うだらう。」

「知らないわ。最う聞かないから可い。」

つんとして行つて了はうとした。笑つて芳岡は前へ廻つて、

「これさ、何うしたのだ。何も怒る事はないぢやないか。」

「だつて那麼事を言ふんだもの。」

「可し、それぢや言ふまい。聞きたいのは何だ。」

「厭、最う。貴方は屹度調戯ふもの。」

「なに調戯ふものか。さア、何だよ。」

「厭よ。笑つて居るから。」

「ちよッ、面倒な孩兒だな。那樣事ばかり言つてると最う何も知らして遣らないよ。」

小鈴は急に風向を變へて袂に取付くやうにした。

「あれさ、後生。お願ひだからさア。」

「だから何だと言つてるのに。」

「あのね、」

と莞爾して、

「本當はね、矢張あの何なの。」

「それ見るが可い。言はない事ぢやない。」

「あれ最うそれは可いとして教へて頂戴よ。あの何は操さんは此頃に東京へ行つて了ふんだつて。本當?」

と稍眞顏になつた。

「うむ、嘘と言つて遣りたいが本當だ。あとが思遣られるね。」

と冗談口、小鈴は受付けず口早に

「そして最う日が決つたの。」
「まだ決らないが何れ近い中だ。」
「えッ、近い中。」
言つたぎり默つて了つた。面白半分に芳岡は又、
「可憫さうに泣別れだね。」
俯向いて居たが、忽ち顏を上げて、
「知らない。何とでもお言ひなさいよ。有難う。左樣なら。」
會釋其儘衝と立離れた。芳岡は流石に拍子を拔かれて、
「あッ、聞きッ放しで行つて了ふのか。餘り現金ぢやないか。いくら俺には用がないからと言つて。」
小鈴は振返つて、
「あら御免なさいましよ。おほゝゝゝ、いづれね、」
とませた口吻に目顏で點頭いて見せて、引別れると遲くなつたといふ風で、裾をほら〳〵急がはしげなポックリの音を立てゝ駈けて行つた。後を見送つ

た芳岡の、未だ其處に立つて居た樣子といふものは、お話になつたものぢやない。

（二）

見た處五抱へもありさうな、幹には注目縄を掛渡して、蜘手に四方へ根を張つた大銀杏が路の角にぬいと立つて居る。兒供の惡戲か見上げる下枝に古草鞋が引掛つて、烏が一羽、日影を眞向に浴びて上に羽を休めて居た。處に名物の漬物、鹽辛、挽物細工などを商つて居る店から二軒置いて、梅屋といふ、料理、待合、旅籠を兼業にした田舎流の一寸したのがある。

奥の小座敷に差向ひの、一人は落付かず、さも坐心の惡さうに、

「僕は厭だ。這麼處へ來たのが自家へ知れると甚麼に叱られるか知れやしない。僕は最う歸るよ。伯母さん處へ行くのが遲くなつて了ふ。」

と立ちかけた、色白の、くり／＼と肥つて、ぱつちりした眼に、秀でた眉の見るから可憐げの美少年。

「あれ操さん、」

と慌てゝ止めたのは、菊菱の小鈴なので、一寸お詣りにと言つて、姉の前を拵へ

て出て來たのだ。荒い棒縞の御召に薄紫の矢飛白の羽織、鶸茶の常着帶に、紅入友禪の前掛を締めて居た。

「先刻も那麼に言つたのに、餘りだわ。私本當に談話があるんだからさ。後生だから些少の間此處に居て頂戴よ。家へ知れる事はありやアしないよ。私此處の喜代ちやんとは仲好しだから。譯を言つて能く話して置いたから大丈夫よ。私だつて姉樣に嘘を吐いて出て來たんだから知れると大變だわ。」

操は迷惑さうに、

「僕はそればツかりぢやない。何だかきまりが惡くつて仕樣がないもの。」

「だつて誰も來やしないわ。」

「來やしないツて這麼處だもの。」

「でも外に恁うして談話をする處はないから、私も間が惡かつたけれども思切つて此處にしたの。昨日家へお出だつたさうだけれど、私やお座敷へ出て居たもんだからついお目に掛れなくつて、歸つて明日の事を聞いて本當に泣きたかつたわ。此儘逢はれずに別れて了つたら何うしやうと思つて一生懸

命になつて漸つとの事で恁うしたのだもの。貴郎も些少は察してくれたつて可いわ。」

と、しんみりとして、黑味勝ちの、張の强い眼を凝と見上げた。操は輕く、

「なに僕だつて、鈴ちやんに逢はないで行つて了ふつもりで居やしない。」

「そんなら何も、私を嫌つて那樣に立ちさうにしなくつても可いと思ふわ。」

「何を言つてるんだ。誰がお前を嫌ふものか。僕はきまりが惡いからと言つてるぢやないか。」

「いゝえ、然うぢやなくつてよ。那樣事にかこつけて逃げやうと思つて、貴郎は本當に人の氣も知らない。」

と涙組んだ。操は見て、驚いたやうな顏をして、やがて頭を掻出して、

「困るな。那樣事を言つたつて僕ア……………。可いやそれぢや居るから、先刻言つた其談話ッてのをお聞かせな。」

小鈴は眞顏に、言ひあへぬ心の籠つた聲音で、

「操さん貴郎は私が甚麼氣で居るか知つて居るの。」

操は訝かしげに眉を寄せて、
「え、甚麼氣ッて。」
「あれ、あれだもの。私ア本當に遣切れないわ。」
俯向いて、術なさうに見えた。操は目を瞬つた。
「何うしたんだい。僕には何だか譯が解らない。」
「可くつてよ。」
と恨めしさう。
「厭だ。那樣顔をして何うしたんだよ。え、何うしたんだよ。」
小鈴は答へず、暫くして、
「貴方は私を何とも思つてお出ぢやないんだもの。」
「何故、」
「何故ッて、貴郎は平氣で東京へ行つておしまひぢやないか。」
「だつて僕は行かなくつちやならないのぢやないか。鎌倉の中學校へ行くよりは、吉井の叔父さんも居る事だし、何うでも東京の方が學校も好いからと

言つて、伯父さんが阿父さんに勸めて、それで僕は東京へ行く事になつたんだ。」
「あれ、私は那樣事を言つてるんぢやなくつてよ。」
「それぢや何を言つてるんだ。」
「貴郎は私を打捨つて行つておしまひぢやないか。」
「だつてそりやア仕方がない。」
小鈴は思込んだやうに膝を進めて、
「それ那樣不實な事をお言ひぢやないか。貴郎は本當に餘りだわ。」
「無理だ。那樣事を言つたつて僕が何うする事も出來やしないぢやないか。僕は困つて了ふ。」
「可いわ。貴郎は那樣氣で居るんだから。」
「那樣氣ッて解らない事ばッかり言ふぢやないか。鈴ちやんは何うかして居るよ。」
小鈴はせき上げた。
「はア何うかして居ますとも、私ア這麼に氣を揉んで居るのに、貴郎は全ッ

きり察しておくれぢやないんだもの。

操は更に、解きかねた心に、つく〴〵顔を見詰めて、

「鈴ちやん、お前何か思つてる事があるなら言つてお了ひな。一人で那樣事ばかり言つてたつていつまでも僕にやア解りやアしない。」

「言つたつて仕樣がありやしないわ。私ア最う捨てられたんだから。」

「捨てる？　鈴ちやんは何故那樣思ひも付かない事ばかり言ふんだらう。僕が東京へ行つて了ふから、それで捨てるなんぞといふのかい。そりやア僕だつて鈴ちやんや何か皆に別れて行くのは厭だけれど、いつまでも這麼田舍に居ちやア何も覺えられやしないからね、行かずに居りやア詰らないものになつて了はなけりやならない。」

「それだから私なんぞは後で甚麼にならうと構はないで行つておしまひなんだらう。」

「だつてそりやア…………。」

「可くつてよ。可くつてよ。貴郎は那樣に邪慳だけれど私や、私や…………。」

と既おろ〳〵聲。

操は持てあつかつたやうで、

「鈴ちやん、それぢや何うすれば可いんだよ。」

「操さん、」

と小鈴は涙を持つた眼を上げて、思切つて、

「貴郎實があるなら私を東京へ連れて行つて頂戴よ。」

「えッ東京へ、」

と思はず聲を上げて、

「那樣事が出來るもんか。」

「おや何故出來なくつて。矢張私が厭だもんだからそれで那樣事をお言ひなんだらう。貴郎は何うして然うだらうねえ。」

「だつて僕が何うして鈴ちやんを連れて行かれやう。那樣無理を言つたつて仕樣がありやしない。」

「何が無理よ。貴郎に別れるのがつらいから連れて行つて頂戴と言つて居

るのに、いくら私が這麼者だからと言つて、それぢや貴郎餘りだわ。餘りだわ。餘りだわ。」

「困るなア。鈴ちやんは本當に解らない。」

「貴郎こそ解らないのだわ。那樣、那樣貴郎ぢやなかつたけれど…………。」

双方共に解らないのだ。年が行かないだけに。小鈴は思ふ心を充分に言つてのける事が出來ず氣ばかりあせり立つて眼に精一杯の力を見せても、操には何の効もなく、

「僕は最う知らないよ。勝手におし。」

と又立ちかける。小鈴は堪へられず、矢庭に犇と取縋りさま、金茶の絹手巾を、袂から引出すと顔に押當てゝわッと泣いた。

（三）

座敷の方には、父の進と、伯母と、今度操に付添つて行くといふ伯父との三人が、夜の更けたのも忘れて、操の遊學の事で未だ何故と話合つて居た。

明日があるからと言ふので、操は早くから寐かされて、今夜を名殘りの、其臥床に入つたが、目は冴返つて寐られやうともせぬ。

宵の間の父の訓戒、伯母の注意そればかりでもなく、住馴れた地を離れて行くそればかりでもなく、漠とした未來の希望、目的などの胸に往來するそればかりでもない。

今迄ついぞ覺えた事もない心地で、何と問はれても確に答へもならぬ事が、後から妙に心に掛るのだ。

操は更に目が冴えた。

枕も定まらず、闇の中に、其眼を皿のやうにして、まじ〳〵と見詰めると、晝間見た小鈴の涙組んだ顔が瞭然と前に見えた。何とも知らず、胸は引締められる

やう。昨日までも、それほどには思はなかつた別離が言ふやうもなく惜しくなつて來る。

腑に落ちなかつた其時の小鈴の言葉も、今になつて、怪しく身に應へるやうで、此少年の未だそれと氣が付かぬ胸に、初めていぢらしいといふ心が起つた。

其場の行掛りで、先刻は心にもない面白からぬ別れ方をしたので、伯母の許から歸り掛けに內所で寄つた、仲直りをして行かうと思つたのが、折を惡く、伯母に連立つて家へ來られたので、つい立寄る事も出來なかつた。

鈴ちやんは嘸僕を怨んで居るだらう。

再び以前の泣顏が、あり／＼と目の前に見えた。

家は其中に寢靜まつて、空には歸る雁の聲。窓の前には竹の戰ぎ。遠く海の音が聞えて、裏手の田面には彼方此方に歌を合せて蛙が鳴交はして居た。

生暖い、夢心の春の夜であつたが、操はそれ處ではないのだ。

時は移つて行く。疲れて僅かに目を合せたかと思ふと、物驚きをして不意に覺めた。外はいつの間にか明るくなつて居る。遲くなつたかと慌てゝ跳起

きて、急がはしく身支度して部屋を出ると庭の彼方で、

「お〻操、最う起きたか。は〻〻、今朝ばかりは起されなかつたな。」

父の進は、早くも起出で〻、一人庭を徘徊して居た。操は見ると手を支いて、

「お父樣、お早うございます。」

「應。」

とさも機嫌よく、

「早く顏を洗つて來い。」

「唯。」

とばかり駈出して、手拭、楊枝、藥局の芳岡が手に成つた齒磨を持込んで、庭の下の、流れの前へ降りて行つた。

幅は三四尺、流れて落ちる早川の裾から引いて來た水が、細流の美しい波の綾を見せて、細かい音を立て〻流れて行く。石の白いのに、底はさながら見え透いて、玉のやう。

前の田の面は、一帶に薄靄で包まれて、蛙は其中に未だ鳴連れて居る。目近に

立つた一本柳は夢のやうに煙つて、彼方に遠く、明神の森に、消殘つた常夜燈の光が瞬いて、前の畦路を、鼻唄で流して行く頰冠りの影が見える。東はポッカリと、眩いやうな銀鼠に縁を取つた、紫走りの横雲の下から沸いて上る淡紅の色に、染返して、其處に此處に勇ましく雀が囀散らして居る。

下の川棚へ出ると、右も左も、水に冠さつて咲溢れるやうな山吹の花。

操は口を嗽ぎ出した。

流れの上の、菊菱の家では、粂次の客が、今日起拔けに皆を連れて箱根へ遊びに行くといふので、近頃類のない早起、粂次は最も遲れて呼起されて、今急がはしく身粧ひの最中である。既支度の整つた小鈴は、例の極彩色を盛上げて、進まぬ顏色も、濃い化粧の下に隱して居たが、姉を待つて居る中に隙を見て裏口から外へ出た。

逢つて恨みを言ふだけの便りが、其僅かな中にあるとは思はれぬが、一目だけでも、とばかり、情に驅られて、扮裝に似合はぬ臺所履の下駄を突掛けたまゝで、窃と出て來たのだ。

流石に氣遣ひの脊後を振返つて、やがて家を離れると、直と急ぎ出した。操の家は其處から一町ばかり家込の間を少し行くと直ぐに田甫で、右へ折れた先は操が降りて來た裏口だ。

小鈴は角へ出ると、はツと思つた。今しも水を手に掬んで居る操の姿は、言ふまでもなく目に入つた。

走寄らうとして、不意と見上げると、常から恐いものに思つて居る進が、庭先に立つて居る。上と下に操とは二間と離れて居ぬ。

途端に此方を向いたやうなので、我にもあらず慌てゝ身を引いて、小蔭へ隱れて立つた。

足は進まず、稍暫く佇立んだまゝで居た。操さんは其中に上つてお了ひだらう。何うしたら。と兎つおいつ。

思付いたやうに、急がはしく手巾を取出して、帶に挿んで居た紙入から、小さな紅筆に三折の紅板、下に屈んで前の流れに筆を濕して、紅を溶いて手巾に書きつけた女文字、其儘押丸めてはらりと水に投入れた。

投入れた手巾は、ふはりと開いて、水に一つ輪を書いて波にもつれてさら〳〵と流れて行つた。小鈴は瞬きもせず此方に見詰めて居る。勾配が付いて居るので、思ふ其方へ水は逸早く優しげな便を乘せて、操の立上らうとする時前に流れて來た。

ゆくりなく操は目を止めた。見覺えのある金茶の色に、隅の縫模樣昨日小鈴が涙を拭つたそれと見るより、思はず手に取ると、忽ち目に入る其筆の跡、

「あなたはあんまりひどい。」

操は思はず水上へ振返つた。小鈴はぢつと眸を凝らして居る。岸の榎に遮ぎられて、操はそれと氣も付かぬ。

「操、操、」

同時に上で進の聲。つか〳〵と寄つて來た。操ははツとして急に手巾を押隱した。

「操、」

肩の上の山吹を越して進の顏が見えた。

心を殘して、詮方なしの返事と共に操は上つて行つた。
其後影、小鈴はこれを、二人の長い別れと竊かに思つた。
姿が見えなくなると、胸は俄かに塞がつて衝上げるやうに涙が沸いて來る。
いつか俯向いて、すご〳〵歸掛けると、目もあやなく小石に躓いて、よろ〳〵と倒れやうとした。生れて初めて、憂きといふ事を、犇と身に覺えたのであつた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

國府津まで見送る爲に、進は操と共に發つた。伯父と、二人に伴はれて、操は其朝菊菱の前を通つた時、中を窺いたが、小鈴は既、姉と、三人の抱妓と共に、客に連れられて箱根へ行つた後であつた。

其裏若い胸の中に、初めて音訪れて來た物の音は、此やうにして斷えやうとする。「あなたはあんまりひどい。」故鄕を離れると共に操は又思出した。
身を賣物の濁江の中に、小鈴は何時まで此儘で居られやう。國府津の彼方に、操は振返ると朝夕目に馴れた箱根の山は名殘を惜むやうに見えた。名殘、名殘、其名殘、其處には小鈴が、あこがれた眼に、此方の空を眺めて居たのであつた

が、操は固より知らなかつた。

眉山全集第三巻終

明治四十二年九月廿三日印刷
明治四十二年九月廿六日發行

（定價金壹圓八拾錢）

眉山全集

著者 川上亮

東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者 大橋新太郎

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者 市川七作

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所 博文館印刷所

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二百四十番
博文館

故川上眉山氏著

巖谷小波君
石橋思案君 校訂

武内桂舟君裝

博文館發行

眉山全集

全四册 洋裝菊判總クロース金文字入表紙意匠高雅紙函入美本 正價一册金壹圓八拾錢

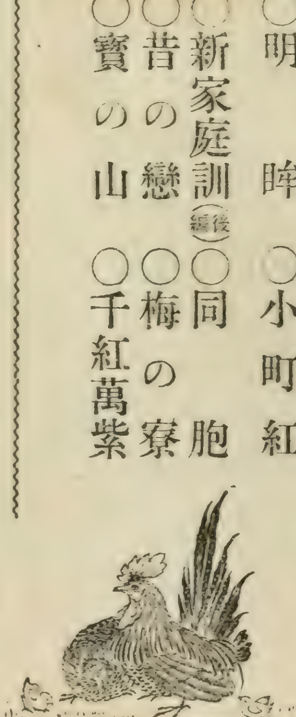
紙數一册約八百五十頁 小包料一册金拾貳錢

第壹卷目次

第貳卷目次

第參卷目次

第四卷目次



幽艶にして清迴なる眉山氏の筆は、眞に明治の華文なり。況んや其想、おのづから當代の重きをなして、而も逌爾として迫らざる處、我文壇の重鎭たり。今や斯人亡くして其著作單り金聲玉振の響を傳ふ。

本書に収めたる諸篇は、孰れも當世文壇をして、眉山氏が絶倫の盛名を擅にせしめたるもの、實に之れ我讀書界に於ける珍璧にして、而してまた明治文壇に異彩ある大作家が面影なり。

故尾崎紅葉君遺著

紅葉全集

全六册　菊判特製
總紙數五千五百頁
一册金壹圓八拾錢
全部金拾圓
小包一册金拾貳錢

麗、春日の如く、清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し奇思縱横字々靈快を極めざるなし。曾て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、俊群英を養ふて藻社の名一世を騒す。山人が明治文學に寄與するの勞天下の齊しく知る所にして仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝く、文壇頓に寂々たり。山人の逝くや命也。而も山人の精神は萬古常に新也。蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に胎し、長く河嶽に藏すべし。即ち親朋同人相謀りて十千萬堂を營み凡そ山人が遺作に係るものは、其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寶の散りて點數せるは聯ねて一環と爲すの美に若かず。全集分ちて六、其作年の順を追ふて之を收め、謹みて江湖の文を愛し、才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

泉鏡花君外十四君作

換菓篇

―（六版）―

全一册　新形上製
紙數三百頁
正價六拾錢
郵税金八錢

名家小説文庫第一篇

露伴叢書　前篇

菊判總布特製
紙數九百七十二頁
正價貳圓
小包料金拾六錢

露伴先生は當代の大家、崇高なるその思想と、奇峭なるその文章とは既に久しく文壇の誇りとする處、その内容に就いては編者また何をか言はん。今左に其目次を錄す

―【内容】―

▽二日物語▽夜の雪▽僥倖▽縁の糸▽休暇傳▽毒朱唇▽ひげ男▽新學士▽迷霧▽和合樂▽川舟▽大珍話▽縁外縁▽夢がたり▽是は／＼▽醉郷記▽珍饌會▽獅子庵▽伊能忠敬▽まき筆日記▽客舍雜筆▽地獄渓日記▽元祿時代の雜劇▽折々草▽將棋雜考

名家小説文庫第二篇

露伴叢書　後篇

菊判總布特製
紙數九百餘頁
正價貳圓
小包料金拾六錢

―【目次】―

▽椀久物語▽春の山▽當世外道の面▽封じ文▽鐵三鍛▽自縄自縛▽蹄鐵▽冷千氷▽箱根草▽銃獵孝行▽夢日記▽ひとよ草▽新浦島▽鄭成功▽日蓮聖人▽二宮尊徳▽突貫紀行▽醉郷記▽文明の庫

名家小說書類 ◎

山崎紫紅君新作

史劇十二曲

最近二年間に於ける著者勞作の結晶物なり、上場せられて都下の劇壇を賑はしたる

—【最新版】—

歌舞伎物語。その夜の石田。亂れ笹。松一木。信玄最後。當流鉢木。破戒曾我。外に明智光秀。戀の洞。三七信孝。その他二篇を收めたり、著者の劇本に所謂机上の臺帳にあらず、而かも亦清新の氣に富みて猥俗の態なし、劇に志ある諸君一讀を乞ふ

全一册 中判特製
紙數五百五十四頁
正價九拾五錢
郵稅金八錢

文學士 小松月陵君著

—(再版)—

沙翁物語十種

全一册 中判美本
紙數三百頁
正價四拾五錢
郵稅金六錢

當代名家十二名作

小說十二人集

—【新版】—

○子守博士…巖谷小波 ○追 害…柴田流星
○放 火……小栗風葉 ○楠…………岡本綺堂
○重 債……夏葉女史 ○彈 正…篠田吟葉
○鬼 玄 蕃…塚原澁柿 ○はきちがひ……鈴木春花
○細 君……柳川春葉 ○職 業……落合浪雄
○朝…………德田秋聲 ○百花百草……武田櫻桃

全一册 菊判上製
紙數四百餘頁
正價八拾五錢
郵稅金拾錢

永井荷風君著

あめりか物語

全一册 中判上製
紙數三百九十頁
正價六拾五錢
郵稅金八錢

—【三版】—

○船室夜話○野路のかへり○岡の上○醉美人○長髮○春と秋○雪のやどり○林間○惡友○舊恨○寢覺め○夜の女○一月一日○曉○市俄古の二日○夏の海○夜半の酒場○落葉○支那街の記○夜あるき○六月の夜の夢○附錄 フランスより ○船と車○ローン河のほとり○秋の巷

◎博文館發行諸書

樋口一葉女史著

一葉全集

全一册 菊判 美本
紙數四百八十六頁
正價四拾錢
小包料金八錢

一葉女史の文壇に現はるゝや明治の紫女を以て評せられ、文の優美なる其想の幽玄なる實に稀代の天品なるは世既に定評あり本書は女史の遺稿を集成せしもの其生涯の才華收めて此中にあり讀者乞ふ一本を机上に備へよ

—【廿五版】—

故若松賤子女史譯述

小公子

全一册 洋裝 菊判
紙數三百七十四頁
正價參拾五錢
郵稅金八錢

近時歐米の讀書社會を震動し劇場に演ぜらるゝこと數回一代の流行を左右して一時年少の子弟をして悉皆小公子の如くならしめたる奇大の勢力ある原書なり女史是れを譯する極めて巧妙にして文一時に喧傳せり中島湘煙女史は字を題して本書に寄せり

—【十七版】—

村井弦齋君著

小說 酒道樂

全二册 和裝 菊判
紙數五百五十四頁
一册 五拾五錢
郵稅金八錢

酒を呑むもの衆し、酒の効用と害毒とを知て飲む者幾人かある、我小說を讀む者衆し、我小說の精神を知て讀む者幾人かある、惟ふに知るは易く悟るは難し、悟るは易く、行ふは尙難し、千萬人中幸に、我精神を知悟して、而して行ふ者ありや否や

—【七版】—

福田琴月君著

當世 奥様氣質

全一册 中判 美本
紙數二百二頁
正價參拾錢
郵稅金四錢

▽奥様十種‖▽あはれな誇り‖▽人の噂‖▽會社員の奥様‖▽結婚前の某孃に答ふ‖▽母より‖▽大みそか‖▽霜夜‖▽土産日記‖▽奥様の失望‖▽奥様となる事は易く奥様たる事は難し‖▽餘興、滑稽鰻の蒲燒

—【再版】—

河井道子　辻村靖子　共譯

家庭小說 ひとりぼっち

全一冊中判特製　紙數三百七十頁　正價六拾五錢　郵稅金八錢

本書は千八百九十七年發行エミ、ラフィーバル女史の著にかゝる「水銀のやうに清く獨樂のやうに敏捷な」英國の一少女を主人公として其天眞を枉けず敬虔の念篤き性質を田園生活に於ける短時日の出來事に描寫して紙上に躍如たらしめしもの由來日本の家庭小說中稀に見る所と云ふを躊躇せざるなり頃日女子英學塾敎授河井辻村二女史譯述して世に公にす其內容の如きはこゝに喋々するを須ひず

高橋光威君譯述

ロビンソン 絕島漂流記

全一冊菊判美本　紙數四百九十八頁　正價四拾錢　小包料金八錢

世若し一大奇絕の談あらばロビソン絕島漂流記ほど奇絕なるはなく世若し大冒險の事あらばロビンソン絕島漂流の事跡ほど冒險なるはあらず氏海上闘らずも暴風に逢ひて難船し萬死を出でゝ孤島に漂着し幾十年間或は鰐魚を友とし或は蠻族と交はり殆んど死して僅に生く奇絕快絕能く片紙の盡す所にあらず諸君よ諸君請ふ簇ふて本書を購求せよ

—【十四版】—

海賀變哲君編

新式 小說辭典

全一冊三六判特製　紙數千三十四頁　正價壹圓廿錢　小包料金八錢

本書の內容は、遠くは春の家氏が書生氣質より、近くは二葉亭氏が平凡の時代に至るまでの間、千有餘の著作中より當世傑作と稱せられたるもの三百餘篇を撰み

絢爛の辭句、巧妙の叙事、輕快の會話等を拔萃し、之を**容姿、扮裝、動作、會話、叙情、叙景、構造、叙事、怪異、滑稽**

の十門に分類したるものにして、且つ其字句も、片言隻語に止まらず、短きも原作の二三行、長きは二三頁に亘りて拔萃し、所々に原作の梗概をも附記したれば、始めて小說をものせんとするものゝ、座右に缺くべからざるは勿論、一の美文集として、各作家の作風を窺知するを得べき近來の好辭典なり。

—【最新版】—

田山花袋君著

小說作法

—【最新版】—

全一冊中判美本　紙數三百餘頁　正價卅五錢　郵稅金六錢

諸名家小說書類

巖谷小波君著

伯林土産 戀の畫葉書

一名 留學生氣質

全一冊 新形特製 紙數四百六十頁 正價壹圓 小包料金八錢

先に洋行土産二巻を著して、洛陽の紙價を高からしめ將た天覽、上覽の榮を得たる著者は、今又拾遺として茲に本書を公にす、小說か、否、談話か、否、畢竟實地の見聞を基として、例の妙想を構ひ、快筆を揮へるもの、加ふるに和田氏が挿畫錦上更に花を添ふるあり、氏も亦當年著者と共に彼地に遊べるの人、机上一たび之を繙かんか、寫す所眞に迫らざるなく、所謂る文明國の暗面は、忽ち淨玻璃の鏡に照らされ例の留學生の眞相は、宛ら紙上に躍々たらん

怒濤庵 江見水蔭君著

實地探檢 地中の秘密

全一冊 菊判上製 紙數三百二十六頁 正價五拾八錢 郵稅金八錢

—【最新版】—

蠻勇の力を以て地中の秘密を發き、深く深く貝層の間に掘入りたる著者の探檢實記なり其發掘の壯烈なる其遺物の怪奇なる文章自在に之を表はし三千年前の日本先住民が生活の狀態は悉く紙面に活躍せり然れば文學上の產物としても科學的著述としても優に當代の奇書たるを失はず考古家の參考書たり旅行家の案內記たる以外に家庭の好讀物として之を江湖に薦む

怒濤庵 江見水蔭君著

冒險小說 大蠻勇

全一冊 中判美本 紙數五百五十頁 正價五拾錢 郵稅金八錢

國民の新要求に應じて出でたる文壇の大產物は是なり從來の冒險小說は餘りに空想的なり怪談式なり變化あるが如くにして實に單純なり著者此舊套を脫して新生命を加へたる冒險小說を獨創す變化縱橫奇想湧くが如く、文字は紙表に躍動して痛快を極む蓋し近來稀に見るの好著なり

【四版】

同君著

地底探檢記

全一冊 菊判美本 紙數二百二十四頁 正價四拾錢 郵稅金六錢

同君著

—(三版)—

實地探檢 捕鯨船

全一冊 洋裝菊判 紙數二百三頁 正價參拾五錢 郵稅金六錢